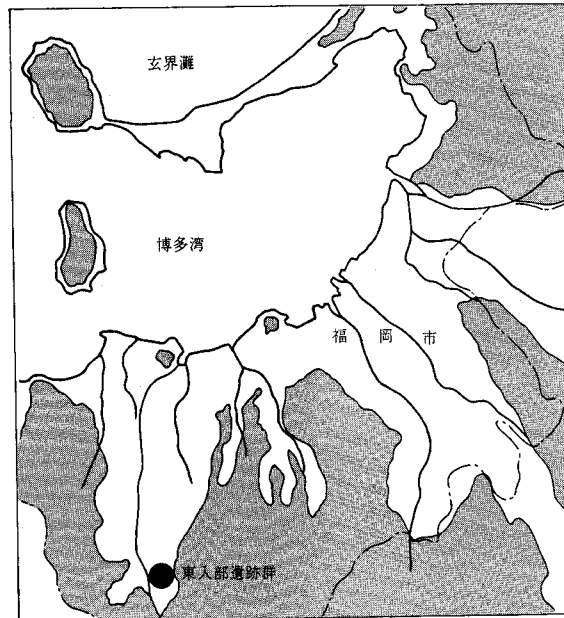




IRU                  BE

# 入 部 IX

— 東入部遺跡群第1次調査報告(2)・第2次調査報告(1) —



9074 HGI-1  
9165 HGI-2

1999

福岡市教育委員会



## 序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と先人によって育まれてきた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な務めです。しかし近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。

本書は、昭和62年度から実施されてきた、早良区入部地区の県営圃場整備に伴う発掘調査のうち、平成2年度の東入部遺跡群第1次調査および平成3年度の東入部遺跡群第2次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地元改良区をはじめ多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対しまして、心からの謝意を表します。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 町田英俊

## 例 言

1 本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区東入部地内で県営圃場整備に伴い実施した発掘調査のうち、東入部遺跡群第1次調査(1990年度)のうち未報告であった縄文時代の遺構・遺物と第2次調査(1991年度)の6・7・9・10区の遺構・遺物の報告である。

1 県営入部地区圃場整備に伴う発掘調査の報告としては以下の8冊が刊行されている。本書はこれを引き継ぎ、9冊目にあたることから書名を『入部IX』とした。この入部という地名は遺跡名を示すものではない。

『入部Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集 1990

『入部Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集 1991

『入部Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集 1992

『入部Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集 1993

『入部Ⅴ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集 1995

『入部Ⅵ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集 1996

『入部Ⅶ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第516集 1997

『入部Ⅷ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第577集 1998

1 本報告に用いた遺構実測図は濱石哲也、宮井善朗、池田祐司、長家伸、榎本義嗣、屋山洋、英豪之、黒田和生が作成し、他に作業員の方々の協力を得た。現場写真は濱石、池田、長家、榎本が撮影した。なお空中・航空写真は有限会社空中写真企画(檀睦夫)による。

1 出土遺物の実測は第1次調査を池田、山口譲治、平川敬治、第2次調査6・7区を濱石、林田憲三、井上かをり、英、黒田、同9・10区を榎本が行った。写真撮影は第1次調査を池田、第2次調査6・7区を林田、同9・10区を榎本が行った。

1 本書に関わる製図は第1次調査を池田、第2次調査6・7区を井上かをり、撫養久美子、同9・10区を榎本があたった。

1 本書の作成には他に緒方まきよ、樋口久子、上田保子、中原尚美、前田みゆき、稲田健二、城山愛、西島信枝、松尾真澄が関わった。

1 本書に用いた方位は磁北である。

1 遺構の呼称は竪穴住居をSC、掘立柱建物をSB、土坑をSK、溝をSD、その他の遺構をSXと略号化した。なお、甕棺墓については第2次調査8区との通し番号とし、略号については通有のKを遺構番号の頭に付している。

1 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

1 本書の作成作業は国庫補助を受けて行った。また作成事業は埋蔵文化財課(課長 柳田純孝、調査第1係長 二宮忠司、調査第2係長 山口譲治)が担当した。

1 執筆はⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ-1～3を濱石、Ⅳを池田、他を榎本が担当した。

1 編集は濱石、池田の協力を得て、榎本が行った。

# 本文目次

(本文頁)

I. はじめに	1
II. 遺跡の立地と歴史的環境	2
III. 調査組織	5
IV. 東入部遺跡群第1次調査の記録	6
1. 概要	6
2. 遺構と遺物	8
1) 住居跡	8
2) 遺物包含層	26
3. 結語	36
V. 東入部遺跡群第2次調査の記録	43
1. 調査の経緯	43
2. 調査地区の概要	44
3. 6・7区の調査	44
1) 概要	44
2) 甕棺墓地	47
(1) 甕棺墓	47
(2) 土壇墓	61
(3) 墓域供献土器	62
3) 石塚古墳と関係遺構・遺物	63
4) その他の遺構と遺物	67
(1) 掘立柱建物	67
(2) 土坑	68
(3) 溝	70
(4) その他の出土遺物	72
5) 小結	78
4. 9区の調査	79
1) 概要	79
2) 遺構と遺物	81
(1) 土坑	81
(2) 溝	81
(3) その他の遺物	82
3) 小結	82
5. 10区の調査	83
1) 概要	83
2) 遺構と遺物	83
(1) 竪穴住居	83
(2) 土坑	89
(3) 甕棺墓	96
(4) その他の遺構と遺物	97
3) 小結	98

# 挿 図 目 次

(本文頁)

第1図	入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡(1/50,000)	3
第2図	入部圃場整備年次別事業地と周辺の遺跡群(1/10,000)	4
第3図	東入部遺跡群および調査地点(1/3,000)	(折り込み)
第4図	4区全体図(1/400)	6
第5図	縄文時代包含層遺物出土状況(1/80)	7
第6図	SC250遺物出土状況実測図(1/40)	8
第7図	SC250実測図(1/40)	9
第8図	SC250石組み遺構実測図(1/20)	9
第9図	SC250出土遺物実測図1(1/3)	11
第10図	SC250出土遺物実測図2(1/3)	12
第11図	SC250出土遺物実測図3(1/3)	13
第12図	SC250出土遺物実測図4(1/3)	14
第13図	SC250出土遺物実測図5(1/3)	15
第14図	SC250出土遺物実測図6(1/3)	16
第15図	SC250出土遺物実測図7(1/3)	17
第16図	SC250出土遺物実測図8(1/3)	18
第17図	SC250出土遺物実測図9(1/3)	19
第18図	SC250出土遺物実測図10(1/3)	20
第19図	SC250出土遺物実測図11(1/3)	21
第20図	SC250出土遺物実測図12(1/3)	22
第21図	SC250出土遺物実測図13(2/3)	24
第22図	SC250出土遺物実測図14(2/3、1/3)	25
第23図	SC250出土遺物実測図15(1/3)	26
第24図	包含層遺物集中区実測図(1/20、1/40)	27
第25図	包含層出土遺物実測図1(1/3)	28
第26図	包含層出土遺物実測図2(1/3)	29
第27図	包含層出土遺物実測図3(1/3)	30
第28図	包含層出土遺物実測図4(1/3)	31
第29図	包含層出土遺物実測図5(1/3)	32
第30図	包含層出土遺物実測図6(1/3)	33
第31図	包含層出土遺物実測図7(1/3)	34
第32図	包含層出土遺物実測図8(2/3、1/3)	35
第33図	第2次調査グリッド配置図(1/2,000)	45
第34図	6区甕棺墓地配置図(1/150)	46
第35図	K0001・0002・0003・0004・0005甕棺墓実測図(1/20)	49
第36図	K0006・0007・0008・0009・0010・0011甕棺墓実測図(1/20)	50
第37図	K0012・0013・0014・0015・0016甕棺墓実測図(1/20)	51
第38図	K0001・0002・0003甕棺実測図(1/8)	52
第39図	K0004・0005・0006・0007甕棺実測図(1/8)	54
第40図	K0008・0009・0010・0011・0013甕棺実測図(1/8)	56
第41図	K0012・0014・0015・0016甕棺実測図(1/8)	58
第42図	甕棺墓副葬品・墓壙内出土遺物実測図(1/1、2/3、1/3)	59
第43図	SX0303・0327土壙墓実測図(1/30)	60
第44図	土壙墓出土土器実測図(1/3)	61
第45図	SX0301・0302・0304・0305・0308供献土器出土状況実測図(1/10)	62

第46図	墓域供献土器実測図 (1/3)	63
第47図	石塚古墳検出状況実測図 (1/60)	65
第48図	石塚古墳石室実測図 (1/40)	66
第49図	石塚古墳出土遺物実測図 (1/2)	67
第50図	SK0307土坑実測図 (1/40)	68
第51図	SK0307土坑出土遺物実測図 (1/3)	69
第52図	SB0406・0407 掘立柱建物実測図 (1/100)	70
第53図	SK0325・0326・0328・0329・0334・0369土坑実測図 (1/40)	71
第54図	SD0331・0332溝土層断面図 (1/20)	72
第55図	土坑・溝出土遺物実測図 (1/3)	73
第56図	その他の出土遺物 1 (1/3)	74
第57図	その他の出土遺物 2 (1/3)	75
第58図	その他の出土遺物 3 (1/1、1/2、1/3)	76
第59図	9区全体図(1/200)	79
第60図	SK0574・0579・0589・0596・0603・0613・0614実測図(1/40)	80
第61図	9区出土遺物実測図(1/2、1/3)	82
第62図	SC0701実測図(1/60)	84
第63図	SC0701出土遺物実測図 1 (1/3)	85
第64図	SC0701出土遺物実測図 2 (1/3)	86
第65図	SC0701出土遺物実測図 3 (1/2、1/3)	87
第66図	SC0705実測図(1/60)	88
第67図	SC0705出土遺物実測図(1/2、1/3)	88
第68図	SK0706・0707・0708・0709・0710・0711実測図(1/20、1/40)	90
第69図	SK0706・0707・0708・0709・0710出土遺物実測図(1/2、1/3)	91
第70図	SK0712・0713・0714・0717・0718・0798実測図(1/40)	92
第71図	SK0713・0717・0798・0819出土遺物実測図(1/3)	93
第72図	SK0819・0900実測図(1/40)	94
第73図	K0018・0019実測図(1/20、1/30)および K0018・0019 出土遺物実測図(1/8)	95
第74図	SX0702実測図(1/40)	96
第75図	SX0702出土遺物実測図(1/3)	96
第76図	SX1100土層実測図(1/100)	97
第77図	ピット・検出面出土遺物実測図(2/3、1/2、1/3)	97

## 図版目次

図版 1	第 1 次調査	(1) IV区包含層調査区(北西から)	(2) SC250(東から)
図版 2	第 1 次調査	(1) SC250遺物出土状況(北から)	(2) SC250遺物出土状況
		(3) SC250石組(北東から)	(4) SC250遺物出土状況(北から)
		(5) E-8-3区遺物出土状況	(6) E-8-3出土遺物
図版 3	第 1 次調査	出土遺物 1	
図版 4	第 1 次調査	出土遺物 2	
図版 5	第 1 次調査	出土遺物 3	
図版 6	第 1 次調査	出土遺物 4	
図版 7	第 1 次調査	出土遺物 5	
図版 8	第 1 次調査	出土遺物 6	
図版 9	第 1 次調査	出土遺物 7	

- 図版 10 第1次調査 出土遺物 8  
 図版 11 第1次調査 出土遺物 9  
 図版 12 第1次調査 出土遺物 10  
 図版 13 6区全景 (上空から)  
 図版 14 (1) 6・7区全景 (北上空から) (2) 7区全景 (南から)  
 図版 15 (1) 6区石塚古墳と甕棺墓 (2) 6区SB0407掘立柱建物とSD0331・0333溝(上空から)  
 図版 16 (1) K0001甕棺墓 (東から) (2) K0002甕棺墓 (北から)  
 図版 17 (1) K0003甕棺墓 (北から) (2) K0004甕棺墓 (西から)  
 図版 18 (1) K0005甕棺墓 (西から) (2) K0006甕棺墓 (西から)  
 図版 19 (1) K0007甕棺墓 (北東から) (2) K0008甕棺墓 (西南から)  
 図版 20 (1) K0010甕棺墓 (西から) (2) K0011甕棺墓 (東南から)  
 図版 21 (1) K0012甕棺墓 (東から) (2) K0013甕棺墓 (北から)  
 図版 22 (1) K0014甕棺墓 (北から) (2) K0015甕棺墓 (北から)  
 図版 23 (1) K0016甕棺墓 (北から) (2) SX0301祭祀土器出土状況 (東から)  
 (3) SX0302祭祀土器出土状況 (東から) (4) SX0305祭祀土器出土状況 (西から)  
 (5) SX0308祭祀土器出土状況 (西北から)  
 図版 24 (1) 石塚古墳検出状況 (西から) (2) 石塚古墳石室・敷石下面 (東から)  
 図版 25 (1) 石塚古墳玄室内遺物出土状況 1 (2) 石塚古墳玄室内遺物出土状況 2  
 (3) SK0307土坑 (西から) (4) SB0406掘立柱建物 (北から)  
 (5) SK0325・0326土坑 (北から) (6) SK0328・0329土坑 (北から)  
 図版 26 6・7区出土遺物 1  
 図版 27 6・7区出土遺物 2  
 図版 28 6・7区出土遺物 3  
 図版 29 6・7区出土遺物 4  
 図版 30 6・7区出土遺物 5  
 図版 31 第2次調査 (1) 9区全景 (2) 10区全景(東から)  
 図版 32 第2次調査 (1) SC0701(東から) (2) SC0701遺物出土状況(東から)  
 (3) SC0701遺物出土状況 (4) SC0705(北から)  
 (5) SK0709(南から) (6) SK0710(南から)  
 図版 33 第2次調査 (1) K0018(東から) (2) K0018(北から)  
 (3) K0019(東から) (4) K0019(南から)  
 (5) SX0702(北から) (2) SX0702遺物出土状況(東から)  
 図版 34 第2次調査 9・10区出土遺物

## 表 目 次

第1表	入部圃場整備地区内発掘調査年度別一覧	1
第2表	東入部遺跡群調査一覧	2
第3表	出土石器観察表	37
第4表	出土土器観察表	38
第5表	出土石器組成表	42
第6表	東入部遺跡群第2次調査地区一覧	44
第7表	6区甕棺墓一覧	48

## 付 図

東入部遺跡群第2次調査6区・7区・10区全体図(1/200)

# I. はじめに

福岡市の西南部に広がる早良平野は、江戸時代、貝原益軒（1630～1714年）によって「北に海ありて、三方に高山あり。広平の地に、村里多く、水田多し。中に早良川（室見川）流るゝ故に、山林河海そなはりて、薪材ともしからず。魚、塩多し。河水多けれ共、滞なくして、水旱の患稀也」（『筑前国続風土記』1703年）と記された旧早良郡に属する。さらに益軒の文は「されとも平田は肥饒ならずして、種植豊ならず」と続く。住み良い環境の割には、田畑の収穫は豊富でなかったことが知られる。益軒がこう記した早良郡は、1975年その全域が福岡市に編入され、以後4半世紀の都市化の波に押され、その姿を大きく変えてきた。

1985年（昭和60年）、福岡市早良区大字重留および東入部一帯の県営圃場整備事業計画が、福岡県農林事務所などから福岡市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）に示された。それは約100ヘクタールの耕地を対象に、1987年度から8ヶ年にわたって圃場整備を行うという大規模な事業計画であった。

埋蔵文化財課で事業計画地内を確認したところ、重留、四箇船石、四箇古川、四箇東、清末、岩本、安通、東入部の8遺跡群と拝塚古墳があることが明らかになった。その時点で発掘調査を行っていたのは、四箇東、清末遺跡群のほんの一部にしかすぎなかったため、埋蔵文化財課は1986年3月に事業地内を試掘調査し、その性格・範囲などの把握を試みた。試掘調査の結果、弥生時代と中世を主体としたかなり密度の濃い遺跡群が、事業地のほぼ全域に広がっていることが改めて確認された。

課では埋蔵文化財の保存と事業の円滑化をめざして事業者と協議をもち、当該年度の対象地を詳細に試掘し、この結果に基き遺跡範囲内の新設の構造物（水路・道路）、削りが遺構面に達する田面と表土直下が即遺構面となる田面については基本的に本調査を行うこととした。ただし田面に関しては盛土などで設計変更をはかり、調査対象面積を最小にする方針をとった。発掘調査は1987年度から1994年度まで8ヶ年にわたって実施し、その後1995年度に暗渠排水に伴う調査を行った（第1表）。

本書では、1990・1991年度の東入部遺跡群第1・2次調査について地区別に本報告を行う。

これまで圃場整備地内の発掘調査を無事継続できたのは、調査に従事していただいた多くの作業員の方々のご協力と、県農林事務所、市農業土木課、鍋山弥三理事長をはじめとする改良区の方々のご指導のたまものである。心から感謝したい。

次数	調査年度	事業面積	調査対象面積	本調査期間	調査対象遺跡群*
1	1987(昭和62)	5.0ha	12,500 m <sup>2</sup>	1988. 1. 6 ~ 1988. 3.31	重留
2	1988(昭和63)	15.2ha	15,000 m <sup>2</sup>	1988. 6.21 ~ 1989. 4. 7	重留(2次)・拝塚古墳
3	1989(平成元)	15.9ha	16,200 m <sup>2</sup>	1989. 8. 1 ~ 1990. 3.26	重留(3次)・岩本・四箇船石
4	1990(平成2)	15.2ha	22,294 m <sup>2</sup>	1990. 7.18 ~ 1991. 3. 8	清末(2次)・岩本(2次)・四箇船石(2次)・東入部・四箇古川
5	1991(平成3)	21.7ha	34,381 m <sup>2</sup>	1991. 5.13 ~ 1992. 3. 5	清末(3次)・東入部(2次)・安通
6	1992(平成4)	14.0ha	13,832 m <sup>2</sup>	1992. 5.20 ~ 1993. 1.31	東入部(3次)
7	1993(平成5)	6.0ha	17,000 m <sup>2</sup>	1993. 5. 1 ~ 1994. 2.28	東入部(7次)
8	1994(平成6)	1.3ha	5,000 m <sup>2</sup>	1994. 7. 7 ~ 1994.11.25	東入部(10次)
9	1995(平成7)	(暗渠排水)	2,600 m <sup>2</sup>	1995.10. 4 ~ 1996. 2.12	東入部(11次)

\* 調査対象遺跡群のアミは本報告済み

第1表 入部圃場整備地区内発掘調査年度別一覧

## II. 遺跡の立地と歴史的環境

県営入部地区圃場整備事業は、福岡市の西南に広がる早良平野の南部、標高592mの油山山麓とその西を流れる室見川との間に広がる水田地帯で実施された（第1・2図）。今回報告する東入部遺跡群は、事業地内の遺跡群のなかでは最も南の福岡市早良区大字東入部地内にあり、南北に延びる低位段丘とその周囲の沖積地を占地する。東西約700m、南北約1200mの広大な遺跡群で、西は室見川、東側は小河川を越え荒平山の麓に達する。北側には安通、清末、四箇大町、四箇古川、四箇船石、岩本の各遺跡群が、川や浅い谷を隔てて分布する。南は室見川が平野に流れ出る狭隘地となる。標高は遺跡群の1次調査北端で29m、3次調査地点で33～37m、南端にあたる10次調査地点で39mをはかる。遺跡名称は大字名から採られている。

この東入部遺跡群では、今年度までに11次にわたる発掘調査が行われてきた（第2表）。その内容は縄文時代の包含層、弥生時代の集落と墳墓、古墳時代の集落と墳墓、奈良・平安時代の官衙的建物群、鎌倉・室町時代の集落と墳墓および生産跡などきわめて豊富なものであった。それはこの遺跡群が、弥生時代以降郡内での一大拠点であると同時に、出土遺物等から見て郡という地域を越えた重要な地位を占めていたことを知らしめた。

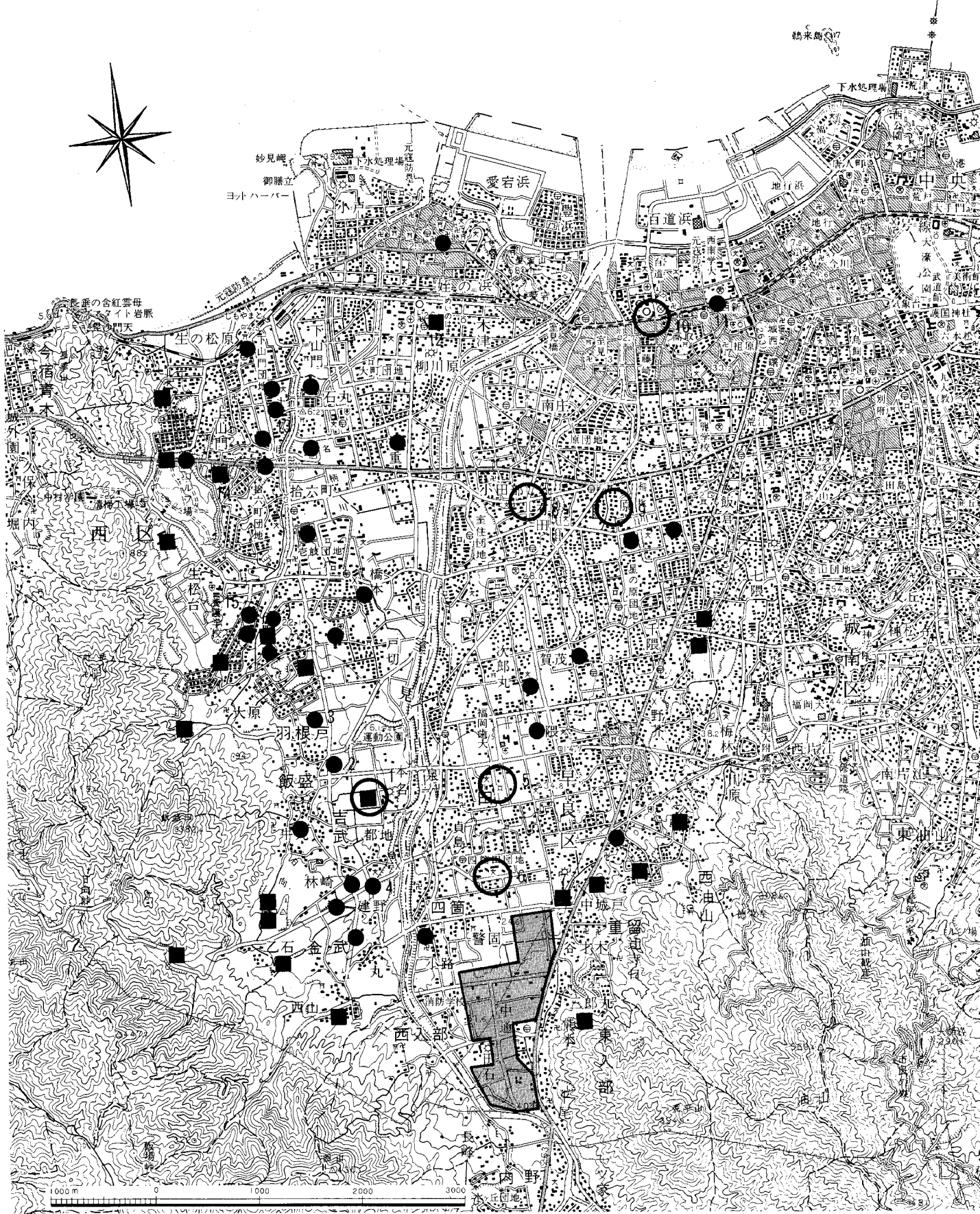
東入部遺跡群が所在する旧早良郡、すなわち早良平野およびそれを取り囲む山陵には、旧石器時代から近世にいたる様々な遺跡群が濃密に分布している（第1図）。1970年代後半以降の福岡市の著しい都市化はこの一帯にも波及し、激しい土地開発に伴う遺跡の発掘調査も相当の件数に及んでいる。その結果、早良平野のみならず北部九州の歴史を新たに書き替える重要な考古資料が蓄積された。弥生時代では吉武遺跡群の大規模な発掘調査で、2千基を越える甕棺墓とその豊富な副葬品から、その社会構成の復元に大きな手がかりを提示した。東入部遺跡群第2次調査の弥生時代墳墓も、この復元の一翼を担っている。同時に土器、青銅器、鉄器等をはじめとした弥生時代遺物の研究にも大きな寄与をなした。古墳時代では藤崎方形周溝墓群、樋渡古墳、拝塚古墳、梅林古墳、クヱゾノ古墳などの調査が行われ、前方後円墳の存在も明らかとなった。また群集墳の調査もかなりの数に上がっている。古代では官衙的建物群が有田、石丸、吉武、東入部等の遺跡群で確認され、その具体的な比定が要請されている。中世では平野内での土地開発の様子が集落の立地と絡んで判明しつつある。

次数	調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間	調査地番	調査原因	報告*
1	9074	HGI-1	5,453 m <sup>2</sup>	(1990. 7.18 ~ 1991. 3. 8)	東入部 1943 他	圃場整備	577集・本報告
2	9165	HGI-2	16,271 m <sup>2</sup>	(1991. 5.13 ~ 1992. 3. 5)	東入部 1378 他	圃場整備	本報告
3	9216	HGI-3	13,832 m <sup>2</sup>	1992. 5.20 ~ 1993. 1.31	東入部 1274 他	圃場整備	485集
4	9208	HGI-4	1,319 m <sup>2</sup>	1992. 5. 8 ~ 1992. 8.10	東入部 329-18 他	公民館建設等	381集
5	9226	HGI-5	351 m <sup>2</sup>	1992. 5.13 ~ 1992. 8.20	東入部 329-1 他	下水道工事等	382集
6	9227	HGI-6	380 m <sup>2</sup>	1992. 8. 9 ~ 1992. 9. 4	東入部 390-7 他	道路拡幅	383集
7	9312	HGI-7	17,000 m <sup>2</sup>	1993. 5. 1 ~ 1994. 2.28	東入部 1172 他	圃場整備	516集・577集
8	9348	HGI-8	175 m <sup>2</sup>	1993.11. 9 ~ 1993.11.26	東入部 329-21 他	道路拡幅	421集
9	9418	HGI-9	145 m <sup>2</sup>	1994. 5.25 ~ 1994. 6.28	東入部 336-2 他	道路拡幅	421集
10	9427	HGI-10	5,003 m <sup>2</sup>	1994. 7. 7 ~ 1994.11.25	東入部 1098-2 他	圃場整備	485集
11	9529	HGI-11	2,600 m <sup>2</sup>	1995.10. 4 ~ 1996. 2.14	東入部 1366 他	圃場整備	
12	9722	HGI-12	30 m <sup>2</sup>	1997. 6. 5 ~ 1997. 6. 7	東入部 1450-1	道路改良	

\* 報告一覧は5頁下にあり

第2表 東入部遺跡群調査一覧





第1図 入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡 (1/50,000)

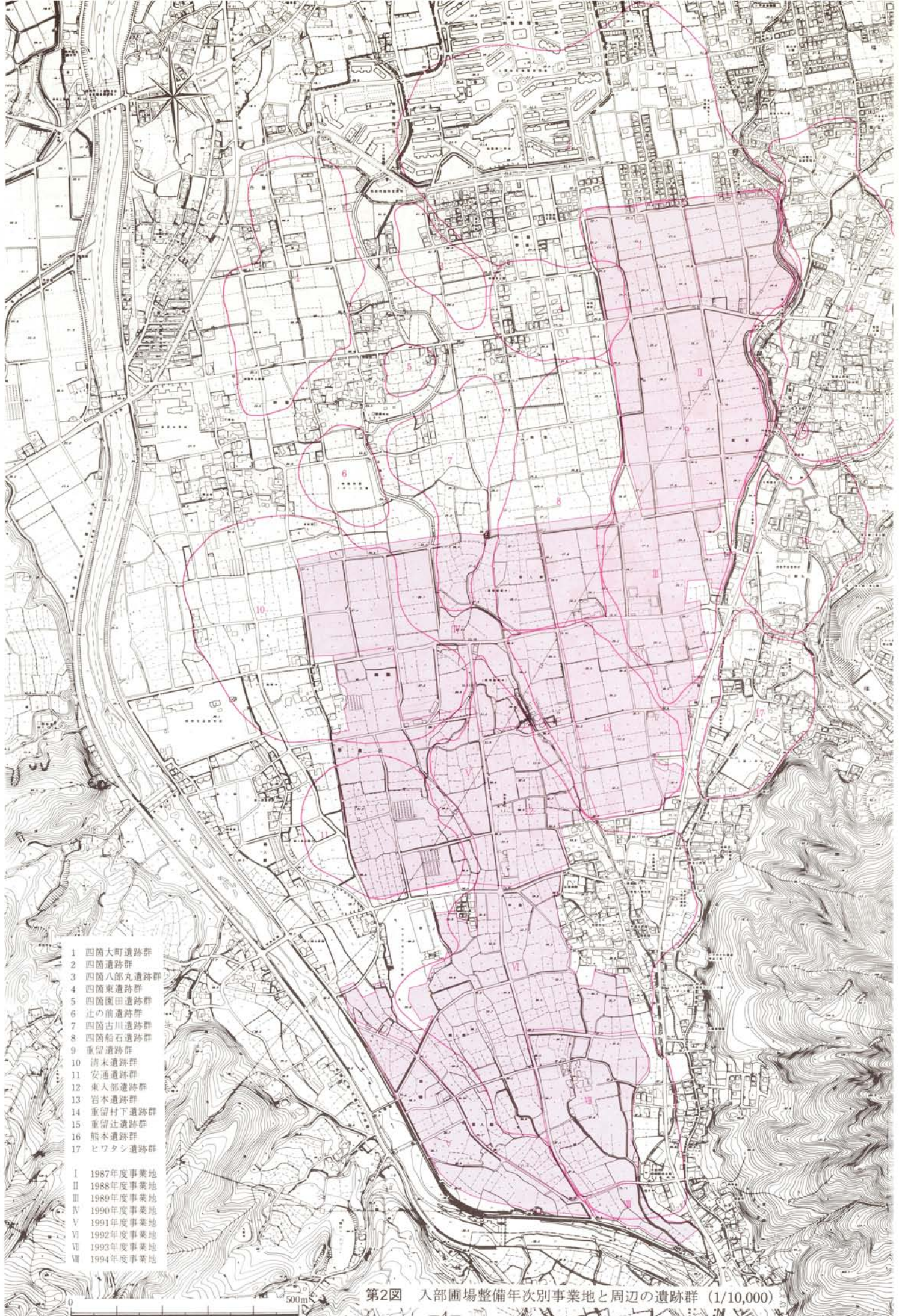
- 1 古武遺跡群
- 2 太田遺跡
- 3 羽根戸遺跡
- 4 都地遺跡
- 5 田村遺跡群

- 6 四箇遺跡群
- 7 拝塚古墳
- 8 有田遺跡群
- 9 原遺跡群
- 10 藤崎遺跡群

- 11 西新町遺跡
- 12 五島山古墳
- 13 拾六町ツイジ遺跡
- 14 宮ノ前遺跡
- 15 野方中原遺跡

- ( ○ 遺跡群
- 遺跡
- 古墳
- アミ部が圃場整備事業地

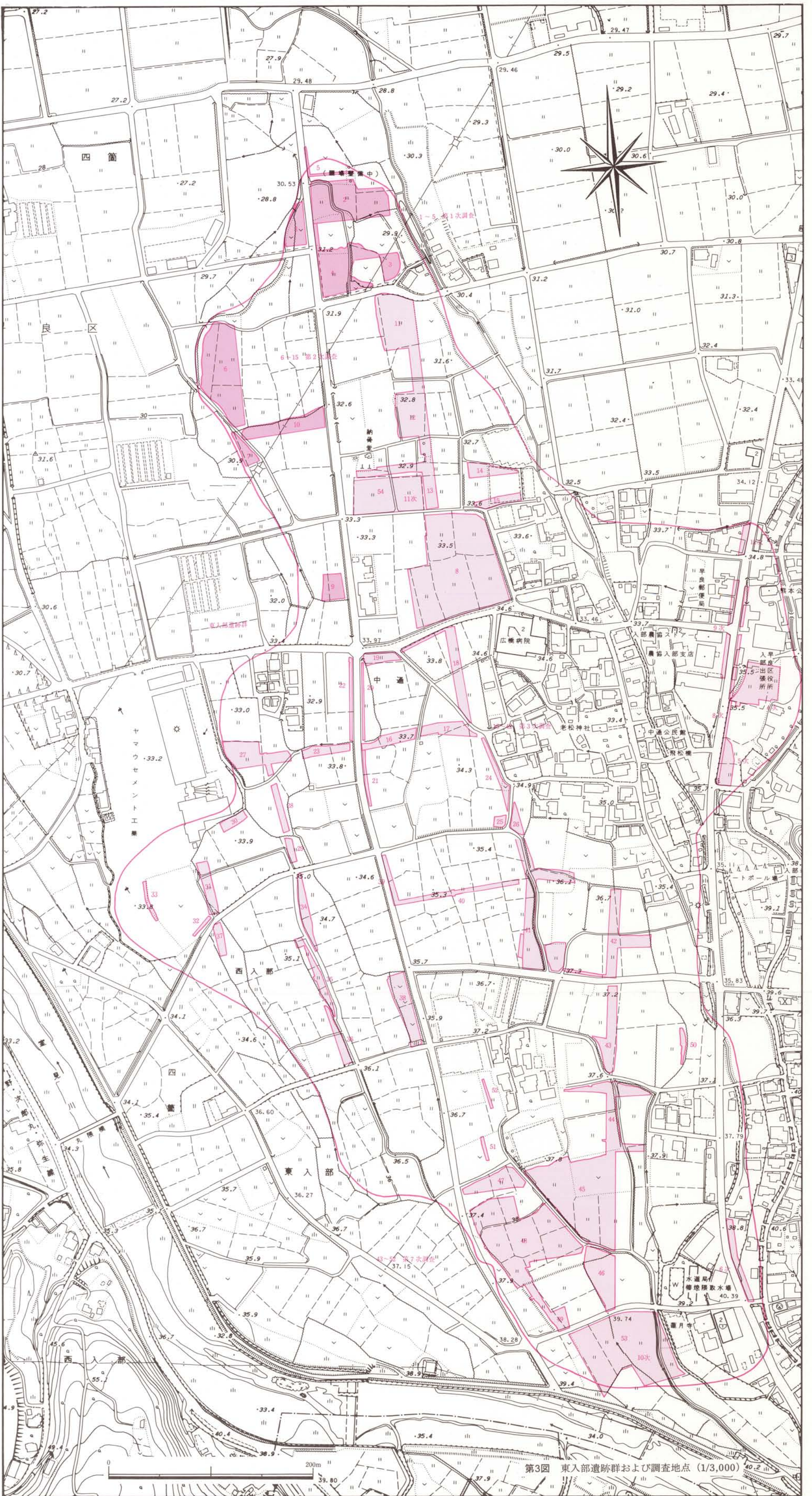




- 1 四箇大可遺跡群
- 2 四箇遺跡群
- 3 四箇八郎丸遺跡群
- 4 四箇東遺跡群
- 5 四箇園田遺跡群
- 6 辻の前遺跡群
- 7 四箇古川遺跡群
- 8 四箇船石遺跡群
- 9 重留遺跡群
- 10 清未遺跡群
- 11 安通遺跡群
- 12 東入部遺跡群
- 13 岩本遺跡群
- 14 重留村下遺跡群
- 15 重留辻遺跡群
- 16 熊本遺跡群
- 17 ヒワタン遺跡群
  
- I 1987年度事業地
- II 1988年度事業地
- III 1989年度事業地
- IV 1990年度事業地
- V 1991年度事業地
- VI 1992年度事業地
- VII 1993年度事業地
- VIII 1994年度事業地

第2図 入部圃場整備年次別事業地と周辺の遺跡群 (1/10,000)





第3図 東入部遺跡群および調査地点 (1/3,000)



### Ⅲ. 調 査 組 織

今回報告する東入部遺跡群第1次調査は1990年度に、東入部遺跡群第2次調査は1991年度に実施したものである。第1次調査については1998年に報告を行っているが、それに収録することのできなかつた縄文時代の遺構と遺物を今回報告する。第2次調査は調査面積が広く、また遺跡群の中心部分であつたため、順次整理を進めてきたものの、今日まで報告が遅れた。今回の報告でもその一部について報告するにとどまる。

以下、1990・1991年度の発掘調査関係者、それ以後の1998年度までの報告書作成の関係者について記す。

#### 事業主体（入部地区圃場整備）

福岡県農林事務所農地整備鉞害課

福岡市農林水産局農業振興部農業土木課

福岡市入部土地改良区

#### 調査主体

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

課長 柳田純孝、折尾学、荒巻輝勝（前任） 柳田純孝

第1係長 飛高憲雄、横山邦継（前任） 二宮忠司

第2係長 柳沢一男、塩屋勝利、山崎純男（前任） 山口譲治

庶務 中山昭則、内野保基（前任） 谷口真由美（文化財整備課管理係）

調査担当 主任文化財主事 濱石哲也（現文化財整備課整備係長）

文化財主事 宮井善朗 長家 伸 池田祐司 榎本義嗣

調査・整理補助 屋山 洋（現埋蔵文化財課文化財主事）

加藤隆也（現埋蔵文化財課文化財主事）

林田憲三 井上かをり 英 豪之 黒田和生 平川敬治

---

#### \* 5頁第2表 東入部遺跡群報告書一覧

『東入部遺跡群1－東入部遺跡群第4次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第381集 1994

『東入部遺跡群2－東入部遺跡群第5次発掘調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第382集 1994

『東入部遺跡群3－東入部遺跡群第6次調査の報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集 1994

『東入部遺跡群4－第8次・9次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第421集 1994

『入部VI－東入部遺跡群第3次・第10調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集 1996

『入部VII－東入部遺跡群第7次調査報告(1)－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第516集 1997

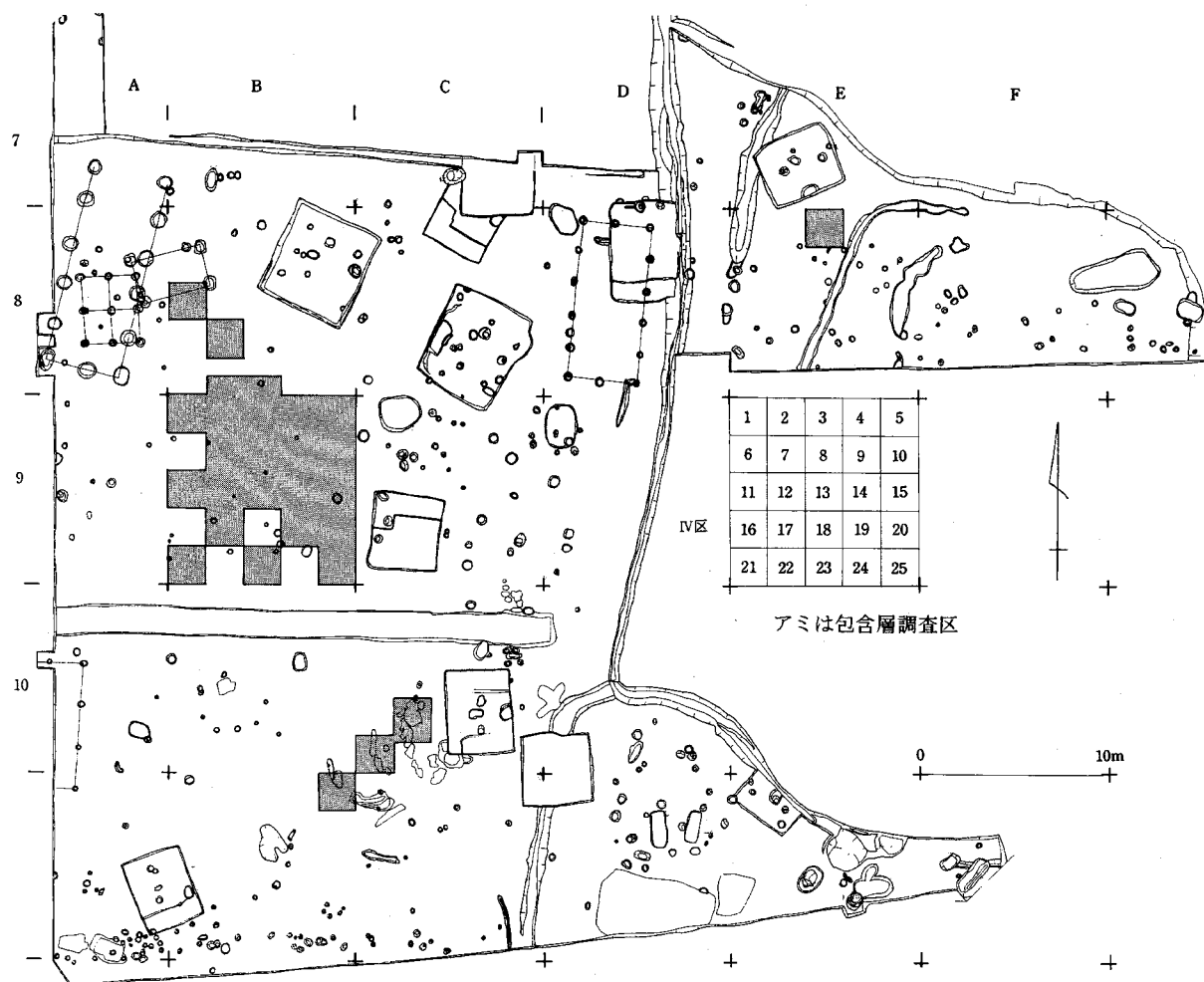
『入部VIII－東入部遺跡群第1次調査報告(1)・第7次調査報告(2)－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第577集 1998

## IV. 東入部遺跡群第1次調査の記録

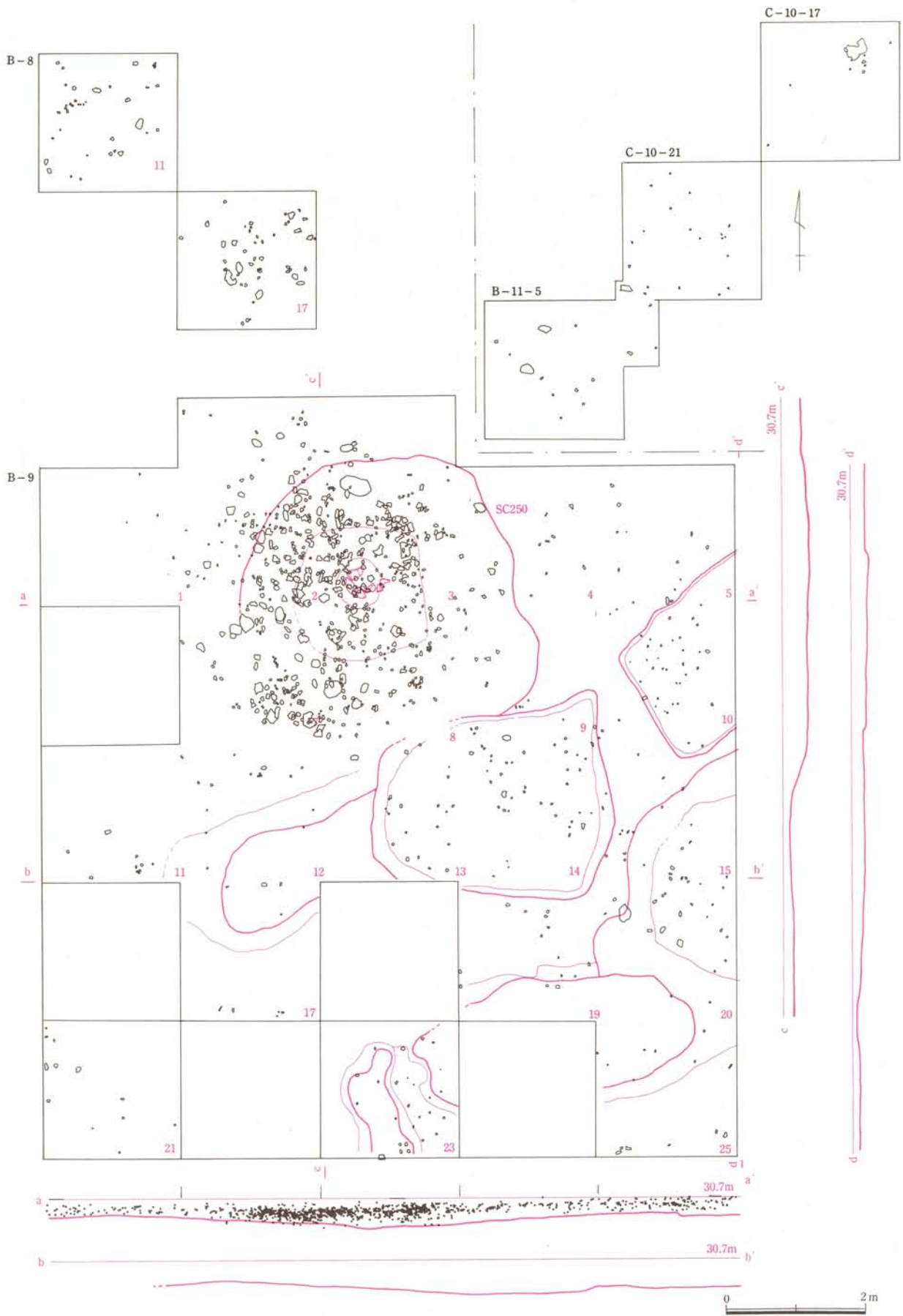
1次調査の概要および弥生時代以降の遺構、遺物については1998年発行の報告書「入部Ⅶ」で報告済みである。今回は、前回、整理等の都合により未報告であった縄文時代の遺構、遺物について報告する。

### 1. 概要

1次調査では、IV区を中心に弥生時代以降の遺構の覆土および、それらの検出面である茶褐色粘質シルトから縄文土器が出土し、遺構、包含層の存在が予想された。このため遺構調査終了後、IV区で遺物が多く見られた箇所を中心に調査区を設定し掘削を行った。この際、遺構調査時に設定した10mグリットを25に分けて2mグリットを設定し(第4図)、このグリット毎に遺物番号を付け、平面、垂直分布を記録した(第5図)。その結果、遺物集中箇所を確認し、住居跡と考えられるくぼみと石組みを検出した。遺物は茶褐色粘質シルトを包含層とし、その下層である黄褐色および暗褐色砂質土からは出土していない。この包含層を除去した面は緩やかな起伏がある(第5図)が上記の住居跡と考えられるSC250以外は遺構とは認定しがたい。しかし、大きな破片が単体で出土した箇所もあり、他に



第4図 IV区全体図 (1/400)



第5図 縄文時代包含層遺物出土状況 (1/80)



第6図 SC250 遺物出土状況実測図 (1/40)

も遺構が存在する可能性が高い。IV区以外は後世の遺構覆土、表土等で縄文土器が出土しているが、少量で遺構、包含層は予想しがたい。特にIII区からは遺物の出土は少ない。また、B-9-12~20区からは弥生土器も出土し、弥生時代の包含層を分離できていない。ただし、その分布は、集中するB-9-14、19区を除いては少なく、縄文土器の集中部には及んでいない。第5図に示した遺物出土状況には弥生土器は除いた。弥生時代の遺物については、すでに前回報告済みであるが、「入部Ⅷ」の第42図に示した出土状況図はB-9-14区南半と19区北半に位置し、遺物番号270がB-10-5区から出土した事を記載していない。ここで追加したい。

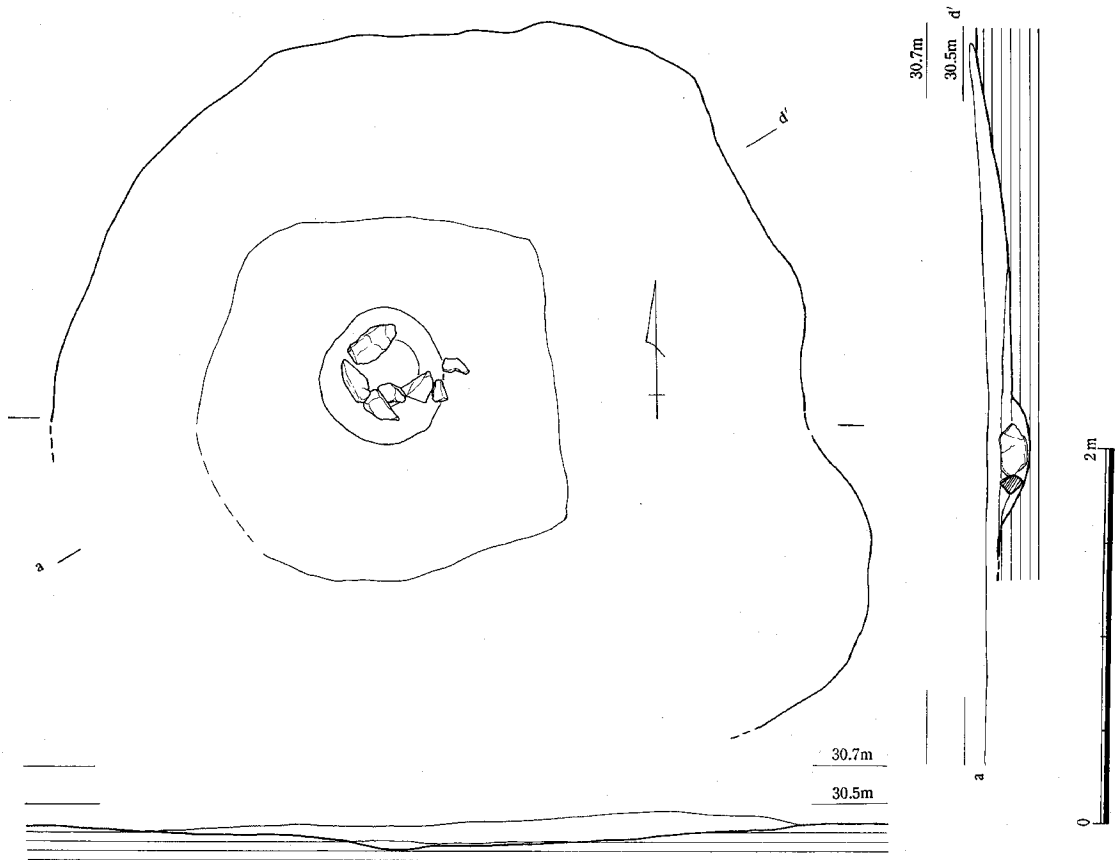
以下検出した遺構、遺物を報告するが、IV区包含層で調査を行ったのは一部のみであり、包含層が未調査のまま保存されていることを明記しておきたい。また、隣接する11区においても、縄文後期の遺構、包含層を確認しており、今後おって報告の予定である。

## 2. 遺構と遺物

### 1) 住居跡

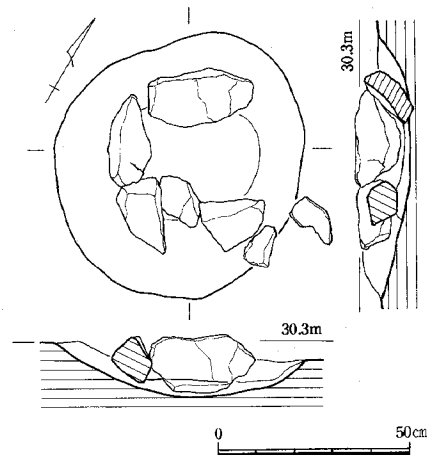
#### SC250 (第6、7図)

縄文時代遺物包含層の掘削を行い B-9-2、3、7、8 区に遺物の集中箇所を確認した。この部分は



第7図 SC250 実測図 (1/40)

包含層を完掘すると円形の緩やかにくぼみとなり、ほぼ中央に石組みが出土した。くぼみのプランは不明瞭であるが径約4mの略円形となり、深さ18cmを測る。第7図で示した下端の内側は鉄分の沈着または踏みしめによる固い面が存在する。柱穴等の遺構は検出できなかった。中央の石組みは径65から70cm、深さ10から15cmの浅い円形の掘り込みに作られる。本体は10から25cm大の礫を北東側が開く「コ」の字形に5個配し、石組み内で20×30cmを測る。掘り込み内の覆土は暗褐色粘質土で焼土、炭化物は全く見られないが、形から炉と考えられる。遺物は出土していない。



第8図 SC250 石組み遺構実測図 (1/20)

遺物の出土状況については第6図に示した。第5図の調査区全体の遺物出土状況のように、周囲の包含層からの出土遺物は散漫で、この集中部分には一定のまとまりがあると考えられる。このことから遺構内遺物と位置づけたい。遺物の集中箇所はくぼみのプランの西側にずれた位置にやはり径4m前後内に分布し、垂直分布は32cmを測る。本来の遺構の規模は、検出したプランよりやや大きく、くぼみは遺構のほぼ床面にあたると考えられよう。

遺物は土器および石器で、土器は破片資料が多い。遺物の垂直分布は遺構の床面より20cm前後浮いた位置に多く、床付近からは少ない。土器の中には31、34、105のように完形に近く復元できるものや大型の破片も多いが、使用した位置を保つようなものではない。多くの遺物は、遺構が廃棄された後、ある程度埋まった段階で捨てられた状況と考えられる。第6図では有文の土器、多く接合したも



の、床近くから出土したもの等について遺物番号を示した。また、他のグリット、表採遺物との接合も試みたが確認できたのは集中箇所内での接合関係のみであった。

#### 出土遺物（第9～23図）

B-9-2、3、7、8区出土の遺物をSC250出土遺物として図示した。図化にあたって、土器は口縁部については数点を除いたほとんどを示し、沈線等の文様があるものは全て掲載した。石器は石鏃、石錐、石斧等の定型化したものは全て、他は代表的なものを図化し、他は数量を数えた。

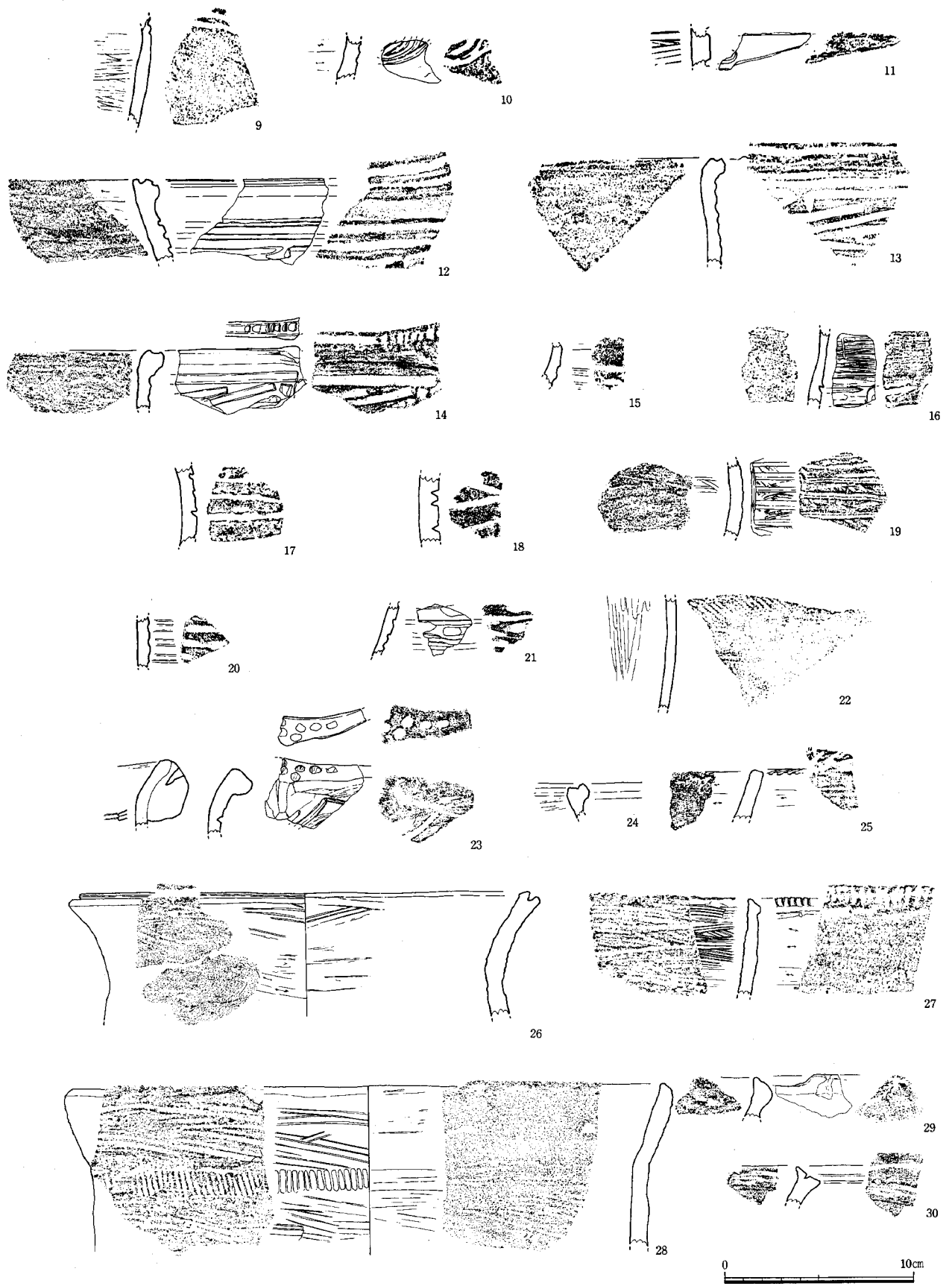
#### 土器

1から21は沈線を施す。その中で1から14は鐘崎式に見られる入組渦文、逆三角形文等を施す精製の鉢で小片は傾き等不明である。1の胴部は膨らみ最大径部で強く内湾し、口縁部は肥厚して短く立上がる。口唇部には沈線がめぐり刺突による列点を施す。波長部は4カ所と考えられ1対には取手状の突起があり、これに丸穴が2つ上方から穿孔される。直交する1対には、口縁部にわずかな突起が上方および外側にあり、それぞれに刻み目が施されるが欠けておりはっきりしない。取手状突起部分の胴部には入組文を施し、頸部の沈線は中断し上に向かって逆「ハ」の字状に開く。これらも対になると考えられる。沈線の間には縄文を施す。施文は器面の丁寧な研磨調整の後に沈線、縄文の順で行われる。2は口縁部に丸みを帯びた突帯をめぐらし、波状部は他の部分より突帯を厚くする。この部分には口唇部に内面方向からの刺突を施し、突帯上面には不連続の半円文が見られる。胴部には入組文を描き、斜位の沈線文は多条化する。沈線は粗く、線のつながりが雑で縄文は見られない。研磨調整も1に比べて粗い。内面には胴部下半に横研磨の後に縦方向の研磨痕が見られる。細かな胎土に砂粒が入る。4は沈線下に渦文が施されるが沈線の深さが異なるなど雑である。5は渦文間に縄文が施され外面の研磨が丁寧で光沢があり器壁が薄い。6は入組渦文下の斜位沈線が多条化する。外面の研磨痕には繊維質の擦痕が見られ、ヘラ状の工具を使う。7は頸部屈曲部に接する様に渦状文が施される。胎土、器面調整は他のものより粗い。8、9、10は渦文、斜位沈線の一部と考えられる。11は丁度沈線部分で破損した胴部逆三角形のポジ文様部分である。12、13、14はやや外反気味に立ち上がる口縁を突帯状に肥厚し、口唇部に沈線をめぐらす。器面は研磨およびナデだが、きめ細かなものではない。12の外面には、わずかに赤色顔料の痕跡が残る。13、14は頸部の横沈線下に斜位沈線を施し、その起点が明瞭に見られる。12、14はわずかながら波状部がありこの部分で12の口唇部沈線は切れ、14には刺突文が施される。15は浅い沈線、16破断面V字形の深い沈線と渦文状の曲線がある。17から20は17、18が断面V字の深い沈線、19、20が浅い沈線でこれまでのものとやや様相が異なる。21は晩期前半の浅鉢で、胎土が細かく、鋭い沈線と浅い列点を施す。混じり込みである。22は研磨調整の後に縄文を施す。23は外反する波状の口縁部の波頂部にはこぶ状の垂下突帯を、口唇部に沿って断面台形の突帯を付し、口唇部には先の尖った断面円形の棒状工具により刺突する。口縁下には沈線が見られる。24は鐘崎式の精製の鉢の口縁部、25、26は粗製土器である。27は口唇部に細い刻目を密に施す。28は内湾気味に外反する口縁部の屈曲部に2枚貝の背による圧痕を施す。29は波状口縁を肥厚し刻みを入れた鉢の口縁部、30は口唇部に鋭い沈線を施す半精製の深鉢と考えられる。

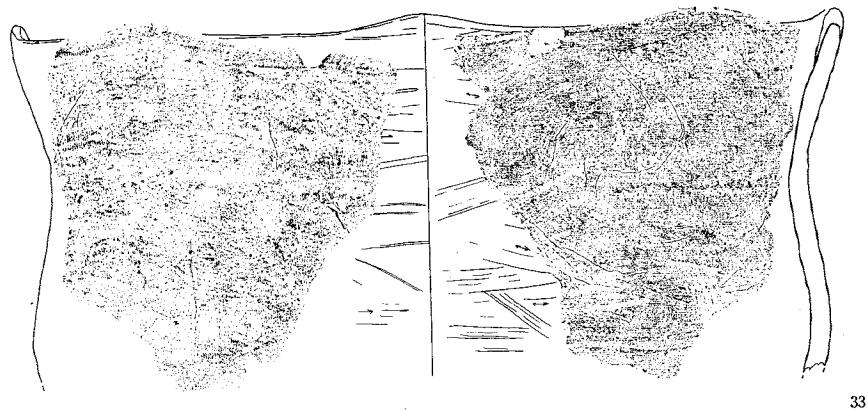
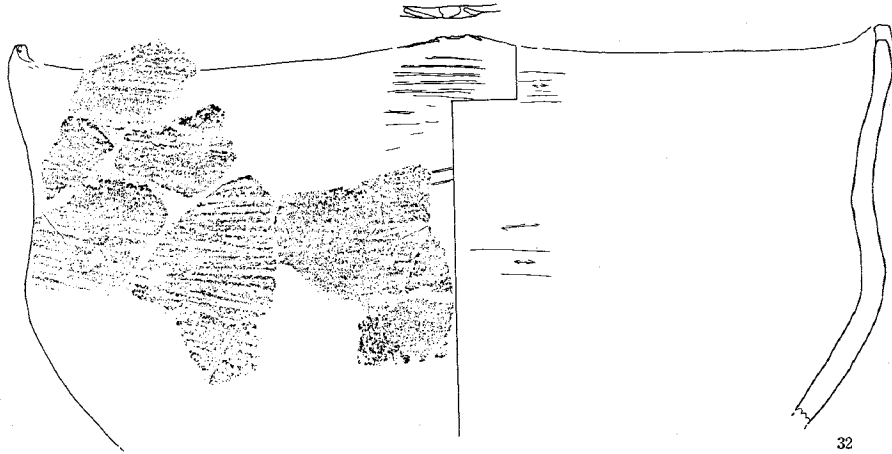
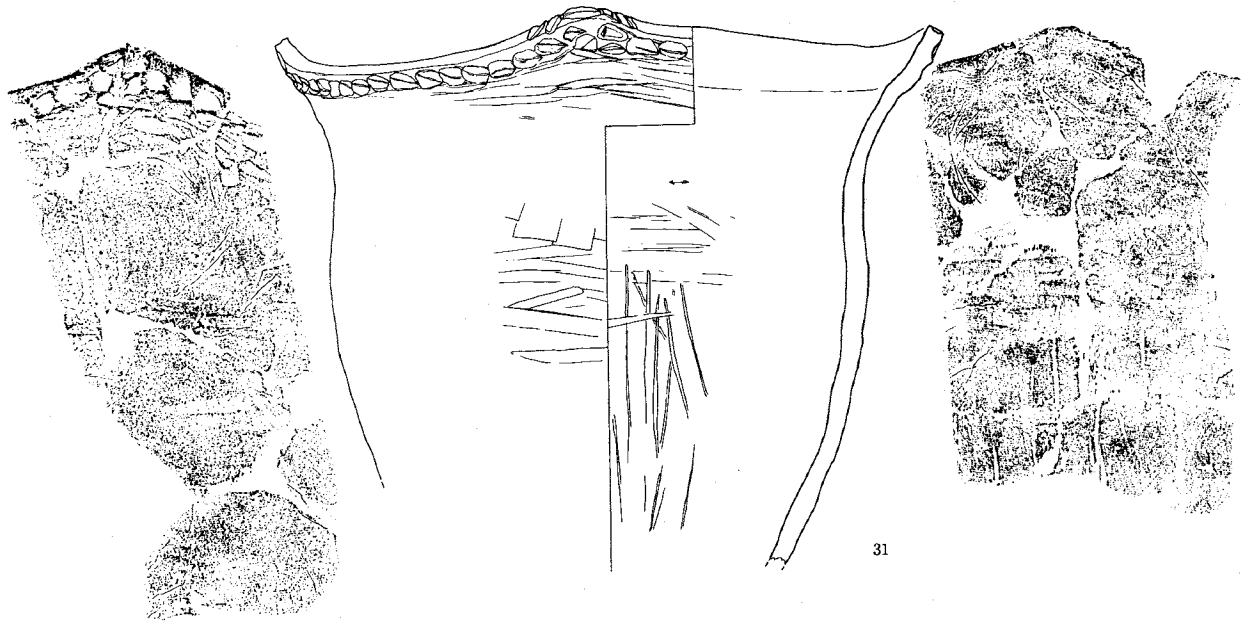
31からは若干の半精製土器と粗製の土器群である。31は4つの頂部の波状口縁深鉢で粗めの半精製品である。胴部下半を欠くがほぼ全体を復元できた。遺構の南端にややまとまって出土した。口唇部は面取りし、1つの頂部には指頭圧痕とそれを挟むようにハの字状に刻目を、その横の頂部には指頭圧痕のみを施すが、他の頂部には見られない。口縁部には爪による刻目を施し口縁帯状を呈す。胴部は最大径部で緩やかに屈曲し、ほぼこれより下は横方向のヘラナデ状の調整を施し、上部には板の木口状の痕跡が見られ上方への調整があると思われるがはっきりしない。口縁下にヘラナデ状の痕跡が



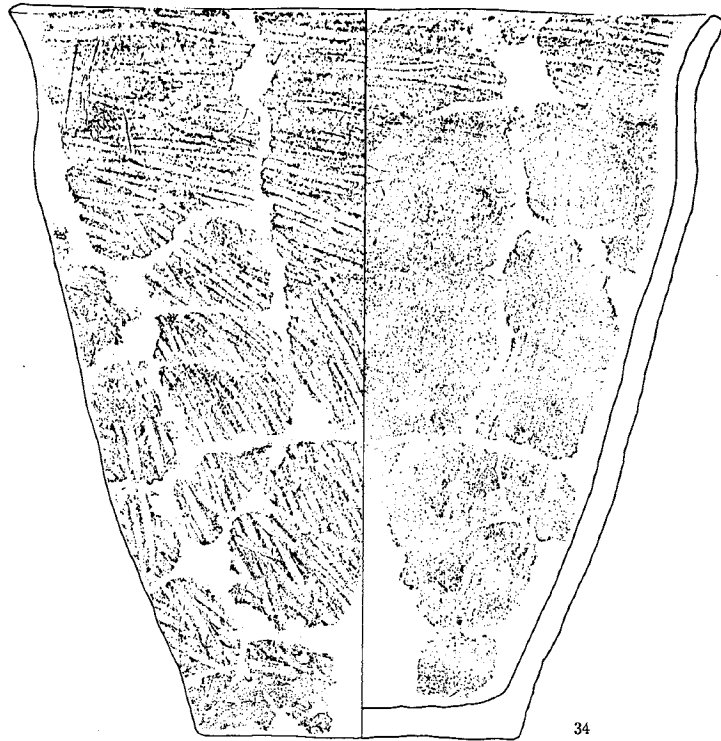
第9図 SC250 出土遺物実測図1 (1/3)



第10图 SC250 出土遺物実測図 2 (1/3)



第11図 SC250 出土遺物実測図 3 (1/3)



34



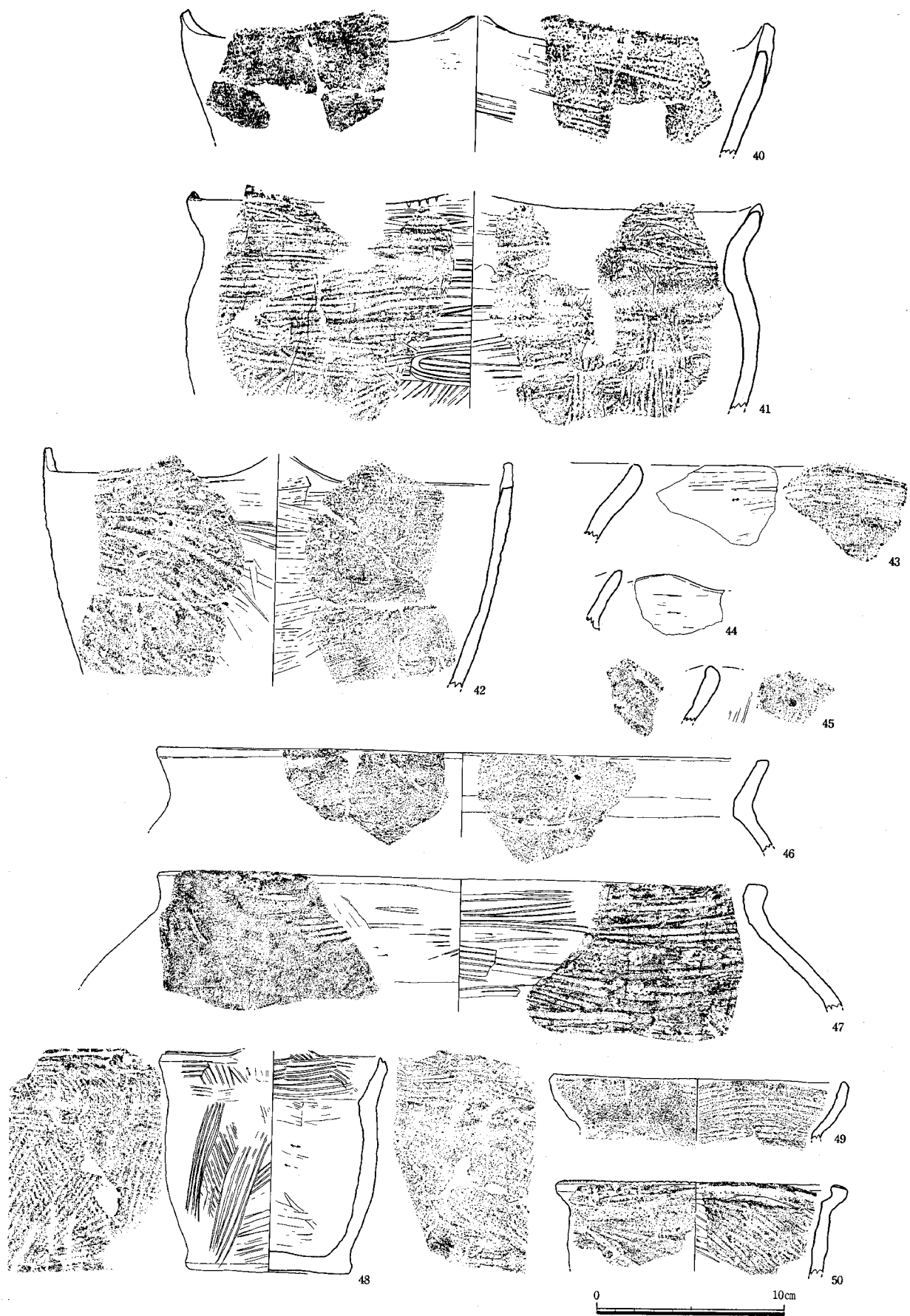
35



第12図 SC250 出土遺物実測図 4 (1/3)



第13図 SC250 出土遺物実測図 5 (1/3)

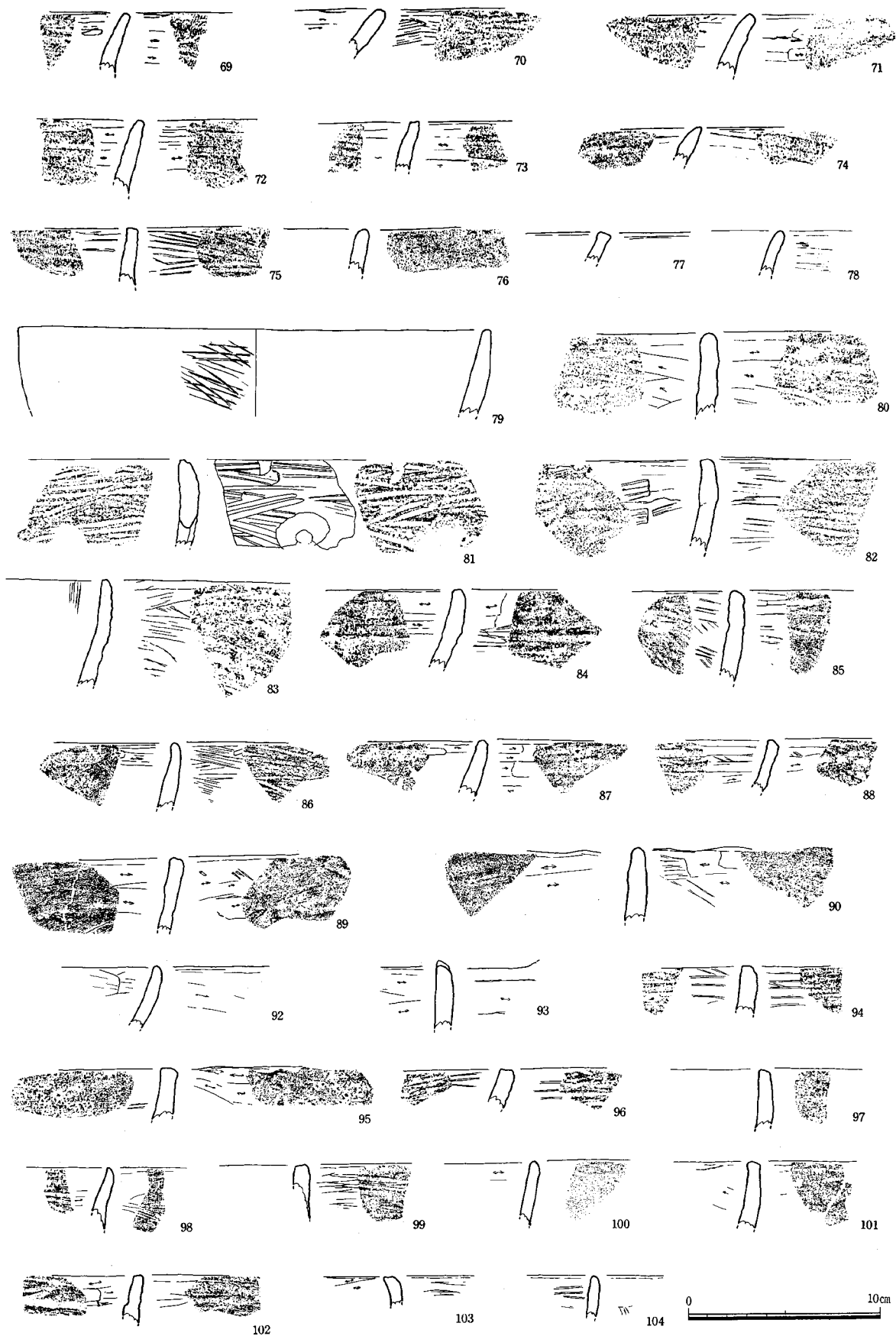


第14圖 SC250 出土遺物実測図 6 (1/3)

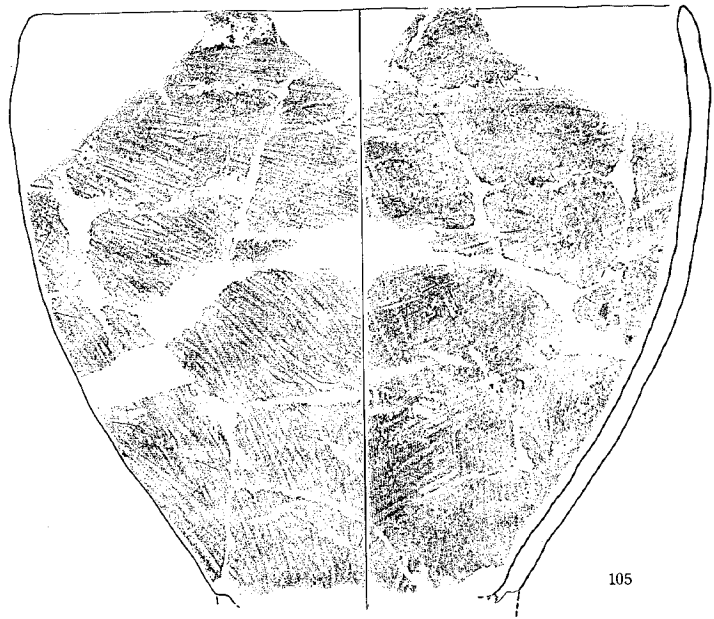


第15図 SC250 出土遺物実測図7 (1/3)

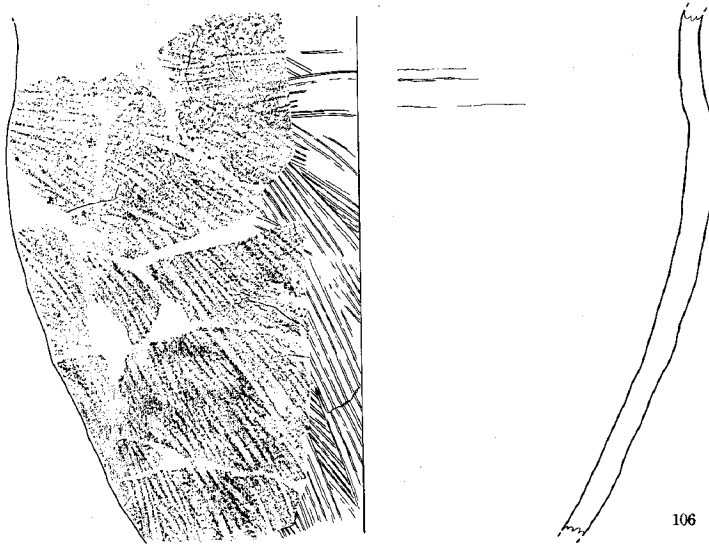




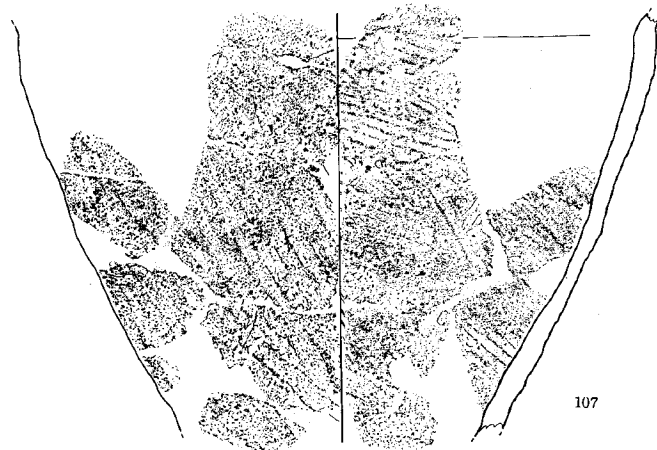
第16图 SC250 出土遺物実測図 8 (1/3)



105



106



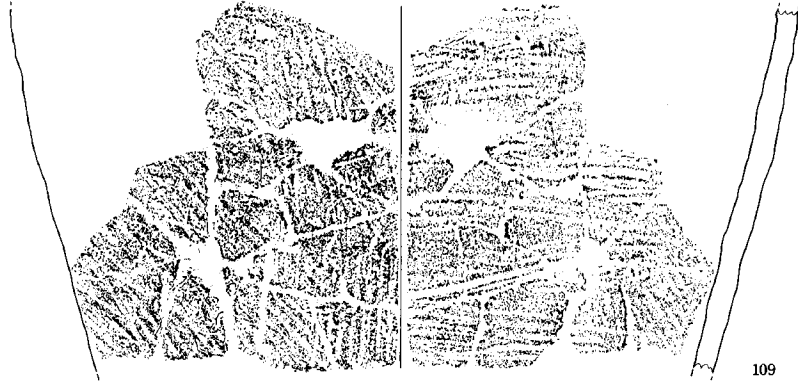
107



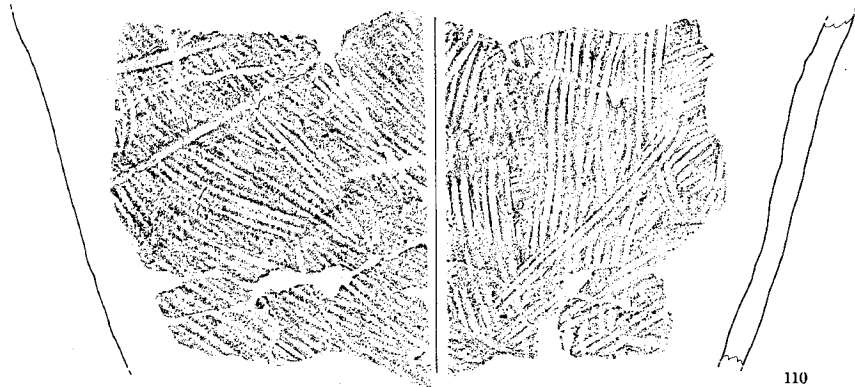
第17図 SC250 出土遺物実測図9 (1/3)



108



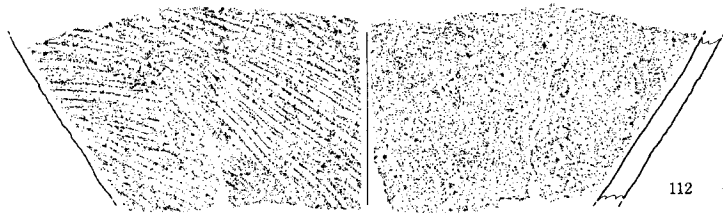
109



110



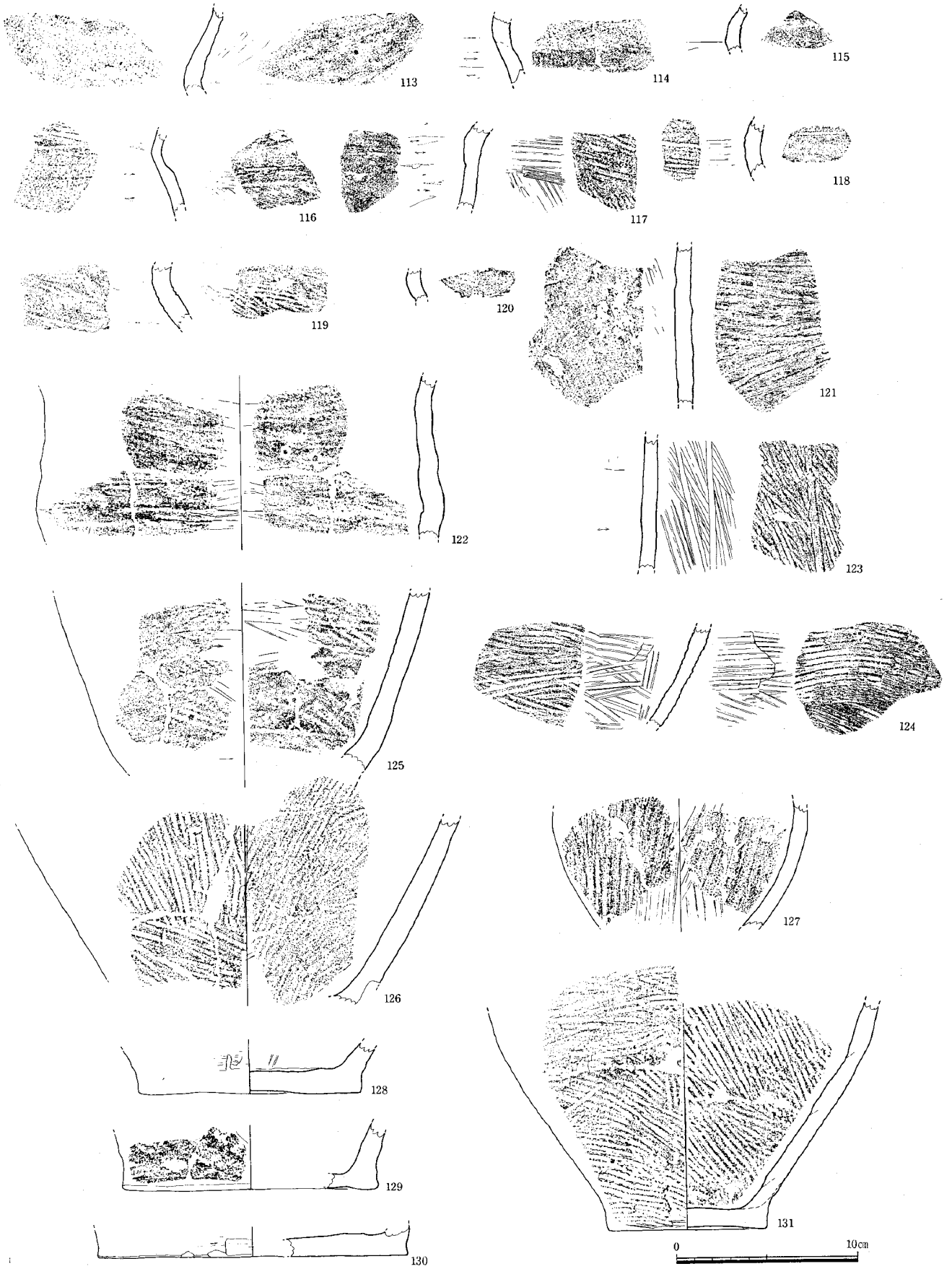
111



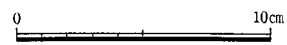
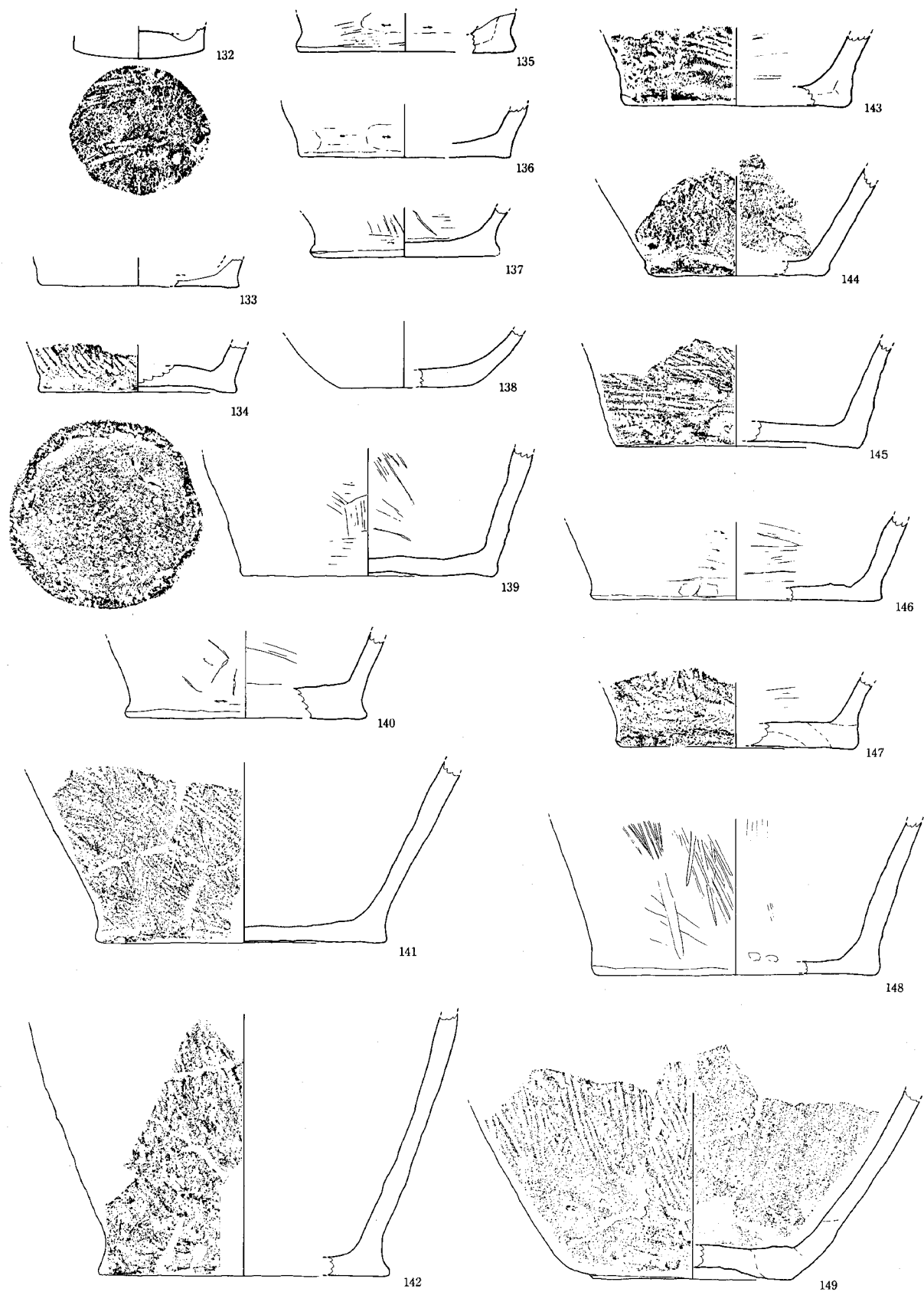
112

0 10cm

第18圖 SC250 出土遺物実測図 10 (1/3)



第19図 SC250 出土遺物実測図 11 (1/3)



第20图 SC250 出土遺物実測図 12 (1/3)

あることから頸部はそれらをナデ消したと考えられる。内面上半は横方向のヘラナデ状、下半には縦方向の条痕状の調整が見られる。32、33は胴部が屈曲し、緩やかに外反する波状口縁の粗製土器で32の波頂部には刻目を施す。波頂部は4つと考えられるが不明。34は口縁部がわずかに外反し長胴で器壁が厚めの深鉢である。外面、内面上部に繊維束状の原体を思われる条痕を施し、内面下半はなでる。全体の1/2強が残存する。35は外面を条痕、内面はナデの後上半を横方向に条痕を施す。

36から45は緩やかに外反する波状口縁を呈す。4つの頂部に復元したが推定である。36の波状部は厚みがありその部分のみ後に張り付けて加える。37、41には波頂部を挟んで刻目を施す。42は外反せず波状部が高い。

46は頸部で屈曲して強く外反しナデ調整である。47は文様を施す精製土器に近い鉢型の器形を呈す。48は小型の鉢で口唇部に沈線を施し、突起を設ける。外面は前面に2枚貝条痕を施し、内面胴部は条痕の後ナデる。1/2弱が残存する。49は強く内湾しながら外反し、内面に2枚貝条痕を明瞭に残す。50は内面に稜を成して外反する口縁部が内側に突起し、口唇部に浅く鋭い刻目を施す。

51から78は外反もしくは外反気味の薄片である。条痕、擦痕調整を施すものが多い。34、39、41のような器形になると考えられる。51は口唇部に刻目があり、波状であろう。79から105は内湾気味に立ち上がる口縁部で条痕調整が多い。105は3/4が残存し遺構の北東隅に固まって出土した。底部との接合面ではずれている。106、107は深鉢の胴部で、上位が緩やかに屈曲し外反して口縁部に到る。108から112は胴部破片で径が復元できるものを掲載した。113から122は屈曲または湾曲部、125から127は底部近くである。128から149は底部である。147で接合部を推定図示したように底の円盤に胴部を乗せるように接合し、急に立ち上がるものが一般的である。149は重みでつぶれたものであろう。132は底が丸い。138も特異で胎土も砂粒をほとんど含まず混ざり込みの可能性も考える必要があろう。148は条痕文の上から研磨調整を施す。

#### 石器

SC250内から222点の石類が出土した。そのなかで定型石器は61点で、石核5点、剥片54点、碎片90点、素材1点、石核調整薄片3点である。石材では黒曜石199点、古銅輝石安山岩21点、玄武岩1点、細粒砂岩1点である。黒曜石は肉眼では佐賀県伊万里市腰岳産とされているものに類似している。

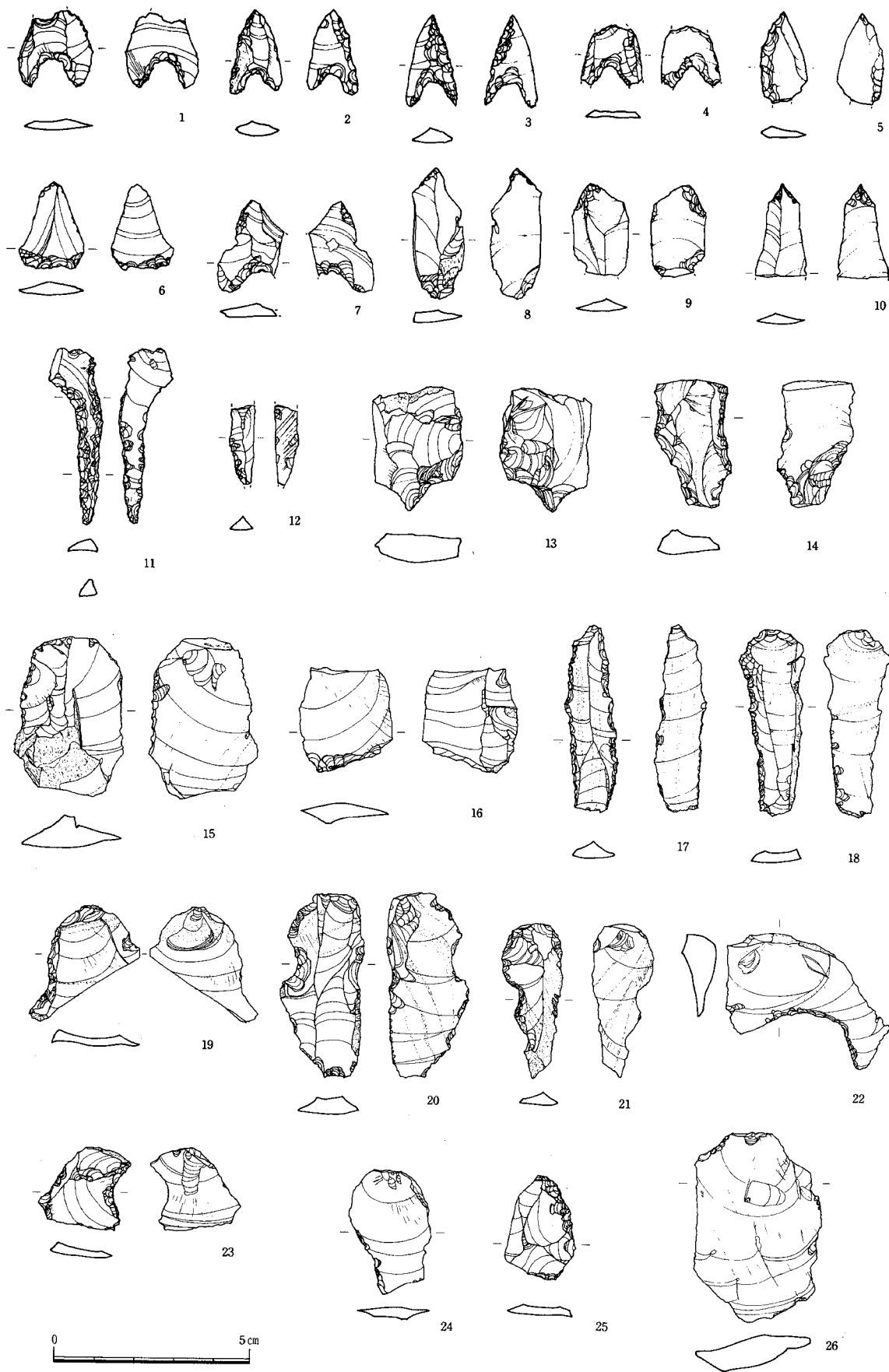
石鏃(1~10) 4点の製品と6点の未製品が出土した。いずれも黒曜石製で主剥離面を残した剥片鏃である。製品はいずれも凹基鏃で片側にのみ調整剥離を施すが、1、4は基部側、2、3は先端側に素材となった剥片の主剥離の打点側となる。5から10は未製品と考えられる。素材剥片の打点は5、6は先端側、7から10は基部側になる。5の片側には入念な調整剥離を施す。他は先端のみに調整剥離が見られる。5、9は基部に切断面が残り、つまみ型石器を素材としていることがわかる。

石錐(11~13) ドリル2点、オール1点で何れも黒曜石製である。11は縦長剥片を素材とし、背面に主に入念な調整を加え、断面三角形に仕上げる。一部自然面が残る。12は小石刃状の剥片の背面片側先端に細かな調整を施す。13は図の上面に自然面が残る。

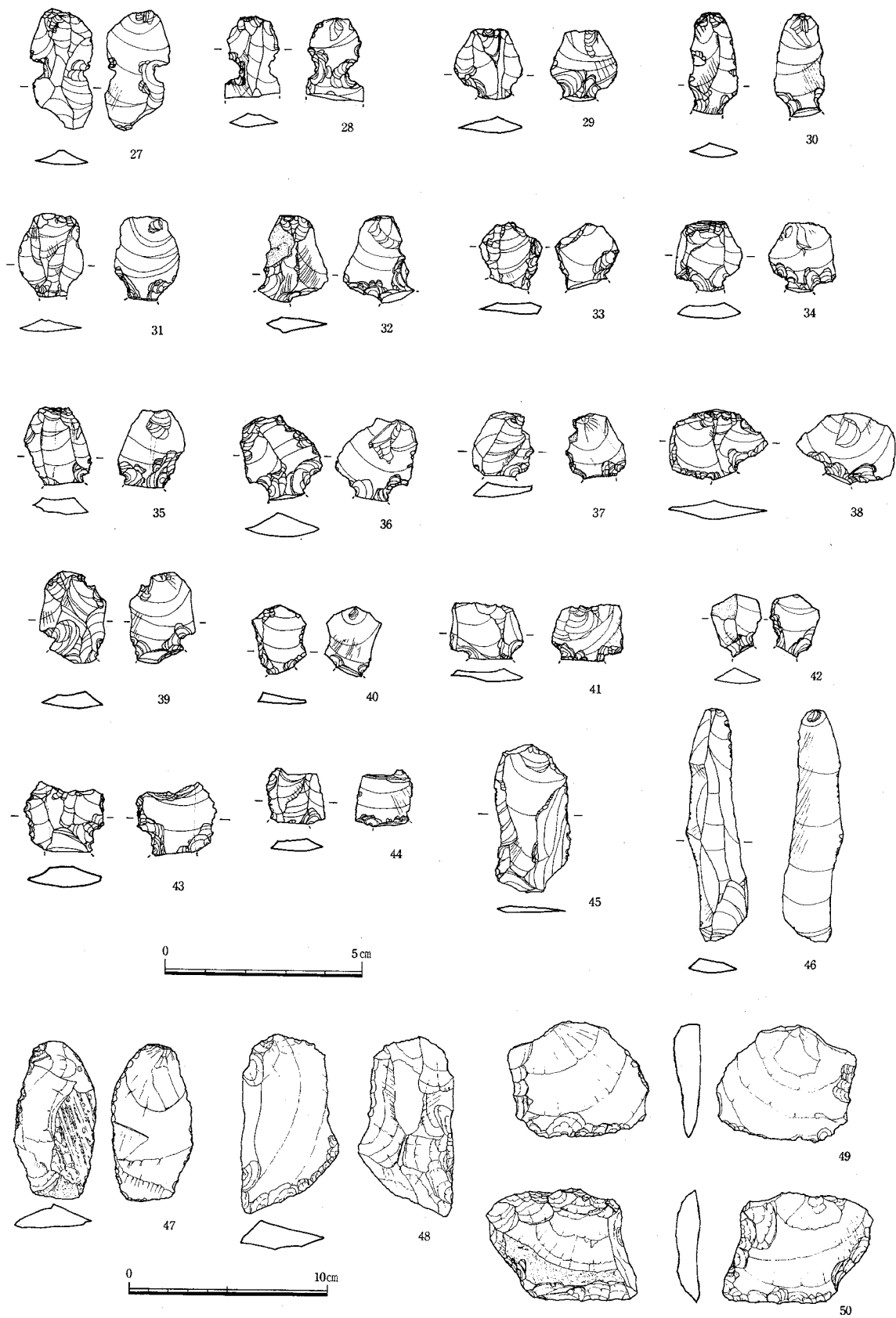
スクレーパー(14~18、48~51) 黒曜石製が4点、古銅輝石安山岩製が12点出土した。黒曜石製の14から18は縦長剥片を使用する。14、17、18は主に背面の側面に調整剥離を入念に施し、15は主剥離面に若干の調整のみである。16は先端側に調整剥離がみられ基部側は欠損する。15、18には自然面が残る。

挟り入り石器(19~23) 黒曜石製が5点出土した。

剥片石器(24~26) 剥片の一部に調整剥離を施した石器で定型化していないものをまとめた。黒曜石製のものが9点出土している。24は側面に、25は側面および端部に、26は基部に調整剥離を施す。

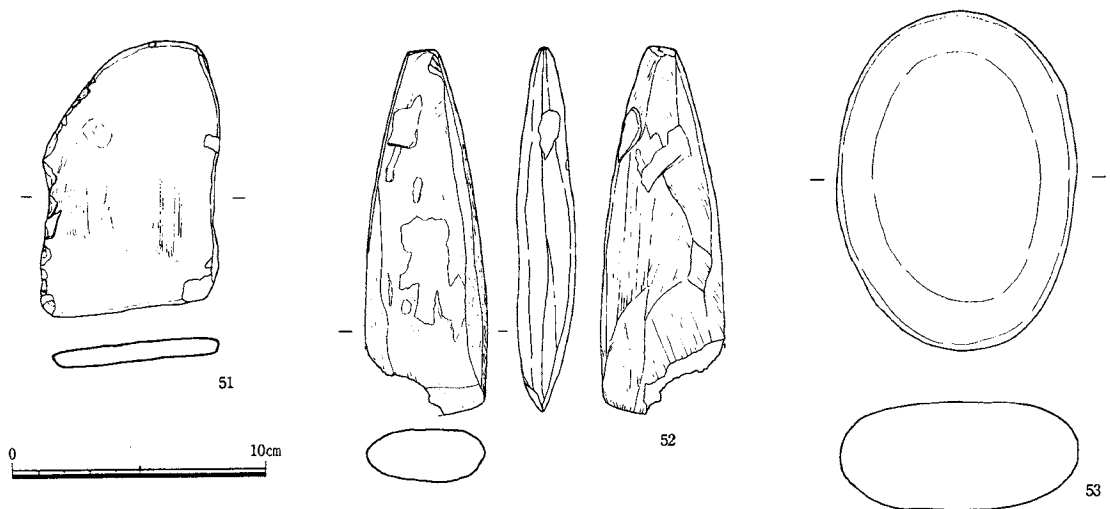


第21图 SC250 出土遺物実測図 13 (2/3)



第22図 SC250 出土遺物実測図 14 (2/3、1/3)





第23図 SC250 出土遺物実測図 15 (1/3)

24の背面の一部、26の背面全面は自然面である。図示していないが切断面を持つものが3点ある。

つまみ型石器(27~44) 黒曜石製が19点出土した。27から40は剥片の基部側で主剥離面に打点を残す。41から44は基部を欠くが端部側もさらに調整剥離による抉り部で切断する。先の石鏃が縦長剥片の端部側を用いているのと対照的で5、9のように未製品に抉り部の切断を残す鏃の存在を考えると、剥片の基部側のつまみ型石器が剥片鏃の素材を取った残りとする考えに肯首できる。27は抉りを入れるが切断していない。主剥離面右側の抉りを入れる剥離作業において先端部まで剥離が及び破棄されたものと考えられる。28は抉り部より端部よりで折れる。抉り部位外に調整剥離を行っているのは36、43のみである。また、32、37、42は自然面を残す。

使用痕のある剥片(45、46) 黒曜石製5点を確認した。縦長剥片4点と不定形剥片1点がある。縦長剥片は側面に、不定形剥片は側面および端部に使用によると思われる刃こぼれがある。

叩き石(51) 風化した玄武岩の薄い板石で2側面に叩き等の使用により面が破損する。

石斧(52) 蛇文岩製の磨製石鏃が1点出土した。扁平な撥型を呈し全体を丁寧に磨く。刃部は欠損するが、幅5cm弱と考えられ、基部は1.2cmを測る。刃部は両刃だが、図示した左面体部は屈曲気味に刃部に狭まり片刃風である。

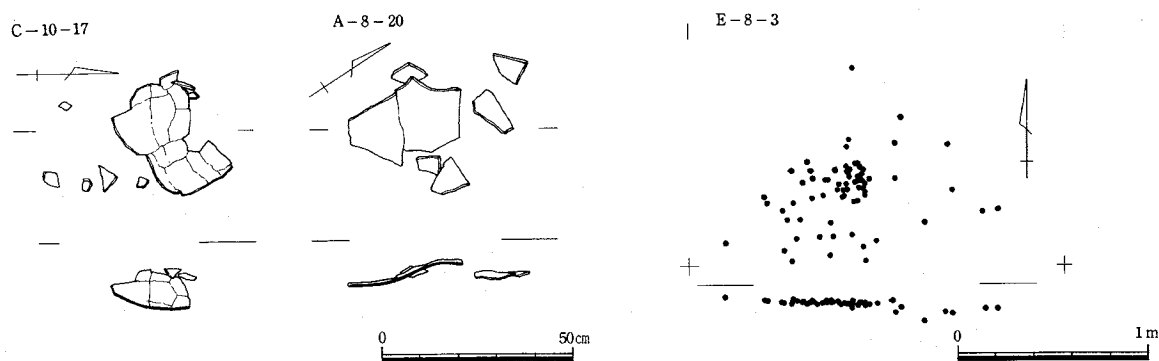
磨石(53) 細粒砂岩のやや扁平な円礫で本来滑らかな原石の片面を磨きに使用し、側面には叩きによる打痕が残る。

## 2) 遺物包含層と遺物

概要で述べたようにSC250以外では遺物の出土は散漫で、接合するものも少ない。鐘崎式の遺物が多いものの、北久根山式、西平式、晩期の遺物も見られる。以下、遺物が集中した部分、大型の破片の出土地点の出土状況、出土した遺物について触れる。また、表採、後世の遺構出土の縄文土器、前回触れていない若干の弥生土器も報告する。細かな出土地点については表に示した。

### E-8-3区(第24図、図版2-5,6)

周辺で土器は出土していない地点で、黒曜石の碎片、剥片が集中して出土した。黒曜石は約1.5mの範囲に13cmの比高差の中で出土し、特に集中する部分では約50cmの範囲内で6cmの比高差の中に集まる。掘削と水洗により193点の黒曜石を得た。ほとんどが細かな碎片で、剥片は12点ほどあるが、そのうち背面に自然面を残す不定形剥片が3点、不定形剥片2点、縦長剥片を切断したもの7点であ



第24図 包含層遺物集中区実測図 (1/20、1/40)

る。削片には3～10mm大細かなものと、やや大きめの不定形なもの、長さ2cmほどの縦長の刃状のものがある。原石は不純物の混ざり具合等からみて2種類以上あると考えられる。接合は試みたができなかった。石器製作が行われた跡で、製品は持ち出されたと考えられる。

A-8-20区(第24図) 大型の破片(第27図198)が内面を上にした状態(第24図)で出土した。遺構検出面の出土で、グリット全体を調査していない。横倒しにした土器棺、埋甕といった遺構内の遺物の可能性がある。

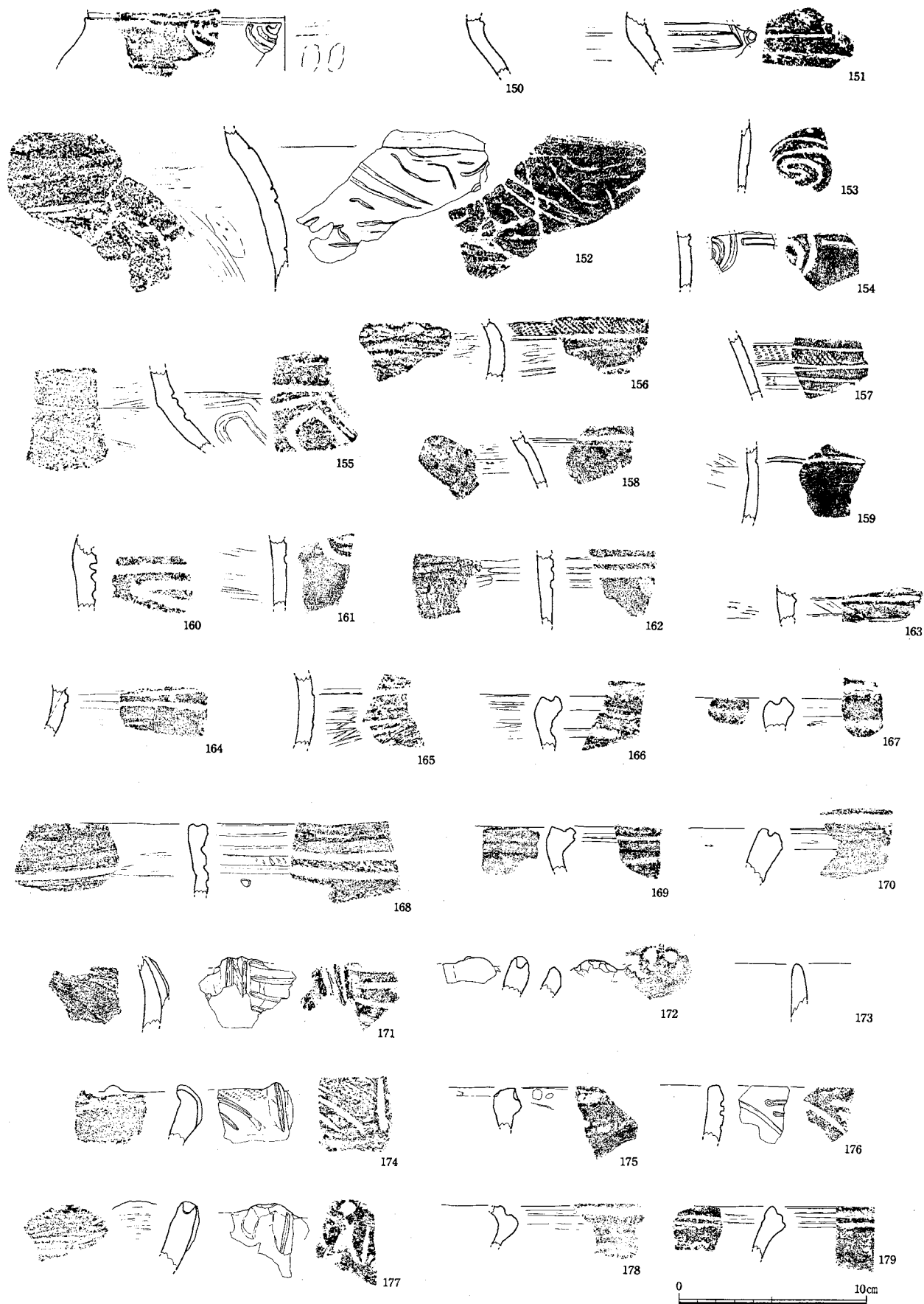
C-10-17区(第24図) 包含層調査時に出土した大型の破片で197が内面を上にして出土した。遺構内遺物の可能性がある。

#### 出土遺物(第25～32図)

##### 土器

150から170は鐘崎式を主体とした沈線文を施す土器で、西平式、晩期等のものもある。150は頸部屈曲部の沈線下に同心の半円を3重に描く。丁寧な作りではない。151は3本の横走沈線と弧を描くが全容は不明。152は入組文、渦文等を描こうとしたようだが、浅く雑な沈線で判然としない。頸部付近は施文後に研磨調整を施す。153は浅入組み渦文を、154は渦文を施す。何れも器壁が薄い。155は厚手で太めの斜行沈線、弧状の沈線を施す。156は縄文と斜行する沈線を施す半精製品、157は丁寧な研磨調整で器壁が薄く、沈線間に縄文を施す。158、159、162、164は沈線文のみで時期不明。162は一見して胎土が異なり、茶色の鈹物が多い。160は三角形モチーフの一端が見られ、161には同心円の一端が描かれる。166から170は口唇部に沈線を施す鐘崎式の鉢である。168は沈線間に浅い刺突状の疑似縄文を施す。

171は口縁部を肥厚し、さらに垂下する粘土帯を2条貼付し沈線を施す。172は突起部を肥厚し刺突を施す。173にも口縁部を薄く肥厚する。174は肥厚した口縁部に垂下する隆起帯で突起を作り沈線を施す。口唇部付近には縄文を施す。175は口縁部を欠く。口唇部からの深い刺突が見られ、口縁部の突起部分が厚くなると思われる。176は内湾気味の口縁部に沈線を施し、その起点は刺突状に深い。177はハ字状に粘土を貼付し中央を突起状にし頂部に刺突する。178は急に内湾する口縁部に、179は外反する口唇部に2本の沈線を施す。180、181は小型の平面方形で脚がつく鉢になると考えられ平滑な研磨調整で仕上げる。沈線間に180は縄文、181は縄文および細かい刻みによる疑似縄文を施す。182は橋状取手とそこにつながる突帯を貼付し、沈線文および湾曲した薄い工具による刺突を施す。橋状部の空隙は径5mmほどの孔で断面円形の工具であけた痕跡がある。調整は雑。183は口縁部に粘土帯をやや内傾させて重ね、口唇部には貝の体部を軽く押圧する事で波状を呈す。胴部は条痕を内外面に施す。186は粘土帯を突起状に貼付する。184は斜行沈線を施す。187から189は口唇部に斜行刻



第25图 包含層出土遺物実測图 1 (1/3)

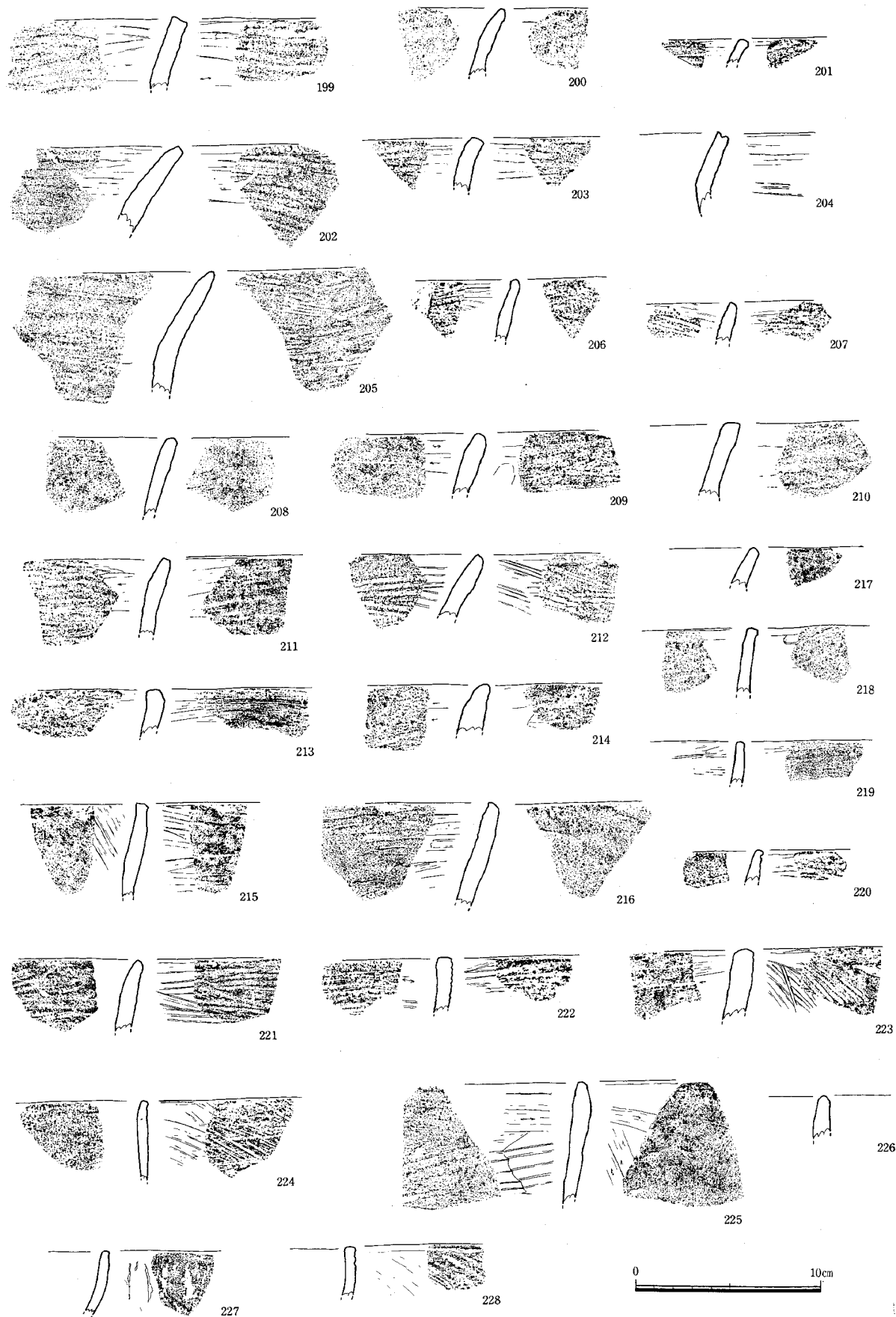


第26図 包含層出土遺物実測図2 (1/3)

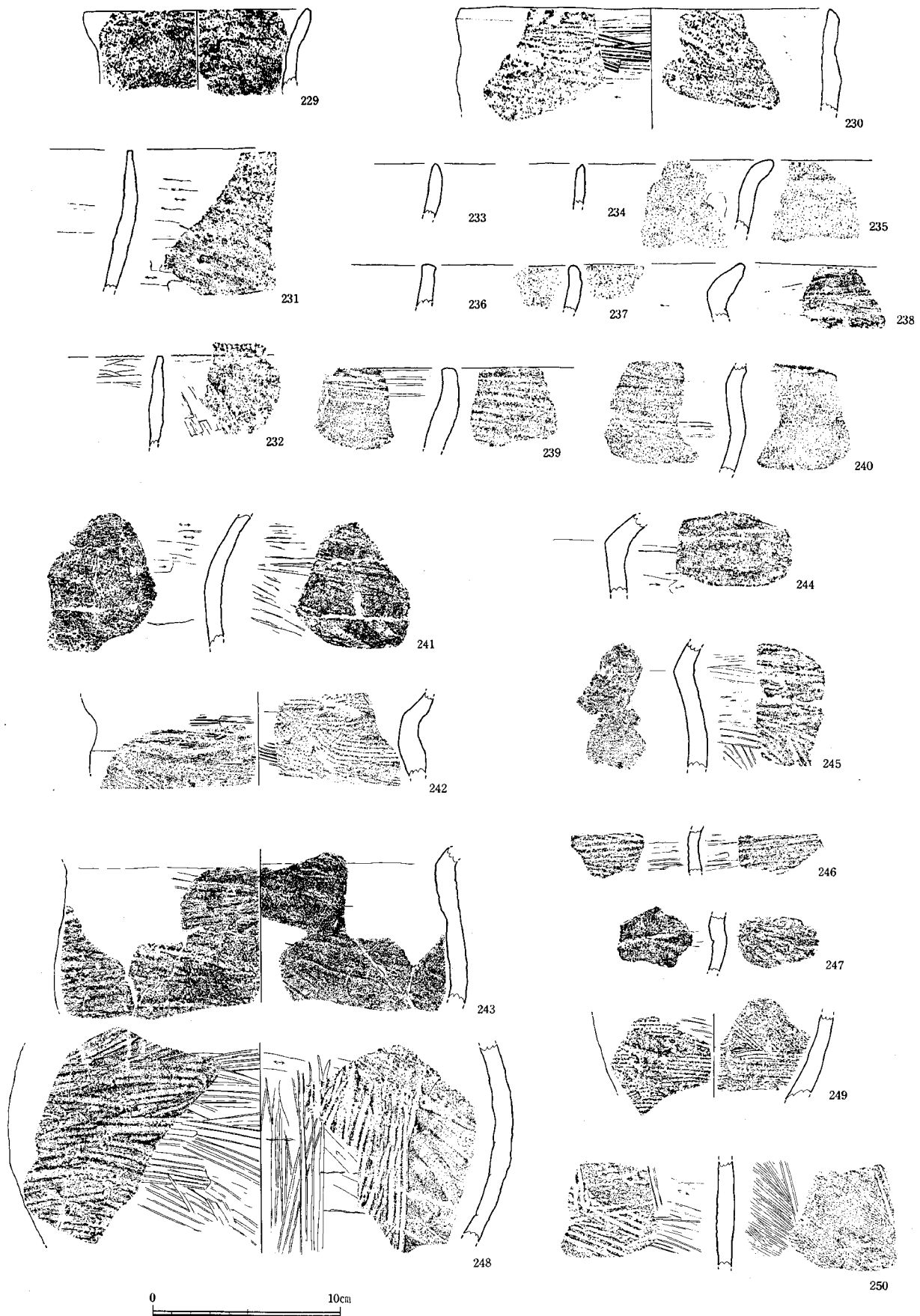


0 10cm

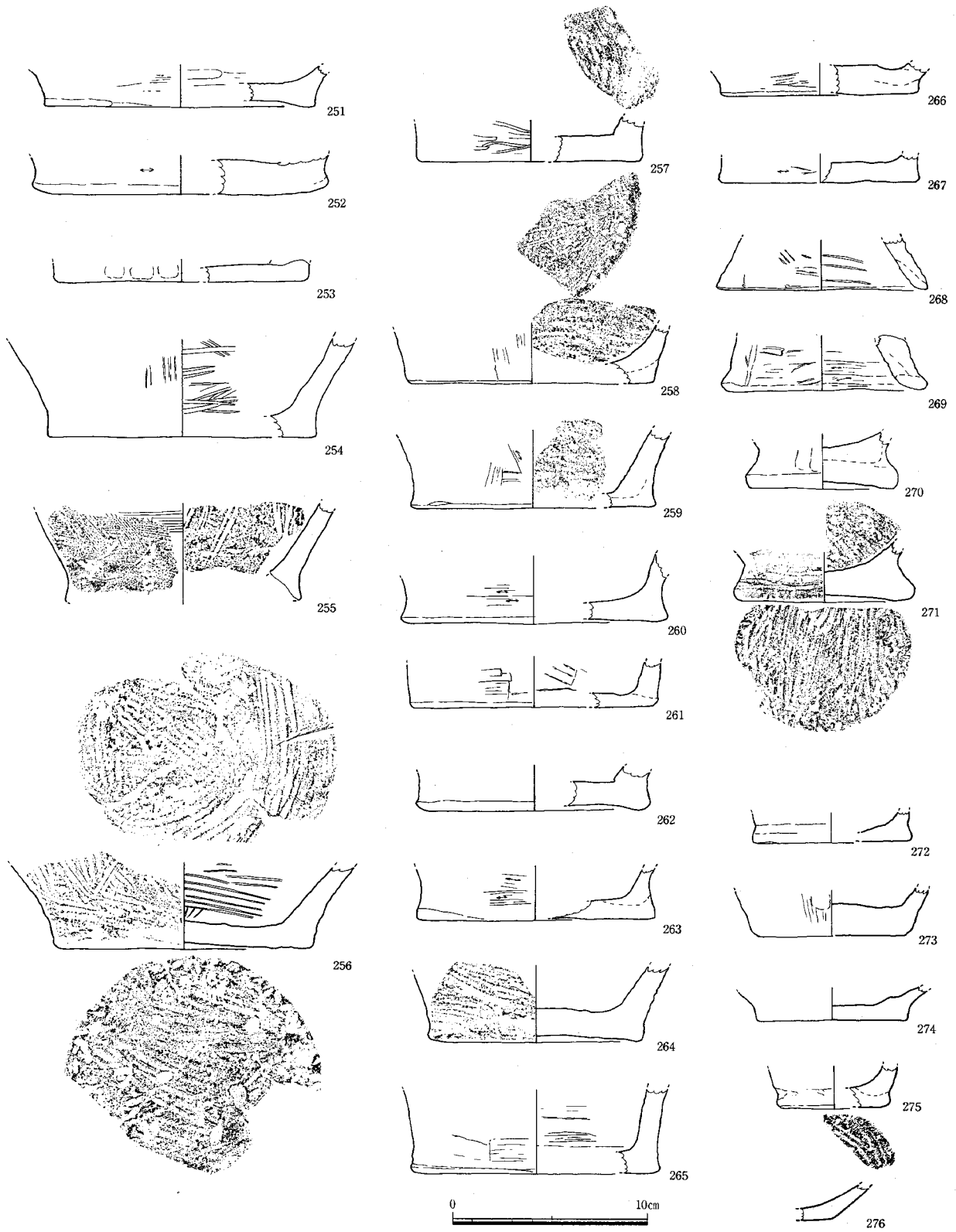
第27図 包含層出土遺物実測図3 (1/3)



第28図 包含層出土遺物実測図4 (1/3)

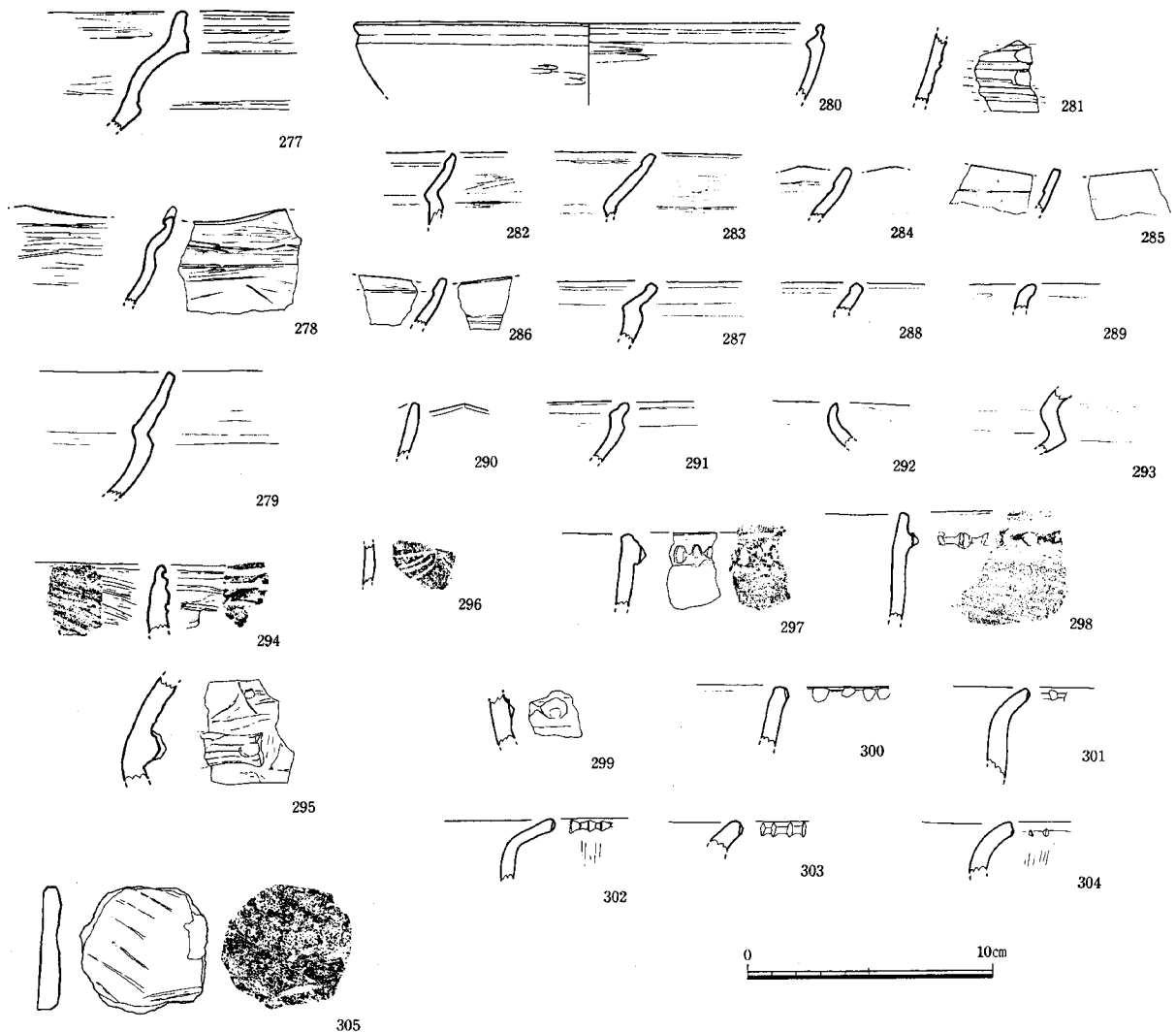


第29图 包含層出土遺物実測图 5 (1/3)



第30図 包含層出土遺物実測図6 (1/3)



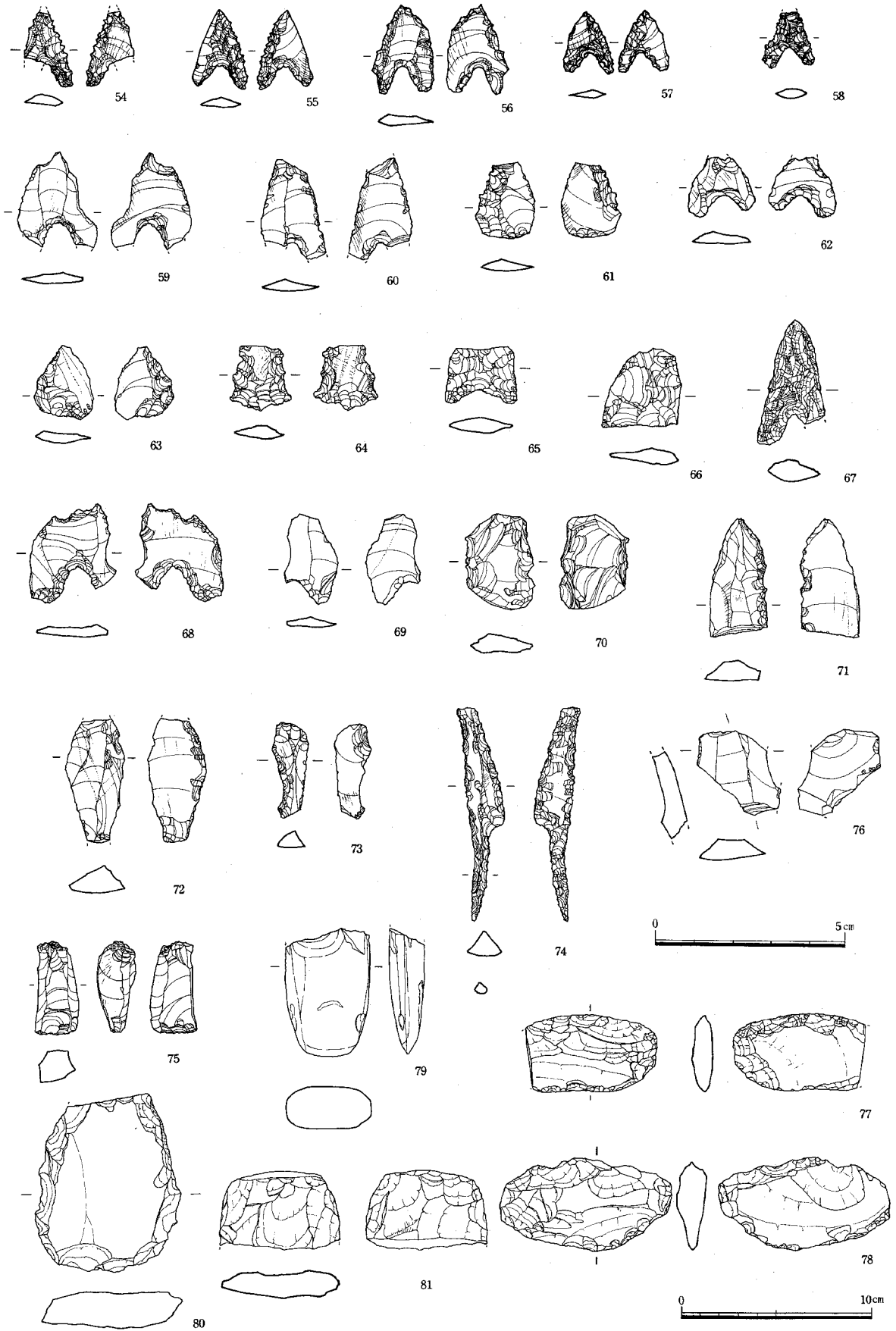


第31図 包含層出土遺物実測図7 (1/3)

みを施し、187は山形を呈す。190は口唇部の幅を広くし鋭い沈線を施す。191は不明瞭な隆起と刺突を施す。192は浅い沈線と細かな刺突を施す。193、194は外反する波状口縁の口唇部に刻目を施す。193の刻目は浅い円形の押圧である。197、198はそれぞれ前述したC-10-17区、A-8-20区出土の大型の破片で遺構の可能性はある。197は幅広の口縁帯状が波状を呈す。198は外反する口縁部の大型の深鉢で条痕調整が明瞭に残る。199から214までは外反する口縁部である。202は口唇部に浅い条痕工具の押圧による刻目を施す。204は口唇部に深い沈線を施す。215から239は内湾気味に直立する口縁部である。235、238は口縁部のみ屈曲して外反する。251から276は底部で267までは円盤状の底部から胴部となり立ち上がる。268、269は脚で調整が粗い。270から272は台形底で晩期以降のものであろう。273は底が厚い。274は壺または浅鉢の底部である。

277から304は晩期以降の浅鉢等の精製土器を主体とする一群で、第28図等の粗製土器の中にこの時期のものも含まれると考えられる。297から299は刻目突帯文土器、300は板付式祖型甕、301から304は弥生前期の甕である。

305は土製円盤で粗製土器の胴部破片を利用する。



第32図 包含層出土遺物実測図8 (2/3、1/3)

## 石器

数量的にはほとんどが黒曜石製の剥片石器である。定型的な石器を図示しその他は数量について後述する。

石鏃(54～70) 67が古銅輝石安山岩製の他は黒曜石製である。54から63は58を除いて主剥離面を多く残す剥片鏃で54、56、59、60、62は剥片の先端を鏃の先とする。58、64から67は全面に調整剥離を施す。68、69は未製品であろう。70は石鏃の未製品か。

彫器(71) 黒曜石製の厚めの縦長剥片の先端から槌状剥離を施し側辺には調整剥離を施す。

石錐(72～74) 黒曜石製で縦長剥片を利用し72、73は片側に調整剥離を施す。74は断面3角形剥片の2側辺に入念な剥離を施し、極めて細長い刃部を成している。

楔形石器(75) 黒曜石製で両端から加激されている。

旧石器時代の剥片(76) 10点ほどのパテナが古そうな黒曜石製の剥片があるが、確実に旧石器時代に属するものは76のみである。

スクレーパー(77、78) 古銅輝石安山岩製のもの2点を図示した。

磨製石斧(79) 緑色片岩製で基部側が欠損する。細身の両刃で器面の粗れが著しい。

打製石斧(80、81) 80は風化した薄い礫の側辺に剥離を加える。一部叩き石として使用したと考えられる部分がみられる。玄武岩と思われるが、黒色の鉱物が見立ち、81とは明らかに異なる。81は今山産と考えられる玄武岩製の基部で短冊状になるとと思われる。風化が著しい。

## 3. 結 語

東入部遺跡1次調査では、縄文時代後期遺物包含層と、住居跡と考えられる遺構1基を検出した。

SC250出土の土器は、入組文等の沈線文を施し研磨調整仕上げを行う精製の鉢形のもの、条痕調整を残す深鉢形土器に大きく分かれる。精製の鉢は、幅広の沈線で入組文、逆三角文等を描き、1のように縄文を施すものと2のように施さないものがある。やや新しい傾向もあるが鐘崎式の中でとらえられると考える。粗製土器は主に口縁部が外反するものと内湾気味に直立する2者があり、前者には波状口縁をなすもの、後者には突起が付くものがある。また47のように精製の鉢と同様の器形を持つものや31のように波状口縁に指頭圧痕を施すものもある。これらの粗製土器も精製土器とセットを成すものと考えられる。遺構内には21の様に新しいものもあるがこれらは少量かつ細片で混じり込みと考えられ、SC250の埋没時期を鐘崎式期と考えたい。土器種構成比を口縁部片で比較すると精製土器7点(8.2%)、粗製土器78点(91.8%)と精製土器の割合が1割弱と少ない。粗製土器とした小片の中に同一個体、混じり込みがあろうが、大きくは変わらないと考えられる。この構成比が有意なものかは資料の増加を待って検討する必要がある。また、遺物観察時の所見として、ほとんどの精製土器の胎土に角閃石の混入が見られるのに対し、粗製土器では数点にすぎない点をあげておきたい。

早良平野においてこの時期、または後期の資料は四箇遺跡の様に著名なものもあるが少ない。主なものに有田遺跡(中期～後期)、吉武遺跡(後期初頭)、四箇遺跡の泥炭層等(西平式、三万田式)、清末遺跡(三万田式)、岩本遺跡(鐘崎式、三万田式)、東入部遺跡(鐘崎式、北久根山式)等があげられるが、四箇遺跡を除いてまとまったものではなく、遺構としてとらえられるものは少ない。鐘崎式は市域周辺でも散見される程度で今回の資料はこの時期の良好なものといえよう。近年、細かな時期差や地域差がこの時期の土器についても検討されている。<sup>(註1)</sup> SC250の中でも型式差としてとらえられそうなものもあるが、今回得られた出土状況を一つの定点として周辺の遺物との検討を行って行くべきであろう。

第3表 石器組成 ( )内は石鏃は剥片鏃の数、他は古銅輝石安山岩の数、他は古銅輝石安山岩の数

	石鏃	石鏃	スクレーパー	抉入石器	剥片石器	U-Fla	つまみ型	彫器	くさび型	剥片	砕片	石核	スボール	石核調整	素材	小計	打製石	磨製石	礫石	叩石	合計
SC250	10 (10)	3	14 (9)	5	6	4	18	1	0.0	54 (2)	90 (9)	5 (1)	5	3	1	219	0.0	1	1	1	222
%	4.5	1.4	6.3	2.3	2.7	1.8	8.1	0.5		24.3	40.5	2.3	2.3	1.4	0.5	98.6		0.5	0.5	0.5	100.0
包含層	8 (7)		12 (10)		9	7	8	1	1	32	57 (4)	5		8	4	152	1	1		1	155
%	5.2	0.0	7.7	0.0	5.8	4.5	5.2	0.6	0.6	20.6	36.8	3.2	0.0	5.2	2.6	98.1	0.6	0.6	0.0	0.6	100.0
表採	3 (1)		10 (3)		13	21	8			25 (1)	63	9		9	1	162					162
%	1.9	0.0	6.2	0.0	8.0	13.0	4.9	0.0	0.0	15.4	38.9	5.6	0.0	5.6	0.6	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
他の遺構	23 (20)	6	3 (3)		29	8	27		3	131 (1)	273 (14)	41 (1)		7	1	552	3				555
%	4.1	1.1	0.5	0.0	5.2	1.4	4.9	0.0	0.5	23.6	49.2	7.4	0.0	1.3	0.2	99.5	0.5	0.0	0.0	0.0	100.0
計 %	44 (38)	9	39 (25)	5	57	40	61	2	4	242 (4)	483	60 (2)	5	27	7	1,085	4	2	1	2	1,094
	4.0	0.8	3.6	0.5	5.2	3.7	5.6	0.2	0.4	22.1	44.2	5.5	0.5	2.5	0.6	99.2	0.4	0.2	0.1	0.2	100.0

石器については 表3に構成を出土地点ごとに示した。SC250は鐘崎式期の遺構、包含層は包含層調査区での出土、表採は遺構検出時に出土したものを多く含み、他の遺構は古墳時代以降の遺構出土でピット出土のものは除いている。出土土器から SC250が鐘崎式期、他は鐘崎式期から弥生中期までのものが混じると考えられる。

SC250出土石器では、剥片石器の中で黒曜石が占める割合は60点中51点と85%を占め、古銅輝石安山岩はスクレーパーのみである。また、剥片石器の内での構成比は石鏃が17%と少なめでつまみ形石器が30%で最も多い。石鏃の中の黒曜石の比率は100%で10点全てが剥片鏃である。剥片は縦長剥片も多いが長さ3、4 cmほどの小型のものが多く、むしろ不定形のやや幅広のものが目立つ。黒曜石は、自然面からして角礫と考えられ5、6 cm大の小型の礫を使用していると推測される。

包含層以下他の出土石器についても、SC250出土のものとは大きな差はないようである。石鏃では1点を除いて黒曜石製であり、そのほとんどが剥片鏃である。つまみ形石器の様な特徴的な石器も多い。これらの状況からして、晩期や弥生前期の混じりはさほど多くなく、後期の資料が多くを占めるものと考えられる。

縄文時代後期の住居跡については、近年特に豊前地域で調査例が増えている。<sup>(注2)</sup> SC250は先に述べたように、石組炉を持った円形の住居跡と考える。プランについては周壁を確認していないため不確定要素がある。近隣では春日市柏田遺跡に北久根山式期の円形住居跡があり後続する。石組炉の導入等豊前地域等の東方との連動が窺える。柱穴は遺構の精査が足りなかったものと考えられる。

以上充分な遺物等の比較検討はできていないが、近接する11地点においても同様の遺構、遺物を確認しており、今後その整理と共に再度検討していきたい。

注

1. たとえば

田中良之 松永幸男 1981 「後期土器について」『荻台地の遺跡IV』 荻町教育委員会

水ノ江和同 1996 『中村石丸遺跡』 福岡県教育委員会

2. 小池史哲 1993 豊前地域の縄文後期住居跡 古文化談叢第30集(下)

第4表 出土土器観察表

凡例 大区で数字のみは後世の遺構の遺構番号

色調が2つある場合左が外面、右が内面

胎土で「2mm」は2mm大までの砂粒を含むという目安。「雲」は金雲母が目立つ、「角」は角閃石を含むの意味

調整は左側の調整を先に施す。2条痕は2枚貝による条痕。1条痕は条痕状であるが1条の痕跡のみ。

挿図番	番号	大区	小区	番号	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考	
Fig. 9	1	B9	3	116, 118	黄橙	精良 角	研磨 縄文	研磨	口唇部列点 突起	
	2	B9	3	80, 91	茶褐	砂粒多 2mm 角	粗い研磨	粗横研磨 沈線	口唇沈線突起口唇に列点	
	3	B9	2	111	茶褐	砂粒 2mm 角	ナデ	研磨	台形突帯 2と同一個体か	
	4	B9	7	23	橙 灰褐	砂粒 角	研磨	擦痕 ナデ	浅い沈線文	
	5	B9	3	37	灰茶褐	細砂粒 角	細縦研磨 縄文	横研磨	研磨 沈線	
	6	B9	3	104	赤茶 暗褐	細砂粒 精良	研磨	研磨斜 横	沈線文	
	7	B9	8	65	淡茶褐 茶褐	砂粒多 角	擦痕	ナデ	沈線	
	8	B9	8		橙	砂粒多角	研磨	研磨	沈線文	
Fig. 10	9	B9	8		橙 灰褐	砂粒 3mm 角	研磨	研磨	沈線	
	10	B9	3	129	淡橙 灰褐	砂粒多 2mm	横ナデ	擦痕	沈線文	
	11	B9	3		茶褐 黄灰褐	砂粒 角少	研磨	条痕	沈線 三角文	
	12	B9	7		暗褐	砂粒 角少	沈線 研磨	削り状擦痕	口縁部所々に赤色顔料?	
	13	B9	7	44	淡橙	砂粒多 角多	篋研磨 丁寧ナ	擦痕	外面、口唇沈線	
	14	B9	7		茶褐 赤	砂粒多 3mm 角少	研磨	削り風擦痕ナデ	突起部を中心に口唇刻み	
	15	B9	8		淡橙	砂粒多 2mm 角	研磨	擦痕	沈線	
	16	B9	3	148	灰褐	細砂粒	細研磨	刷毛目状擦痕	深い沈線 半精製~精製	
	17	B9	3	48	暗灰褐	砂粒 2mm	縦ナデ	横ナデ	沈線	
	18	B9	8	82	灰褐 淡橙	砂粒多 2mm	ナデ	ナデ		
	19	B9	3	119	明橙 灰褐	細砂粒多 角	擦痕	擦痕	沈線	
	20	B9	7	18	灰茶 橙	細砂粒多 3mm	丁寧研磨	ナデ	沈線 晩期?	
	21	B9	8	128	淡灰橙	微細砂粒	研磨	研磨	沈線、凹点 晩期	
	22	B9	2	23	淡褐	精良	研磨 縄文	研磨		
	23	B9	3	144	淡橙	砂粒 2mm	丁寧なナデ	ナデ	波状部に垂下突帯、刺突文	
	24	B9	8	30	淡橙 黄白	細砂粒少	研磨	擦痕		
	25	B9	3		淡茶	精良	条痕 ナデ	横ナデ	口唇部斜行刻み	
	26	B9	8	118	灰褐	砂粒多	条痕	条痕		
	27	B9	3	150	茶褐 淡橙	砂粒多 3mm	削り ナデ	2条痕	口唇刻み	
	28	B9	2	5	暗褐 暗灰褐	砂粒多	2条痕	擦痕 ナデ	頸部に原体押圧	
	29	B9	8	125	灰褐 淡橙	砂粒	ナデ	なで	突起	
	30	B9	8	128	灰 淡橙	砂粒	横ナデ	擦痕	口唇部鋭い沈線	
	Fig. 11	31	B9	7	5, 8, 9, 11, 1	赤茶	砂粒多	篋ナデ	削り 篋ナデ	波状 指頭圧痕
		32	B9	7	87	灰褐 灰	砂粒多 2mm 有色	2条痕	擦痕 ナデ	
		33	B9	7/8	28, 67/117	黄灰	砂粒多	擦痕 ナデ	擦痕 ナデ	3B203 7
	Fig. 12	34	B9	3	57, 79, 121	明褐色 にぶ	砂粒多	繊維条痕	繊維条痕ナデ	口径 28.2
		35	B9	8	125	淡黄褐	砂粒多	繊維条痕	繊維条痕ナデ	
	Fig. 13	36	B9	8	14	淡橙	砂粒多 2mm	ケズリ状擦痕	擦痕	波状
		37	B9	3	133, 114	茶褐 淡黄褐	砂粒多 3mm	条痕 ナデ	ケズリ状擦痕	波状部刻目
		38	B9	2/3	25	茶褐 褐	砂粒多 3mm	2条痕	2条痕	
39		B9	2/3	112, 116/1	茶褐色	砂粒 2mm	条痕	条痕	波状	
Fig. 14	40	B9	2	52, 54	淡黄灰 灰褐	砂粒多	擦痕 ナデ	条痕 擦痕	波状 煤 刻目	
	41	B9	3	151	橙灰 灰褐	砂粒多	2条痕	条痕	波状	
	42	B9	7	42	淡茶 灰茶褐	砂粒多 3mm	繊維条痕	板状擦痕	波状	
	43	B9	7	67	茶褐	砂粒多 2mm	横研磨	粗		
	44	B9	3	77	茶褐 淡茶	砂粒 2mm	擦痕	ナデ	波状	
	45	B9	3		茶褐	砂粒少 2mm	条痕 ナデ	ナデ	波状	
	46	B9	3	203	灰褐 暗灰	砂粒多 2mm 雲母	ナデ	ナデ		
	47	B9	3	64	灰褐 淡黄	砂粒 2mm	条痕 ナデ	条痕		
	48	B9	3	17, 18	茶 灰茶褐	砂粒多 2mm	2条痕 ナデ	2条痕 ナデ		
	49	B9	8	5, 128	淡橙 黒褐	砂粒	ナデ 擦痕	2条痕		
	50	B9	3		淡橙 暗褐	砂粒	条痕 ナデ	2条痕	口唇部浅く鋭い刻目	
	Fig. 15	51	B9	2		橙 暗茶褐	砂粒多	擦痕	条痕 ナデ	口唇部刻目
52		B9	3	180	淡橙 暗灰	砂粒	2条痕 ナデ	2条痕 ナデ		
53		B9	7		淡橙灰 淡黄	砂粒多 2mm	削り	繊維条痕		
54		B9	3	117	茶褐	砂粒多 3mm	2条痕	2条痕	波状	
55		B9	2	20	灰茶 淡茶	砂粒多 3mm	1条痕	削り 粗		
56		B9	2	116	橙 灰暗褐	砂粒多 2mm	1条痕	1条痕		
57		B9	3	197	橙 淡橙	砂粒多 2mm	深い 2条痕	ケズリ状擦痕		
58		B9	7		淡灰	砂粒多 3mm	擦痕 平滑ナデ	擦痕 ナデ	半精製	
59		B9	8	118	淡黄橙 灰褐	砂粒多 3mm	ヘラ状擦痕	擦痕		
60		B9	3		茶褐	砂粒多 3mm	2?条痕 ナデ	条痕 ナデ		
61		B9	2		灰茶 橙	砂粒 2mm	条痕	擦痕		
62		B9	2		灰茶 橙	砂粒 2mm	2条痕	粗		
63		B9	8	115		砂粒	ナデ横	擦痕		
64		B9	8	128	灰褐 橙	砂粒多 3mm	2?条痕	ナデ		
65		B9	8	68	灰茶	砂粒多 2mm	ケズリ状擦痕	条痕		
66		B9	3	5	淡橙	砂粒多 2mm	条痕	擦痕		
67		B9	7	67	灰褐	砂粒 4mm 良	擦痕	条痕		
68		B9	3	118	明橙	砂粒多 2mm	2条痕	2条痕 ナデ		
Fig. 16	69	B9	3	273	淡茶 暗灰茶	砂粒 3mm	擦痕	擦痕		
	70	B9	7	75	淡茶灰	砂粒	擦痕	ナデ		
	71	B9	8	128	灰褐	砂粒 2mm	擦痕	ナデ		
	72	B9	8	6	灰橙	砂粒多	擦痕 木目風	擦痕		
	73	B9	3		灰茶	砂粒	擦痕	擦痕		
	74	B9	8	91	淡橙色	砂粒少	ヘラナデ	ヘラナデ	波状	
	75	B9	3	108	茶褐	砂粒 2mm	2条痕	2条痕 ナデ		

挿図番	番号	大区	小区	番号	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
	76	B9	3	116	暗褐 暗灰	砂粒多2mm	ナデ	ナデ	
	77	B9	8	70	赤茶	砂粒2mm	横ナデ	横ナデ	
	78	B9	2	77	茶褐	砂粒2mm	研磨	ナデ	
	79	B9	7	88	灰褐	砂粒多	条痕 ナデ	ナデ	
	80	B	2	96	灰茶褐	砂粒多3mm角	擦痕 ナデ	擦痕	
	81	B9	3	169	灰橙	砂粒多3mm	1条痕	2条痕	焼成後穿孔
	82	B9	2	8	茶褐	砂粒多2mm	条痕	擦痕 ナデ	
	83	B9	11	1	黄灰褐 暗灰	砂粒多3mm	ケズリ状	ナデ	
	84	B9	2	32	茶褐	砂粒2mm	擦痕	擦痕	
	85	B9	8	9	暗褐	砂粒2mm	条痕 ナデ	2条痕 ナデ	
	86	B9	8	65	灰茶	細砂粒	ナデ	ナデ	
	87	B9	7	88	淡茶	砂粒多3mm	ナデ	ナデ	
	88	B9	3		茶褐	砂粒3mm	擦痕凹凸	ヘラナデ	
	89	B9	2	99	暗茶褐	砂粒	削り ナデ	横ナデ	接合外傾
	90	B9	3	8	暗灰褐	砂粒多	条痕 擦痕	横ナデ	
	92	B9	8	126	鋭い茶褐色	砂粒多	ナデ擦痕	ナデ擦痕	
	93	B9	2	14	茶褐	砂粒多2mm	ナデ	ナデ	
	94	B9	8		灰褐 橙	砂粒多	擦痕	擦痕	
	95	B9	3	30	くすんだ淡橙	砂粒3mm少	ナデ	ナデ	半精製
	96	B9	7			砂粒少	2条痕	条痕 擦痕	
	97	B9	8	118	茶褐	砂粒 良	ナデ	ナデ	
	98	B9	8	128	茶褐	砂粒2mm	細条痕	細条痕	
	99	B9	3	132	灰橙	砂粒	条痕 ナデ		表裏不明
	100	B9	3		灰黄褐	砂粒	条痕 ナデ	ナデ	
	101	B9	3	108	茶褐	砂粒多	ナデ	ナデ	
	102	B9	8	139	淡橙	砂粒3mm	条痕? ナデ	条痕? ナデ	
	103	B9	7	35	淡橙	砂粒	横ナデ	横ナデ	波状?
	104	B9	3		くすんだ茶褐	細砂粒	ナデ凹凸	2条痕	
Fig. 17	105	B9	3	62, 63, 67, 7	灰褐色	砂粒多	条痕	条痕 ナデ	胴部
	106	B9	8	117	赤茶 灰茶褐	細砂粒多	繊維条痕	ナデ	
	107	B9	8	120	淡橙 黒	砂粒多3mm	ヘラ条痕 ナデ	2条痕	
Fig. 18	108	B9	8	126	灰橙 淡黄	砂粒	条痕	削り 擦痕	
	109	B9	8	119	茶褐 淡茶	細砂粒多	2条痕 ナデ	2条痕	
	110	B9	7	33	橙 黒	砂粒	条痕 擦痕	条痕	
	111	B9	2	26	橙	砂粒	条痕	条痕 ナデ	
	112	B9	2	65	橙 灰褐	砂粒多2mm	条痕	擦痕	
Fig. 19	113	B9	3	116	灰褐	砂粒2mm	条痕 ナデ	ナデ	
	114	B9	7		茶褐 淡茶灰	砂粒多	ナデ	ナデ	
	115	B9	8	128	灰茶褐	精良	ナデ	ナデ	
	116	B9	3	113	淡橙灰 暗灰	砂粒	擦痕	擦痕平滑	
	117	B9	2	16	茶褐	砂粒多2mm	2条痕 細条痕	ナデ	接合線
	118	B9	3	152	淡橙	砂粒	条痕 ナデ	2条痕	
	119	B9	2	10	淡橙 灰橙	細砂粒、3mm	条痕 ナデ	条痕 ナデ	
	120	B9	8	128	灰褐 暗灰	砂粒	ナデ	ナデ	
	121	B9	3	200	茶褐 灰褐	砂粒多2mm	条痕	擦痕	
	122	B9	3	100, 102	淡茶灰 暗褐	砂粒	条痕 擦痕	条痕 ナデ	
	123	B9	8	125	淡黄灰	砂粒3mm	1条痕	ナデ	
	124	B9	7	77	淡茶 灰茶	砂粒2mm	2条痕 ナデ	2条痕	
	125	B9	8	95, 105, 1	茶灰 暗灰	砂粒2mm	条痕	条痕擦痕ナデ	接合痕
	126	B9	7/8	10, 38, 43, 他	茶褐 淡茶	砂粒2mm	2条痕	2条痕 ナデ	
	127	B9	2	113	橙 暗褐	砂粒2mm	条痕	2条痕	
	128	B9	8	112	橙 灰橙	砂粒多3mm	削り	擦痕 ナデ	
	129	B9	3	72	淡橙 黄灰白	砂粒	指押さえ	ナデ	
	130	B9	8	85	黄白	砂粒3mm	ナデ	ナデ	
	131	B9	7	74	明橙	砂粒多2mm	条痕	条痕	
Fig. 20	132	B9	3	199	橙 茶灰	砂粒 良	擦痕	ナデ	底は条痕ナデ
	133	B9	3		淡橙	砂粒少 良	擦痕	粗	
	134	B9	8	24	灰褐	砂粒多8mm	2条痕	ナデ	
	135	B9	3	13	淡橙	砂粒2mm 良	擦痕	横ナデ	
	136	B9	2	93	淡橙	砂粒	横ナデ	横ナデ	
	137	B9	3	193	灰橙	砂粒3mm 良	条痕 ナデ	擦痕	
	138	B9	7	11	淡茶灰	微細砂粒	丁寧ナデ	研磨	
	139	B9	8	174	淡橙	砂粒多角微量	擦痕	条 ナデ	
	140	B9	7		淡橙 暗灰	砂粒多3mm	擦痕 ナデ	擦痕 ナデ	
	141	B9	7		淡黄橙	砂粒多3mm	条痕	条痕 ナデ	
	142	B9	7	71	灰褐 暗灰	砂粒2mm	細条痕条削り	ナデ	
	143	B9	8	128	橙 灰褐	砂粒多3mm	条痕 ナデ	条痕 ナデ	
	144	B9	8	101	橙 黒	砂粒多3mm	ヘラナデ	条痕 ナデ	
	145	B9	7	85	橙 灰	砂粒多3mm	1条痕	ナデ	
	146	B9	8	50	赤灰褐 淡黄	砂粒多3mm	ナデ状擦痕	擦痕	
	147	B9	2/8	56	橙 淡橙	砂粒多	条痕 ナデ	擦痕 ナデ	
	148	B9	7	5	橙 淡橙	砂粒多2mm	条痕 研磨	擦痕 ナデ	
	149	B9	3	107	橙 淡橙	砂粒多2mm	条痕	削り	
Fig. 25	150	-			淡灰	砂粒多3mm	横ナデ	指押 ナデ	沈線
	151	B9	7	88	淡灰 淡灰黄	砂粒3mm	粗研磨	擦痕 ナデ	沈線
	152	D11			茶褐 淡茶	砂粒多2mm	研磨	条痕ナデ 削り	渦文習作?
	153	B9			黒褐	少	研磨	研磨	浅い沈線文
	154	B8	17	48	灰白	細砂粒 角	研磨?	ナデ	沈線
	155	A10			橙茶 淡黄褐	砂粒	ナデ	擦痕	沈線
	156	B11				砂粒2mm角	研磨 縄文	研磨	沈線
	157	-			淡橙茶 黄灰	砂粒多2mm	研磨	ナデ	沈線

挿入番	番号	大区	小区	番号	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
	158	-			淡橙	砂粒2mm	ナデ	擦痕	沈線
	159	B11			淡茶 暗灰	砂粒 角	研磨?	擦痕 ナデ	沈線文
	160	418			淡黄灰 淡灰	砂粒多3mm	粗	粗	太く深い沈線
	161	-			灰茶 黒褐	細砂粒	研磨	研磨	沈線
	162	B9			黄白	砂粒多 有色	研磨	研磨 ナデ	沈線
	163	B9	5	105	茶 黒	砂粒3mm	擦痕	擦痕	
	164	B11			淡黄橙	砂粒多3mm	擦痕 研磨	ナデ	沈線
	165	-			灰茶褐	砂粒	細条痕	横ナデ	浅い断面U字沈線
	166	B9			淡橙	砂粒 良	研磨	研磨	口唇部沈線
	167	C10	21		橙 淡黄	砂粒3mm	横ナデ	ナデ	口唇部沈線
	168	B9	20	4	茶灰	細砂粒多 角	研磨? 擬縄文	研磨	沈線 刺突
	169	B8	11	17	黄白	微細砂粒 角	研磨	研磨	口唇部沈線
	170	?			淡灰白	砂粒	刷毛目状擦痕	擦痕	口唇部沈線
	171	D11			茶褐 灰茶褐	砂粒多2mm	ナデ	擦痕	突起部肥厚沈線
	172	B8			灰茶	砂粒2mm	ナデ	ナデ	突起部肥厚、刺突3
	173	A11			灰橙	細砂粒少	ナデ	ナデ	口縁部に沈線
	174	-			淡黄白	砂粒少 角	擦痕 縄文	ナデ	縦突起
	175	B9			淡橙	砂粒2mm	ナデ	ナデ	口唇部刺突
	176	-			淡灰黄	砂粒多	ナデ	ナデ	沈線文
	177	B11			淡灰茶	砂粒2mm	ナデ?粗	条痕	波状部突帯刺突
	178	B9			淡黄橙	砂粒2mm角	研磨?粗	粗	口縁部沈線
	179			35	茶褐	砂粒多 角	研磨	条痕 研磨	沈線
Fig. 26	180	205			橙色	微細砂粒 角	研磨 縄文	丁寧な研磨	小型
	181	C12			くすんだ橙色	砂粒2mm	研磨 縄文	研磨	一部疑似縄文
	182	1区002			茶橙 橙	砂粒	ナデ	ナデ横	突起部に沈線刻み
	183	C12			淡灰茶	砂粒多3mm	巻貝条痕	巻貝条痕	口唇部押点
	184	209			淡灰白	砂粒	ナデ	ナデ	斜方凹線
	185	-			淡橙	砂粒多2mm	ナデ	ナデ	口唇部斜行刻み
	186	202			橙灰黄	砂粒多	ナデ	ナデ	突起
	187	347			淡黄	細砂粒多	ナデ	擦痕	
	188	A8	20		灰橙	砂粒多	ヘラ削り	条痕 ナデ	口唇部斜行刻み
	189	B9	10	11	淡茶 灰褐	砂粒3mm	ヘラナデ	ナデ	口唇部斜行刻み
	190	A10			灰橙白 灰白	砂粒2mm	ナデ	ナデ	口唇部鋭い刻み
	191	-			淡橙	細砂粒少	粗	粗	刺突
	192	B9			茶褐	砂粒多4mm		2条痕	浅い沈線細かな刺突
	193	B11	5	4	淡黄	砂粒多2mm	条痕 擦痕	条痕 ナデ	突起 口唇部ごく浅い刻目
	194	E11			茶褐色 黄茶	砂粒2mm	擦痕 ナデ	2条痕	波状 口唇部刻み
	195	E11			暗褐	微細砂粒多	擦痕	ヘラナデ	
	196	B9	9		黄褐 灰茶	砂粒多	条痕	条痕 ケズリ状	波状
Fig. 27	197	C10	17	1	茶褐	砂粒	1cm幅板ナデ	ナデ	口縁帯
	198	A8	20		橙 淡灰褐	砂粒多3mm	条痕	条痕	
Fig. 28	199	A8			橙色 茶褐	砂粒多2mm	擦痕	擦痕	
	200	B9	15	25	橙 橙灰	砂粒多2mm	ナデ 凹凸	ナデ 凹凸	
	201				淡茶 灰褐	砂粒	ナデ	ヘラナデ	
	202	B11			灰茶	砂粒3mm	条痕 ナデ	条痕	口唇部刻み目
	203	-			茶褐	砂粒2mm	条痕	条痕	
	204	209			暗灰 淡灰	砂粒3mm	条痕 ナデ	擦痕 ナデ	口唇部沈線
	205	-			灰茶 淡黄茶	砂粒4mm	巻貝条痕	条痕	
	206			49	淡灰	砂粒多2mm	擦痕	擦痕	
	207	B9			淡橙	砂粒3mm	削り	2条痕	
	208	C9			淡灰褐	砂粒2mm	擦痕	ヘラナデ	
	209	C9			淡黄灰	砂粒多	擦痕	擦痕	
	210	B8			暗灰褐 淡黄	細砂粒 雲母	擦痕	擦痕	
	211	205			灰橙色	砂粒3mm	条痕 ナデ	条痕 ナデ	
	212	B9	4	7	暗褐	砂粒多3mm	擦痕	擦痕	
	213	B9			灰褐	砂粒2mm	擦痕	擦痕 ナデ	
	214	A8	20		橙	砂粒多3mm	削り	刷毛目状擦痕	
	215	C7			橙 灰褐	砂粒2mm	擦痕	条痕	
	216	B11			淡灰茶 灰褐	砂粒	削り ナデ	ヘラナデ	
	217	-			灰橙	砂粒	ナデ	ナデ	
	218	B11			暗褐	微細砂粒3mm	擦痕 ナデ	削り ナデ	
	219	B		128	黄白 黒	砂粒少	擦痕	研磨	
	220	-			橙 淡黄	細砂粒多	削り	ナデ	
	221	422			淡橙	砂粒多2mm	条痕	条痕 横ナデ	
	222	B9			淡橙灰	砂粒2mm雲母	条痕	条痕 ナデ	
	223	A11			暗橙	砂粒多	条痕	擦痕	
	224	B11			淡茶	砂粒	条痕	ナデ	
	225	372			茶褐 灰褐	砂粒多	ナデ	条痕 擦痕	
	226	B9			淡橙	砂粒	粗	粗	
	227	B11			灰褐	砂粒微量	ナデ	ナデ	外面に縦亀裂
	228	B11	5	10	茶褐 淡橙	砂粒少	2条痕	丁寧ナデ	
Fig. 29	229	B11			灰黄褐	砂粒	擦痕	擦痕	
	230	B9			暗褐	砂粒多2mm	条痕	条痕 ナデ	口唇部刻目
	231	B9	17	9	灰褐	砂粒多3mm	擦痕	ナデ	
	232				暗褐 灰茶	砂粒多2mm	削り	ナデ	口唇部二枚貝背押圧刻み目
	233	E11			暗灰褐	砂粒多2mm	丁寧ナデ	丁寧ナデ	
	234	B9	19	32	橙 淡黄褐	細砂粒	擦痕	ナデ	
	235	B10			黄茶 暗褐	砂粒	ナデ柄	ナデ 刷毛目状	新しいか?
	236	B9			淡橙 暗灰褐	砂粒2mm	ナデ	ナデ	
	237	B9	10	25	暗褐 暗茶褐	精良	研磨	ナデ	
	238	B9			灰白 淡灰	砂粒2mm角	擦痕	条痕 ナデ	

挿図番	番号	大区	小区	番号	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
Fig. 30	239		235		暗褐色 淡茶	砂粒多	条痕 ナデ	擦痕 ナデ	接合線
	240	B11			暗灰褐色 淡黄	砂粒	ナデ横	条痕 ナデ	
	241	A9			赤茶 暗褐色	砂粒多 2mm	条痕 ナデ	条痕 ナデ	
	242	I区 018			淡灰 灰褐色	砂粒 3mm	条痕 ナデ	条痕 ナデ	
	243	B8	11	31	淡灰 淡黄	砂粒多 2mm	ナデ 削り	条痕 ナデ	
	244	D11			茶褐色	砂粒 3mm	ナデ横	ナデ	
	245	-			赤茶 暗褐色	砂粒多 2mm	条痕 ナデ	ナデ	
	246	-			茶褐色 黄白	砂粒多	削り	2条痕	
	247	B		16	暗茶褐色	砂粒	条痕 削り	擦痕 ナデ	
	248	B10			淡灰茶	砂粒 2mm	条痕	削り 条痕	
	249	B9			橙 暗褐色	砂粒 2mm	細条痕	2条痕	
250	B8	17		淡橙 灰褐色	砂粒	ハケ	2条痕		
Fig. 30	251	A11			黄白	砂粒多 3mm	擦痕	ナデ	底外擦痕 底外研磨
	252	A8	20			砂粒多	擦痕	ナデ	
	253	C9			淡橙灰	砂粒多 2mm	指押さえ	ナデ	
	254	205			淡橙 黒褐色	砂粒多 2mm	条痕 丁寧ナデ	条痕 ナデ	
	255	B9	9		淡橙	砂粒多	ハケ	ナデ 条痕	
	256	D11			橙 灰橙	砂粒多	2条痕	2条痕	
	257	B8			黒 淡橙	砂粒多 2mm	ヘラナデ	ヘラナデ	
	258	D11			灰褐色	砂粒	横ナデ	条痕 ナデ	
	259	C11			赤茶 淡茶灰	砂粒多 2mm	条痕 擦痕	2条痕 擦痕	
	260	B9			淡黄褐色	砂粒	横ナデ	ナデ	
	261	B9			淡黄	砂粒 3mm	擦痕	条痕 削り	
	262	B9	11	3	橙	砂粒多 2mm 角	削り	ナデ	
	263	B10			淡橙	砂粒多 2mm	ナデ横	ナデ	
	264	D11			橙茶 淡橙	砂粒多 3mm	条痕	ナデ	
	265	205			橙灰 灰褐色	砂粒 2mm	擦痕	擦痕	
	266	B8			淡橙	砂粒多 2mm	擦痕	ナデ	
	267	B11			黄茶 灰茶	砂粒多 2mm	擦痕	擦痕	
	268	B11			淡茶	砂粒多 3mm	削り	削り	
	269	B11			橙	砂粒 3mm	削り	削り	
	270	201			橙 灰褐色	砂粒 3mm	ナデ	条痕	
	271	A11			淡橙	砂粒多 3mm	条痕	条痕 ナデ	
	272	209			淡橙灰	砂粒少	ナデ	粗	
	273	201			灰茶褐色	砂粒 3mm	擦痕 丁寧ナデ	ナデ	
	274	202			淡灰	砂粒	ナデ	指圧痕	
	275	B10			淡橙	砂粒 2mm	ナデ	削り ナデ	
	276	B9			淡灰褐色	細砂粒少 角	研磨		
	Fig. 31	277	II区			灰茶褐色	砂粒少 精良	研磨	
278		-			淡灰 灰	砂粒微量 2mm	研磨	研磨	波状口縁
279		B8			淡橙	細砂粒	研磨	研磨	波状口縁
280		B9	14	17	淡黄灰	精良	研磨	研磨	1/10
281		B10			淡橙 淡橙色	細砂粒	研磨	研磨	凹線、浅い点 晩期
282		B9	14	14	暗褐色 黄褐色	細砂粒少 精良	研磨	研磨	
283		C10			灰褐色	精良	研磨	研磨	
284		B10			灰黄	細砂粒	研磨	研磨	波状部に細刻み
285		B9	21		暗灰褐色	細砂粒	研磨	研磨	波状?
286		B10			黄灰褐色	細砂微量	研磨	研磨	浅録では粗め
287		B9	13	18	暗灰 暗褐色	砂粒	研磨	研磨	
288		B10			黒	砂粒	研磨	研磨	
289		-			黒	砂粒少	ナデ	ナデ	
290		B9			橙白	精良	研磨	研磨	波状 傾き不明
291		046			淡橙	細砂粒	研磨	研磨	
292		B11			黒	砂粒	研磨	研磨	傾き不明
293		B11			灰褐色	砂粒 2mm微量	研磨	研磨	晩期
294		B9	14	3	淡橙	砂粒	ナデ	擦痕	沈線 晩期?
295		B9	4	10	淡橙	砂粒 2mm少	削り	擦痕	リボン状突起 晩期
296		B11			灰褐色	精良	粗	粗	ごく浅い沈線
297		II区 074			茶褐色 淡明橙	砂粒	擦痕 ナデ	ヘラナデ	刻目突帯文
298		II区 050			灰茶褐色 黒	砂粒	条痕 ナデ	なで	刻目突帯文
299		-			淡茶 黒	砂粒	ナデ	擦痕	刻目突帯文
300		A10			橙 淡橙	砂粒	横ナデ	丁寧なナデ	祖型髷 顔料?
301		C10	21	2	明橙 淡橙灰	砂粒	ナデ	ナデ	弥生前期
302		II区 053			淡茶褐色 淡黄	砂粒 2mm	刷毛目	ナデ	弥生前期
303		B11			淡橙	砂粒	横ナデ	ナデ	弥生前期
304		B9	15	25	灰茶褐色 淡橙	砂粒 3mm	刷毛目	ナデ	弥生前期
305		B9			淡灰	砂粒多 2mm	削り	擦痕	



第5表 出土石器観察表

挿図番	番号	大区	小区	番号	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
Fig. 21	1	B9	3		石鏃	黒曜石	1.9	1.9	0.28	0.49	つまみ形石器
	2	B9	7	5	石鏃	黒曜石	2.1	1.3	4.1	0.52	
	3	B9	2	50	石鏃	黒曜石	2.33	1.48	0.34	0.41	
	4	B9	8	128	石鏃	黒曜石	1.57	1.55	0.21	0.35	
	5	B9	3	203	石鏃	黒曜石	2.28	1.2	0.72	0.48	
	6	B9	7	73	石鏃未製品	黒曜石	2.25	1.65	0.34	0.6	
	7	B9	7	88	石鏃未製品	黒曜石	2.36	1.74	0.35	0.65	
	8	B9	3	112	石鏃未製品	黒曜石	3.3	1.32	0.38	1.13	
	9	B9	3	112	石鏃未製品	黒曜石	3.37	1.45	0.34	0.76	
	10	B9	2	116	石鏃未製品	黒曜石	2.39	1.31	0.23	0.4	
	11	B9	8	128	石鏃	黒曜石	4.58	1.28	0.37	1.13	
	12	B9	3	112	石鏃	黒曜石	1.98	0.6	0.35	0.25	
	13	B9	8	118	石鏃	黒曜石	3.23	2.3	0.74	3.85	
	14	B9	8	128	スクレーパー	黒曜石	3.42	1.83	0.49	2.82	
	15	B9	7	88	スクレーパー	黒曜石	4.09	2.76	0.92	5.16	
	16	B9	3	112	スクレーパー	黒曜石	2.62	2.38	0.52	2.24	
	17	B9	7	88	スクレーパー	黒曜石	3.87	1.22	0.52	2.15	
	18	B9	7	88	スクレーパー	黒曜石	4.74	1.66	0.34	2.33	
	19	B9	8		挟り入り石	黒曜石	1.84	3.23	0.3	1.1	
	20	B9	8	128	挟り入り石	黒曜石	4.7	1.98	0.45	2.94	
	21	B9	7	88	挟り入り石	黒曜石	3.85	1.53	0.43	1.54	
	22	B9	3	86	挟り入り石	黒曜石	3.56	3.96	0.89	4.49	
	23	B9	2	21	挟り入り石	黒曜石	2.1	2.09	0.37	1.27	
	24	B9	3	84	剥片石器	黒曜石	3.15	1.93	0.49	1.73	
	25	B9	2	106	剥片石器	黒曜石	2.48	1.75	0.31	0.94	
	26	B9	7	51	剥片石器	黒曜石	4.73	3.23	0.73	12.19	
Fig. 22	27	B9	3	112	つまみ形石器	黒曜石	3.09	1.43	0.4	1.25	
	28	B9	3	62	つまみ形石器	黒曜石	2	1.45	0.39	0.89	
	29	B9	3	112	つまみ形石器	黒曜石	1.8	1.69	0.46	0.89	
	30	B9	3	203	つまみ形石器	黒曜石	2.64	1.26	0.38	0.78	
	31	B9	7	88	つまみ形石器	黒曜石	2.1	1.63	0.3	0.88	
	32	B9	8	128	つまみ形石器	黒曜石	2.23	1.67	0.43	1.12	
	33	B9	8	203	つまみ形石器	黒曜石	1.5	1.62	0.3	0.68	
	34	B9	3	112	つまみ形石器	黒曜石	1.71	1.75	0.42	0.19	
	35	B9	8	128	つまみ形石器	黒曜石	1.93	1.43	0.42	1.16	
	36	B9	8	128	つまみ形石器	黒曜石	1.16	1.83	0.61	1.54	
	37	B9	7	2	つまみ形石器	黒曜石	1.67	1.43	0.38	0.67	
	38	B9	2	30	つまみ形石器	黒曜石	1.78	2.53	0.58	1.35	
	39	B9	3	66	つまみ形石器	黒曜石	2.22	1.71	0.42	0.49	
	40	B9	8	128	つまみ形石器	黒曜石	1.66	1.35	0.24	1.35	
	41	B9	7	88	つまみ形石器	黒曜石	1.44	1.8	0.31	1.72	
	42	B9	1	112	つまみ形石器	黒曜石	1.43	1.24	0.46	0.68	
	43	B9	3	203	つまみ形石器	黒曜石	1.82	1.95	0.54	1.49	
	44	B9	8	128	つまみ形石器	黒曜石	1.39	1.33	0.3	0.52	
	45	B9	7	88	U-Fla	黒曜石	3.74	1.88	0.9	1.97	
	46	B9	3	203	U-Fla	黒曜石	5.9	1.22	0.37	3.52	
	47	B9	8	54	スクレーパー	古銅輝石安山岩	7.94	3.98	1.12	36.31	
	48	B9	8	54	スクレーパー	古銅輝石安山岩	9.34	4.28	1.18	62.86	
	49	B9	8		スクレーパー	古銅輝石安山岩	5.93	6.92	1.42	56.97	
	50	B9	7	27	スクレーパー	古銅輝石安山岩	5.66	6.75	1.27	71.17	
	Fig. 23	51	B9	3	13	磨石	玄武岩	10.6	7.1	0.76	105.29
		52	B9	7	80	磨製石斧	蛇文岩	15.1	4.87	2.86	249.39
		53	B9	3	1	磨石	細粒砂岩	13.4	9.5	4.4	911.94
Fig. 32	54	SC205			石鏃	黒曜石	2	1.28	0.27	0.27	石鏃か
	55	SC205			石鏃	黒曜石	2	1.43	0.27	0.34	
	56	SC209			石鏃	黒曜石	2.28	1.59	0.28	0.65	
	57	SC211			石鏃	黒曜石	1.59	1.27	0.18	0.2	
	58	-			石鏃	黒曜石	1.47	1.35	0.38	0.36	
	59	B9	10	43	石鏃	黒曜石	2.53	1.96	0.31	1.2	
	60	B9	14	14	石鏃	黒曜石	2.55	1.84	0.33	1.22	
	61	B9	23	12	石鏃	黒曜石	1.98	1.54	0.3	0.91	
	62	B8	11	23	石鏃	黒曜石	1.5	1.77	0.31	0.74	
	63	B9	4		石鏃	黒曜石	1.98	1.55	0.38	0.89	
	64	-			石鏃	黒曜石	1.71	1.64	0.4	0.99	
	65	B9	4	14	石鏃	黒曜石	1.44	1.87	0.32	1.17	
	66	A10	235		石鏃	黒曜石	2.05	1.99	0.45	2.21	
	67	-			石鏃	古銅輝石安山岩	3.29	1.71	0.55	1.56	
	68	E11			石鏃未製品	黒曜石	2.24	2.28	0.3	1.69	
	69	B9	10	22	石鏃未製品	黒曜石	2.42	1.4	0.25	0.71	
	70	B9	13	8	石鏃未製品	黒曜石	2.45	1.78	0.48	2.69	
	71	E11			彫器	黒曜石	3.12	1.48	0.57	3.29	
	72	E11			スクレーパー	黒曜石	3.23	1.52	0.7	3.17	
	73	-			スクレーパー	黒曜石	2.47	0.93	0.42	0.93	
	74	-			石鏃	黒曜石	5.66	0.95	0.65	2.39	
	75	B9	10	20	楔形石器	黒曜石	2.32	0.95	0.87	2.8	
	76	E11			旧石器	黒曜石	2.32	2.18	0.75	2.64	
	77	B9	17	1	スクレーパー	古銅輝石安山岩	6.98	4.05	1.1	46.17	
	78	B9	23		スクレーパー	古銅輝石安山岩	9.21	4.61	1.55	68.04	
	79	D12			磨製石斧	緑色片岩	6.17	4.56	1.87	92.91	
	80	D12			打製石斧	玄武岩?	8.11	6.57	1.15	184.75	
	81	B9			打製石斧	玄武岩	3.92	6.2	1.03	65.84	

## V. 東入部遺跡群第2次調査の記録

### 1. 調査の経緯

1991（平成3）年度の県営入部地区圃場整備事業地は総面積21.7ヘクタールに及び、前年度の南側にあたる大字東入部の中通工区（173,000㎡）と、事業地西南側の室見川沿いの西入部工区（44,000㎡）に分かれていた。中通工区には清末遺跡群、岩本遺跡群、安通遺跡群、東入部遺跡群が知られていた。ここでは、すでに『入部Ⅳ』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集、1993）で述べたところであるが、東入部遺跡群第2次調査を中心に調査の概要について改めて触れたい。

**試掘調査** 1991年4月2日から5月10日まで詳細分布調査として、対象地の試掘調査を行った。この調査は、遺跡の範囲、遺構の時代と性格、遺構面までの深さ、埋蔵状況などを把握し、圃場事業と埋蔵文化財の保存との調整をはかるのが目的である。調査には重機（バックホー）を用いてトレンチを掘削し、その写真撮影および遺構・土層の略測図を作成した。

試掘の結果、東入部遺跡群では全域にわたり遺構の密度がきわめて濃かった。南側では表土直下で弥生時代の甕棺墓、住居跡、土坑、ピットなどを多数検出し、墓地と集落が一体となった遺跡であることを予想させた。甕棺墓はトレンチ内だけでも10数基確認し、全体では100基を越えるものと予想された。北側は、古代から中世の遺構・遺物、また包含層を確認した。これらの検出面は、表土直下から深いところでも20cm程度であった。西側は縄文時代終末の甕棺墓、中世以降の土坑、溝、ピットなどを確認した。遺構のほとんどは表土直下からの検出であった。

西入部工区では遺構の検出はなかったものの、中通工区では清末遺跡群、岩本遺跡群、安通遺跡群でも遺構・遺物を確認し、旧河川を除いた大半の部分に縄文時代から中・近世におよぶ遺跡が分布する事が判明した。工事の当初計画に照らし合わせると、発掘調査を要する面積は102,400㎡で、それは工事対象地の60%にも達した。

**本調査** 試掘調査に基づく発掘対象面積は、従事職員数および期間の面から不可能であり、埋蔵文化財課は設計変更などにより調査対象面積を縮小するよう事業者に要請した。その後、県・市の農政、地元改良区と数回にわたる調整会議をもち、7月には主に盛土による田面高の変更により、調査対象面積を34,381㎡まで縮小した。事業者側はこれ以上の設計変更は困難であるとし、また埋蔵文化財課でも翌年の2月末までの期間があれば調査終了が可能と判断し、この新しい設計のもとで本格的に調査を進行することになった。

また一方、これらの調整を待たず、構造物など設計変更が困難な部分について本調査を行うこととし、5月13日、東入部遺跡群6区の表土剥ぎを開始した。その後、7区、安通遺跡群、調査面積が確定した8月から東入部遺跡群8区へと進んだ。この地区は当初の予想を越える遺構の密度で、弥生時代の墓地・堅穴住居、古墳、奈良時代の掘建柱建物など重複した状態で検出した。甕棺墓などからの副葬品の発見も相次ぎ、11月16日には現地説明会を開催し、遺跡と出土遺物を一般に公開した。10月には職員4人の調査体制が整い、複数地区にわたって調査を展開できるようになり、年末までに安通遺跡群が終了するとともに、東入部遺跡群の9～15区の調査にも着手した。東入部遺跡群11～13区は中世の層が厚く、また遺構が錯綜しており、期間とのかねあいで調査は困難を極めたが、田面のうち削平が及ばない下層部を今後の調査に期することで、2月末には決着をみた。東入部遺跡群8区のがついた1992年1月、清末遺跡群の調査を開始し、遺構が比較的薄かったため、3月初めには調査が終了した。その後、機材の撤収などを行い、3月5日に1991年度の発掘調査を完了した。

## 2. 調査地区の概要

東入部遺跡群は、荒平山の西麓から西北方向に延びる舌状の丘陵上に広がる遺跡群で、第2次調査地点はその中央から北半部にほぼ相当する。

6・7・9・10区は丘陵の西北から西縁にあたり、その西側は旧河川へと傾斜し、安通遺跡群と対峙する。今回報告する地区で、詳細は後述する。

8区は丘陵中央の尾根線上から西側斜面にあたる。ここでは、弥生時代の集落・墓地、古墳、奈良・鎌倉時代の集落を確認した。弥生時代集落は前期から中期に営まれ、竪穴住居と掘立柱建物あわせて20数棟からなる。墓地は集落の東側に接し、甕棺墓・土壙墓・木棺墓あわせて160数基からなり、その一部は南北2ヶ所に方形区画墓を形成する。墓地の時期は前期末から後期初頭に及び、銅剣、銅釧、鉄製武器などの副葬品が出土した。古墳は5基検出した。いずれも円墳で、主体部は木棺、小形竪穴式石室各1基、横穴式石室2基、不明1基である。奈良・鎌倉時代の集落は掘立柱建物を主体とするが、密度は薄い。

11・12・13区は8区から北に続く丘陵尾根線上にあり、13区では上層では中世集落が、下層では弥生時代集落が8区から延びてきている。11区は縄文時代包含層や古墳時代の集落がみられ、第1次調査地点の南への広がりを示している。12区は幅9m前後、一辺74～75mほどの方形溝に囲まれた地区に相当し、足の踏み場もないほどの遺構と遺物が密集している。鎌倉時代を中心とした居館あるいは寺院の跡と考えられるが、詳細は今後の整理に待ちたい。

14・15区は丘陵の東斜面にあたり、弥生時代の遺構も若干みられたが、主に中世の集落で掘立柱建物、井戸、土坑などを検出した。密度は薄い。

なお、8・11・12区の田面部分の発掘調査は、工事により削平がおよぶ深さまでにとどめ、また8区の弥生時代墓地は調査後埋め戻しを行った。

## 3. 6・7区の調査

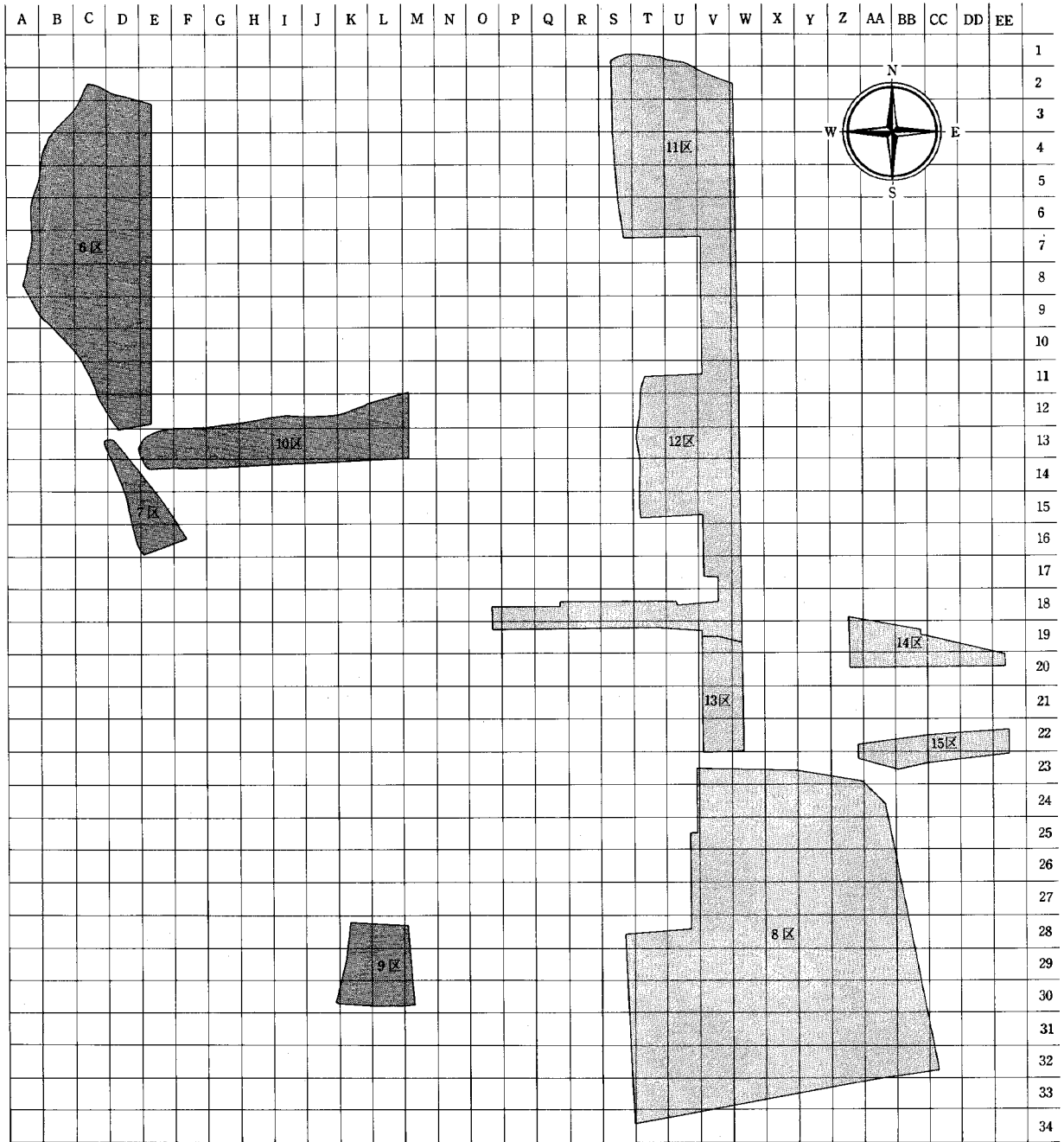
### 1) 概要

6・7区は東入部遺跡群の西北部に位置する。第2次調査のグリッドで示せば、6区がA～E-2～12、7区がその南のC～E-13～15にあたる。地形的には丘陵の西斜面にあたり、西縁は旧河川に続く段落ちとなるが、近世以降の水田化で削平を受け、旧状は失われていた。遺構検出面は礫もしくは黄褐色土で、その標高は7区南端で30.55m、6区北端で30.20mをはかる。

遺構は調査区の全域に広がるが、ピットが多く、その密度は薄い。主な遺構としては縄文時代終末

区	調査対象面積	調査面積	調査原因	備考	報告
6	3,344 m <sup>2</sup>	3,207.28 m <sup>2</sup>	排水路・田面		本報告
7	240 m <sup>2</sup>	245.34 m <sup>2</sup>	排水路・田面		本報告
8	6,172 m <sup>2</sup>	7,177.98 m <sup>2</sup>	用水路・排水路・道路・田面	弥生時代墓地は埋め戻し保存。	
9	491 m <sup>2</sup>	505.08 m <sup>2</sup>	排水路・田面		本報告
10	-	1,178.56 m <sup>2</sup>	田面		本報告
11	2,410 m <sup>2</sup>	2,242.50 m <sup>2</sup>	用水路・排水路・道路・田面	上面遺構だけ調査で、下部は保存。	
12	2,268 m <sup>2</sup>	2,334.12 m <sup>2</sup>	用水路・排水路・道路・田面		
13	432 m <sup>2</sup>	401.86 m <sup>2</sup>	用水路・排水路・道路		
14	644 m <sup>2</sup>	460.30 m <sup>2</sup>	用水路・田面		
15	270 m <sup>2</sup>	316.90 m <sup>2</sup>	道路		
計	16,271 m <sup>2</sup>	18,069.92 m <sup>2</sup>			

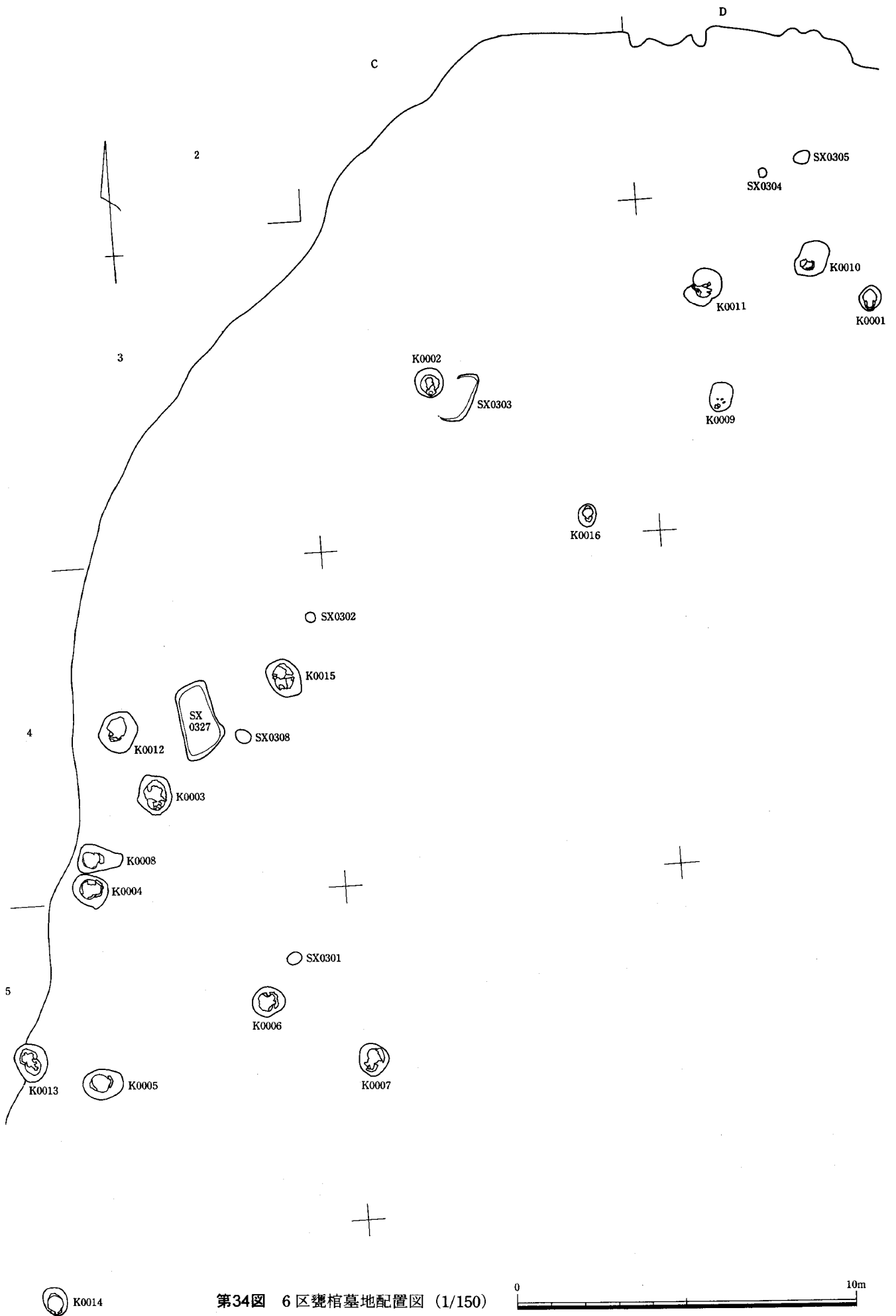
第6表 東入部遺跡群第2次調査地区一覧



第33図 第2次調査グリッド配置図 (1/2,000)

から弥生時代初頭の甕棺を中心とした墓地、予想もしなかった横穴式石室を埋葬主体部とする古墳、中世の掘立柱建物・土坑などである。以下検出した遺構と出土遺物について 6・7 区あわせてみていく。

なお、遺構番号は第2次調査全体での4桁の通し番号で、この両地区では0001～0016・0301～0407を用いている（欠番あり）。また遺構の位置はグリッドで示している。



第34图 6区甕棺墓地配置图 (1/150)

## 2) 甕棺墓地

調査区北側のD-3区から西側のB-6区にかけ、台地の縁辺に沿うような状況で16基の甕棺墓と2基の土壇墓を確認した。さらに、墓域に対する祭祀と考えられる小壺の出土を5ヶ所でみた。付近は大きく削平を受けており、遺構の残存状況は不良である。検出面は礫が中心となっていた。

### (1) 甕棺墓

16基検出したが、付近の遺構などから丹塗りの大型壺が出土しており、削平によって失われたものも多少あったものと考えられる。検出した甕棺墓はいずれも上部を削られており、棺自体も潰れたり、攪乱を受けているものが多かった。甕棺は約40mの長さに分布し、墓壇方向や墓間距離などの配置には規則性ないが、位置関係からは北群(K0001・0002・0009・0010・0011・0016)と西群(残りの甕棺墓)に大別できる。甕棺の挿入方向は北側に位置するK0010・0011が西側から、西側に位置するK0004・0006・0008が東側から、残りは南側からで、北側から挿入する例はない。埋置角度は30度前後のものが多い。棺内からの人骨の出土はなかった。また棺の穿孔はK0001下甕以外は不明である。

各墓の出土状況、墓壇形態などについては第4表にまとめたので、以下各墓ごとの棺の特徴、副葬品、墓壇内出土遺物について触れる。組合せ棺は蓋を上甕、身を下甕と称する。

**K0001棺** (第38図 1・2) 1は上甕の突帯文甕。底部を欠損する。復元口径24.0cm。口縁端部からやや下がった部位に突帯をめぐらし、ヘラで刻目を入れる。外面は荒いヘラナデ、内面はナデで指押さえ痕が残る。胎土には砂粒が混じり、焼成良好、口縁部は黄褐色、他は暗褐色を主に呈する。突帯下には煤が付着し、胴中位には半月形の黒斑がみられる。

2は下甕の壺。口縁の一部を欠くがほぼ完形で、胴下位に外からの穿孔がある。口径19.1 cm、器高59.2 cm。長胴で、最大径を上位にとる。肩部には浅い段がつき、頸部は内傾して長くのび、口縁部が短く外反する。外底部は直立気味で、わずかに上げ底となる。外面は丹塗りで、頸部が縦、口縁部と胴上位が横、胴中位から下位にかけては斜めから縦方向のヘラ研磨を行う。内面は、口縁部が丹塗りで横方向のヘラ研磨、それ以外は指あるいは板状工具によるナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒が多く、金雲母、赤色粒も混じる。焼成良好、内面は淡赤褐色を呈する。胴最大径部分の相反する2ヶ所に黒斑がある。

**K0002棺** (第38図 3・4) 3は上甕の口縁から頸部を打ち欠いた壺。胴部は長めで、最大径を上位にとる。外底部は直立気味で平底となる。外面は丹塗りで、斜めから縦方向のヘラ研磨を施す。内面はナデ調整で仕上げているが、器面の剥離が著しい。胎土には砂粒が多く、赤色粒も混じる。焼成良好、内面は淡赤褐色を呈する。胴最大径部分に1ヶ所大きな黒斑があり、他にも小さな黒斑がある。

4は下甕の口縁部を打ち欠いた壺。残存高60.8 cm。胴部は上位で大きく張り、肩部にはヘラによる明確な段を設ける。頸部は大きく内傾し、端部が立ち上がる。外底部は直立し、平底となる。外面は頸部が縦、胴上～中位が横、下位が縦方向のヘラ研磨で仕上げる。外底部には指押さえ痕が残る。内面は頸部上位に横方向のヘラ研磨、他はナデ調整を行う。内面器表の剥離が著しい。胎土には砂粒、赤色粒が多く混じり、焼成良好、淡赤褐色を呈する。丹は施さない。胴最大径付近に3ヶ所の黒斑がある。

**K0003棺** (第38図 5・6) 5は上甕の口縁から胴部の上位までを打ち欠いた壺。残存部も接合ができない。胴最大径は中位よりやや上にあるとみられ、外底部は直立し、平底となる。外面は丹塗りで、胴部は横から斜め方向のヘラ研磨、外底部は細かい刷毛目調整を行う。内面は指押さえナデの後刷毛目調整を行うが、器表の剥離が著しい。胎土には砂粒が多量に混じり、焼成良好、内面は明るい黄褐色を呈する。胴最大径部分に黒斑がある。

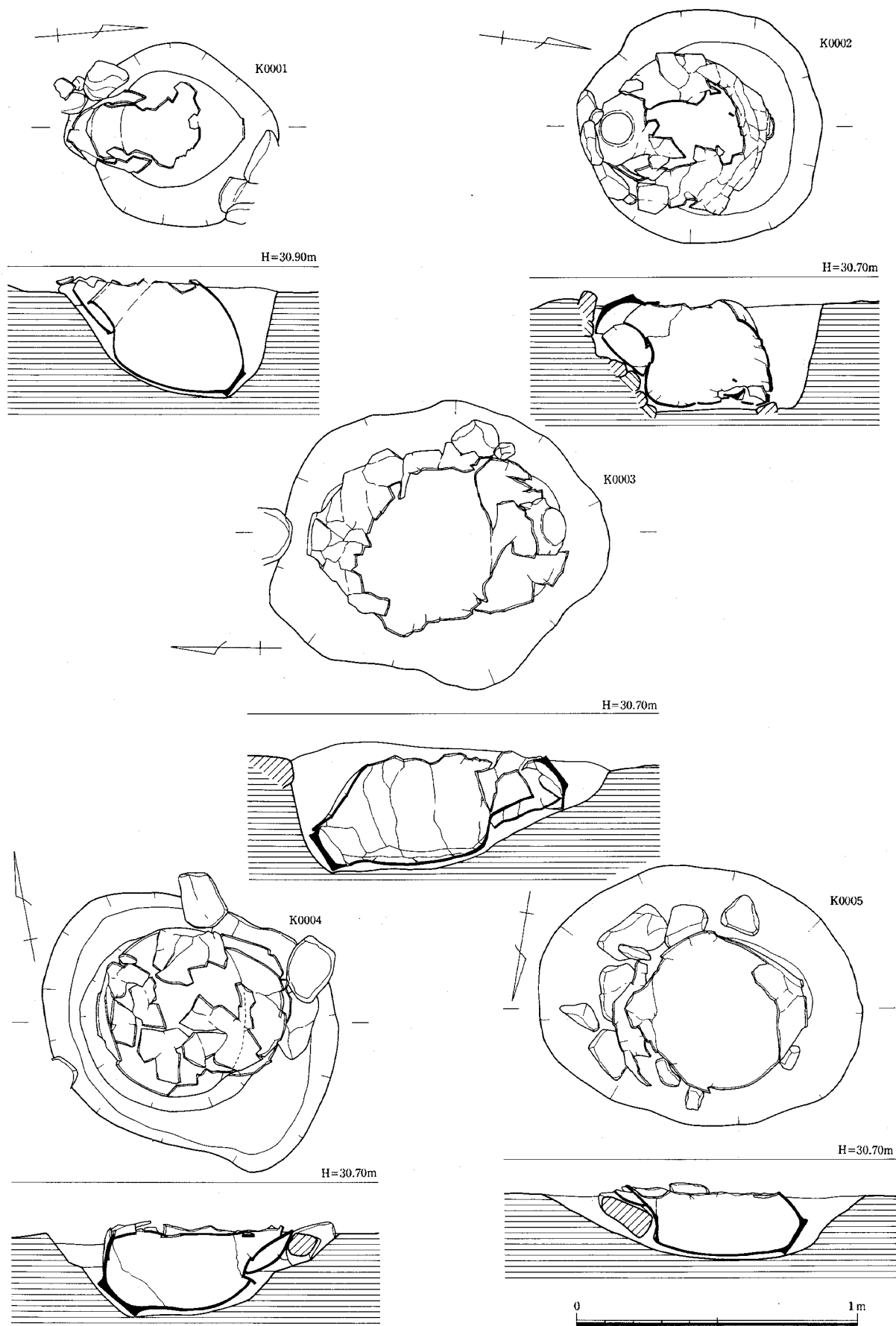
甕棺墓 番号	グリット 地区	墓 墳	棺				副葬品および 墓壇出土遺物
			形式	組合せ	挿入方位	埋置角度	
K0001	D-3	長さ76cm、幅65cmの楕円形。深さ40cm。	覆口	上 甕 下 壺	S-5°-W	39.0°	壺 (31)
K0002	C-3	径83~88cmのほぼ円形。深さ43cm。	覆口	上 壺* 下 壺*	S-6°-E	35.0°	管玉2 (45・46) 壺 (32)
K0003	B-4	長さ118cm、幅113cmの不整楕円形。深さ46cm。	覆口	上 壺* 下 壺*	S-1°-E	31.0°	
K0004	B-4	長さ113cm、幅88cmの楕円形。深さ34cm。二段堀り。上甕下に石。	覆口	上 壺* 下 壺*	E-10°-S	49.0°	浅鉢 (33)
K0005	B-5	長さ115cm、幅92cmの楕円形。上甕下・周囲は石で固定。	覆口	上 壺* 下 壺*	E-10°-N	31.0°	壺 (34) 浅鉢 (35)
K0006	B-5	長さ96cm、幅85cmの楕円形。深さ32cm。上甕下に石。	覆口	上 壺* 下 壺*	E-20°-N	28.5°	
K0007	C-4	長さ99cm、幅83cmの楕円形。深さ43cm。墓壇と棺主軸は不一致。	覆口	上 壺* 下 壺*	S-35°-W	13.0°	
K0008	B-4	長さ134cm、幅93cmの不整楕円形。深さ33cm。二段堀り。上甕周囲に石。	覆口	上 壺* 下 壺*	E-24°-N	38.0°	壺 (36)
K0009	D-3	長さ84cm、幅65cmの長方形。深さ19cm。	不明	壺	不明	不明	石鏃 (47)
K0010	D-3	長さ88cmの不整長方形。深さ28cm。北側は攪乱を受ける。	単棺	壺	W-9°-N	31.0°	壺 (37) 甕 (38・39)
K0011	D-3	長さ117cm、幅95cmの楕円形。深さ32cm。二段堀り。北側攪乱を受ける。	覆口	上 甕 下 壺	W-24°-N	33.5°	壺 (40) 石鏃 (48)
K0012	B-4	長さ125cm、幅99cmの楕円形。深さ48cm。二段堀り。上甕下に石。	覆口	上 鉢 下 壺*	S-24°-W	23.0°	
K0013	B-5	長さ115cm、幅92cmの楕円形。深さ48cm。	覆口	上 壺* 下 壺	S-25°-E	24.5°	壺 (41)
K0014	B-6	長さ90cm、幅70cmの楕円形。深さ31cm。	覆口	上 鉢 下 壺	S-6°-E	32.0°	壺 (42) 浅鉢 (43)
K0015	B-4	長さ130cm、幅95cmの不整楕円形。深さ37cm。	覆口	上 甕 下 壺*	S-5°-E	21.5°	
K0016	C-3	長さ68cm、幅53cmの楕円形。深さ20cm。上甕周囲に石を置く。	覆口	上 甕 下 壺*	S	19.0°	壺 (44)

[棺のうち\*がつくものは打ち欠き。副葬品・墓壇出土遺物の( )内は第42図の遺物番号]

第7表 6区甕棺墓一覧

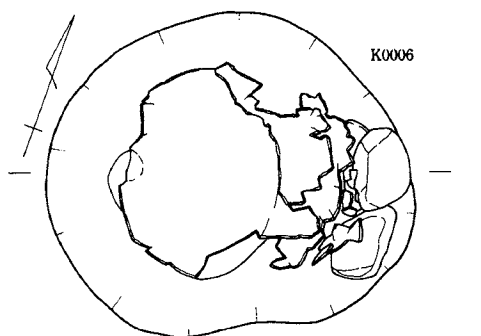
6は下甕の口縁から頸部を打ち欠いた壺。残存高70.6cm。胴部は大きく膨らみ、その最大径を上位にとる。肩部には沈線を入れるが、全周はせず、胴部から頸部がなめらかに内傾する感じである。頸部の内傾の角度は小さく、その上位は直立する。外底部は直立し、わずかに上げ底となる。外面は丹塗りで、頸部から胴最大径部位までは横、それ以下は斜めから縦方向のヘラ研磨を行う。外底部は刷毛目調整である。内面は頸部から胴最大径部位までが刷毛目調整、それ以下はナデ調整で仕上げる。胎土には多量の砂粒が混じり、焼成良好、内面は黄褐色を呈する。胴最大径部分の相反する2ヶ所に黒斑がある。今回の棺のなかでは最も大きい。

K0004棺(第39図7・8) 7は上甕の口縁から胴部上位までを打ち欠いた壺。胴下位から底部は欠損する。胴最大径は上位にとる。外面は丹塗りで、斜め方向のヘラ研磨を行う。内面はナデ調整で、上位の一部に刷毛目調整がみられる。胎土には砂粒が混じり、焼成良好、内面は褐色から黄褐色を呈



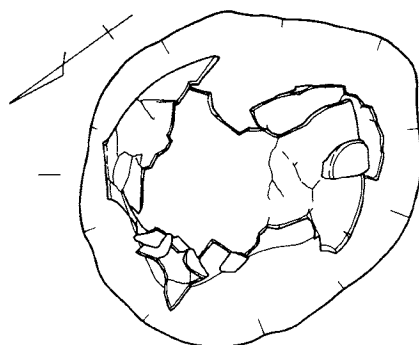
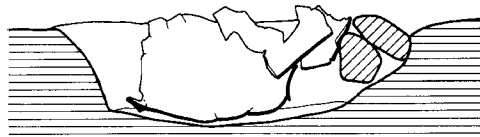
第35図 K0001・0002・0003・0004・0005 甕棺墓実測図 (1/20)





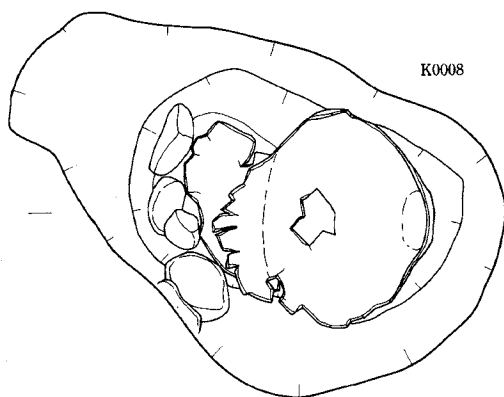
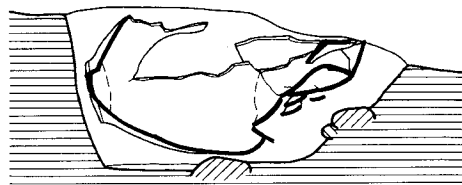
K0006

H=30.70m



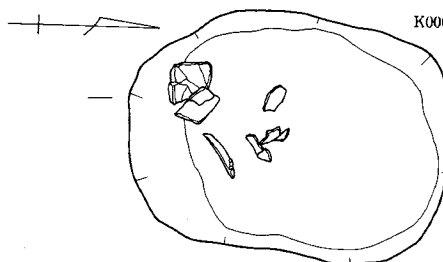
K0007

H=30.90m



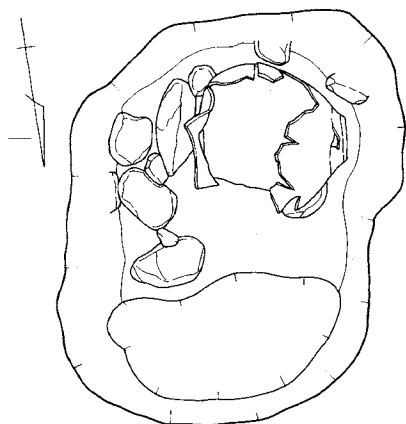
K0008

H=30.60m



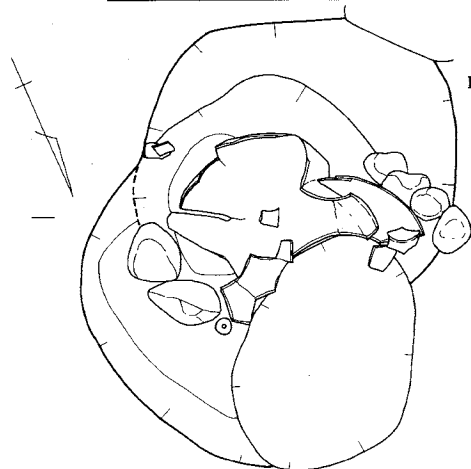
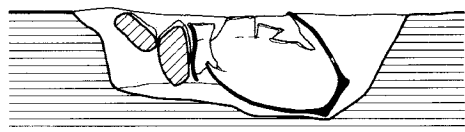
K0009

H=30.80m



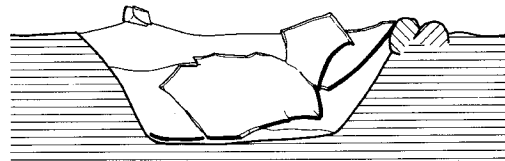
K0010

H=30.70m



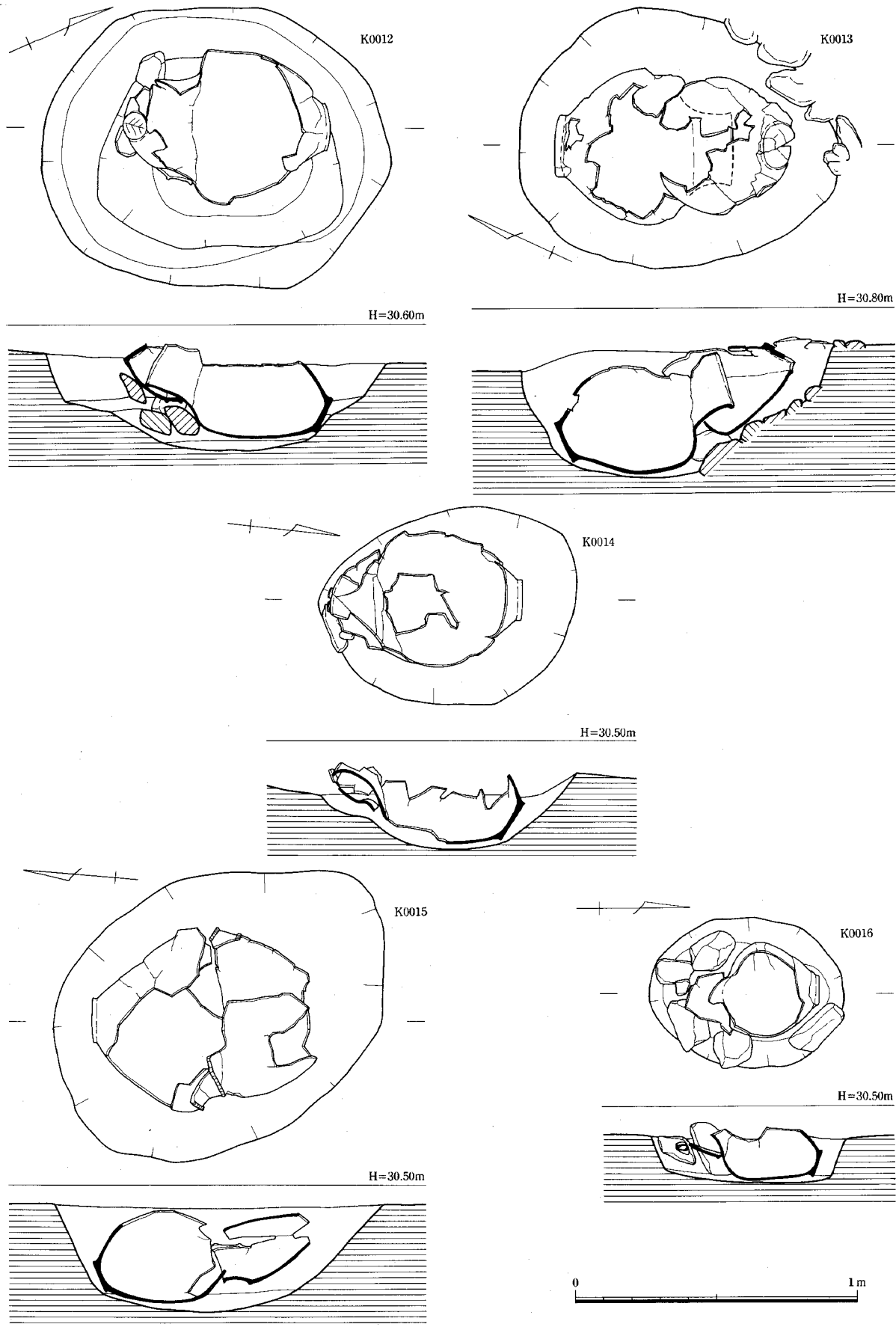
K0011

H=30.70m

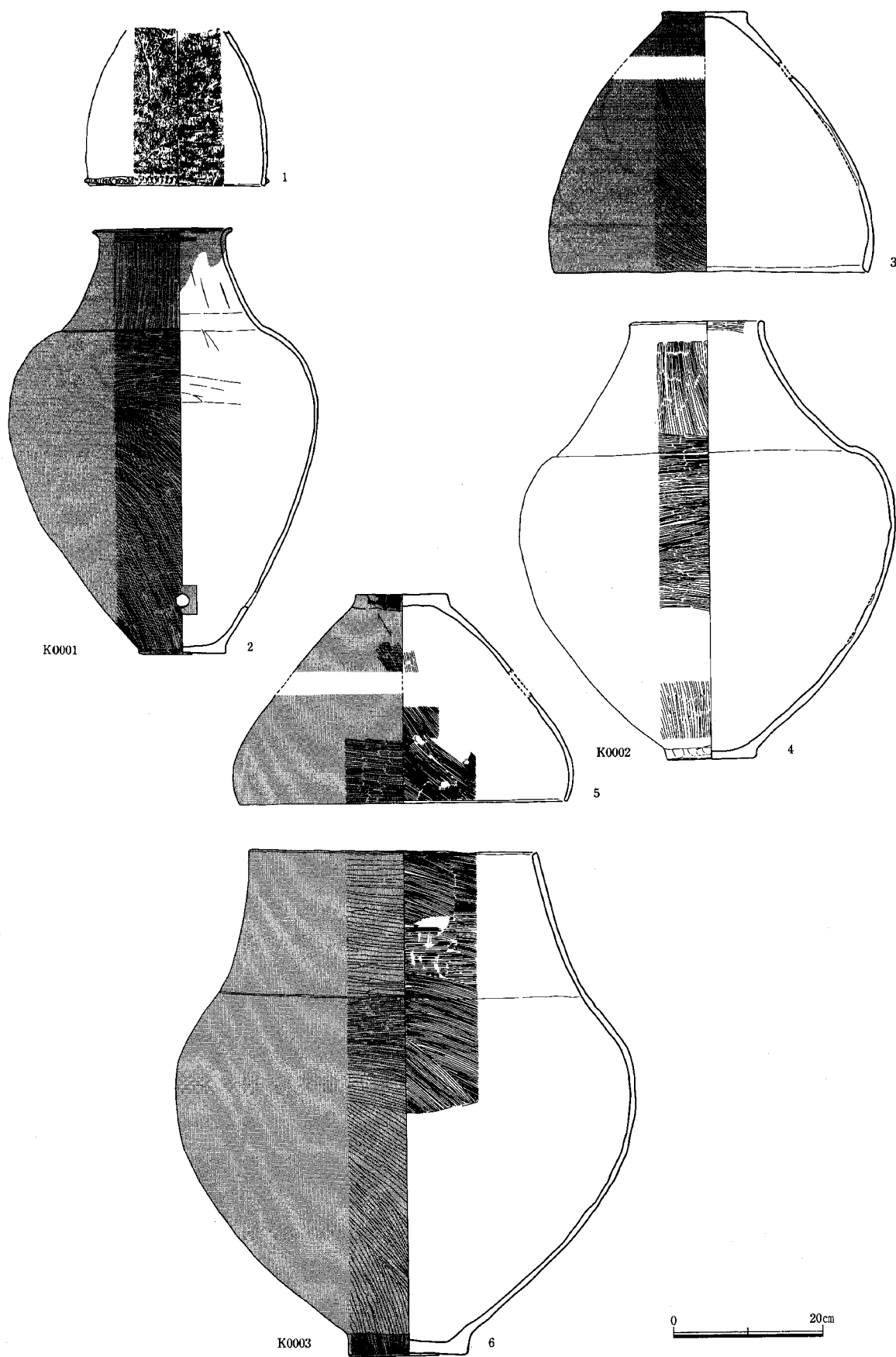


0 1m

第36図 K0006・0007・0008・0009・0010・0011 甕棺墓実測図 (1/20)



第37図 K0012・0013・0014・0015・0016 甕棺墓実測図 (1/20)



第38图 K0001 · 0002 · 0003 甕棺実測图 (1/8)

する。胴最大径部分に黒斑がある。

8は下甕の口縁部を打ち欠いた壺である。残存高61.4cm。胴部は上位に最大径をもち、大きく張る。肩部にはヘラで沈線をめぐらせ、長めの頸部が内傾気味に立つ。外底部は直立し、上げ底となる。外面は丹塗りで、頸部から胴上位までが横、それ以下が斜め方向のヘラ研磨を施す。外底部は細かい刷毛目調整を行う。内面は頸部が刷毛目調整、胴部はナデで仕上げるが一部刷毛目調整が見られる。胎土には砂粒が多く混じり、焼成良好、内面は赤褐色を呈する。胴最大径から下にかけての相反する2ヶ所に黒斑がある。

**K0005棺** (第39図9・10) 9は上甕の口縁から頸部を打ち欠いた壺。底部が欠損するなど残存状態は悪い。胴部は最大径を上位にとり、肩部にはヘラによる明瞭な段を設ける。外面は丹塗りで、横から斜め方向のヘラ研磨、内面はナデ調整で仕上げる。内面器表の剥落が著しい。胎土には砂粒が多く、赤色粒も混じる。焼成良好、内面は淡赤褐色を呈する。小さな黒斑が認められる。

10は下甕の口縁部を打ち欠いた壺。残存高60.7cm。胴部は長めで張りがあり、最大径は上位よりやや下にある。肩部には浅い沈線をめぐらす。外底部はわずかに外に張る。外面は丹塗りで、頸部が横、胴部が斜めから縦方向のヘラ研磨を行う。他の甕棺と異なり、胴部の研磨は左下がりととなる。外底には細かい刷毛目調整を施す。内面はナデで仕上げるが、部分的に刷毛目調整がみられる。胎土には砂粒が多く混じり、焼成良好、内面はくすんだ黄褐色を呈する。胴最大径からやや下がった部位に大きな黒斑がある。

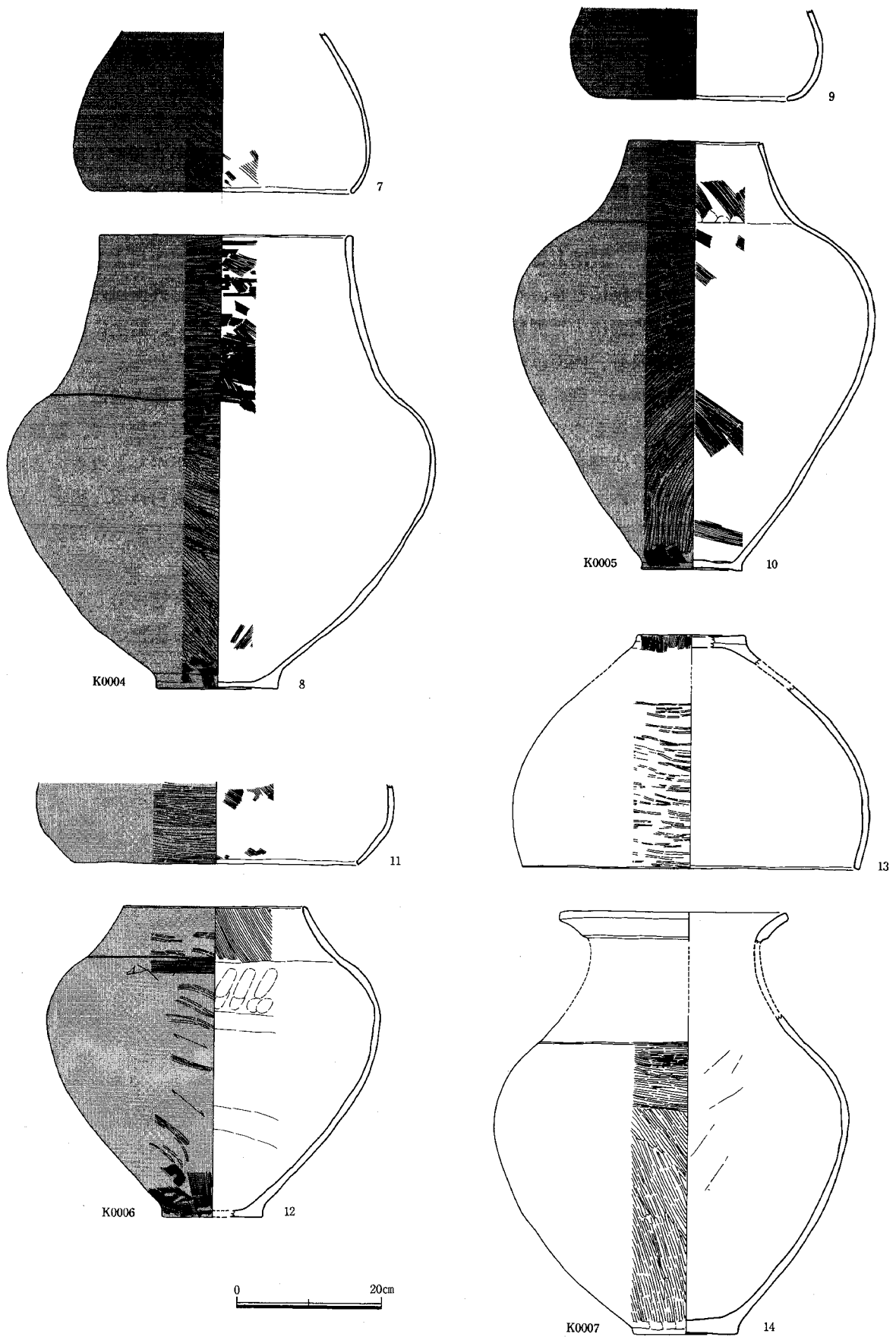
**K0006棺** (第39図11・12) 11は上甕の口縁から頸部を打ち欠いた壺。胴最大径部分しか残存しない。外面は丹塗りで、横方向のヘラ研磨を行う。内面はナデで、下位には刷毛目調整が残る。胎土には砂粒が多く、若干の金雲母も含む。焼成良好、内面は灰褐色を呈する。残存部に黒斑がみられる。

12は下甕の口縁部を打ち欠いた壺。残存高44.3cm。胴部は最大径を上位にとり、安定感がある。肩部には浅い沈線がめぐり、頸部が内傾する。外底部は直立し、平底となる。外面は丹塗りで、ヘラ研磨を行う。肩部下と外底部には細かい刷毛目調整が残る。内面は器表の荒れが著しいが、指押さえの後、板状工具によるナデで仕上げる。胴上位には指押さえ痕が残る。胎土には多量の砂粒の他、赤色粒、金雲母を含む。焼成良好、内面は淡赤褐色を呈する。肩部直下にはヘラ描き文が2ヶ所みられる。また肩から胴上位にかけて黒斑がある。

**K0007棺** (第39図13・14) 13は上甕の口縁から頸部を打ち欠いた壺。胴部は最大径を上位にとるが、腰が低い。肩部には浅い沈線をめぐらす。外底部は直立気味で、わずかに上げ底となる。外面は横方向のヘラ研磨で、外底には刷毛目調整と指押さえの跡が残る。内面はナデ調整で仕上げるが、剥落が著しい。胎土には砂粒が多く、赤色粒も含む。焼成良好、外面は褐色～暗褐色、内面は赤みをおびた褐色を呈する。胴最大径部分に大きな黒斑がある。

14は下甕の壺。口縁から底部まで残るが、頸部が接合しない。復元口径33.5cm、復元高60.0cm。口縁部は外部が肥厚し、その下に段が付く。口唇はわずかにくぼむ。胴部は中位に最大径をとり、頸部との境には小さな段がつく。外底部は直立気味である。外面は丹塗りとみられ、胴上位までが横、下位に向け斜め方向のヘラ研磨を行う。内面は板状工具によるナデで仕上げる。胎土には砂粒が多く、焼成良好、主に赤みをおびた黄褐色を呈する。胴最大径部分に黒斑がある。

**K0008棺** (第40図15・16) 15は上甕の口縁から頸部を打ち欠いた壺。胴部も残存状況が悪く接合しない。胴最大径は中位近くにあり、外底部は直立気味である。外面は丹塗りで、斜め方向のヘラ研磨を行う。外底部は刷毛目調整がみられる。内面は指押さえの後刷毛目調整を行う。胎土には砂粒が多く混じり、焼成良好、暗赤褐色を呈する。胴最大径部分に黒斑がある。



第39图 K0004 · 0005 · 0006 · 0007 甕棺実測図 (1/8)

16は下甕の口縁部を打ち欠いた壺。残存高55.3cm。胴部は上位に最大径をとり、張りが大きい。肩部には沈線をめぐらす。外底部は直立する。外面は丹塗りで、頸部から胴上位まで横、それ以下は斜め方向のヘラ研磨を行う。外底部は刷毛目調整。内面は、頸部上端が丹塗りの後ヘラ研磨、頸部は指押さえの後刷毛目調整、胴部はナデ調整で仕上げる。内底部には指押さえ痕が残る。胎土には砂粒が多く、赤色粒も混じる。焼成良好、内面は赤褐色を呈する。胴最大径部分と相反する側の頸部から胴部にかけて黒斑がある。

**K0009棺** (第40図17) 壺の底部付近だけが残存する。平底で、外底部がわずかに張る。底部からの立ち上がりを見れば、長胴となるものであろうか。外面は丹塗りで、胴下位はヘラ研磨、外底部は指押さえを横方向に連続して行う。内面は剥離が著しい。胎土には砂粒が多く、赤色粒も含む。焼成良好、内面は黄褐色を呈する。

**K0010棺** (第40図18) 口縁から頸部の上位を打ち欠いた壺である。残存高42.0cm。長胴で、上位が大きく張る。肩部に明瞭な段がないまま頸部が大きく内傾する。外底部は外にわずかに張り、平底となる。外面は丹塗りで、頸部が縦、胴上位が横、それ以下が縦方向のヘラ研磨を行う。内面はナデで、指押さえの痕が著しい。胎土には砂粒が多く、赤色粒、金雲母も混じる。焼成良好、内面は淡赤褐色を呈する。胴中位から下位にかけ大きな黒斑がある。

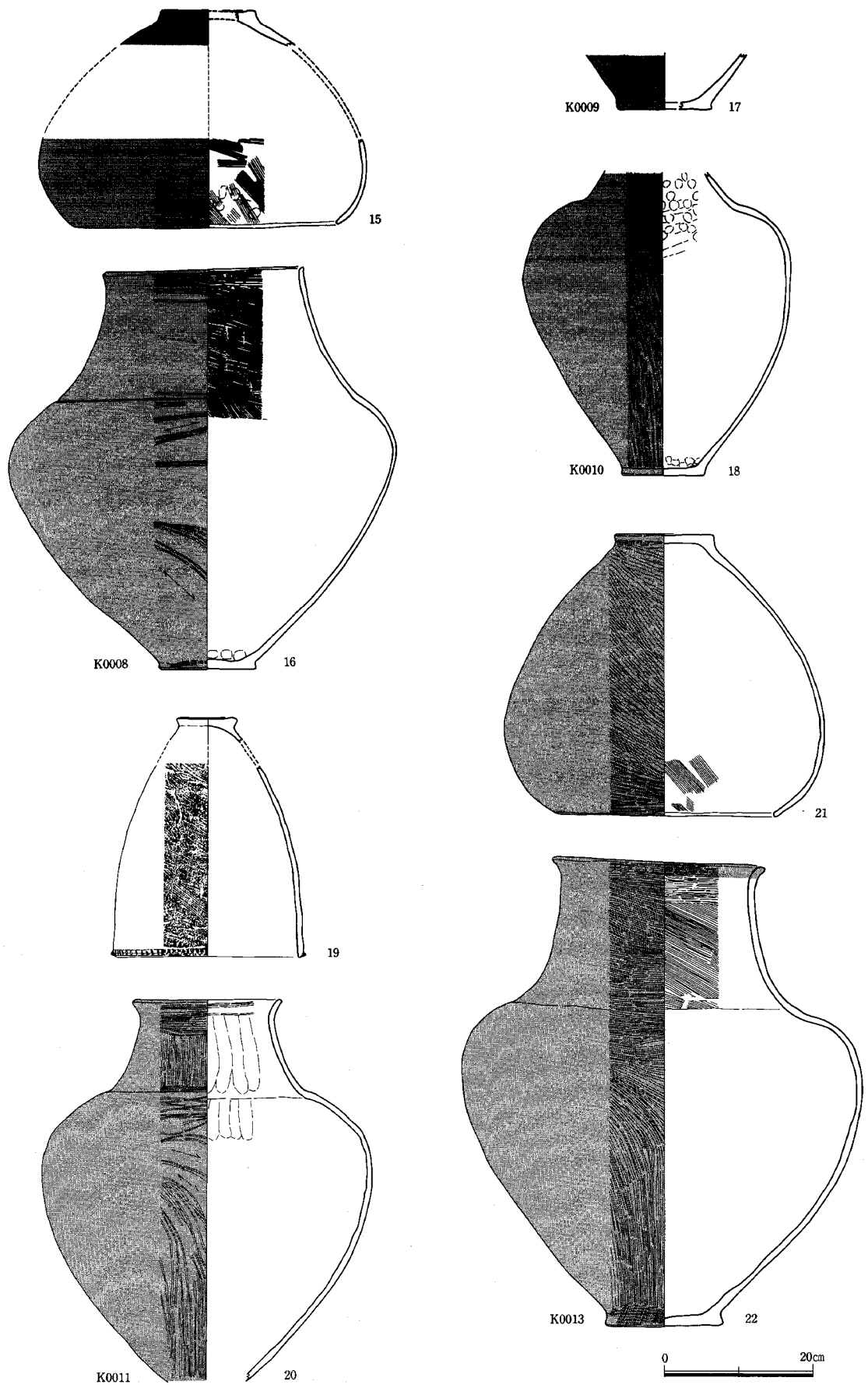
**K0011棺** (第40図19・20) 19は上甕の突帯文甕。口縁端部からわずかに下がった位置に突帯を貼り付け、ヘラで刻み目を入れる。外底部は外に張り、上げ底となる。外面は条痕、内面は条痕をナデ消す。胎土には砂粒が混じり、焼成良好、暗褐色を呈する。胴中位に黒斑があり、また突帯下から胴中位にかけて煤が付着する。

20は下甕の壺。底部は欠損する。復元口径20.5cm、残存高52.8cm。長胴で、最大径を上位にとる。肩部には浅い段がつき、頸部が内傾し、口縁部が緩く外反する。外面は丹塗りで、口縁部が横、頸部が縦、胴部上位が横、それ以下が斜めから縦方向のヘラ研磨を行う。内面は口縁部が丹塗りでヘラ研磨、それ以外はナデで仕上げるが、頸部を中心に指押さえの痕が残る。胎土には砂粒が混じり、焼成良好、内面は赤みをおびた明黄褐色を呈する。胴下位に黒斑がある。

**K0012棺** (第41図23・24) 版組上、K0013と挿図の順序が前後した。23は上甕の突帯文鉢。口径33.5cm、器高26.4cm。口縁の上端部と胴屈曲部とに三角突帯を貼り付け、細い棒状工具で刻み目を入れる。外底部は外に張り、木葉痕のある平底となる。内外面とも横方向のヘラ研磨で仕上げる。胎土には砂粒が混じり、焼成良好、外面赤褐色、内面くすんだ黄褐色を呈する。内外胴下位にそれぞれ黒斑がある。

24は下甕の口縁部を打ち欠いた壺。残存高61.2cm。長胴で、最大径を上位にとる。肩部には沈線がめぐり、頸部が内傾し、上位で直立する。外底部は直立し、わずかに上げ底となる。外面は丹塗りで、頸部から胴上位は横、それ以下は斜め方向のヘラ研磨を施す。外底部には刷毛目調整を行う。内面は、頸部上端が丹塗りの後ヘラ研磨、それ以下はナデの後刷毛目調整を部分的に行う。頸部には指押さえの痕が残る。胎土には砂粒が混じり、焼成良好、内面は黄褐色を呈する。胴最大径の相反する2ヶ所に黒斑がある。

**K0013棺** (第40図21・22) 21は上甕の口縁から頸部を打ち欠いた壺。残存高38.8cm。胴部の最大径は上位にあり、肩部には沈線をめぐらす。外底部は端部がわずかに外に張る。外面は丹塗りで、上位が横、下位が縦方向のヘラ研磨を施す。外底部には粗い刷毛目調整が一部残る。内面はナデ調整で仕上げるが、上位には一部刷毛目調整がみられる。剥落が著しい。胎土には砂粒が多く、赤色粒も混じる。焼成は良好で、内面は淡赤褐色を呈する。胴最大径下の3ヶ所に黒斑がある。



第40图 K0008 · 0009 · 0010 · 0011 · 0013 甕棺实测图 (1/8)



22は下甕の壺。口径29.1cm、器高65.1～63.6cm。器形はやや歪むものの、胴上位の張りが大きい。肩部には部分的に沈線を入れる。頸部は直立気味で、口縁部が短く外反する。外底部は外に張り、平底となる。外面は丹塗りで、口縁から胴上位までは横、それ以下は斜めから縦方向のヘラ研磨を行う。外底部には刷毛目調整を施す。内面は、口縁部が丹塗りの後ヘラ研磨、頸部は刷毛目、胴部はナデ調整で仕上げる。口縁外面には指頭痕と爪痕が連続的にまわり、また上端から内側にかけても指頭痕が残る。胎土には砂粒が多く、赤色粒も混じる。焼成良好、内面は赤みをおびた黄褐色を呈する。黒斑は胴最大径部分から下にかけて2ヶ所みられる。

**K0014棺**（第41図25・26） 25は上甕の胴部に屈曲部をもつ鉢である。口径37.0cm。底部は欠損する。K0012上甕の鉢と突帯の有無を別にすればよく似る。内面胴屈曲部から上と外面は丹塗りで、内外面とも横方向のヘラ研磨で仕上げる。胎土には砂粒が多く混じり、焼成良好、主に黄褐色を呈する。胴下位の内外に黒斑がある。

26は下甕の壺。復元口径29.1cm、器高61.8cm。胴部は最大径を上位にとり、張りが大きい。肩部には浅い沈線がめぐり、口縁部は大きく外反する。外底部は外に張り、平底となる。外面は丹塗りで、口縁から胴上位は横、それ以下は斜めから縦方向のヘラ研磨を施す。また底部付近は細かい刷毛目調整を行う。内面は口縁部が丹塗りの後ヘラ研磨、頸部は指押さえの後刷毛目調整、胴部はナデで刷毛目調整もみられる。胎土には砂粒が多く混じり、焼成良好、内面赤褐色を呈する。胴下位に黒斑がある。

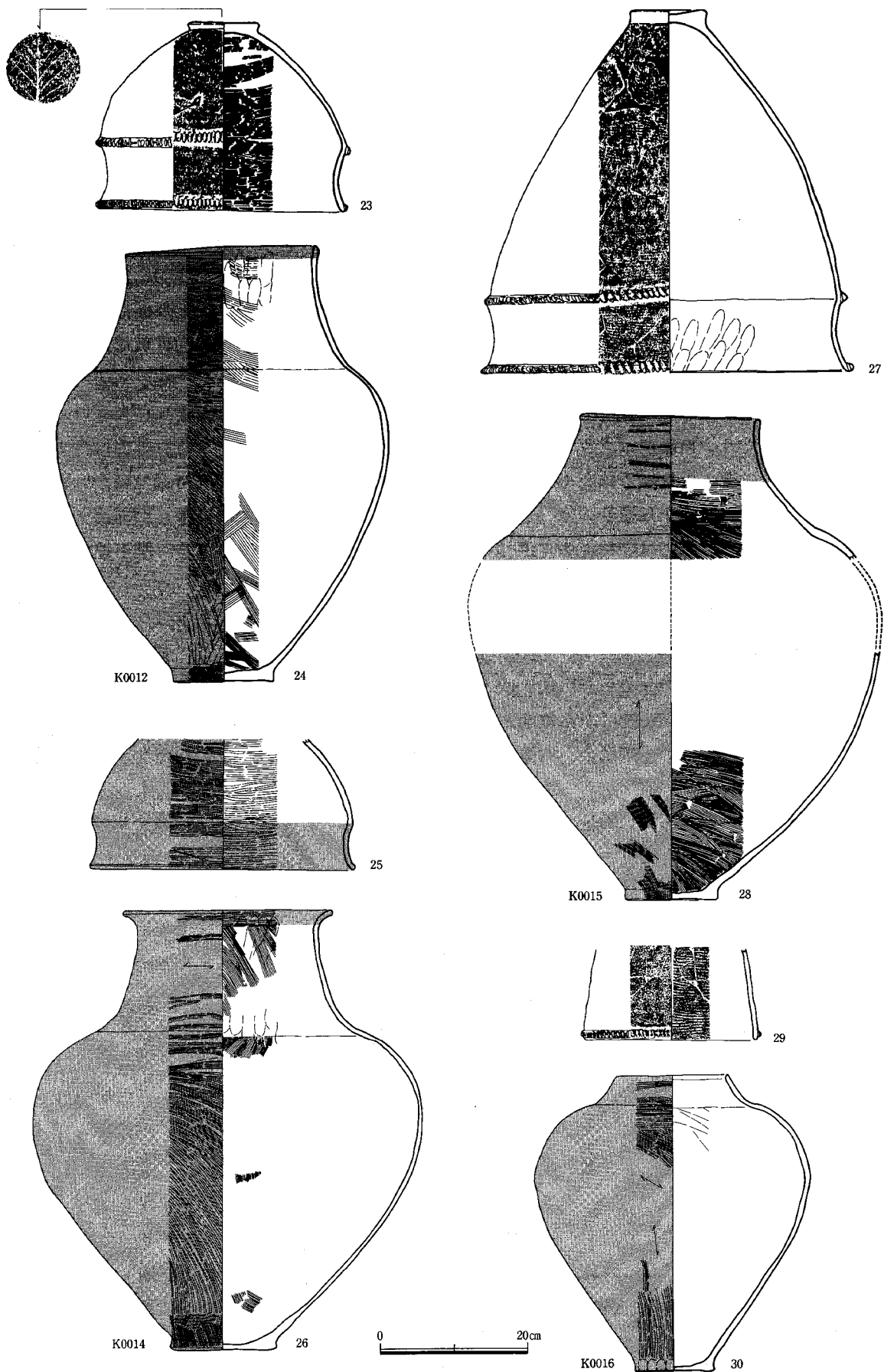
**K0015棺**（第41図27・28） 27は上甕の突帯文甕。口径50.5cm、復元器高51.2cm。口縁端部と胴屈曲部に突帯を貼り付け、ヘラで右下がりに刻み目を施す。外底部はわずかに外に張り、上げ底となる。外面は条痕、内面はナデでなめらかに仕上げる。胴屈曲部突帯から中位にかけて煤が著しく付着し、それ以下は器表が二次焼成を受け剥落気味となる。胎土には多量の砂粒とともに赤色粒も混じる。焼成良好、外面は主に褐色から暗褐色、内面は明黄褐色を呈する。突帯間の近接した2ヶ所に黒斑がある。

28は下甕の口縁部を打ち欠いた壺。復元高70.4cm。胴部は頸部と接合できないが、長胴で比較的張りが小さい。頸部には浅い段がつき、頸部が大きく内傾する。外底部は直立し、わずかに上げ底となる。外面は丹塗りで、頸部は横、胴部は斜め方向のヘラ研磨を、胴下位から底部にかけては刷毛目調整を部分的に行う。内面は頸部上位まで丹塗りの後ヘラ研磨、以下は刷毛目調整を行う。内外面とも器表の剥離が著しい。胎土には砂粒が多く、赤色粒も混じる。焼成はややあまく、内面は赤みをおびた黄褐色を呈する。胴最大径部分に黒斑がある。

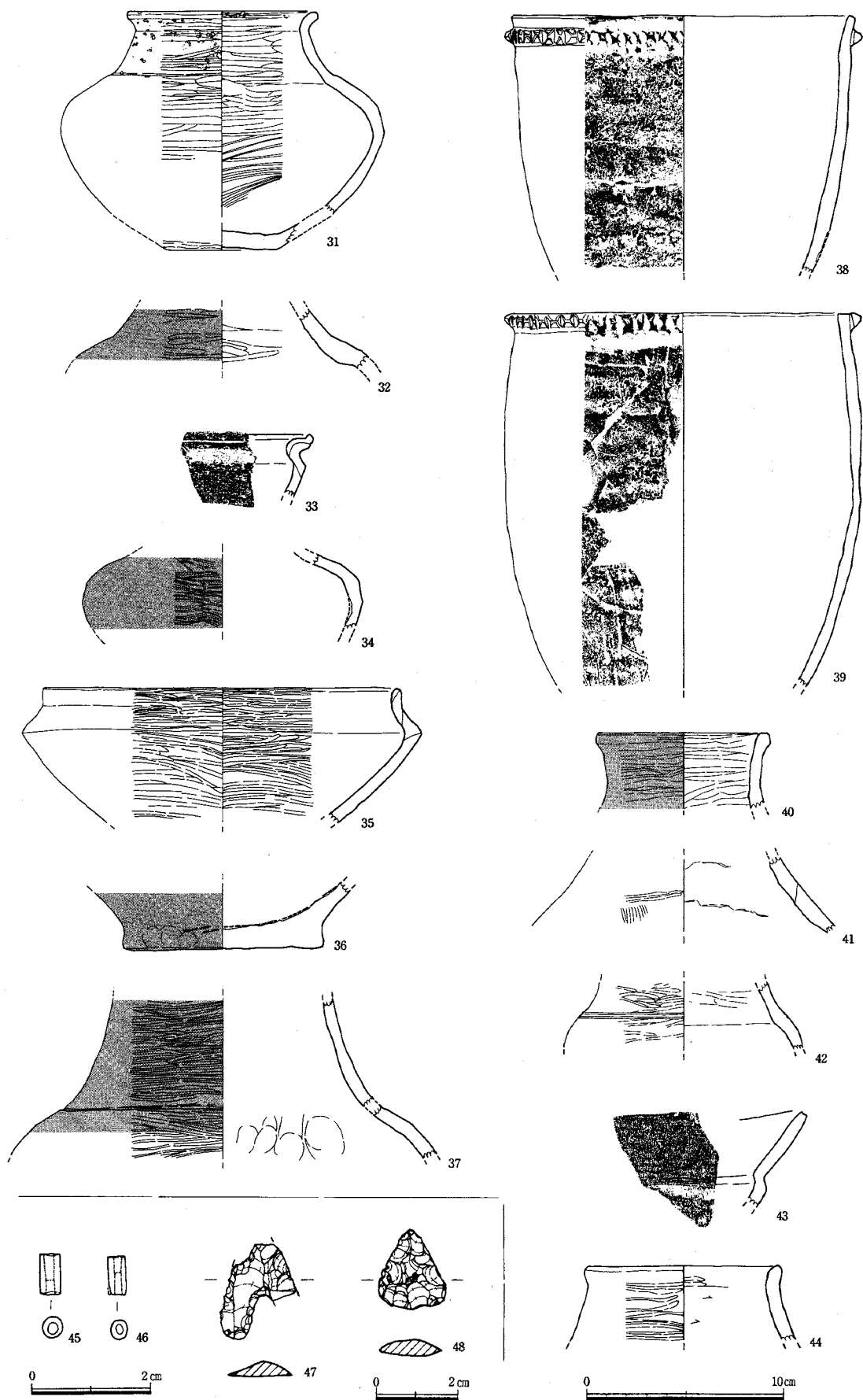
**K0016棺**（第41図29・30） 29は上甕の突帯文甕である。胴部下半から底部を欠損する。復元口径23.6cm。口縁端から少し下がった部位に突帯を貼り付け、ヘラ状工具で右下がりに刻み目を入れる。外面はナデ、内面は比較的整った条痕で調整する。胎土には微砂粒が混じり、赤色粒、金雲母も含む。焼成は良好、外面は主に暗褐色、内面はくすんだ赤褐色を呈する。突帯下には煤が付着する。

30は下甕の口縁から頸部を打ち欠いた壺である。残存高41.6cm。長胴で、上位に最大径をもつ。胴部と頸部の境には沈線や段はない。外底部は外に張り、外縁1.3cmほどを残し上げ底となる。外面は丹塗りで、頸部から胴上位までは横、胴中位は斜め、それ以下は縦方向のヘラ研磨を行う。外底部には指押さえの跡が残る。内面は器表の剥離が著しいが、おおむねナデで仕上げる。胎土には砂粒が多く、赤色粒、金雲母も混じる。焼成良好、内面は赤褐色を呈する。胴最大径部分に黒斑がある。

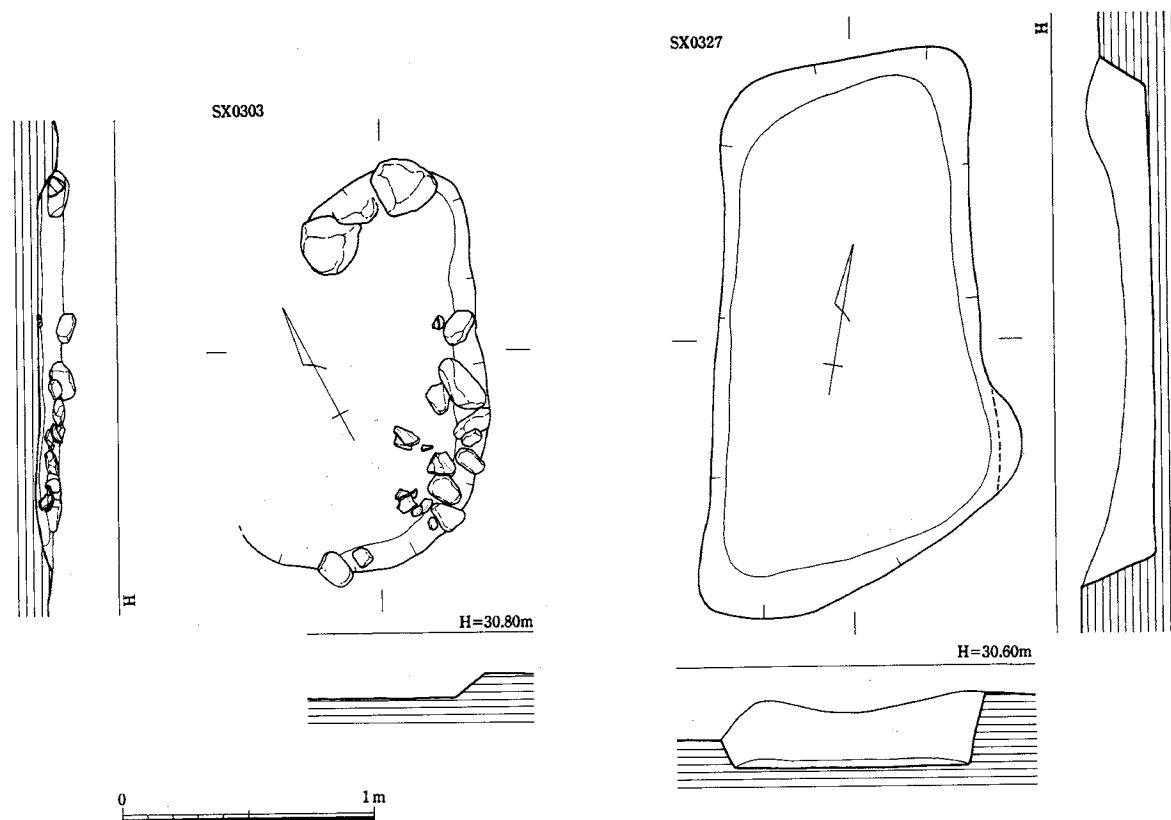
**副葬品及び墓境内出土遺物**（第42図31～48）遺物番号が若干前後するが、検出甕棺墓の番号順に以下出土遺物をみていく。



第41图 K0012·0014·0015·0016甕棺实测图 (1/8)



第42図 甕棺墓副葬品・墓壙内出土遺物実測図 (1/1、2/3、1/3)



第43図 SX0303・0327 土壙墓実測図 (1/30)

31はK0001墓壙出土の壺。口径9.6cm、復元器高12.0cm。扁球形の胴部から頸部が短く内傾し、口縁部が外反する。底部は中くぼみの平底。口縁内外面と胴外面はヘラ研磨、胴内面は条痕で仕上げる。口縁部から頸部にかけては赤色顔料が点在し、彩文の痕とも考えられる。微砂粒が混じった精良な胎土で、焼成良好、外面は暗褐色、内面は主に黒色を呈する。頸部から胴上位にかけ黒斑がある。供献土器であろう。

32・45・46はK0002から出土した。45・46は下甕内から出土した副葬品の碧玉製管玉である。45は長さ0.7cm、径0.35cm。46は長さ0.65cm、径0.25cm、孔径0.15cmで、一端が欠損する。ともにくすんだ青緑色を呈し、穿孔も両側から行う。32は墓壙内から出土した壺の肩部片である。外面は丹塗りを施し、胴内面はナデ、他はヘラ研磨を行う。胎土には砂粒が多く、焼成良好、内面は赤褐色を呈する。厚みのある壺である。

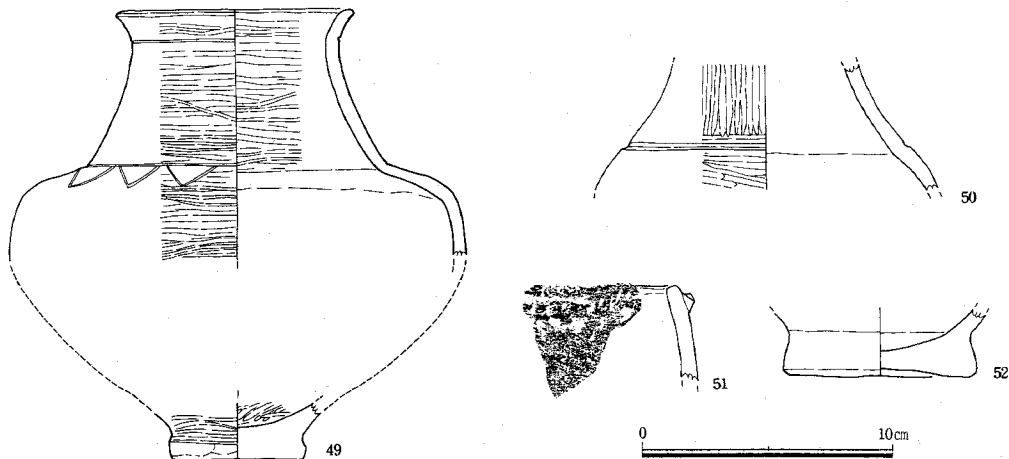
33はK0004墓壙出土の浅鉢片である。口縁部は直立し、外面に一条の沈線をめぐらす。内外面ともヘラ研磨で丁寧に仕上げる。微砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好、外面暗褐色、内面暗黄褐色を呈する。

34・35はK0005墓壙から出土。34は壺の胴部片。外面丹塗りで、横のヘラ研磨を行う。内面はナデ調整。胎土には砂粒が混じる。35は鉢。胴部が屈曲し、口縁端は直立する。内外面ともヘラ研磨だが、荒い。胎土には砂粒が混じり、外面淡赤褐色、内面灰黒色を呈する。

36はK0008墓壙から出土した壺の底部片。外面丹塗りで、外底部には指押さえの跡が残る。内面はナデ調整。胎土には砂粒が多く、赤色粒も混じる。

47はK0009墓壙内から出土した黒曜石製の石鏃。凹基の剥片鏃で、脚の一方と先端が欠損する。

37～39はK0010墓壙からの出土。37は壺片で、肩部には段がつき、長めの頸部が立ち上がる。外面



第44図 土壌墓出土土器実測図 (1/3)

はヘラ研磨、内面はナデ調整。外面頸部から肩部直下まで赤色顔料がみられ、彩文が施されたと考えられる。胎土は精良で、外面灰黒色（黒塗りか？）、内面黄褐色を呈する。38・39は突帯文甕で、38は口縁端下に、39は口縁端に接して突帯を貼り付け、ヘラで刻目を入れる。ともに外面は板状工具によるナデ、内面は指ナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒、金雲母が混じる。外面は暗褐色を呈し、煤の付着と二次焼成の痕がみられる。このどちらかが単棺としたK0010の上甕であった可能性もある。

40・48はK0011墓壙内から出土した。40は口縁端が短く外反する壺片。内外面ともヘラ研磨。胎土には砂粒が混じり、外面褐色を呈する。黒斑がある。48は黒曜石製の石鎌。三角鎌で、長さ2.05cm、重量1gをはかる。

41はK0013下甕内に混入していた壺の頸部片。外面はヘラ研磨、内面はナデ調整で接合痕が明瞭である。胎土には砂粒が多く、外面灰褐色、内面黒色を呈する。

42・43はK0014墓壙から出土。42は2条の細い沈線をめぐらせた壺の肩部片で、胴内部以外はヘラ研磨。胎土は比較的精良、外面くすんだ黄褐色を呈する。43は波状口縁の浅鉢片。内外面ともヘラ研磨。胎土は精良、黄褐色を呈する。

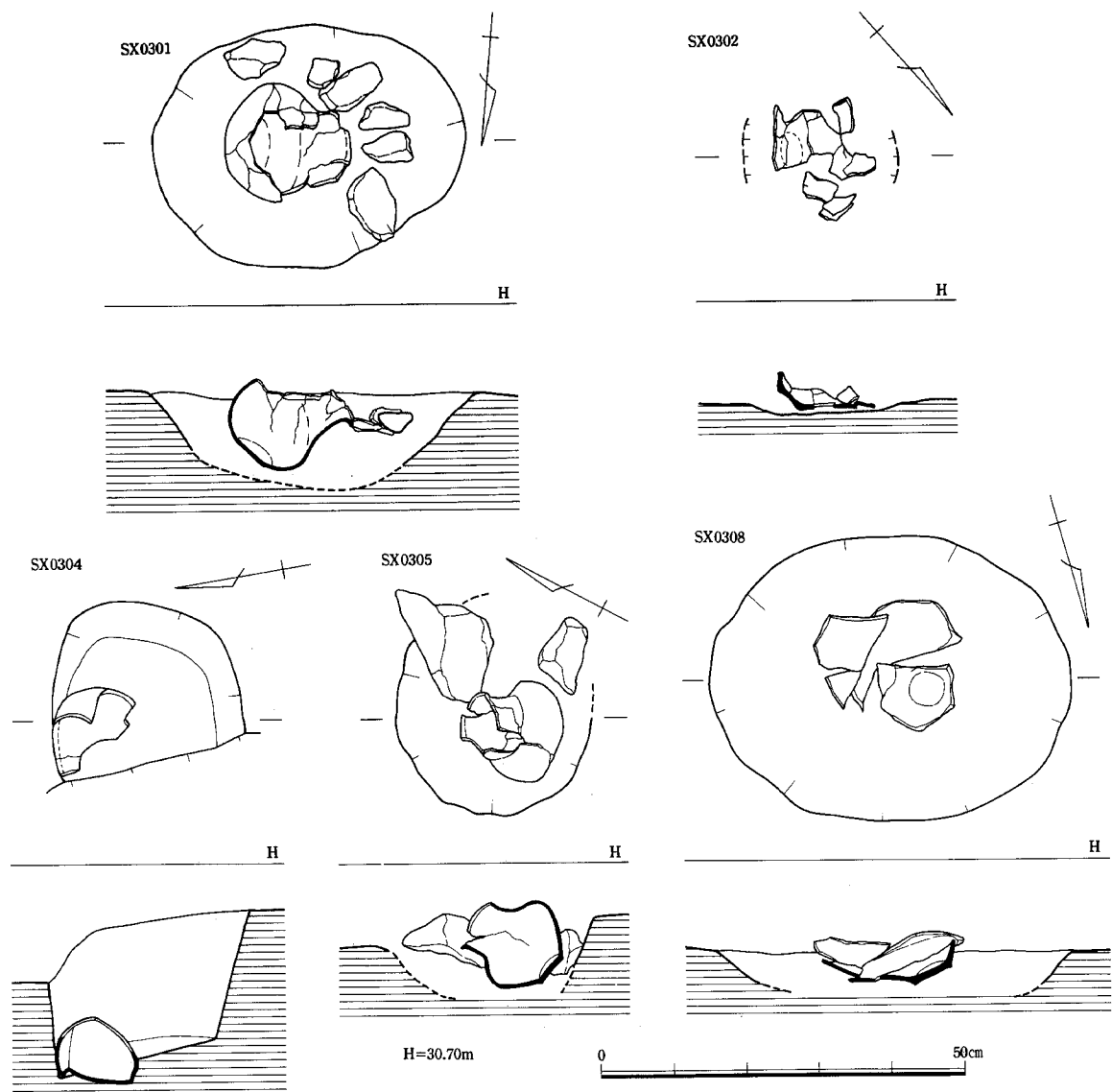
44はK0016墓壙から出土した壺口縁片。頸部内面は強いナデ調整、他はヘラ研磨。胎土には砂粒が多く、灰黒色を呈する。

## (2) 土壌墓

SX0303 (第43図) C-3区、K0002の東側で検出した。長さ1.65m前後の隅丸長方形をなす。主軸はN-28°-E。深さは10cm程度で、西側壁は失われる。東側壁下の2ヶ所で壺破片が出土した。

出土土器(第44図49・50)ともに壺である。49は墓壙東南隅からまとまって出土した破片を復元したもので、供献品と考えられる。口径9.4cm、復元器高18.0cm。上位で大きく張った胴部、肩部には長めの頸部、外底部をヘラで面取りした小さい底部が特徴的である。肩部と口縁下にはそれぞれ細い沈線がめぐり、肩部の沈線下にはヘラ描きの鋸歯文を連続的に施す。口縁内面から外面はヘラ研磨、胴部内面はナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒が混じり、暗褐色から灰黒色を呈する。50は肩部に太めの沈線をめぐらす。外面はヘラ研磨で、頸部は縦方向に施す。内面はナデ調整。胎土には砂粒が多く、赤色粒も混じる。外面淡赤褐色を呈する。

SX0327 (第43図) B-4区、K0003・0012・0015に挟まれ位置で検出した。平面は長さ2.10m、幅1.05mの隅丸の不整長方形。深さは30cm。主軸はN-10°-E。西側壁は礫部分を掘り下げている。



第45図 SX0301・0302・0304・0305・0308 供献土器出土状況実測図 (1/10)

覆土は暗黒褐色砂質土で、壙内から土器片が出土した。

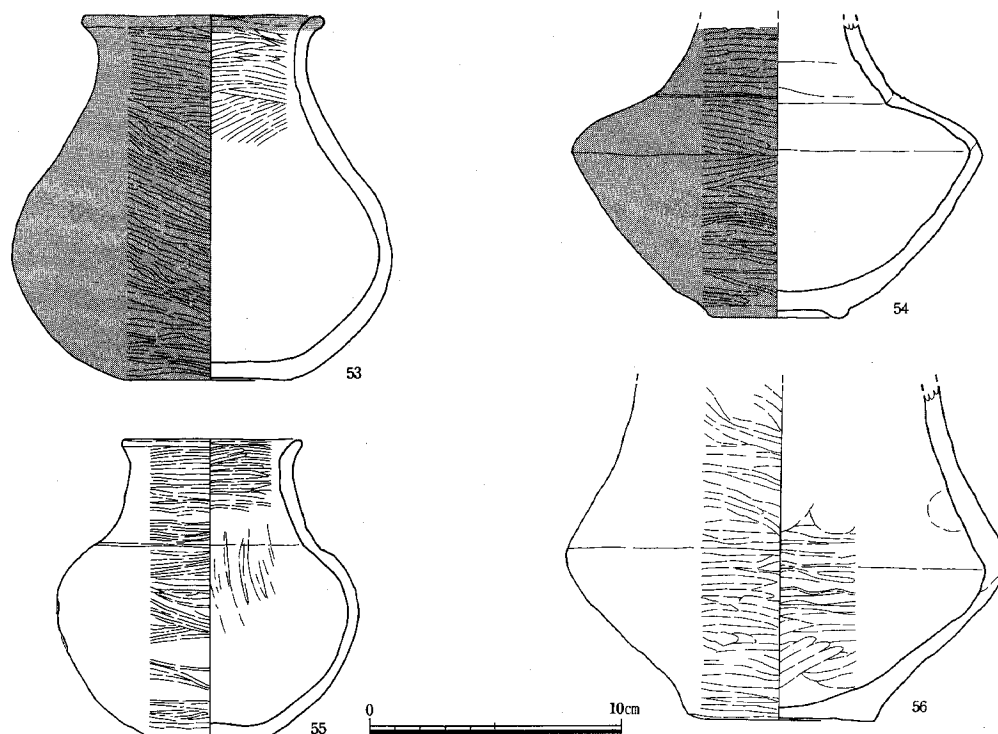
出土土器 (第44図51・52) 51は突帯文甕片。口縁端から下がって突帯を貼り付け、ヘラで浅い刻目を入れる。内外面ともナデ調整。胎土には砂粒、赤色粒が多く、主に淡赤褐色を呈する。52は甕底部片。外底部は外に張り、上げ底となる。残存部はナデ調整。胎土には砂粒が多く、外面赤褐色。

### (3) 墓域供献土器

いずれも浅い掘り方に壺を埋置したものである。掘り方もいまひとつ明瞭さを欠き、あるいは土墳墓等の供献品ではないかと遺構の精査を行ったが、確認できなかった。

**SX0301** (第45図) B-5区、K0006の北東で検出した。長さ43cm、幅34cm、深さ13cmの東西に長軸をとる穴の中に、口を西に向けた壺を斜めに埋置する。口のまわりには礫を配する。

出土土器 (第46図53) 復元口径9.6cm、器高14.4cmの壺。下膨れの胴部から境をもたないまま頸部が内傾気味に立ち上がり、口縁部が外反する。底部は平底で、わずかにくぼむ。外面および口縁内面までは丹塗りで、その部分と頸部内面までヘラ研磨、胴部内面と底部はナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒が混じり、焼成良好。



第46図 墓域供献土器実測図 (1/3)

SX0302 (第45図) B-4区、K0015の北東で検出した。埋置穴は不明瞭。壺は口を北に向け、横に埋置する。

出土土器 (第46図54) 壺で、口縁部を欠損する。胴最大径部分が張り、稜線ができる。肩部には細かい沈線をめぐらす。底部は外端部幅0.5cmほどを輪状に残し、その内側はくぼむ。外面は丹塗りで、ヘラ研磨を行う。内面はナデ調整。胎土には砂粒が多く、金雲母も混じる。外底部には黒斑がある。

SX0304 (第45図) D-2区、K0010の西北で検出した。西側を攪乱坑に切られる。埋置穴は東西に長い楕円形で、南北幅は26cm、深さは23cmをはかる。北側壁下から壺片が出土したが、紛失した。

SX0305 (第45図) D-2区、SX0304土壙墓の北東で検出した。35×27cmの東西に長い楕円形穴の中に、口を西北に向けた壺を斜めに埋置する。東側には磔を配する。深さ15cm前後。

出土土器 (第46図55) 口径7.1cm、器高11.0cmの壺。胴最大径を中位よりやや上にとり、肩部にはヘラで段をつける。底部は平底。外面と口縁から頸部内面はヘラ研磨、胴部内面はヘラ状工具によるナデ調整を行う。胎土には微砂粒、赤色粒が混じる。外面は黄褐色。胴から底部にかけて器表の1/4程を占める黒斑がある。

SX0308 (第45図) B-4区、SX0327土壙墓東南で検出した。東西に長軸をとる長さ50cm、幅39cm、深さ6cmの浅い楕円形の穴に、壺が斜めに埋置される。

出土土器 (第46図56) 壺で、口縁部を欠損する。胴中位が屈曲し、頸部が立ち上がる。底部は平底。内外底がナデ調整の他はヘラ研磨で仕上げる。微砂粒を含む精良な胎土で、主にくすんだ赤褐色を呈する。外面は丹塗りの可能性がある。胴屈曲部の上に黒斑がある。

### 3) 石塚古墳と関係遺構・遺物

C-4区で検出した横穴式石室を主体部とする古墳である。調査開始時、一帯は水田で、古墳の存在は予想だにできなかった。従前の分布調査でも知られておらず、今回小字名をとって石塚古墳と命名



した。検出したのは玄室を中心とした敷石部分と、その周りに穴を掘って倒された腰石だけである。墳丘や外部施設はまったく遺存せず、その形態規模については知るところがない。出土遺物からみると、近世以降、おそらく水田を造営する際にこの古墳を破壊し、運びきれなかった腰石を倒し埋め、一帯を平坦化したものと考えられる。玄室床面はかろうじて残されたことになる。なおこの古墳の遺物を廃棄したと考えられるSK0307土坑があり、あわせてここで報告する。

**横穴式石室**（第47・48図） 主軸をN-85°-Eにとり、東側に開口する。石室の各側壁の腰石は外側に穴を掘り倒されている。隙間に挟んだと考えられる小ぶりの石も一緒にみられる。奥壁外側にも穴が掘られているが、石そのものはない。残存するのは玄室床面と羨道の一部の長さ3.6mである。

**玄室** 残存する敷石と倒された腰石から復元すると、玄室は奥幅2.20m、前幅2.25m、左壁長2.55m、右壁長2.70mをはかる。確認できる腰石は花崗岩の割石を使用する。両側壁はそれぞれ2石からなり、奥壁側が高さ2m、幅1.5m前後、袖側がそれより一回り小さくなる。厚さは50cm前後で、玄室側は面取りする。また奥壁石はその埋め穴からすれば、高さ2.5m、幅2m前後の1石であったと推定できる。玄門部は両袖で、右袖腰石が高さ1.5m、幅0.7m、左袖腰石が高さ1.8m、幅1.5mの割石を使用する。腰石より上の構造については不明である。玄室床面には10~30cm大の転石を用いた敷石が全面に施されている。この敷石は上下二層にわたって行われており、上層の敷石は小ぶりとなる。この上層の敷石面から耳環、鉄製武器などが出土した。

**羨道** 玄門部から外に向かい1m程しか残存しない。奥幅1.5m前後、底から0.3mの位置に長さ50cmと90cmの2石を一行に組み合わせ、梱石とする。玄室の上層敷石の際、羨道の床面にも敷石を施している。梱石の東側に埋め込まれた割石の構成部位は不明である。

**出土遺物**（第49図57~81） 玄室の上層敷石上から金属製品を検出した。これらは敷石の間に挟まって残っていたものだが、原位置を示すものかどうかはわからない。出土状況は第48図に示した。図中の番号と以下に記す遺物番号とは同じである。この他腰石を倒した穴から須恵器、土師器の破片などが出土しており、その一部は後述するSK0307土坑出土遺物と接合する。

57・58は耳環である。57は中実の銅胎に金箔をおいたもので、長径3.0cm、短径2.6cmをはかる。突合せ部の隙間は0.1cm、断面は径0.6cmの円形を呈する。腐食し、金箔は内側と外側の一部に残る。58も中実の銅胎に箔をおくものだが、腐蝕し箔の種類は不明。長径2.9cm、短径2.6cm、突合せ部の隙間は0.15cmをはかる。断面は径0.7cmの円形。

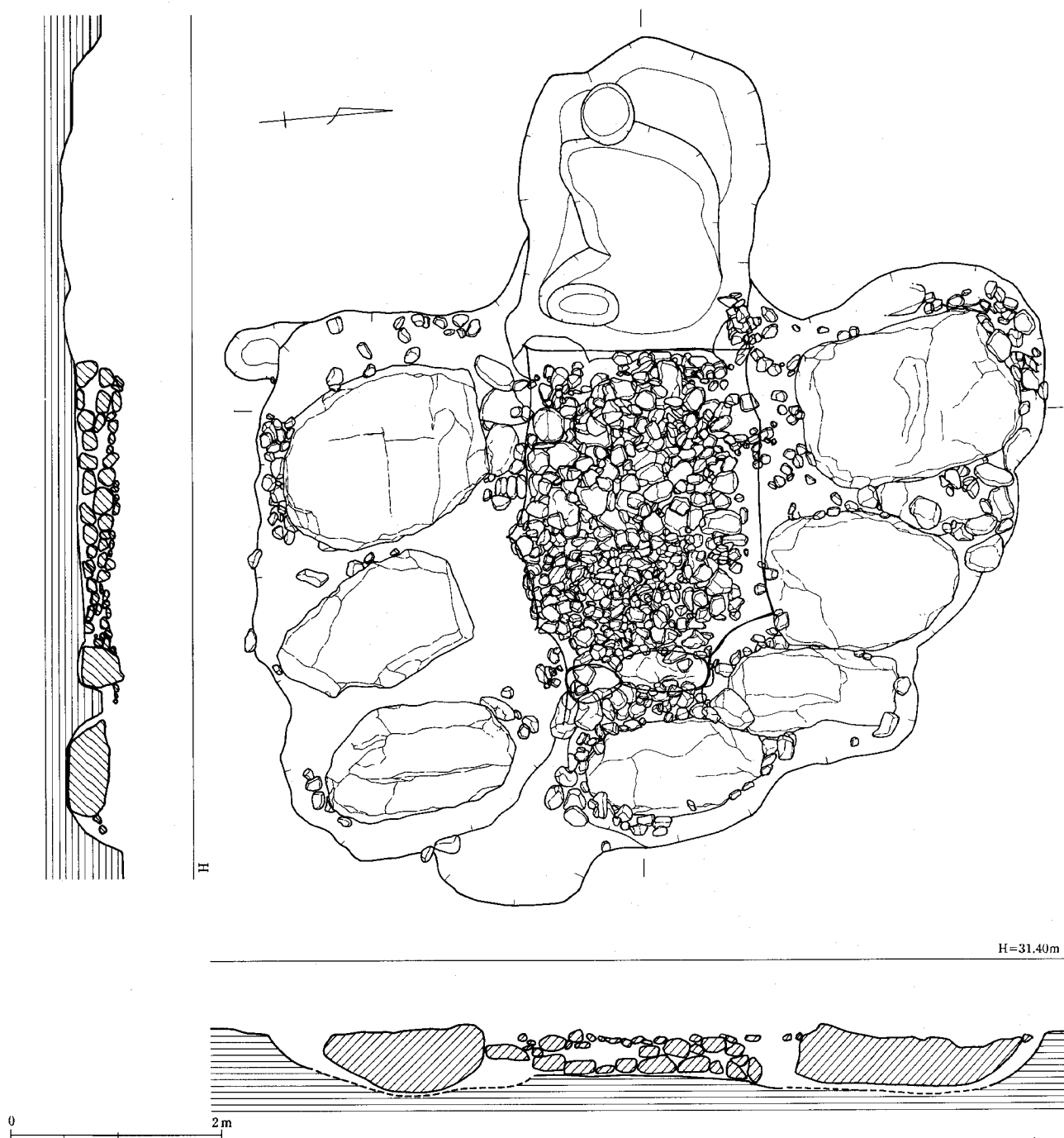
59は鉄直刀の茎片である。幅2.3cm、厚さ0.7cm。60は直刀の鉄製柄金具。中空で、長さ5.0cm、幅2.6cm。柄尻はややくぼむ。断面は長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.1cmの楕円形となる。

61~65は鉄刀子。このうち、61は長さ30.9cm、刃幅2.8cm、刃渡り23.0cmで、茎部端は丸みをおびる。また茎部端付近に目釘穴らしきものが認められる。全体に腐蝕が進んでいる。62~64は刃幅2cm以下の小形刀子。65は茎部分で、木質が残る。

66~80は鉄族。66・67は広根の斧箭式に属するもので、円頭、断面平造り。66は関と小さな茎をもち、67は頭部の丸みが大きく平面菱形に近い。68も小形だがこの類であろう。69・70は尖根式の鏃で、身は柳葉形に近い。69は関があるのに対し、70は明瞭ではない。71~80は尖根式鏃の茎、筥被部分の破片である。72・77・78には木質が残る。

81は弓金具。長さ3.4cm。軸部は断面方形で、両端が丸みをもつ。木痕が残る。

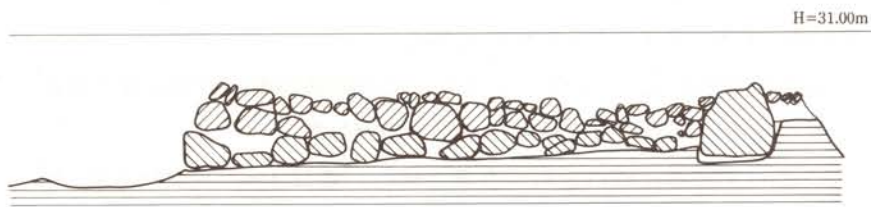
**SK0307**（第50図） D-3・4区、石塚古墳の北東で検出した東西3.90m、南北3.30mの不整形土坑である。深さは10cm前後。この坑内から破損した須恵器大甕や高坏などが出土し、その一部は石塚古墳の出土土器と接合する。おそらく、古墳破壊時に石室内および周辺の出土遺物をまとめて廃棄した



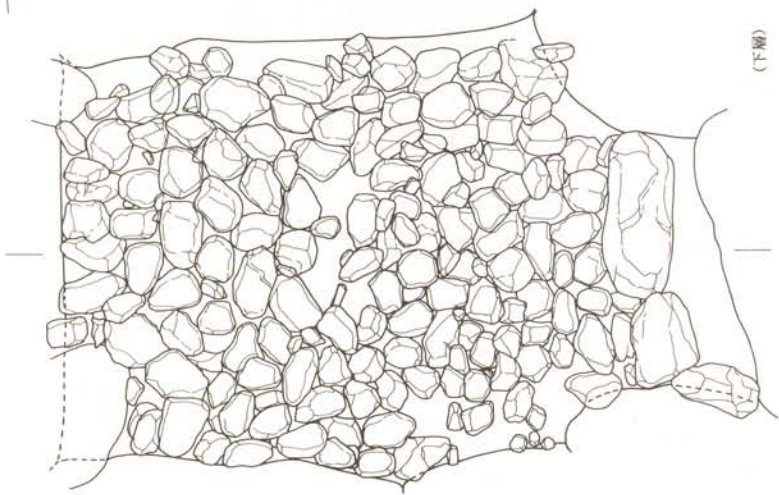
第47図 石塚古墳検出状況実測図 (1/60)

ものであろう。土坑からは近世の陶磁器類も出土していることから、その破壊時期は近世以降と考えられる。ここでは石塚古墳の年代を推定するため、古墳時代の土器を抽出した。

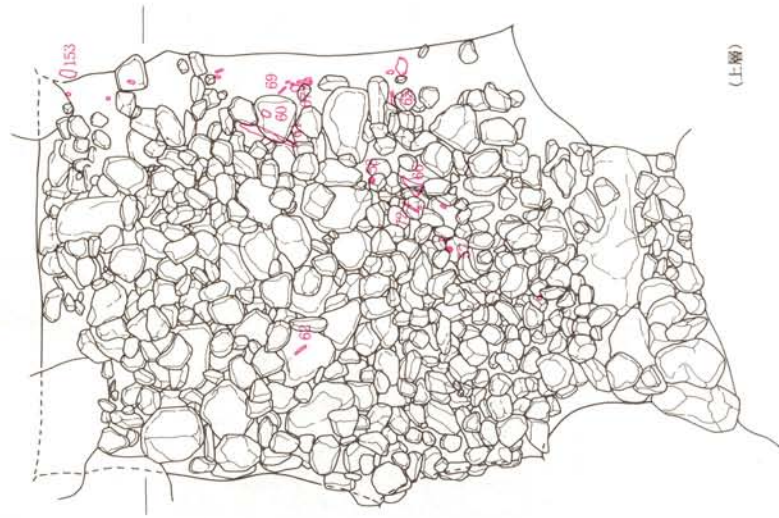
出土遺物(第51図82~87) 82~85は須恵器。82は長脚の有蓋高杯。口径12.4cm、器高18.0cm。杯部の立ち上がりは0.6cmと低く内傾し、端部は尖り気味となる。受部は外上方に短くのびる。杯底部の約1/2にヘラ削りを施す。筒部は中位に2条の沈線をめぐらせ、その上下に2段の長方形透かしを三方に配するが、上段の透かしは切り込みが浅い。下段透かしの下には1条の沈線がめぐり、裾部が開き、その端部は上方にはねる。胎土には砂粒が混じり、焼成堅緻、青灰色を呈する。83は低脚の



H=31.00m



(下層)

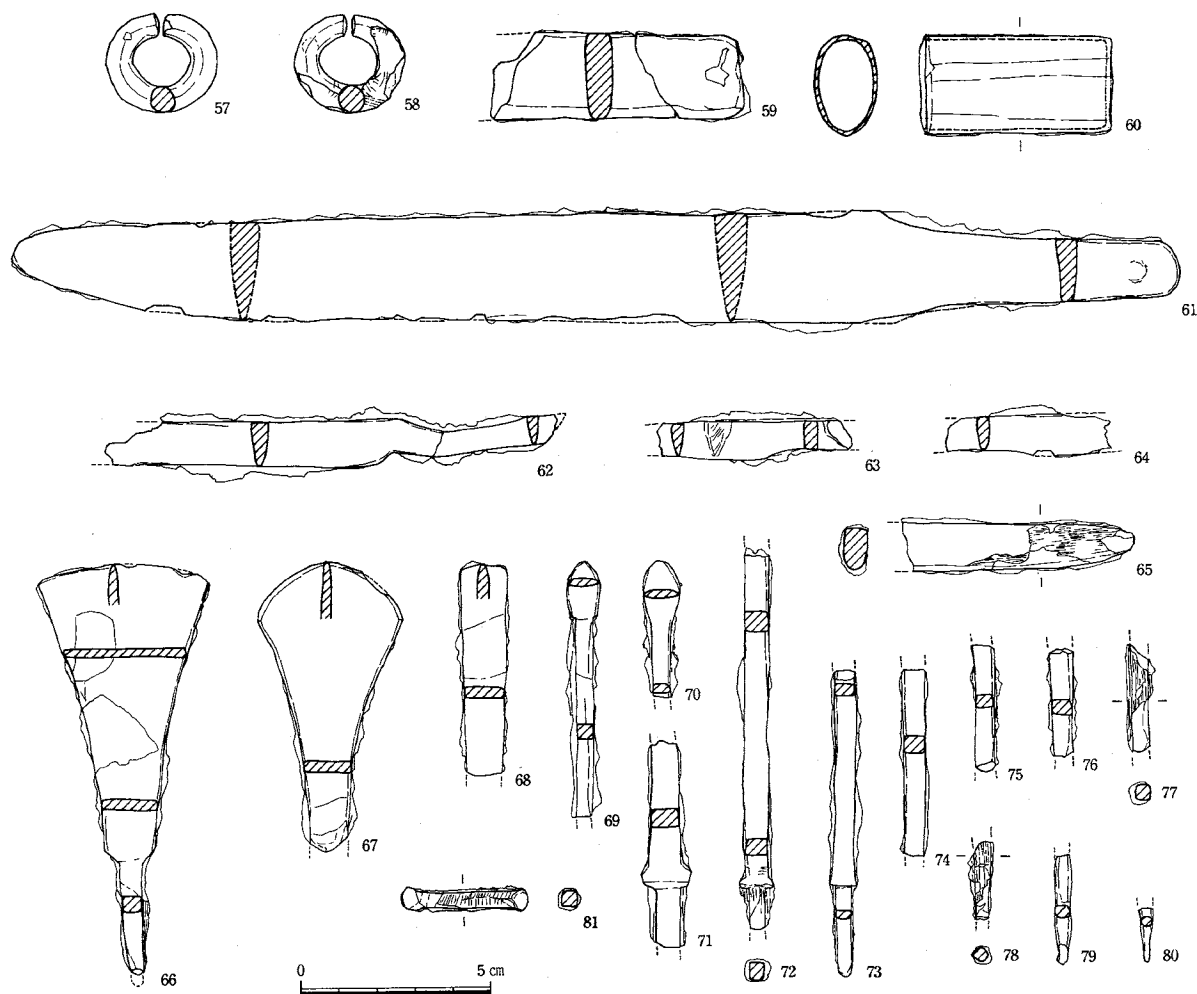


(上層)

H=31.00m



第48図 石塚古墳石室実測図 (1/40)



第49図 石塚古墳出土遺物実測図 (1/2)

無蓋高杯片。杯底部はヘラ削り、他はナデ調整。胎土は精良、焼成堅緻、青灰色を呈する。84は直口壺。復元口径10.1cm。胴部の張りは小さい。残存部は横ナデ調整。胎土には砂粒が混じり、焼成堅緻、暗青灰色を呈する。85は復元口径50.0cmの大型甕。肩から頸部が大きく開き、口縁外面は稜をつくって垂れ下がる。頸部上位には上に1条、下に2条の沈線をめぐらせ、その間をヘラ描きの直線文を連続して施す。胴部外面は平行タタキ、内面は青海波文タタキ、他の部位は横ナデ調整を行う。胎土は精良だが、焼成があまく、青みをおびた明灰色を呈する。頸部文様帯下に同じヘラ記号を並べて刻む。

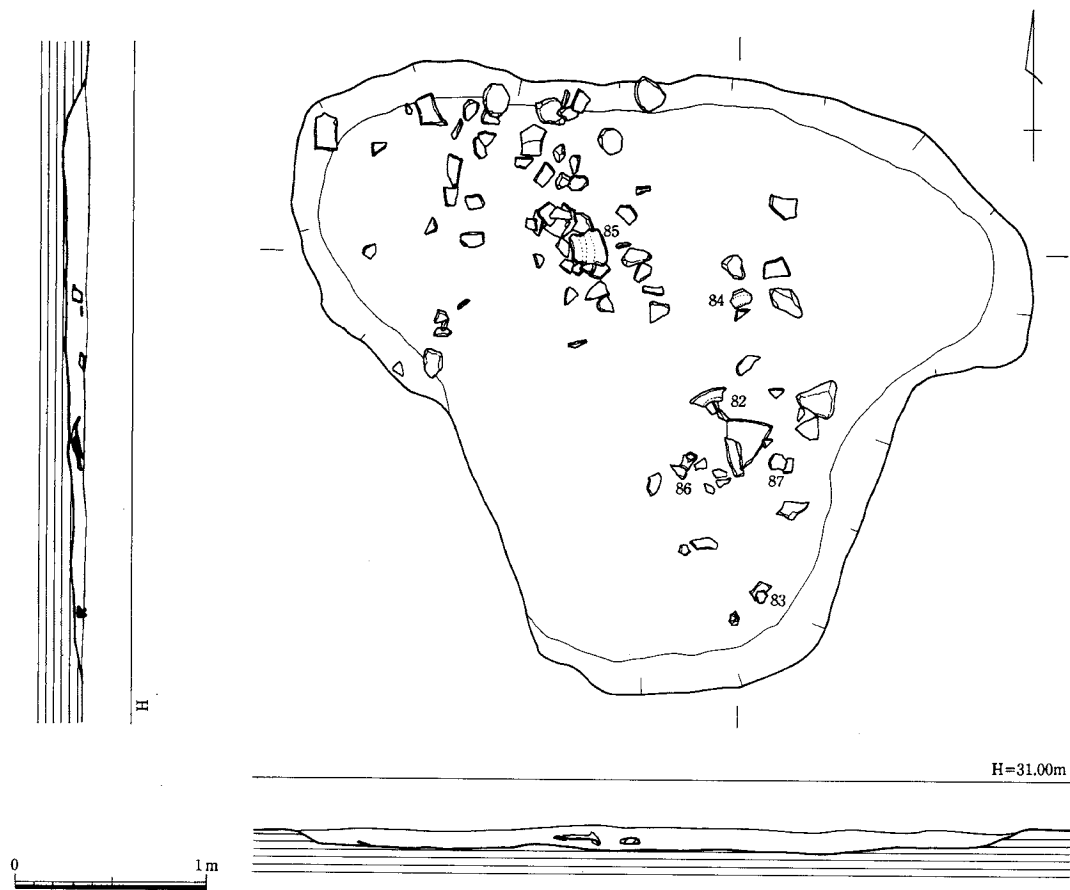
86・87は土師器の高杯である。86は杯部の底部と体部の境が屈曲し、体部が大きく開く。脚部は低く、筒部から段がついて裾部が開く。復元口径15.6cm、器高9.8cm。杯部内外面、脚裾部外面はヘラ研磨を行い、杯内底は放射状の暗文となる。筒部はヘラ削り。胎土は精良、焼成良好、赤褐色を呈する。87は碗形の杯部をもつ。杯部外面はヘラ研磨、内面は放射状の暗文となる。筒部はヘラ削り。胎土には砂粒が混じり、焼成良好、赤褐色を呈する。

#### 4) その他の遺構と遺物

##### (1) 掘立柱建物

掘立柱建物2棟を確認した。他にも柱穴が多く、まとめきれなかった建物もあると考えられる。

SB0406 (第52図) 6区南側、C-10区を中心に検出した2間×3間の南北棟である。建物方位はN-9°-E。梁行実長は390cm (13尺)、柱間は195cm (6.5尺)の等間。桁行実長は690cm (23尺)、



第50図 SK0307 土坑実測図 (1/40)

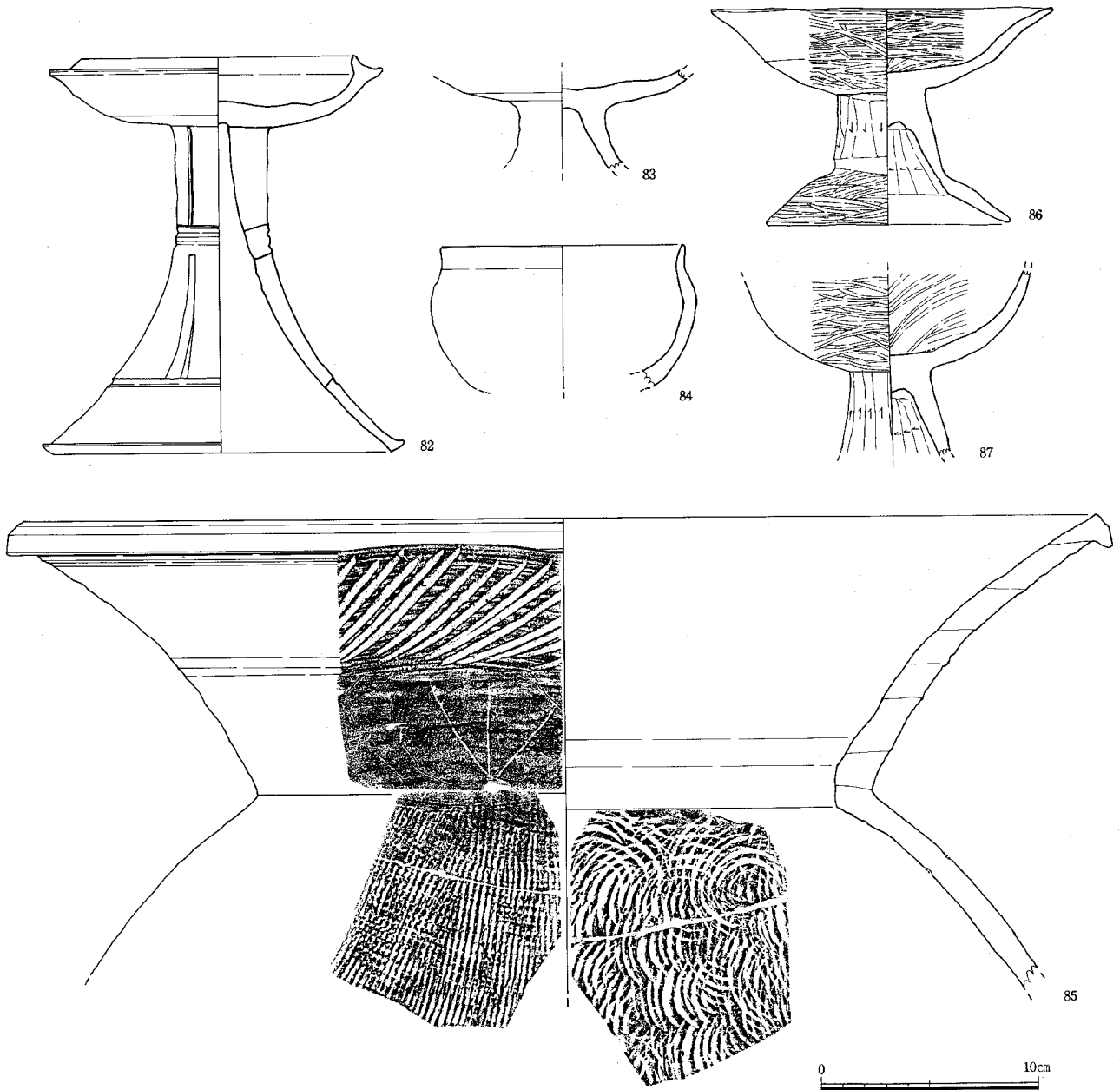
柱間は北から240cm (8尺)、210cm (7尺)、240cm (8尺)となる。柱穴は径30~40cmの円形で、深さは20~45cm。0336・0337・0338の柱穴から土師器皿(糸切り・ヘラ切り底混じる)などが出土した。

SB0407 (第52図) 7区南端で検出した。1間×2間の南北棟で、南側を除き庇柱がまわる。建物方位はN-14°-W。身舎の梁行実長は210cm (7尺)、桁行実長420cm (14尺)で、柱間は210cm (7尺)の等間である。東南隅柱は検出できなかった。西側の庇柱は身舎から90cm (3尺)、北側は120cm (4尺)、東側は105cm (3.5尺)離れて設ける。東庇の外105cm (3.5尺)にはさらに2間からなる柱列があり、中央の柱穴は2穴となる。身舎の柱穴は径30~40cmの円形で、深さは30cm前後をはかる。柱痕は径15cm程度。0318・0319・0320の柱穴から土師器皿(ヘラ切り)、瓦器などの細片が出土した。

## (2) 土坑

近世以降のものを除いて13基の土坑を確認した。多くが中世に属するものであったが、ここでは主だった6基を報告する。

SK0325 (第53図) 6区の北端、D-2区で検出した。長軸を南北方向近くにとる長さ1.30m、幅1.10mの楕円形土坑で、深さは24cmをはかる。覆土は青灰色土ブロックの混じった暗褐色土。坑内から中世土師器の細片が出土した。



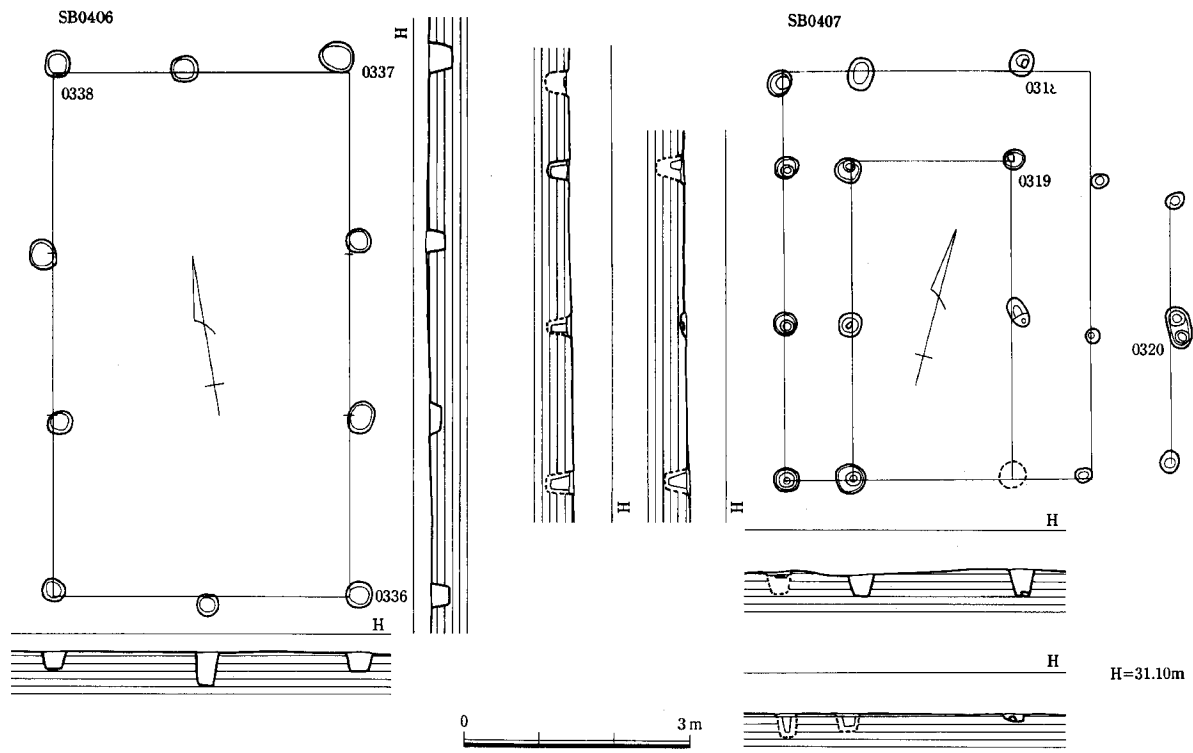
第51図 SK0307土坑出土遺物実測図(1/3)

SK0326 (第53図) SK0325のすぐ西側で検出した。長軸をほぼ南北方向にとる長さ1.30m、幅0.93mの楕円形土坑で、北側は尖り気味になる。深さ40cm。覆土はSK0325と同じである。坑内からは須恵器、中世土師器の細片が出土した。

SK0328 (第53図) 調査区西端のB-7区で検出した。長軸をほぼ南北方向にとる長さ2.10m、幅1.05mの不整長方形土坑である。深さは30cm。覆土は暗褐色砂質土。

出土遺物(第55図88) 須恵器の高台付杯である。焼きで器形の歪みが著しい。復元口径18.9cm、器高6.0cm。高台は低い。内外底がナデ調整、残りは横ナデ調整で仕上げる。胎土は精良で、焼成堅緻、灰色を呈する。

SK0329 (第53図) SK0328の西側で検出した一辺1.85～1.90mの不整形土坑である。深さは15cm。西側壁の上部は段落ちにかかる。覆土は暗褐色砂質土。坑内からは土師器の細片の他、弥生土器



第52図 SB0406・0407掘立柱建物実測図 (1/100)

片などが出土した。

SK0334 (第53図) 6区の南端近く、D-11区で検出した。南北方向に長軸をとる長さ1.84m、幅1.35mの楕円形土坑である。底面は北側が深さ10cm、西側は一段深く掘り込まれ、上面からの深さは23cmとなる。坑内からは中世土師器、青磁などの細片が出土した。

SK0369 (第53図) 7区の中央、C-7区で検出した。長軸を南北方向にとる長さ2.56m、幅1.20mの楕円形土坑である。深さは21cm。東側壁の南側を近代の土坑に切られる。坑内からは土師器椀、甕の破片などが出土した。

### (3) 溝

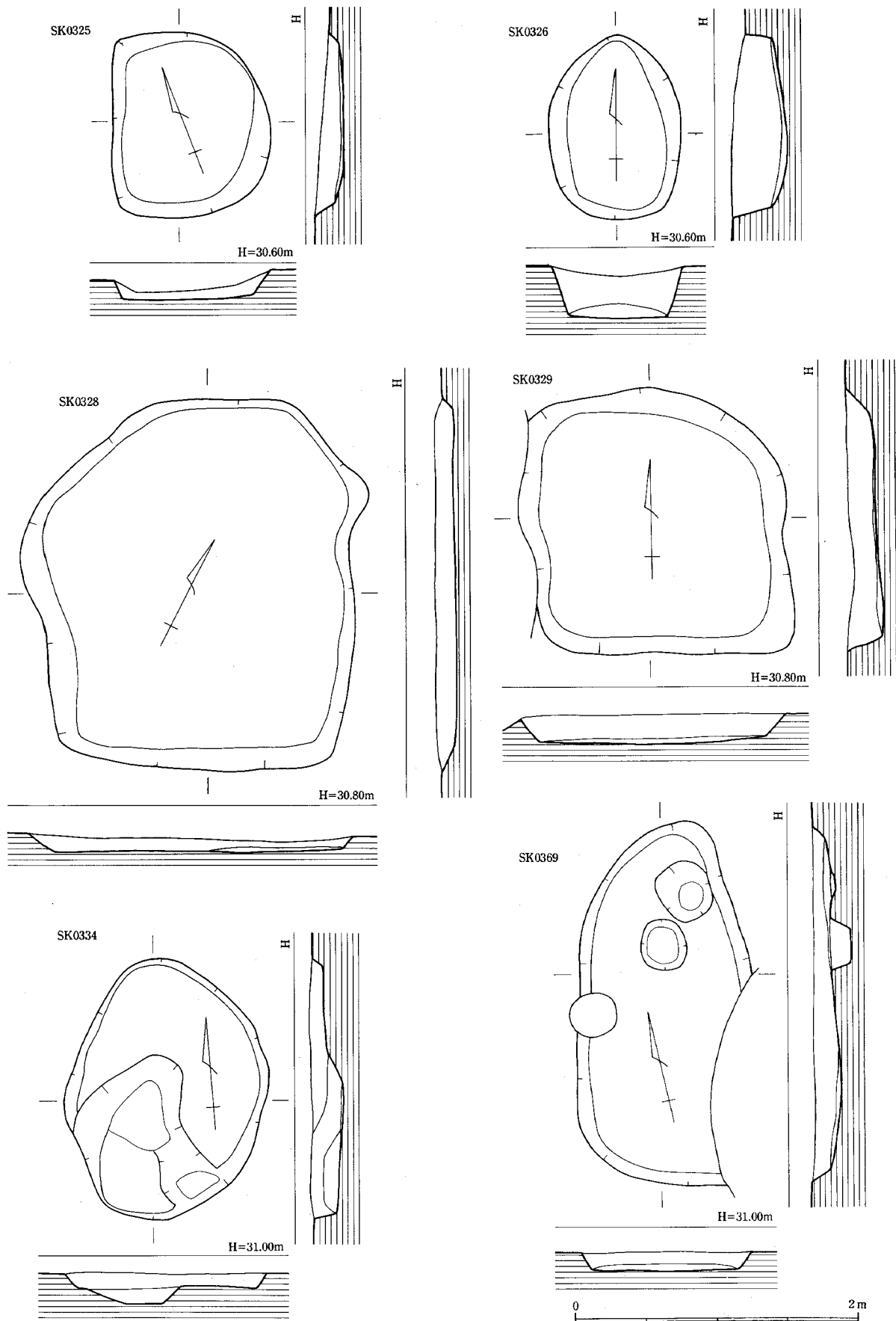
6区南側および7区で6条検出した。いずれも幅1m、深さ50cm未満の小規模なもので、SD0331・0333を除くと短い。SD0332・0333が弥生時代、他は中世に属するものである。

SD0331 (第54図) E-7区の調査区境から西南に走り、C-3区で南におれ、段落ちに続く。幅0.5m~1.0m、深さ35~50cm。断面はU字形を呈する。C-10区、D-8区内の溝底から土師器などがまとまって出土した。SB0406・0407を囲むような位置にあり、集落の環溝の可能性もある。

出土遺物 (第55図89~96) 89~94は土師器皿。89は口径9.6cm、器高1.8cm。小ぶりで身が深い。90~94は口径10.0~10.6cm、器高1.0~1.3cmと89に較べ口が広く身が浅い。図示した杯の底部は全てヘラによる切り離しで、89・90・91には板状圧痕が残る。95は土師器高台付杯。口径15.0cm、器高5.9cm。高台は1.5cmと高く、外に張る。内底は放射状のナデ、他は横ナデ調整で仕上げる。96は黒色土器のB類片。復元口径15.0cm。内外面とも横方向のヘラ研磨を行い、黒くいぶす。89~91・96がD-8区、95がC-10区から出土した。他に陶器片などが出土している。

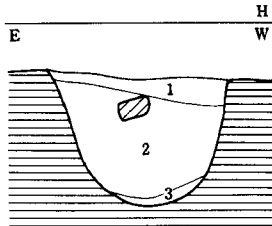
SD0332 (第54図) E-8区調査区境から東へ約8m走り、途切れる溝である。溝幅は1m前後をはかり、西端部はやや広がる。深さは25cm~40cmで、断面はU字形を呈する。SD0331・0333に切ら





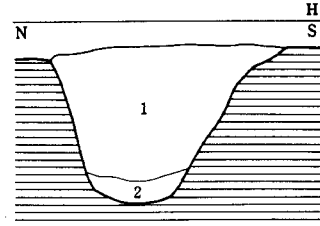
第53図 SK0325・0326・0328・0329・0334・0369 土坑実測図 (1/40)

SD0331 No 1



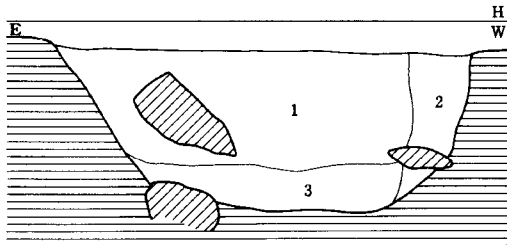
- 1 やや茶色みをおびた黒褐色土
- 2 黒褐色粘質土
- 3 黒褐色砂土

SD0332(東端)



- 1 暗茶褐色粘質土
- 2 1よりやや暗い

SD0331 No 2



- 1 暗褐色と黒褐色土
- 2 1に灰色みおびる
- 3 1より砂質

H=33.00m



第54図 SD0331・0332 溝土層断面図 (1/20)

れる。弥生土器の他、中世土器が混入する。

SD0333 E-8区の SD0332上からほぼ一直線に西南に走る溝である。西南端はやや西に向き、段落ちに続く。溝幅は1m前後、深さは25cm。断面はU字形を呈する。覆土は暗褐色砂質土。B-10区、D-10区からまとめて弥生土器などが出土した。

出土遺物(第55図97~110) 97~99は突帯文甕の口縁片。97・98は口縁端部下に、99は口縁端部に接して突帯を貼り付け、ヘラで刻目を入れる。97の外側だけが条痕、他はナデ調整を行う。100は直立する口縁端部に細い棒状工具で直接刻目を入れた甕。内外面ともナデ調整を行う。外面には刃圧痕が残る。

101~103は如意形口縁の甕。101・102は口縁端部下端にヘラで刻目を入れるが、101は刻目が大きい。103は口縁端部に刻目がなく、胴部に三角突帯を貼り付け、ヘラで浅い刻目を入れる。いずれも外面は刷毛目、内面はナデ調整を行う。外面には煤の付着や二次焼成の痕が認められる。

104は口縁端部に三角突帯を貼り付け、ヘラで小さな刻目を入れたいわゆる亀ノ甲タイプの甕。残存部はナデ調整で外面には煤が付着する。

105~109は甕の底部片。外底部はなめらかに胴下半部に続く。106は焼成後底部を外側から穿孔し、甑としたものである。105・106・109の外側だけが刷毛目調整、他はすべてナデ調整である。内面は黒色を呈するものが多い。

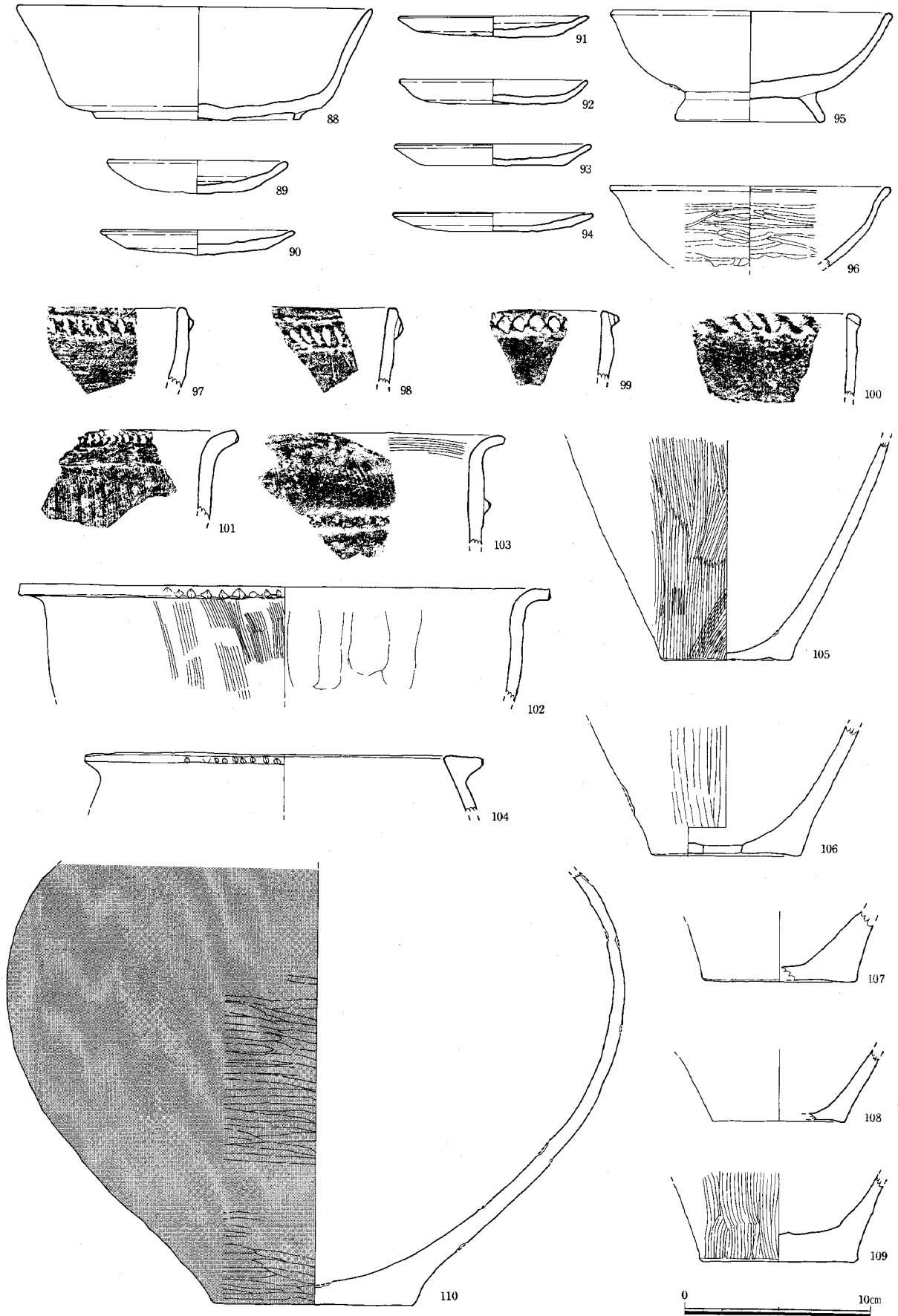
110は外面丹塗りの壺である。平底の底部から胴部が大きく張り、最大径は中位にとる。外面は横方向のヘラ研磨を行うが、やや粗い。内面はナデ調整だが、器表の剥離が著しい。

#### (4) その他の出土遺物(第56~58図111~157)

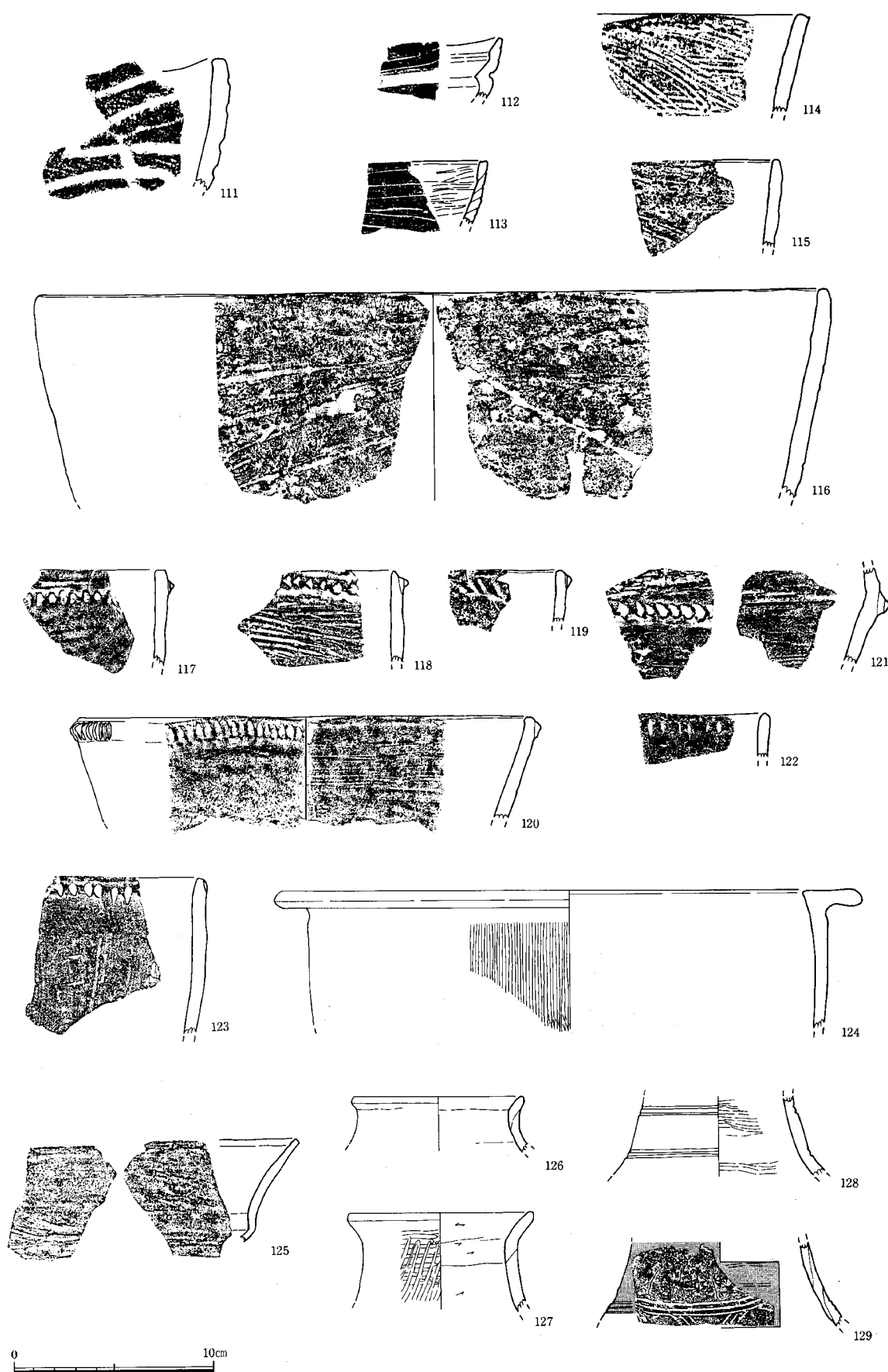
ここでは、ピットや遺構検出面から出土した遺物を取り上げ説明する。なお、土器は1/3、156の石鏃が1/1、残りの石器・鉄器は1/2で図示している。

111は磨消縄文を施す深鉢片。磨消縄文と凹線で外面を飾るが、ナデ地の部分もある。内面はナデ調整。胎土には砂粒が多く、黄褐色を呈する。

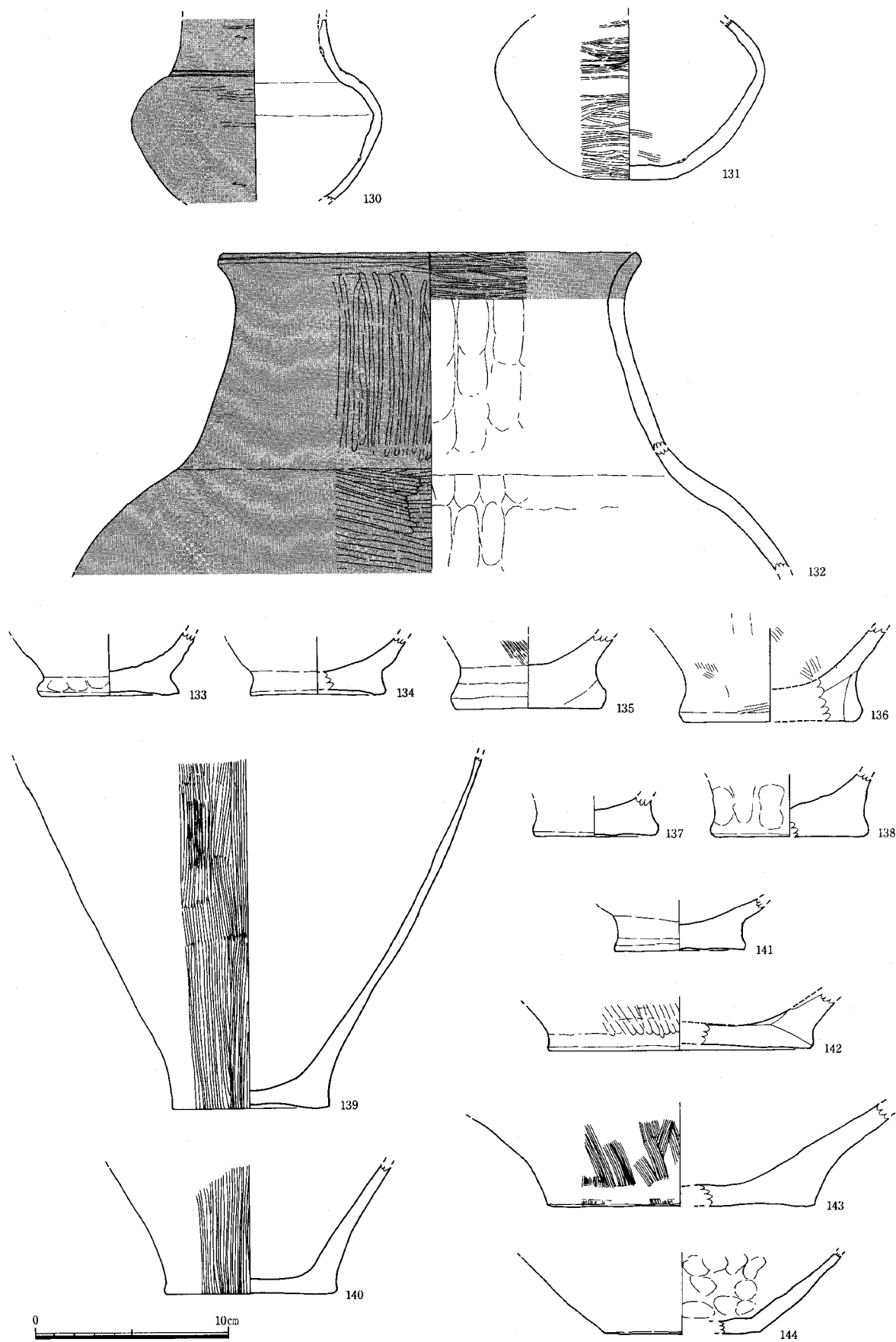
112・113および125は精製の浅鉢。112・113波状口縁をなし、口縁内部には段がつく。112は短い口縁部の外面に2条の細い沈線をめぐらす。113は長めに開く口縁部で、やはり外面に5条の沈線をいれる。125も長めの口縁部が開き、屈曲して胴部に続く。いずれも内外面ともヘラ研磨で丁寧仕上げる。胎土は精良で、焼成良好、暗褐色から黒色を呈する。



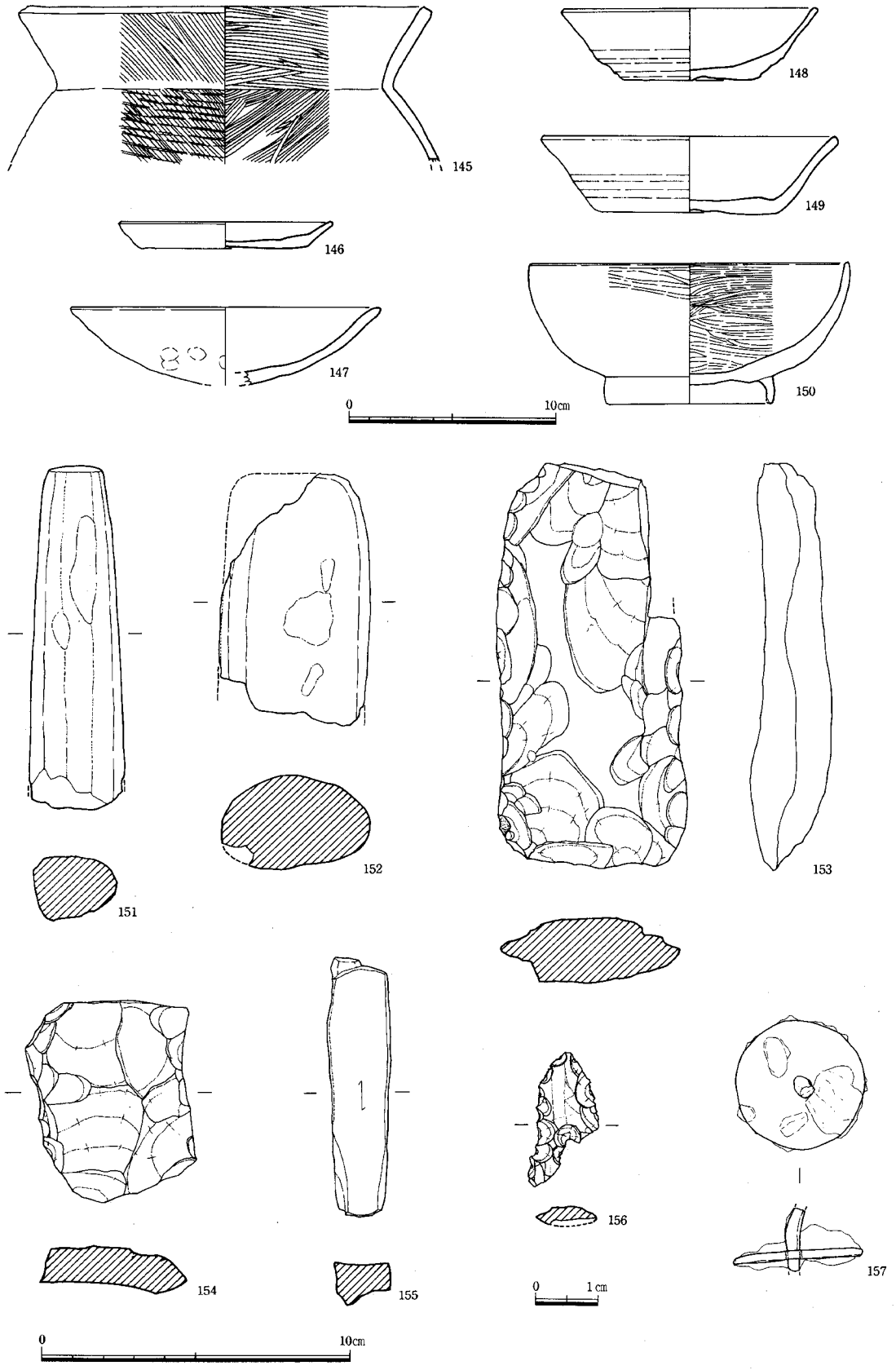
第55図 土坑・溝出土遺物実測図 (1/3)



第56図 その他の出土遺物 1 (1/3)



第57図 その他の出土遺物 2 (1/3)



第58図 その他の出土遺物 3 (1/1、1/2、1/3)

114～116は粗製の深鉢。口縁部は外傾気味で、端部は平坦に近い。外面調整は114が条痕、115・116が擦痕。内面はナデ調整で、116は強い横ナデとなる。胎土には砂粒が多い。

117～121は突帯文甕。117は口縁端部から下がった位置に突帯を貼り付け、細い棒状工具でやや左下がりに刻目を入れる。118～120の突帯は、口縁端部に接して上面を斜めに貼り付け、ヘラで右下がりに刻目を入れる。121は胴部突帯部分の破片で、刻目は棒状工具で入れる。器面調整は118の外面と内面の一部、120・121の内面が条痕、他はナデである。

122・123は直立気味の口縁部外端に直接刻み目をヘラで入れた甕。122の刻目は小さく、口縁端からやや下がった場所に施す。ともに内外面ともナデ調整であるが、123の内面は板状工具による。

124は逆L字状口縁の甕。胴部外面は細い縦刷毛目、他はナデ調整で仕上げる。外面には煤の付着が著しい。後述する139・140の甕底部とともに7区から出土した。

126～132は壺。126は頸部が短めで、口縁部は小さく外反する。内外面ともナデ調整。127は頸部が長めに立ち上がり、口縁部が外反する。外面は横方向の上に縦方向のヘラ研磨、内面は口縁部がヘラ研磨、他は削り状のナデ調整を行う。128は肩部と頸部上位にそれぞれ2条の沈線をめぐらす。外面は摩滅、内面ヘラ研磨。129は肩部に2条の沈線をめぐらせ、その下に3本一組からなる山形文?を施す。外面は丹塗りでヘラ研磨、内面はナデ調整。130は扁球形の胴部で、肩部には2条の沈線をめぐらす。図示しなかったが、底部は平底。外面ヘラ研磨、内面ナデ調整。外面丹塗るか。131は胴部が上位で大きく張る。底部は平底で、稜線を作らないまま胴部へ続く。外面ヘラ研磨、内面ナデ調整。胎土は比較的精良。胴最大径部分に黒斑がある。132は大形壺。肩部に明瞭な段がないまま頸部が内傾し、口縁部が外反する。口唇には沈線がめぐる。外面は丹塗りで、頸部は縦、胴部は横方向のヘラ研磨を行う。内面は口縁上位が丹塗りでヘラ研磨、それ以下は指押さえナデ。胎土には砂粒が多く、赤色粒も混じる。内面は淡赤褐色を呈する。K0016の東側でまとまって出土したもの(SX0397)で、甕棺として用いられたと考えられる。

133～144は底部片。外底部が外に張る133～137は突帯文甕、外底部が直立する138は弥生前期甕、139・140は中期の甕であろう。141は小形壺、142・143は大形壺の底部片。144は平底で143とともに、141・142と比べ後出するものである。

145は土師器甕。胴部外面は平行タタキで整形した後、内面もあわせて刷毛目調整を行う。外面には煤の付着が著しい。

146～149は土師器。146は皿で、口径10.3cm、器高1.3cm。底部はヘラ切り。147は丸底の杯。復元口径15.0cm。底部はヘラ切り。148・149は杯。148は復元口径12.5cm、器高3.5cm、149は口径14.2cm、器高3.7cm。ともに底部はヘラ切りで、149には板状圧痕が残る。

150は黒色土器椀A類。復元口径15.4cm、器高6.8cm、高台高1.5cm。内面をヘラ研磨し、黒色にいぶす。外面は横ナデ調整。

151は頁岩製の石刀片。端部も含め丁寧に磨く。細身で端部から先端部に向かい幅、厚さとも大きくなる。断面は一方が丸みをおび、一方は角張る。152は変岩類の磨製石斧の頭部片。153は玄武岩製の打製石斧。長さ13.4cm。頭部から側辺の一部は欠損する。154は玄武岩製の扁平な打製石器。スクレーパーの類であろうか。155は粘板岩製の砥石。断面方形で、各面がくぼむほど使用し、さらに破損した部分も砥面として利用している。156は黒曜石製の石鏃。長さ2.2cm。有脚で、一方は欠損する。

157は鉄製紡錘車。径4.2cm、厚さ0.3cmの円盤中央に、径0.6cmの孔を設け、径0.5cmの軸棒を通す。軸棒は約3cm残る。K0011の攪乱部分から出土した(第36図)。



## 5) 小結

6・7区で検出した遺構は突帯文期から板付Ⅰ式期の墓地、6世紀後半の横穴式石室を埋葬主体部とする石塚古墳、それに12世紀を前後する時期の集落跡が主なものである。ここでは甕棺墓地をとりあげ、簡単なまとめにかえたい。

この地点で検出した墓地は16基の甕棺墓、2基の土壙墓、それに祭祀土器からなる。遺構面は削平が大きく、失われた甕棺墓があったことは出土遺物中に甕棺片をふくむことから知られる。祭祀土器としたものも、この点からいえば、土壙墓底などに供献されたものであった可能性も捨てきれない。これまでこの時期の甕棺墓は玄界灘沿岸や有明海沿岸で知られており、それぞれ編年も試みられている。玄界灘沿岸は糸島地方に見られるが、基数としては今回の調査ほどまとまったものではない。

今回出土した下甕に使用された壺は、その形態から5類に分けることができる。1類は長胴で、肩部から頸部が大きく内傾し口縁部が短く外反するもので、K0001・0005・0010・0011・0016がこれにあたる。K0010・0016は他に比べ小振りである。器面調整は外面へラ研磨で、K0005・0012は外底部と内面に刷毛目調整を行う。K0012は頸部下端径が大きくなり、立ち上がりも直立気味になる。K011は胴上位の張りが大きい。棺の組み合わせをみると、K0005が壺、K0012が突帯文鉢である他は突帯文甕である。2類は胴部が上位で大きく張り、頸部下端の径が大きくなり内傾するK0002・0015である。器面調整は外面へラ研磨で、K0015の外底部と内面には刷毛目調整を行う。棺の組み合わせはK0002が壺、K0015が大形の突帯文甕となる。3類は胴部上位が大きく張り、頸部が直立気味に立ち上がり、口縁が外反するものでK0013・0014が相当する。器面調整は外面がへラ研磨で、外底部と内面には刷毛目調整を施す。棺の組み合わせはK0013が壺、K0014が鉢である。4類は胴部丸みをおび、頸部が広くまた長く立ち上がるものである。K0003・0004・0006・0007がこれにあたるが、口縁部はすべて打ち欠きになっている。その一部は5類と同じ口縁部になると考えられる。器面調整は外面がへラ研磨で、外底部と内面には刷毛目調整を施す。棺の組み合わせはすべて壺である。5類は口縁部外面に段がつくK0007で、壺と組み合わせる。外面はへラ研磨、内面はナデ調整となる。

これまでの編年によれば、長胴で頸部が短く内傾する1類、また肩部が大きく張り頸部下端の広がる2類が先行するものである。1・2類のどちらが先行するのかは明確にしたいが、2類の頸部下端が広がる傾向は3～5類につながるものでもある。つぎに胴部が安定するものの口縁部が短く外反する3類を経て、頸部が広くまた長くなる4・5類に至るといふ時期変遷をとらえたい。ただし、1・2類のなかでもK0005・0012、K0015は、その形態や調整に新しい要素をもち、3類と同じ時期まで残存するものと考えられる。具体的には1・2類が夜臼Ⅰ式、3類が夜臼Ⅱa式、4・5類が夜臼Ⅱb式・板付Ⅰ式に相当するものと考えられる。総じて、長胴でスマートだが肩が張り安定感のない壺から、どつしりとした胴部と広く長い頸部をもつ壺への変遷をたどることができる。

この甕棺の変遷を6区の墓地で見ると、北群の6基はいずれも1・2類に属し、西群は1～5類のすべてを含む。しかし西群の1・2類に相当するのは、その形態や調整に新しい要素をもち3類の時期に下がるK0005・0012、K0015である。北群の墓地が夜臼Ⅰ式期にまず形成され、Ⅱa期になり墓域が西群に移され、板付Ⅰ式期まで墓地を造営したことになる。この時期の甕棺は支石墓の埋葬主体部として利用されていることが多いが、この墓地に支石墓があったとの確証は得られなかった。

### (参考文献)

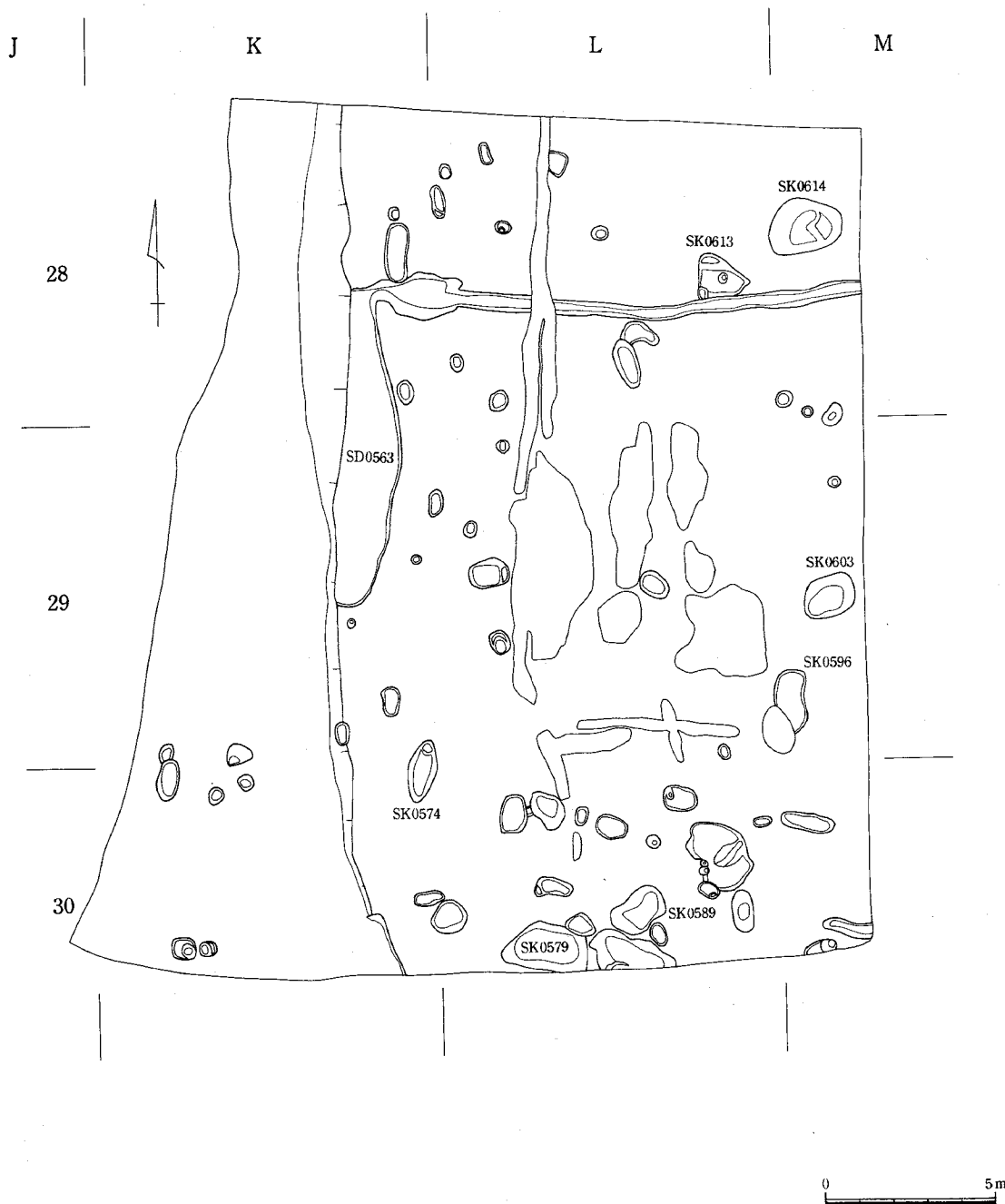
橋口達也「大形棺成立以前の甕棺の編年」九州歴史資料館研究論集17 1992

山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980

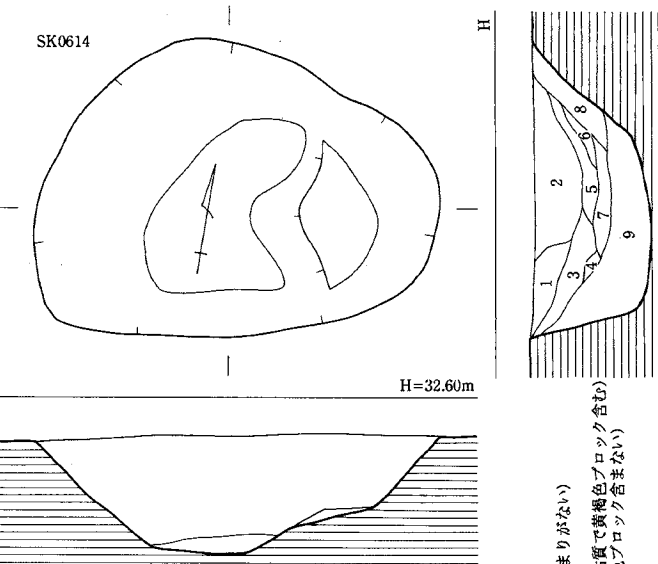
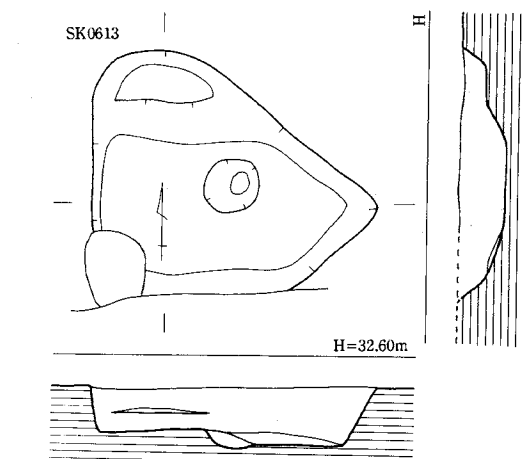
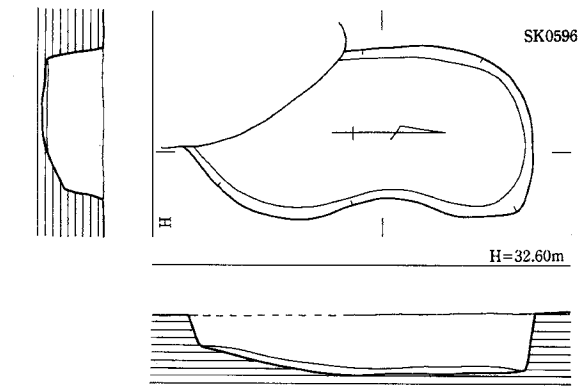
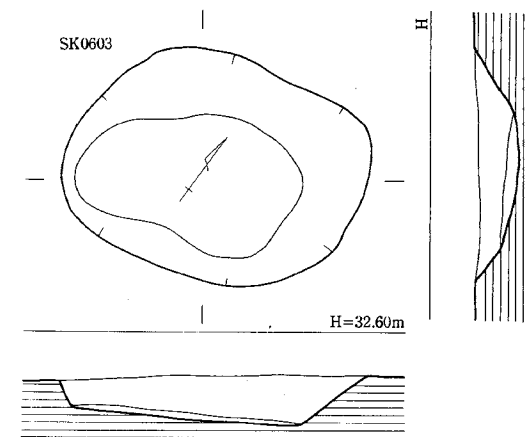
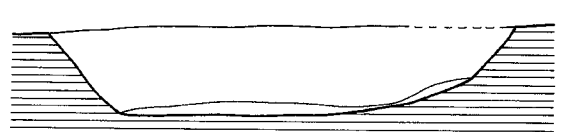
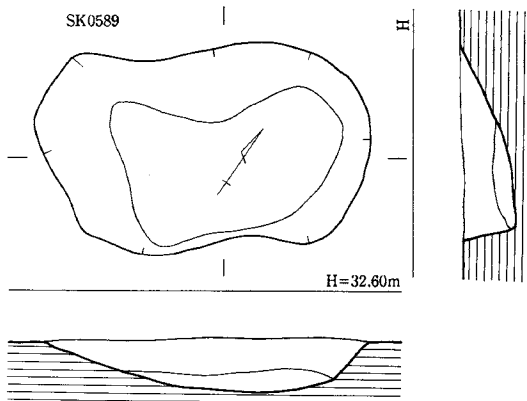
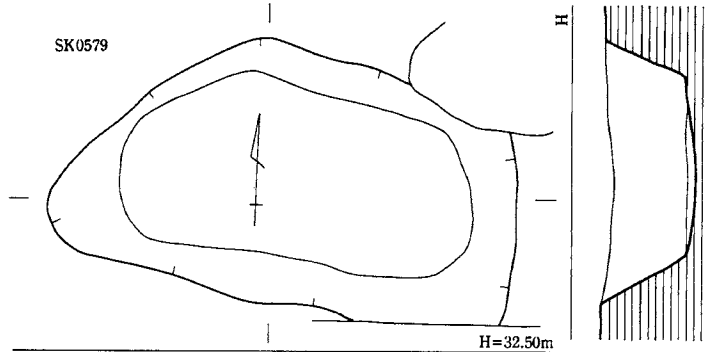
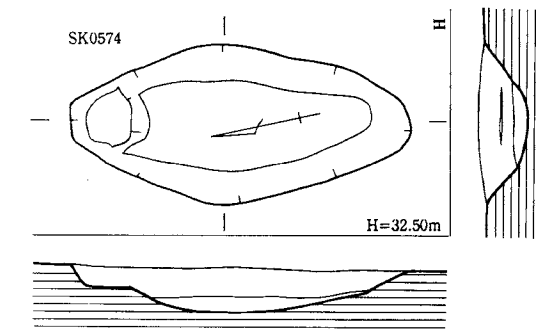
## 4. 9区の調査

### 1) 概要

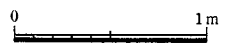
9区は本遺跡群の占地する低位段丘の北西端に位置し、調査区の西端は砂礫で埋没する南北方向の旧河道となる。その河道を挟んだ西側には安通遺跡群が展開する。遺構は表土、床土下の細砂が混じる明黄褐色土上面で検出した。遺構面は東側で32.4m、西側で32.0mを測り、河道が走る西側に向かって緩く傾斜する。検出遺構には土坑、溝、ピットがあるが、出土遺物が僅少であるため、性格、時期ともに不明なものが多い。また、攪乱も多数認められた。なお、K区の段落ちは現水田造成によるものである。本調査区は排水路、切り土田面を対象とし、その調査面積は505.08㎡である。



第59図 9区全体図 (1/200)



- SK0614
- 1 茶褐色土
  - 2 淡茶褐色土
  - 3 1と同じ(1よりまじりがない)
  - 4 暗茶褐色土
  - 5 暗茶褐色土(やや粘質で黄褐色ブロック含む)
  - 6 暗茶褐色土(黄褐色ブロック含まない)
  - 7 暗茶褐色弱粘質土
  - 8 茶褐色土
  - 9 黒褐色土



第60図 SK0574・0579・0589・0596・0603・0613・0614 実測図 (1/40)

## 2) 遺構と遺物

### (1) 土 杭

**SK0574** (第60図) K-29・30区に位置する。長楕円形を呈し、長径1.8m、短径0.8m、深さ0.25mを測る。壁面の立ち上がりは緩やかである。北側には平坦部を有する。覆土は茶褐色土である。出土遺物には弥生土器、土師器の細片が少量ある。

**SK0579** (第60図) L-30区で検出した不整長方形の土坑で、南東隅は調査区外に位置する。長さ2.5m、幅1.3m、深さ0.5mを測り、断面は逆台形を呈する。覆土は茶褐色土を主体とし、出土遺物には弥生土器、白磁の細片が少量ある。

**SK0589** (第60図) L-30区、SK0579の北東に位置する。不整形を呈し、長さ1.8m、幅1.0m、深さ0.25mを測る。南側の壁面を除き、立ち上がりは緩やかである。覆土は茶褐色土で、黄褐色土ブロックが混じる。

出土遺物(第61図158) 土師器小皿で、復元口径8.2cm、器高1.0cmを測る。全体に器面が磨滅する。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はないものとみられる。他に弥生土器の細片が出土している。

**SK0596** (第60図) M-29区で検出した。南西を攪乱に切られるが、不整な長方形を呈するものと考えられる。長さ1.8m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。覆土は茶褐色土で、明黄褐色土のブロックが混じる。土師器小皿の細片が数点出土している。

**SK0603** (第60図) SK0596の北東に位置する。不整な方形を呈し、長さ1.5m、幅1.2mを測る。深さは0.15～0.25mで、底面は北東に緩く傾斜する。茶褐色土の覆土に黄褐色土のブロックが多量に混じる。出土遺物は土師器と考えられる細片1点のみである。

**SK0613** (第60図) L-28区で検出した不整形な土坑で、南側をSD0563に切られる。現存で、長さ1.5m、幅1.3mを測る。底面には浅いピット状の掘り込みを有する。覆土は茶褐色土で、黄褐色土ブロックが混じる。

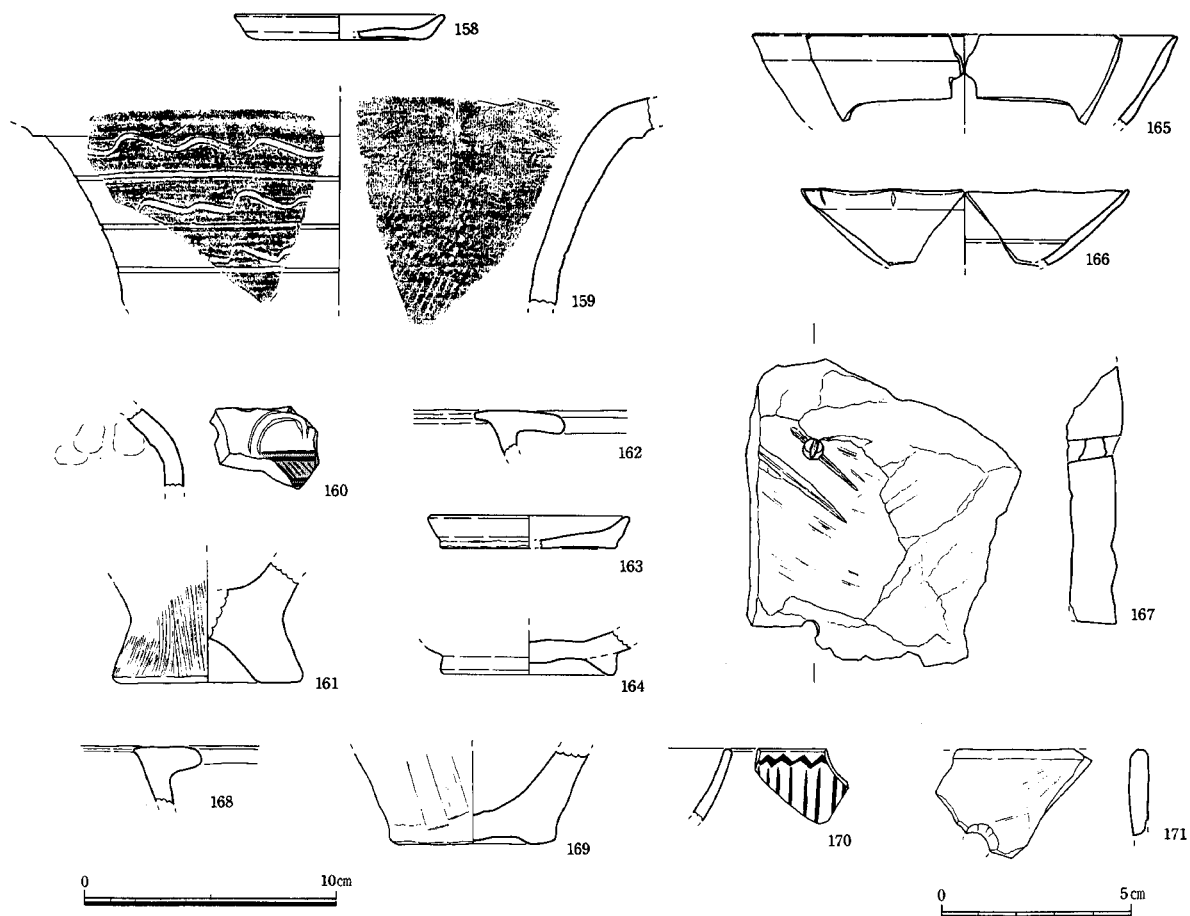
出土遺物(第61図159) 須恵器の甕の頸部で、口縁端部および胴部を欠失する。沈線で画された文様帯にはヘラ描きの波状文が施される。内外面共にヨコナデを加えるが、外面は格子目状、内面には木目直交の平行叩き目が残る。胎土には径1mm程度の白色砂粒が混じる。他に土師器片が少量出土している。

**SK0614** (第60図) M-28区に位置する。不整楕円形を呈し、長径2.15m、短径1.6m、深さ0.6mを測る。東側には狭い平坦部を有する。覆土はレンズ状に自然堆積する。出土遺物はない。

### (2) 溝

**SD0563** (第59図) K-29区から北側に延び、K-28区で、ほぼ直角に東側に折れる。M-28区まで延長するが、調査区外に延伸する。南北方向では段落ちに西側の肩を切られる。深さは南北部分で0.1m程度、東西部分では0.25mとやや深くなり、その幅は約0.4m、断面は「U」字形を呈する。覆土は茶褐色土を主体とし、黄褐色土ブロックが少量混じる。

出土遺物(第61図160～167) 160～162は弥生土器である。160は壺の肩部片で、外面にはヘラ状工具による重弧文とその下位に短い斜行文を施し、赤色顔料による彩文を加える。内面には指オサエが明瞭に残る。161・162は甕である。161は底部で、上げ底の裾部は大きく張り出す。外面には縦方向の刷毛目、内面にはナデを施す。162はやや外傾する「T」字状の口縁部片で、内外面にヨコナデ調整を行う。163は土師器の小皿である。復元口径7.8cm、器高1.3cmを測り、外底部は回転糸切りである。板状圧痕は認められない。調整は内底部をナデ、その他はヨコナデを施す。164は瓦器碗の底部で、断面台形状の低い高台を貼付する。内面はヘラ研磨、外面はヨコナデを行う。165は越州窯系の青磁



第61図 9区出土遺物実測図 (171は1/2、他は1/3)

碗で、口縁部には輪花を有する。内外面には発色の悪いオリーブ灰色の釉が施釉され、体部外面の上半には熔着物が認められる。復元口径は16.8cmである。166は白磁で、傾きの度合いから皿であろうか。外面にはへら状工具による短い劃線を施し、口縁部には輪花を有する。内面には段状の沈線が巡る。釉色はやや濁りのある白色で、外面下半は露胎となる。167は滑石製品である。図上での裏面には煤の付着や鑿による削痕が認められることから石鍋を転用したものと考えられる。円形孔が2個穿たれ、完存する一方には鉄芯が残る。

### (3) その他の遺物 (第61図168~171)

いずれも攪乱出土の遺物で、168・169は弥生土器である。168は口縁部片で、逆「L」字状を呈し、内唇部は僅かに張り出す。内外面にヨコナデを施す。169は底部で、外面は板状工具によるナデ、内面はナデを行う。170は青磁碗で、外面に細線蓮弁文を有する。蓮弁先端部は片彫りにより、山形状に尖る。灰白色の胎土ににぶい緑色の釉がかけられる。171は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石庖丁である。背部と紐の一部が遺存する。

### 3) 小 結

9区はその立地や遺構検出状況から集落の縁辺部に該当するものと考えられる。出土遺物が希少な上に、時期的なまとまりをみせないため、時期不詳であるが、SK0589やSD0563出土土師器は13世紀後半から14世紀前半の時期に該当するものである。SD0563は建物等を圍繞する溝であろうか。混入遺物であるが、弥生時代前期壺(160)やXI類白磁(166)、越州窯系青磁(165)には注目される。

## 5. 10区の調査

### 1) 概要

10区は本遺跡群の立地する低位段丘の北西部に位置する。遺構は表土、床土下の黄褐色土上面で検出した。遺構面は少量の礫が混じるものの、比較的安定した黄褐色土がひろがる。本調査区の西側では段落ちして、6・7区の礫混じりの黄褐色土層へと連なる。遺構面の標高は西端で31.4m、G区付近が最高所で31.6m、東端で31.3mとなる。G区付近に段丘中の微高地尾根が存在するものと思われ、その東西に緩い傾斜を有する。また、東北端のJ～M区には後述するSX1100の谷の落ち際を確認した。検出した主な遺構には弥生時代の竪穴住居・土坑・甕棺墓、古墳時代の竪穴住居、古代の土壇墓等がある。本調査区は切り土田面を調査対象とし、その調査面積は1178.56㎡である。

### 2) 遺構と遺物

#### (1) 竪穴住居

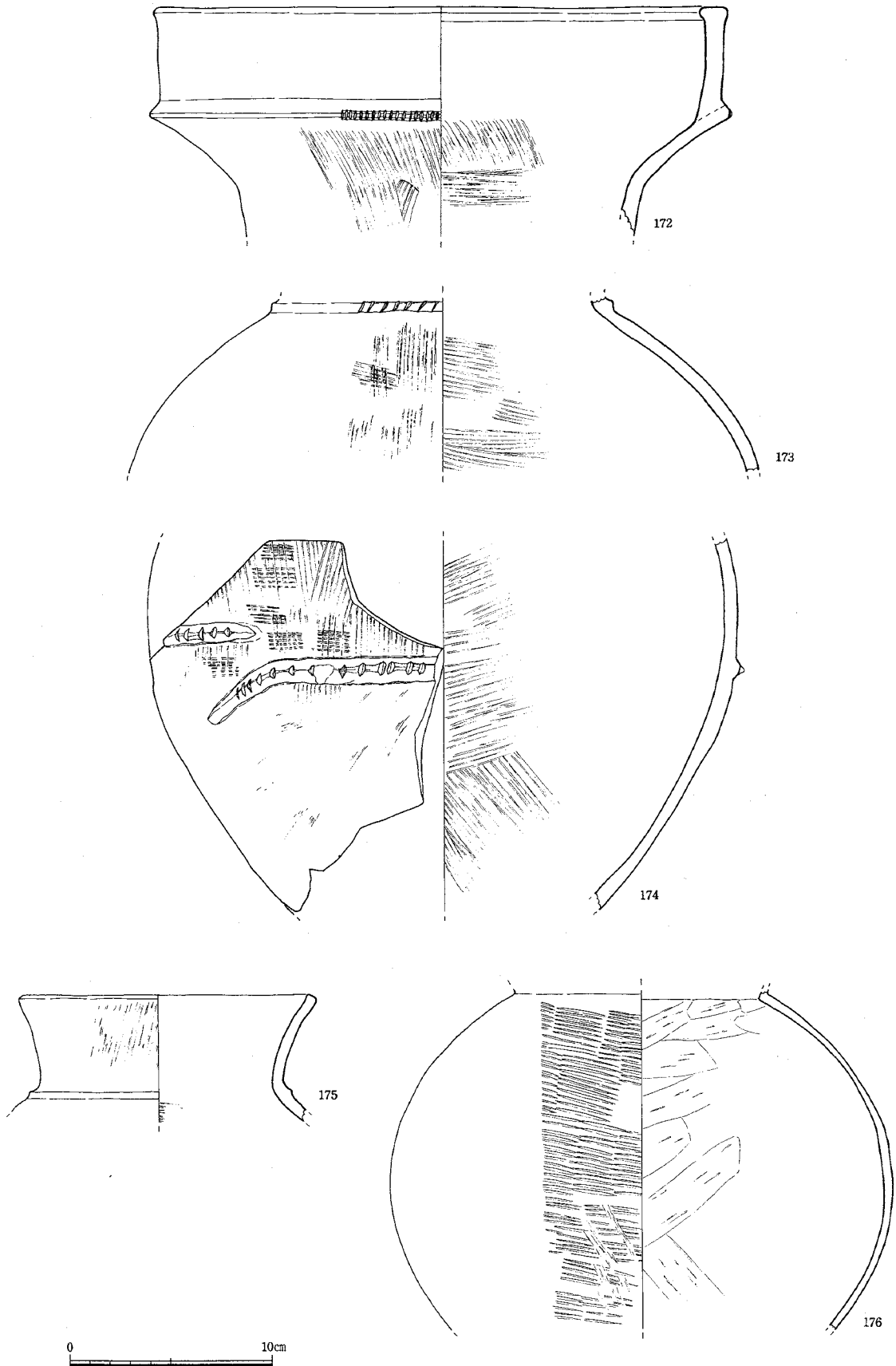
SC0701 (第62図) J-13区で検出した方形の竪穴住居である。南西コーナーは調査区外に位置する。南北の壁長7.3m、東西の壁長6.3mを測り、南北方向にやや長い長方形プランを呈する。壁は20～30cmが遺存する。東壁中央と西壁中央の屋内土坑(P6)部分を除いて、幅15～30cm、深さ5～10cmの壁溝が巡る。底面には暗茶褐色土を用いた厚さ5cm程度の貼床を行い、上面はよくしまる。更に、その貼床上に黄褐色土ブロック混じりの茶褐色土を貼って、南北の両壁面沿いに「コ」字形のベッド状遺構を対峙させ付設する。上端幅60～80cm、貼床面からの高さ約10cmを測り、貼床土に比してしまりはしない。南側ベッドの周囲には幅10～30cm、深さ5cm程度の浅い溝が断続して巡る。なお、平面図上の点線部分は覆土との識別がつかず、貼床面までベッドを掘下げた部分を復元したものである。また、ベッドおよび床面上で炭化材および焼土を確認したことから、本住居は焼失家屋であると考えられる。材は東南壁沿いに集中がみられる。炭化した建築材は一部に板材がみられるものの、大半は径10cm前後の丸材で、床面中央にむけてほぼ放射線状に並ぶことから、寄棟構造に葺かれた垂木材が遺存したものと考えられる。なお、支柱穴はベッドの内側コーナー部分で検出したP1～P4の4本柱と考えられ、径25～40cmの円形を呈する。床面からの深さは30～40cmを測る。床面のほぼ中央で確認した楕円形を呈するP5は炉と考えられるもので、深さ8cmを測り、炭化物が少量認められた。西壁中央に位置する半楕円形のP6は屋内土坑で、床面からの深さ30cmを測る。

出土遺物(第63図～第65図) 以下の記述では1・2層の上位出土を上層遺物、それ以下の炭化材出土レベルまでの出土を中層遺物、床面、ベッド面および炭化材下の出土遺物を下層遺物としている。172～175は壺である。172～174は在地系の複合口縁壺で、172・173は上層出土、174は下層で出土した。172は直立する口縁上部を有し、平坦な端部は内面に鈍く突出する。屈曲部にはヘラによる刻目が施される。口縁下部には刷毛目、上部にはヨコナデを施す。173は胴部の上半で、頸部との境に断面三角形の低い突帯を貼り付け、ヘラによる刻目を有する。突帯部をヨコナデする他は刷毛目調整である。174は胴部下半である。破片資料のため、全容は不明であるが、2条の突帯は高さの異なる位置に配され、下位の突帯は端部が下方に折れる。上位の突帯には棒状工具、下位にはヘラにより刻目が施されている。外面下半はヘラナデ、他は刷毛目を施すが、外面の上半には刷毛目に切られる横方向の叩き目が観察できる。175は上層出土で、頸部には低い突帯を貼付する。口縁部外面および胴部内面は刷毛目、他はナデもしくはヨコナデを加える。176～178は甕である。176は炭化材より数cm浮いた中層で出土した庄内系甕である。外面にはやや右下りもしくは水平に近い叩き目、内面にはヘラ

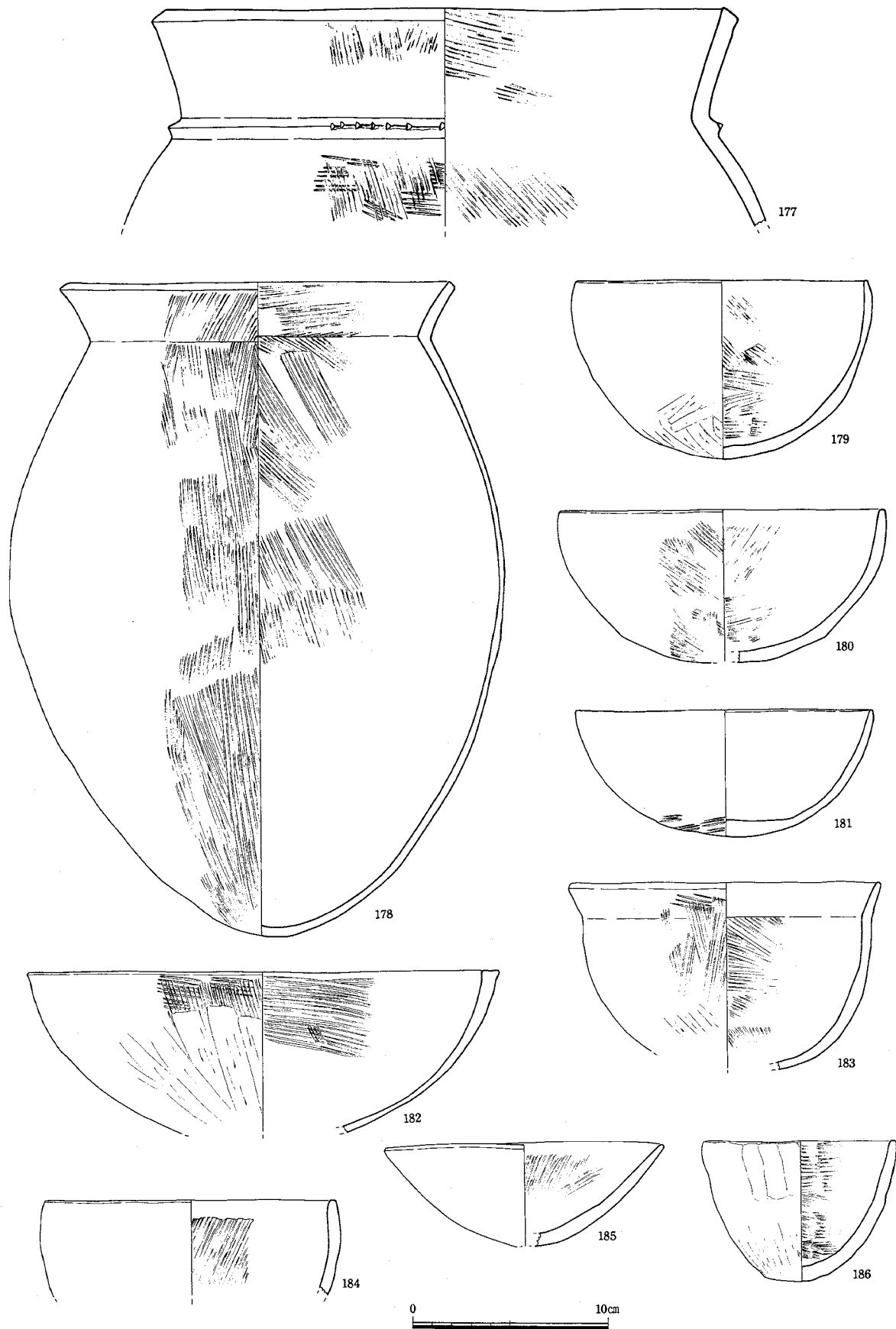


第62図 SC0701 実測図 (1/60)

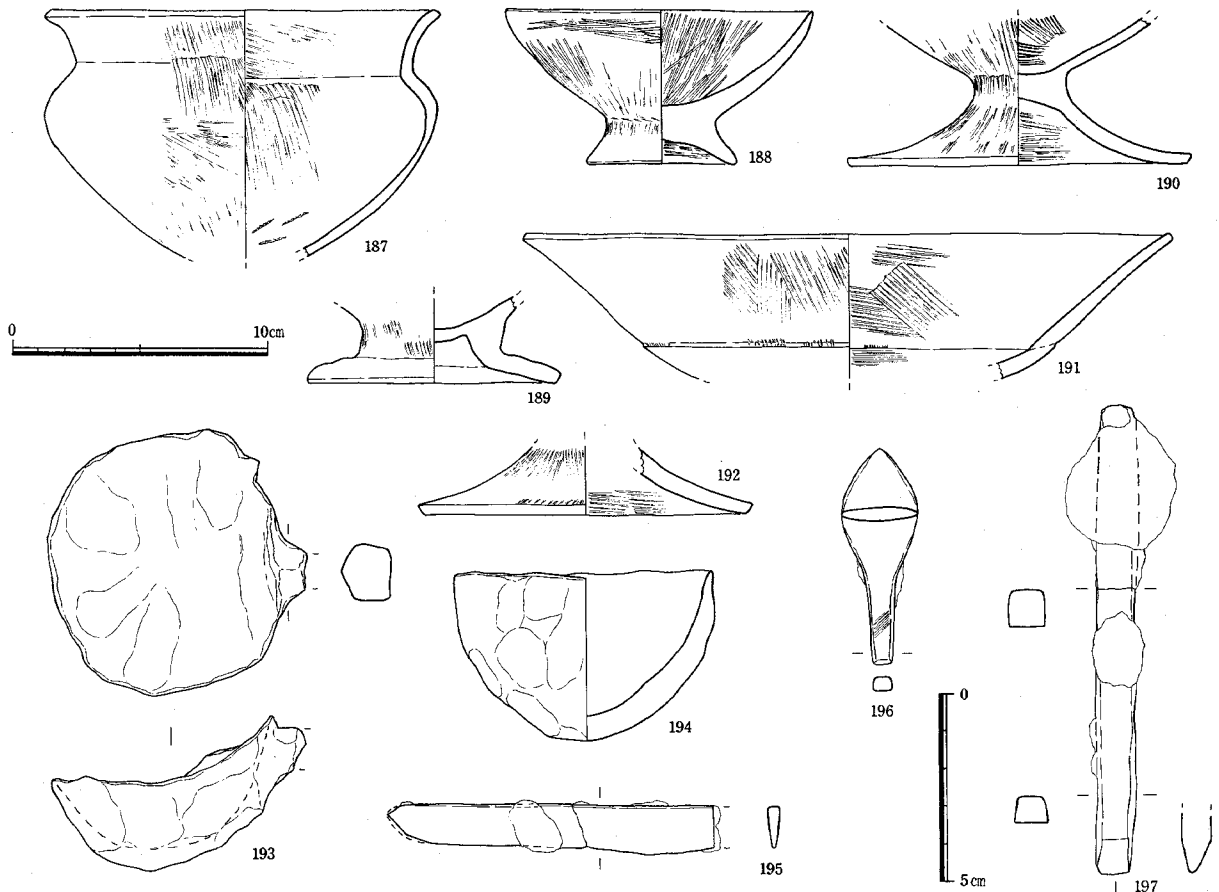




第63図 SC0701 出土遺物実測図 1 (1/3)

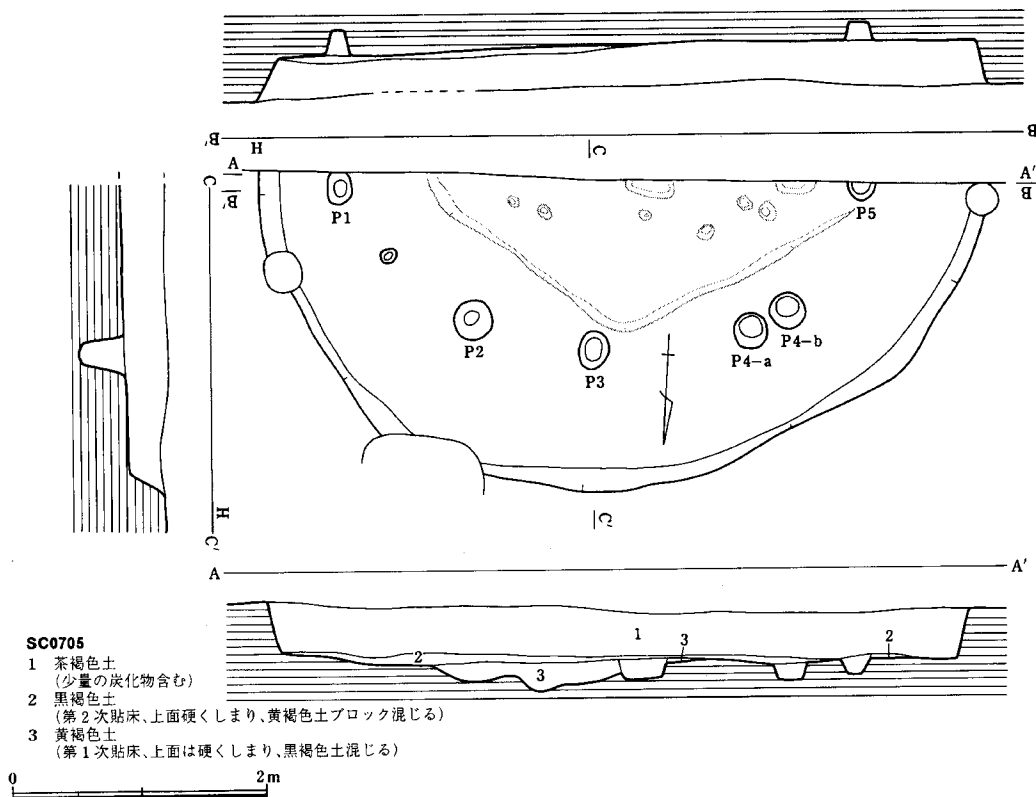


第64图 SC0701 出土遺物実測図 2 (1/3)



第65図 SC0701 出土遺物実測図3 (193~197は1/2、他は1/3)

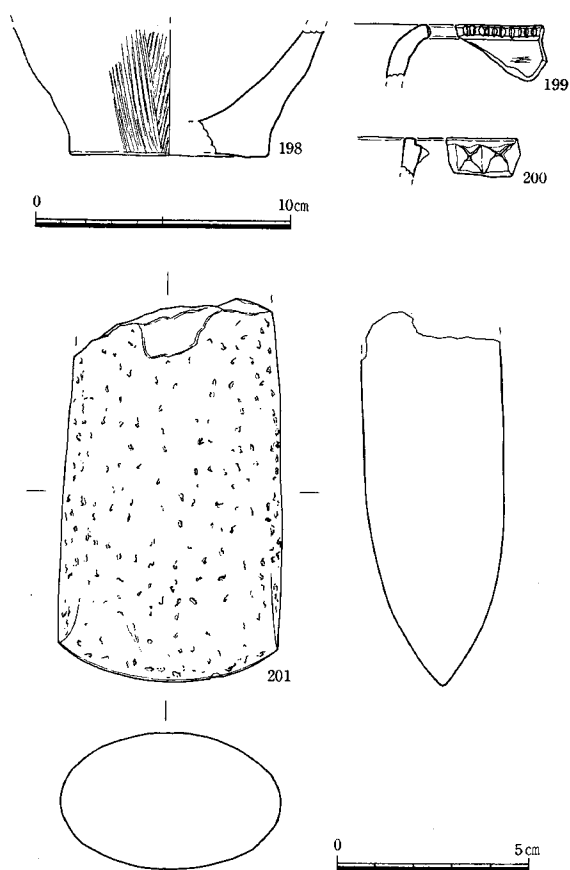
削りが施される。色調は暗黄褐色で、胎土には1~2mmの砂粒が多量に混じる。外面には煤の付着が一部認められる。177・178は在地系の「く」字形口縁を有する甕で、炭化材とほぼ同一レベルの中層で出土した。177の頸部には断面三角形の突帯が巡り、ヘラによる刻目が施される。内外面共に刷毛目調整を行うが、胴部外面には横方向の叩き目が残る。178は口径9.7cm、器高34.0cmを測る。内外面に刷毛目を施すが、内面下半はナデ消す。外面の下半には煤が付着する。179~187は鉢で、いずれも在地系のものである。179~181はやや深みのある器形で、丸底を呈する。口縁部は体部からそのまま立ち上がる。外面下半の調整は179はヘラ削り、180は粗い刷毛目、181は叩きである。いずれも中層出土である。182は口径に比して器高が浅いもので、外面下半はヘラ削り、外面の口縁下は叩きの後、刷毛目を加える。炭化材下の下層出土である。183は口縁部を緩く外反させる。体部の下半はヘラ削りで、口縁部外面には叩き目が残る。床面出土である。184は中層出土で、僅かに内湾する口縁部を有し、179と同様の器形になるものであろう。185は尖底気味の底部を有し、外面下半は磨滅がすすむが、ヘラ削りと思われる。床面で出土した。186は口径9.9cmを測る小形の鉢で、外面下半は粗いヘラ削り、上半は指ナデを施す。ベッド面出土である。187は上半で屈曲する胴部に外反する口縁部が付く。胴部下半はヘラ削り、他は刷毛目を施す。下層出土である。188・189は台付鉢で、188は精良な胎土を用いたもので、色調は赤褐色を呈する。内面および口縁部外面はヘラ研磨、外面下半にはヘラ削りと研磨を行う。ベッド面で出土した。189の裾部は内湾気味に開く。中層出土である。190~192は高坏である。190・192は低脚のもので、脚部は刷毛目調整を行う。191は坏部の上半



第66図 SC0705 実測図 (1/60)

で、口縁部が長く伸びる。190・191は中層、192は下層出土である。193・194は手捏ね製品で、193は杓子形土製品である。断面方形の柄部を欠失する。ベッド面出土である。194は鉢で、口径 6.9cm、器高 4.5cmを測る。P3柱穴から出土した。195～197は鉄製品で、いずれもベッド面で出土した。195は小形の刀子で、茎部を欠損する。身幅1.1～1.3cm、背厚0.3cmを測る。196は有茎柳葉形の鏃で、ほぼ完形である。長さ5.7cm、身幅2.0cmを測る。茎部には有機質の付着が認められる。197はほぼ完形の片刃の鏃である。長さ12.5cm、幅1.0cmを測る。基部に比して刃幅は僅かに狭い。断面は方形もしくは台形状を呈する。

SC0705 (第66図) H-13・14区で検出した円形竪穴住居で、南側は調査区外に伸びる。復元径は5.5mを測る。壁は高さ約40cmが遺存する。底面では2面の貼床(2・3層)が確認できた。共に上面は硬くしまる。3層の1次貼床は凹凸のある住居中央部分に貼られる。その面で掘り込み(平面網掛け図)を確認できたが、径、深さ共に10cm程度のものが大半であった。2層の2次貼床はほぼ全



第67図 SC0705 出土遺物実測図 (201は1/2、他は1/3)

面に薄く貼られ、その面では主柱穴と考えられるP1～P5を確認できた。壁面から40～70cm内側に巡る。径は20～30cmで、深さはP1・P5は15～20cm、P2～P3は40～50cmを測る。P4-a・bは規模が類似しており、柱建替えによるものであろうか。炉と考えられる掘り込みは調査区内では確認し得なかった。

出土遺物（第67図） 198～200は甕で、198・199は板付系のものである。198は底部で、外面には刷毛目、内面にはナデ調整を施す。199は口縁部片で、口唇部の全面にヘラ状工具による刻目を行う。調整は口縁部がヨコナデ、胴部内面が刷毛目である。200は突帯文系の甕で、口縁端部からやや下った位置に突帯を貼付し、棒状の工具による太い刻目を有する。201は輝緑玄武岩製の太型蛤刃石斧で、基部を欠失する。幅5.8cm、厚さ3.7cmを測る。他に黒曜石剥片が出土した。

## (2) 土坑

SK0706（第68図） F-13区で検出した。一辺1.6mを測るほぼ正方形を呈し、深さ0.25mを測る。断面は逆台形で、底面には円形もしくは楕円形の掘り込みを有する。

出土遺物（第69図202） 安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の大型の石庖丁である。基部、刃部、紐の一部が遺存する。両面から穿孔を施す。他に弥生土器の細片、黒曜石剥片が少量出土した。

SK0707（第68図） SK0706と同様のF-13区に位置する。不整な隅丸正方形で、一辺1.4～1.5mを測る。深さ0.3mを測り、底面はほぼ平坦である。茶褐色土を主体にレンズ状に堆積する。

出土遺物（第69図203・204） 203は甕の口縁部片で、口縁部上端に太めの突帯を貼付し、棒状工具による刻みを行う。外面は擦過、内面は板ナデを施す。204は壺であろう。外面は粗いヘラ研磨がみられる。内面は粗くナデる。

SK0708（第68図） F-14区で確認した楕円形の土坑である。長径2.15m、短径1.45m、深さ0.4mを測る。東側壁面のみ緩やかに立ち上がる。

出土遺物（第69図205・206） 205は黒色土器 A 類の椀である。高台端部は僅かに外方に張り出す。復元底径は8.8cmを測る。206は瓦器椀で、断面方形の高台を付す。内面には粗いヘラ研磨を加える。他に鉄滓1点、黒曜石剥片等が出土している。

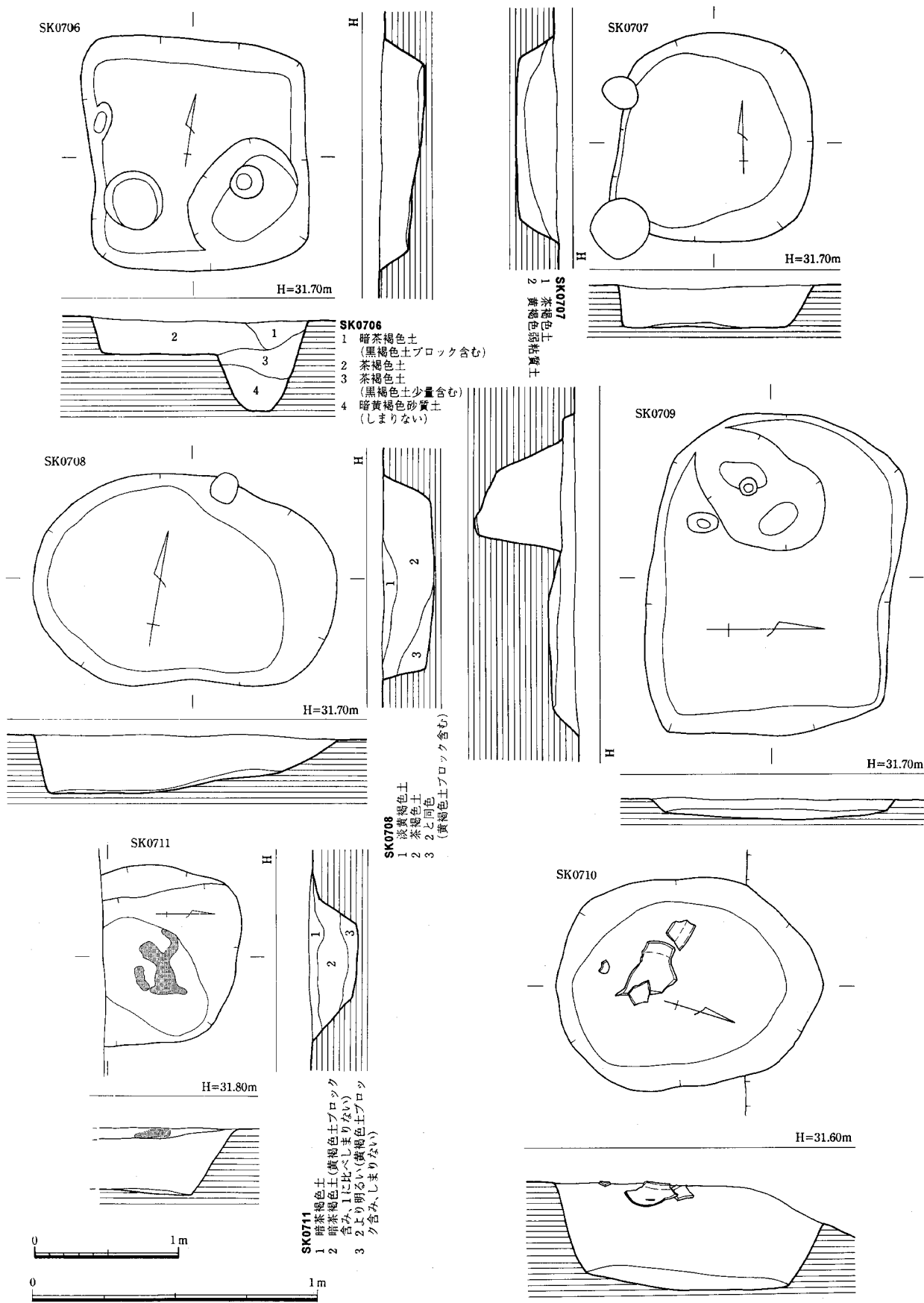
SK0709（第68図） F-13区に位置する。隅丸長方形を呈し、長さ2.3m、幅1.7m、深さ0.15mを測る。西側には深さ0.6mの掘り込みを有する。

出土遺物（第69図207～209） 207は復元口径 35.0cmを測る滑石製石鍋である。外面には鑿による削り、内面には研磨を施す。208は砂岩製砥石で、一方の端部を欠失する。4面を砥面として利用する。209は復元口径 17.0cmを測る越州窯系青磁碗である。口縁部を輪花にし、その下位にヘラ描きの劃線を有する。暗灰色の密な胎土に黄緑色の釉が施される。他にヘラ切りの土師器坏・椀の細片、黒曜石が出土している。

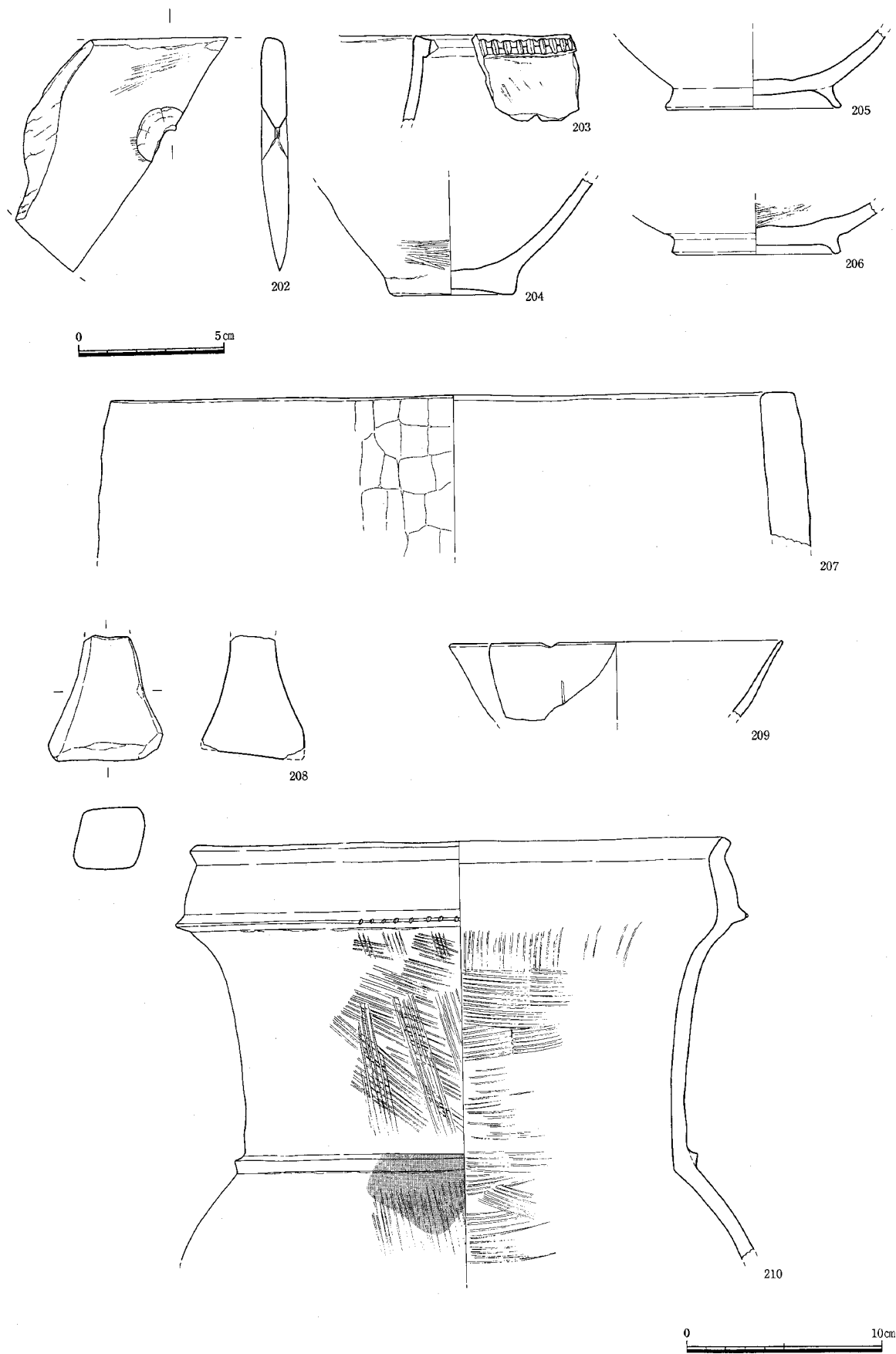
SK0710（第68図） H-12区で検出した。楕円形を呈し、長径0.95m、短径0.75m、深さ0.35mを測り、底面は北側に向かって緩い傾斜を有する。覆土は茶褐色土を主体とする。

出土遺物（第69図210） 複合口縁壺で、上層から出土した。口縁上部は内傾して立ち上がり、端部を外反させる。口縁屈曲部には断面三角形の突帯を貼付し、ヘラによる細かい刻目を施す。また、胴部と頸部の境にも突帯を付し、赤色顔料が認められる。口縁上部の内外面および頸部突帯はヨコナデ、他は刷毛目調整を行う。復元口径は36.8cmを測る。他に同一個体と考えられる口縁部が出土しているが、接合面をもたない。

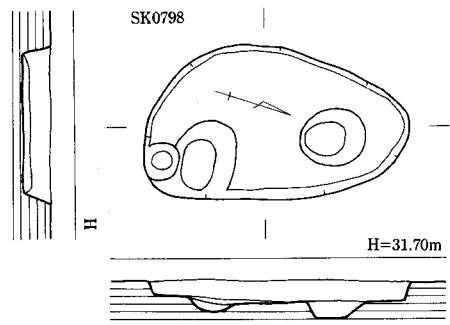
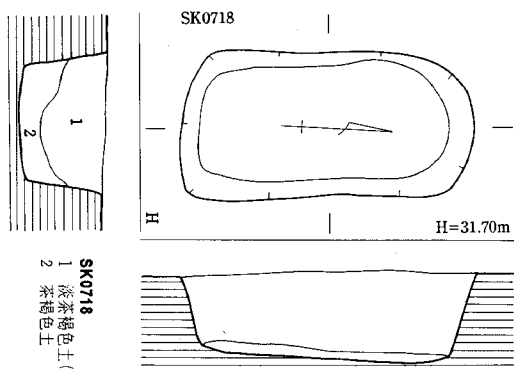
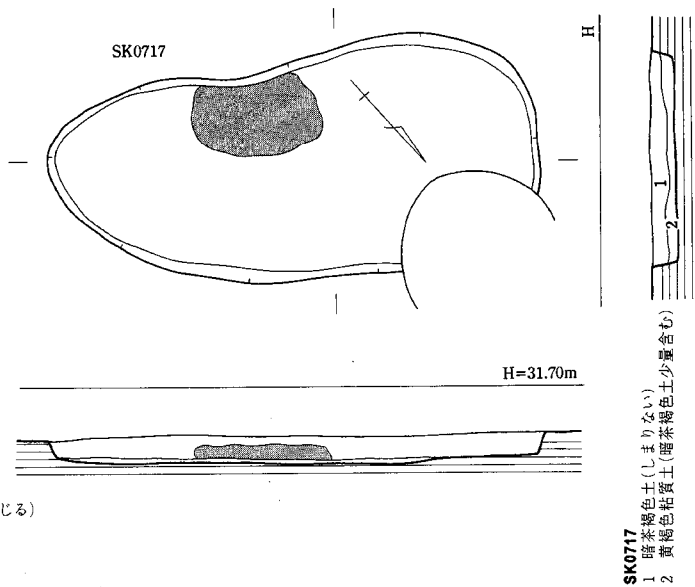
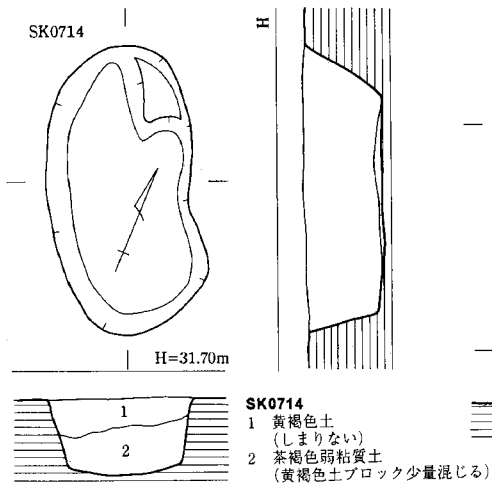
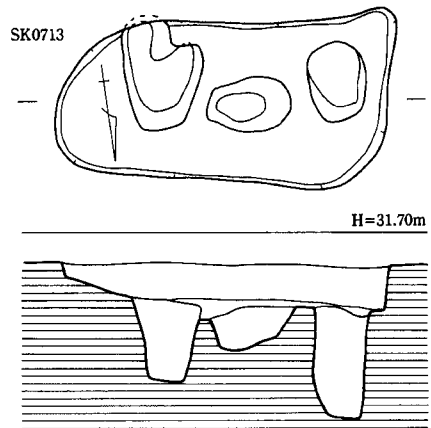
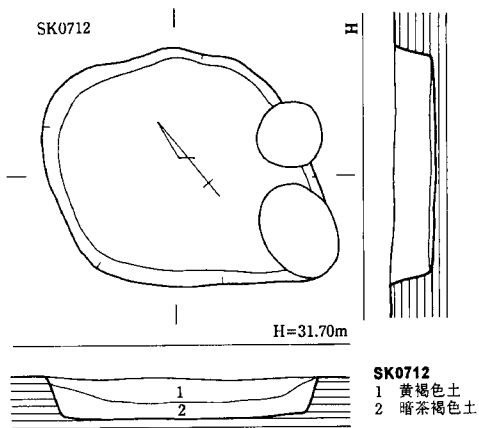
SK0711（第68図） F-14区に位置する。遺構の南半部は調査区外に延びる。現存の幅は1.25m、深さ0.45mを測る。上層の中央部では焼土、炭化物がみられ、その周囲はかたくしまる。弥生土器の



第68図 SK0706・0707・0708・0709・0710・0711 実測図 (SK0710は1/20、他は1/40)



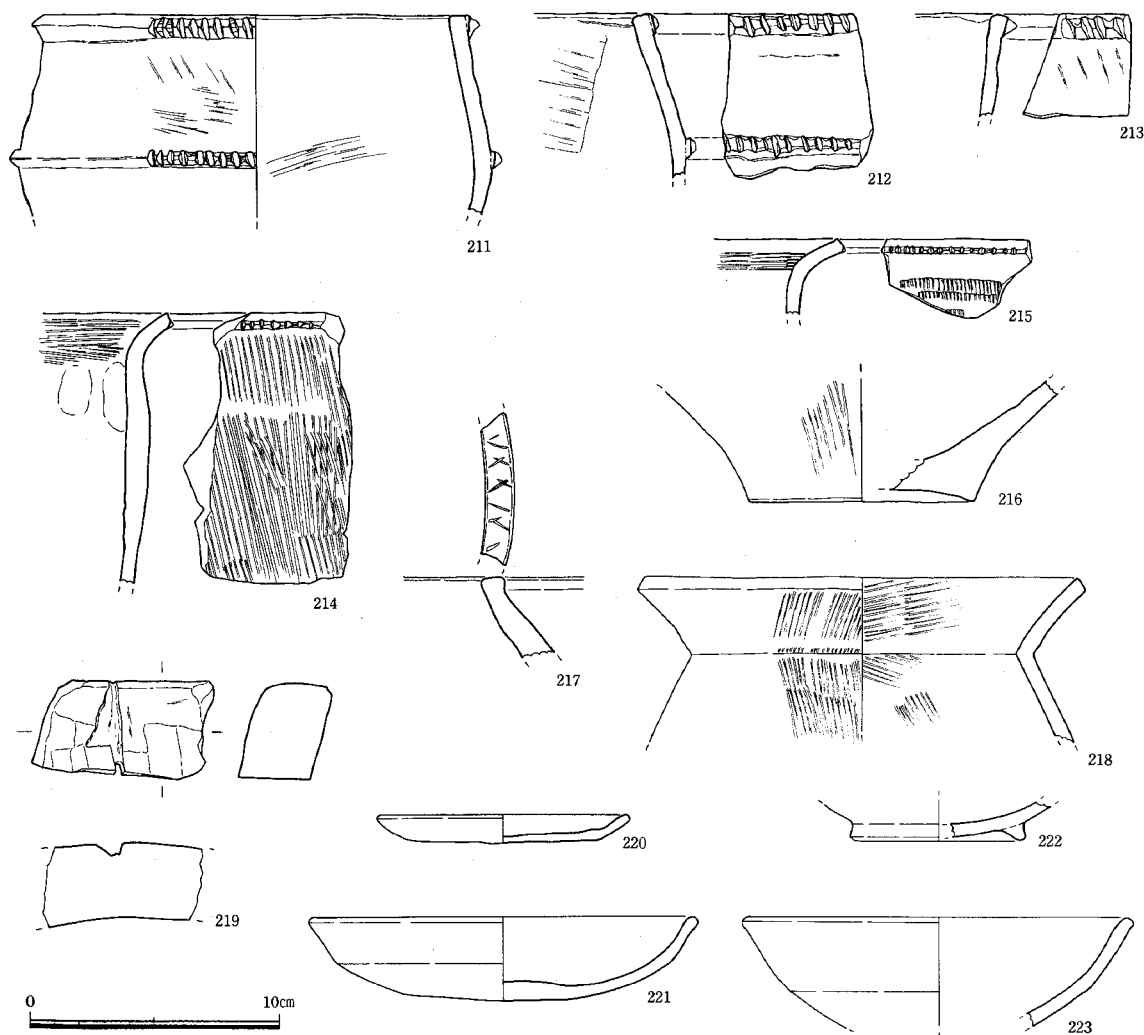
第69図 SK0706・0707・0708・0709・0710 出土遺物実測図 (202は1/2、他は1/3)



0 1m

第70図 SK0712・0713・0714・0717・0718・0798 実測図 (1/40)





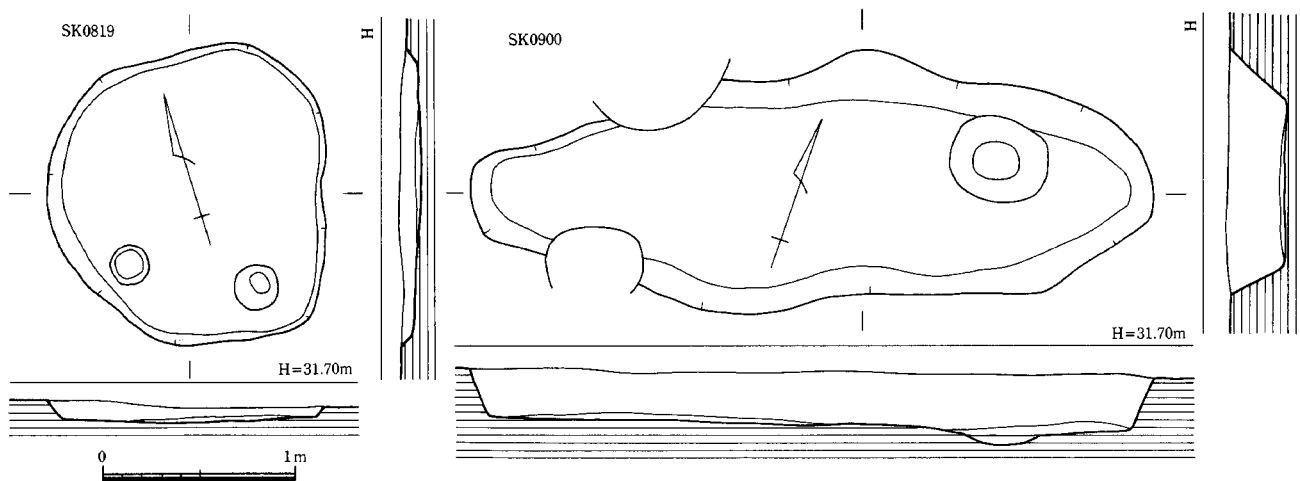
第71図 SK0713・0717・0798・0819 出土遺物実測図 (1/3)

細片、黒曜石が少量出土した。

SK0712 (第70図) I-13区で検出した不整形の土坑で、長さ1.4m、幅1.25mを測る。深さは0.2mで、平坦な底面を有する。弥生土器と考えられる細片が1点出土した。

SK0713 (第70図) H-13区に位置する。不整な方形を呈し、長さ1.75m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。底面には深さ0.3～0.6mの掘り込みが認められた。覆土は茶褐色土を呈する。

出土遺物 (第71図211～216) 211～215は甕で、211～213は突帯文系のものである。211・212は肩部で屈曲し、その屈曲部および口縁部端部に太めの突帯を貼付する。211は板状工具により深い刻目を施す。外面は器面の剥落がすすみ、調整は不明瞭であるが、条痕もしくは擦過風のナデが残る。内面は板ナデである。212も板状工具による刻みが施される。口縁部に比して屈曲部の刻目はやや浅い。調整は211に同じである。213は口縁部のみに突帯を付すもので、同様に板状工具により深い刻目が施される。外面は植物繊維状の擦過が認められ、内面はナデを行う。214・215は如意形口縁を呈する板付系の甕である。214は口縁部下端にへラ状工具により押し引き風の刻目をいれる。外面および口縁部内面は刷毛目、胴部内面には指オサエが残る。215は木口により浅い刻目を214と同様に口縁部



第72図 SK0819・0900 実測図 (1/40)

下端に施す。外面は刷毛目、ヨコナデ、内面は口縁部が刷毛目後ヨコナデ、胴部はナデを行う。内面の口縁部と胴部との境界には稜を有する。216は鉢と考えられる底部である。外面は刷毛目後ナデ、内面はナデ調整である。僅かに上げ底となる。

**SK0714** (第70図) I-13区で検出した楕円形の土坑である。長径1.5m、短径0.75m、深さ0.4mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。弥生土器と考えられる細片が数点出土している。

**SK0717** (第70図) K-13区に位置する。不整な長楕円形プランを有し、長径2.6m、短径1.25mを測り、深さは0.15mと浅い。底面の中央北側には厚さ7~8cmの焼土がひろがるが、壁面に焼けた痕跡は認められない。

出土遺物(第71図217・218) 217は複合口縁壺の口縁上部と考えられるもので、平坦な端部上面にはヘラ状工具により「×」字が刻まれる。218は「く」字状の口縁部を有する甕で、内外面共に刷毛目を施す。復元口径は17.2cmを測る。他に叩きの後刷毛目を施した、甕の細片が2点出土している。

**SK0718** (第70図) K-13区で確認したやや不整な隅丸長方形の土坑で、長さ1.55m、幅0.75m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形で、底面は北側への緩やかな傾斜がみられる。出土遺物はなかった。

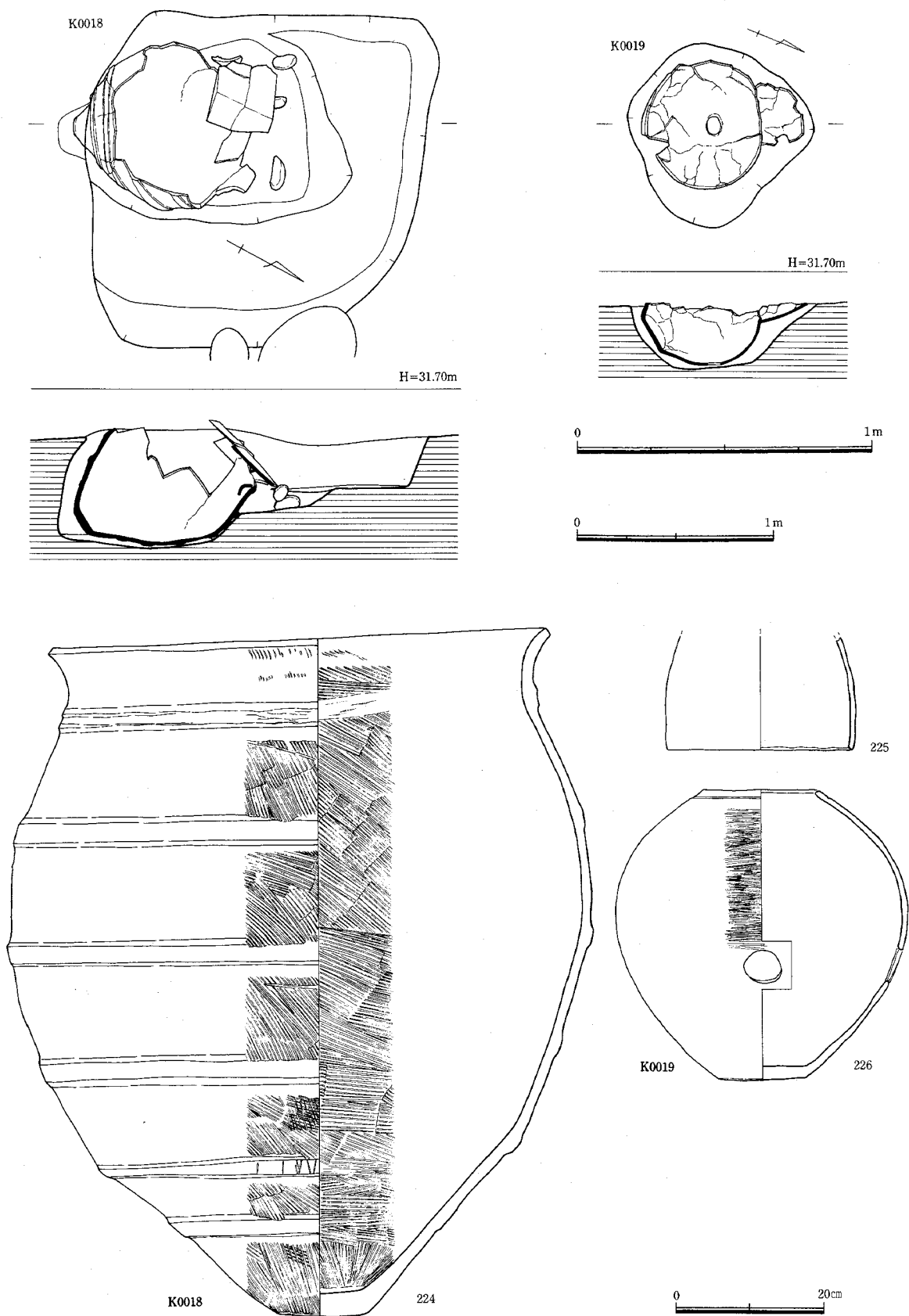
**SK0798** (第70図) F-13区に位置する土坑で、やや不整な楕円形を呈する。長径73m、短径0.8m、深さ0.15mを測る。底面には浅い掘り込みが認められた。

出土遺物(第71図219) 滑石製石鍋の口縁部を再利用したもので、図の上面が石鍋の外面である。側面には鋸引きの痕跡が認められ、上面および側面にかけて幅・深さ共に0.5cm前後の溝を有する。有溝石錘の未製品であろうか。他に土師器小皿の細片が少量出土している。

**SK0819** (第72図) G-13区で検出した。不整な円形を呈し、径1.4~1.5m、深さ0.1mを測る。底面北側では円形のピット状の掘り込みを2個確認した。

出土遺物(第71図220~223) 220は土師器坏である。復元口径9.8cm、器高1.2cmを測り、外底部は回転ヘラ切りである。221は土師器の丸底坏で、復元口径15.2cm、器高3.4cmを測る。内外面ともに器面の磨滅がすすむため、調整は不明である。222・223は瓦器椀である。222断面台形の低い高台を貼付する。内面にヘラ研磨を施す。223は器面が風化する。復元口径は15.0cmである。

**SK0900** (第72図) I-13区で確認した長楕円形の土坑である。長径3.6m、短径1.3m、深さ0.3mを測る。断面は逆台形を呈し、ほぼ平坦な底面東側には径0.5mの浅い掘り込みを有する。土師器および瓦器の細片が各1点出土している。



第73図 K0018・0019 実測図 (K0018は1/30、K0019は1/20) および K0018・0019 出土遺物実測図 (1/8)

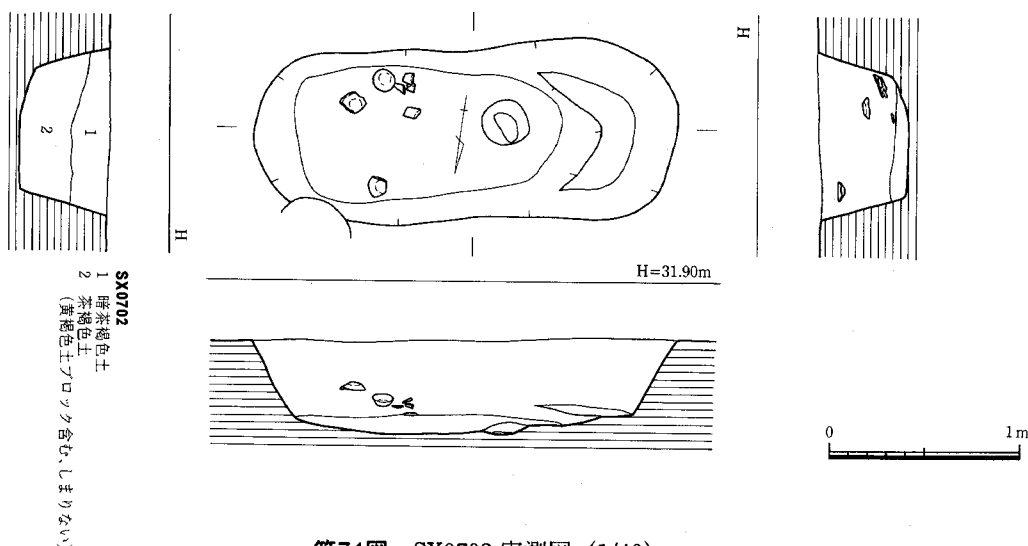
(3) 甕棺墓

**K0018 (第73図)** 調査区西端のE-13区で確認した石蓋単棺の甕棺墓である。1辺約1.6mを測る不整な正方形の竪坑南西寄りに斜坑を掘削し、甕棺を据える。最大厚約3cmで、断面は偏平な菱形を呈する石を蓋として利用する。また、斜坑の平坦面には石蓋を支持するための拳大の小礫を据える。

なお、墓壇の上半は削平を受け、甕棺および石蓋の一部は欠失する。甕棺の主軸方位はN-28°-W、埋置角度は32°を測る。

**出土遺物 (第73図 224)** 口径66.6cm、器高93.3cm、底径11.4cmを測る。凸レンズ状の底部を有し、胴部へはほぼ直線的に移行する。丸味のある卵形の胴部に外反する短い口縁部が付き、頸部から胴部には断面台形の低い突帯を6条貼付する。上から5条目の突帯にはヘラ状工具による施文が一部にみられる。外面の調整は上から1条目の突帯下位までヨコナデで、口縁部には下地の刷毛目調整が残る。突帯間は縦あるいは斜方向の刷毛目である。2条目以下の突帯上端部は上位の刷毛目調整が及ぶため稜線が鈍くなる。内面は刷毛目調整を行う。底部は放射状に、胴部下半は横方向を主体とし、上半は斜方向となる。口縁部には一部ヨコナデを加える。その口縁部内面には黒色顔料が部分的に遺存している。色調は赤褐色を呈し、胎土には細かい砂粒が少量混じる。

**K0019 (第73図)** F-13区で検出した覆口式の甕棺墓で、上甕には鉢、下甕には壺を用い、共に口縁部を打ち欠いている。墓壇は削平により、径0.6mの不整円形プランが遺存する。また、甕棺の欠損も著しく、とくに上甕は遺存状況が悪い。なお、下甕の墓壇底面接地部分には穿孔が施される。

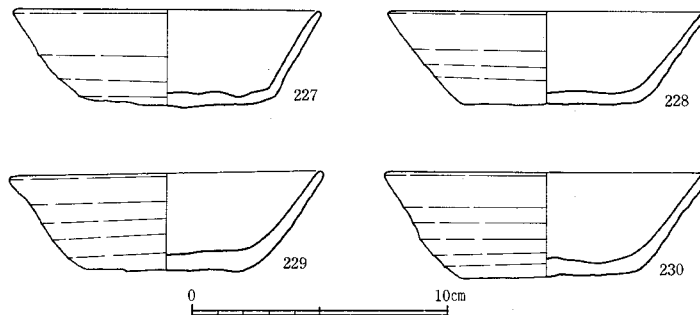


第74図 SX0702 実測図 (1/40)

甕棺の主軸方位はN-22°-Wで、埋置角度は27°である。

**出土遺物 (第73図 225・226)**

225は上甕に用いられた鉢で、口縁部を打ち欠く。体部下半は削平により欠失する。器面の風化がすすむが、胴部にはヘラナデが認められる。226は下甕の壺で、頸部



第75図 SX0702 出土遺物実測図 (1/3)

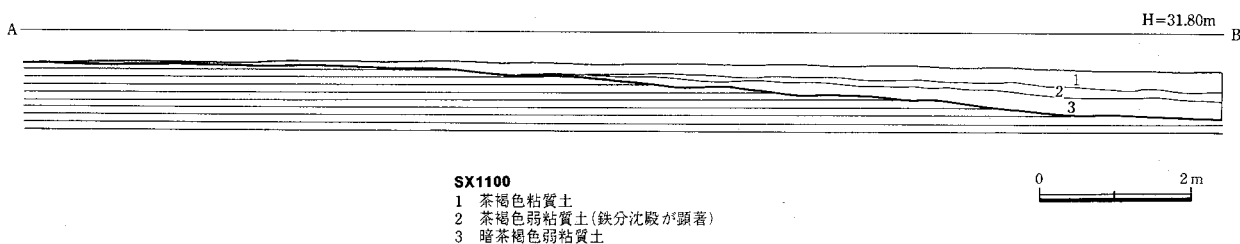
上位を打ち欠く。胴部と頸部の境にはヘラ描きの沈線が1条施される。また、胴部の下半には不整形形を呈する内面からの穿孔を有する。外面胴部上半は横方向のヘラ研磨、下半は丁寧なナデである。上半部に認められる黒斑部分では下地調整の細かい刷毛目が観察できる。残存器高は39.6cmである。内面は一部にナデが残る程度で、大半は器面の風化により不明瞭である。

(4) その他の遺構と遺物

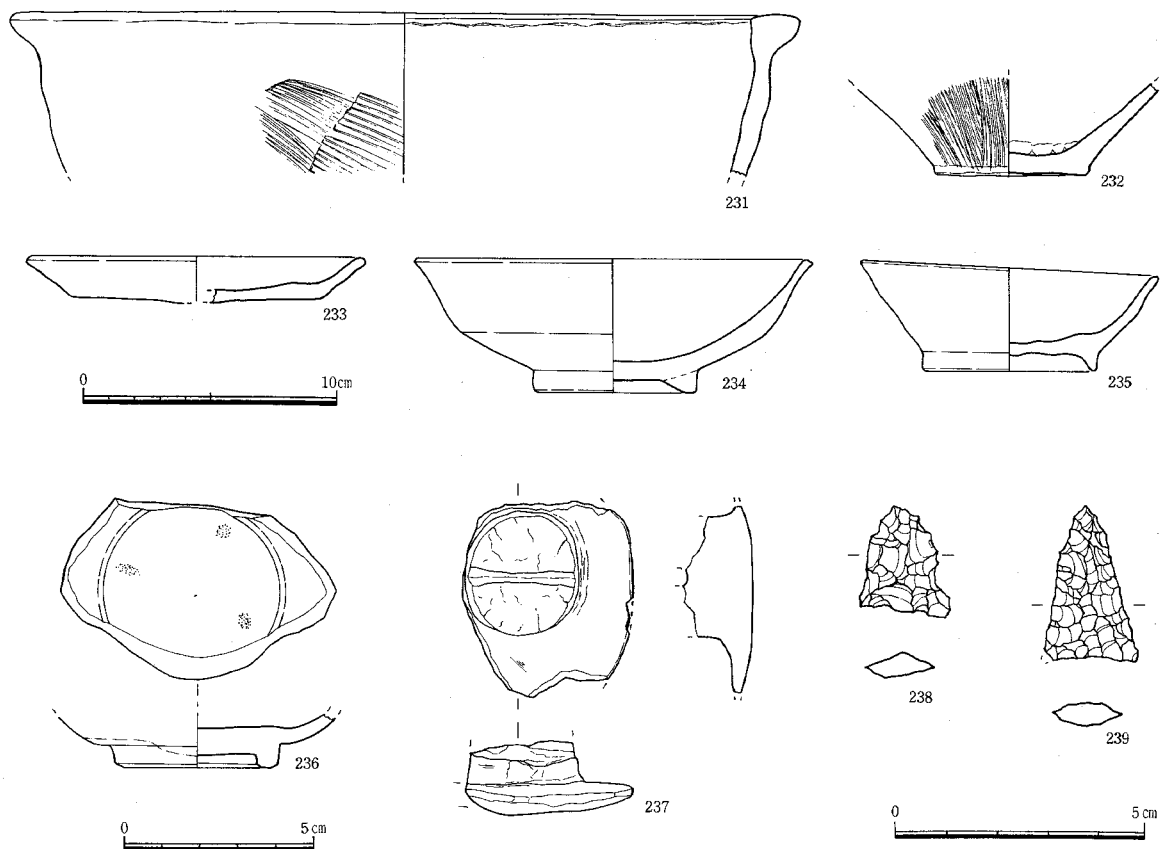
本項ではここまで触れられなかった遺構とピットおよび検出面出土の遺物について述べる。

**SX0702 (第74図)** 土壌墓と考えられる遺構で、H-13区に位置する。隅丸長方形のプランで、長さ2.25m、幅0.95m、深さ0.5mを測る。西側には狭い平坦部が認められた。図化した土師器4点は南北の壁面沿いの浮いたレベルで出土している。出土時に完形を保つものは1点であったが、他の3点も接合により、完形にちかく復元できた。その出土状況から木蓋上に供献されていた遺物が蓋の腐食等に伴い壙内に転落したものであろうと推測される。

出土遺物 (第75図227~230) いずれも土師器坏で、外底部は回転ヘラ切りの未調整である。口径



第76図 SX1100 土層実測図 (1/100)



第77図 ピット・検出面出土遺物実測図 (237は1/2、238・239は2/3、他は1/3)

は 12.0～12.4cmで、平均は12.3cm、器高は3.7～4.2cmで、平均は4.0cmである。いずれも内外面共にヨコナデを施す。色調は赤橙色を主体とする。

SX1100 (付図・第76図) J～M区の北側部分で確認した谷部で、茶褐色土を主体に埋没する。東西2本のトレンチを設定した。土層図は西側トレンチの西壁のものである。検出面である黄褐色土は南西から北東方向に向かって緩く傾斜し、2・3層の堆積が始まる箇所に落ち込みが認められる。北東端では深さ0.6mとなる。覆土中からは弥生時代中期の土器細片が出土した。トレンチ内ではピット状の掘り込みを2基確認し、1基より弥生土器と考えられる高坏片1点が出土した。なお、本調査区での田面切り土がこれら遺構に及ばないことから以上のトレンチ調査にとどめた。

その他の遺物(第77図) 先述したようにピットおよび検出面出土遺物についてとりまとめて報告する。231・236・237・239は検出面出土、他はピット出土の遺物である。231・232は弥生土器鉢もしくは甕である。174の口縁部は断面が鈍い三角形を呈する。胴部外面は斜方向の刷毛目、口縁部はヨコナデし、内面はナデを行う。復元口径は29.4cmである。232は底部で、外面は刷毛目、内面はナデ、底部には指オサエが残る。233は須恵器の皿である。復元口径13.0cm、器高1.8cmを測り、外底部は回転ヘラ切りの未調整である。234・235は土師器碗である。234は体部の中位で鈍い稜をもって屈曲し、底部には断面三角形の低い高台を貼付する。復元口径は15.4cm、器高5.3cmを測る。器面の磨滅が著しく調整は不明である。345は断面台形のやや高い高台を有し、体部は直線的に延びる。外底部は回転ヘラ切り未調整で、他はヨコナデ調整を行う。口径11.7cm、器高6.7cmを測る。236は龍泉窯系青磁碗で、圏線を有する見込みには目跡が残る。外面の高台一部にまで淡黄緑色の釉が施される。237は滑石製品で、凸面の底部に穿孔を有する径3.0～3.5cmの円形つまみがつくが、上半部は欠失する。238・239は黒曜石製の石鏃である。181は完形で、長さ2.2cm、幅1.8cm、重量1.61gを測る。239は基端を僅かに欠失する。長さ3.1cm、幅1.8cm、重量1.80gを測る。

### 3) 小 結

本調査区で確認された遺構は弥生時代前期(I期)、弥生時代終末～古墳時代初頭(II期)、古代後半～中世前半(III期)に大別される。

I期に属する遺構としてSC0705、SK0707・0713、K0019が挙げられる。SC0705出土の如意形口縁の甕は口唇部全面に刻みを行うことから板付I式併行の可能性を有する。また、SK0713出土甕は口縁部下端のみに刻目を有することや、突帯文土器との共伴から板付II古段階併行に位置付けられよう。K0019は1基が単独で存在し、壺の形態から板付II式新段階の所産である。なお、この段階以前のまとまった墓域は本報告の6区で検出されている。II期に該当する遺構にはSC0701、SK0710・0717、K0019がある。SC0701出土遺物は大半が在地系土器で占められるものの、庄内系甕(176)を含んでいる。なお、176はいわゆる大和型庄内甕であるが、奥田尚氏により在地系の胎土との分析を頂いている。該期の早良平野内における竪穴住居は2本柱が主体を占め、4本柱は本例および本調査区の北東約250mに位置する岩本遺跡で1軒(2次SC0505:布留式古段階)が確認されているに過ぎない。176の体部は球形に近く、同遺跡と同時期か若干古い段階に位置付けられよう。K0019は橋口編年のKVd式に該当するもので、底部は丸底化へは至っておらず、SC0701より古い段階の所産である。III期にはSK0708・0709・0798・0819・0900、SX0702が該当する。SK0708は黒色土器A類と瓦器の共伴から11世紀後半頃、SK0819は土師器法量から12世紀前半、SX0702は同様に土師器法量から9世紀前半と考えられる。いずれも単発的で、該期の集落主体は遺構密度から本調査区東側の第2次11～13区にあるものと考えられる。

# 図 版



第1次調査作業風景

第 1 次 調 査

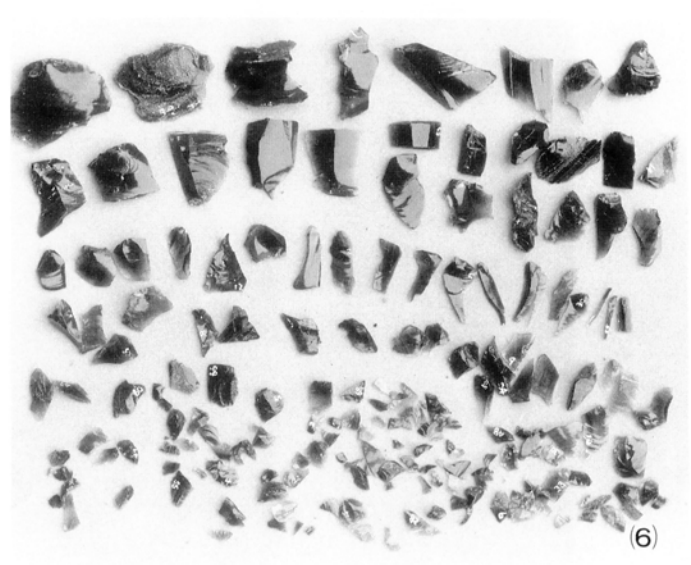
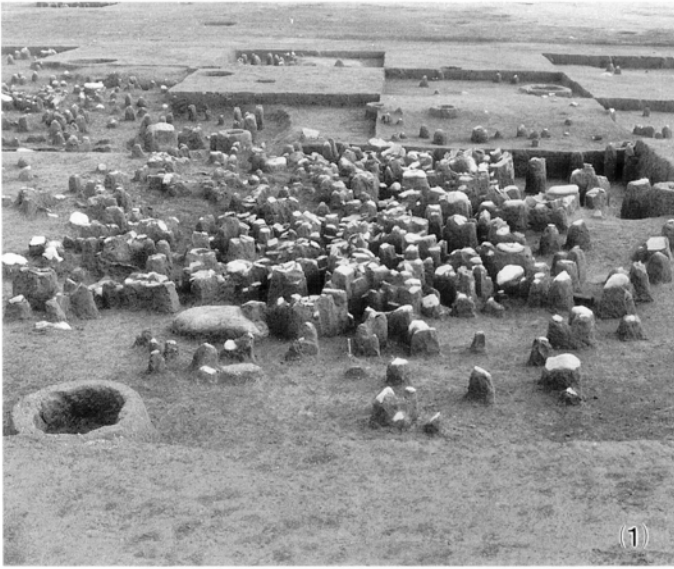


(1) IV区包含層調査区（北西から）

(2) SC250（東から）



第 1 次 調 査



(1) SC250 遺物出土状況 (北から)

(3) SC250 石組 (北東から)

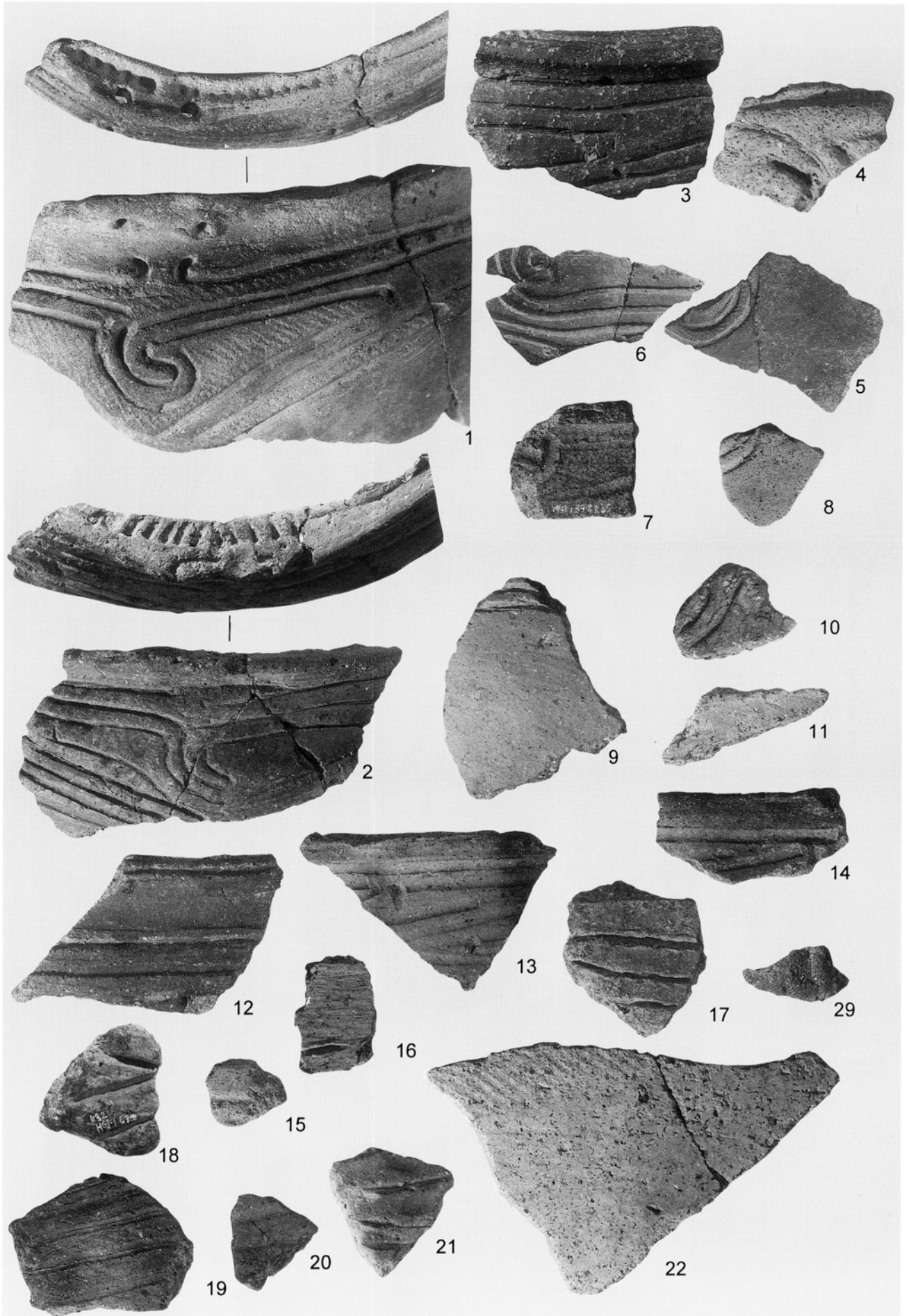
(5) E-8-3 区遺物出土状況

(2) SC250 遺物出土状況

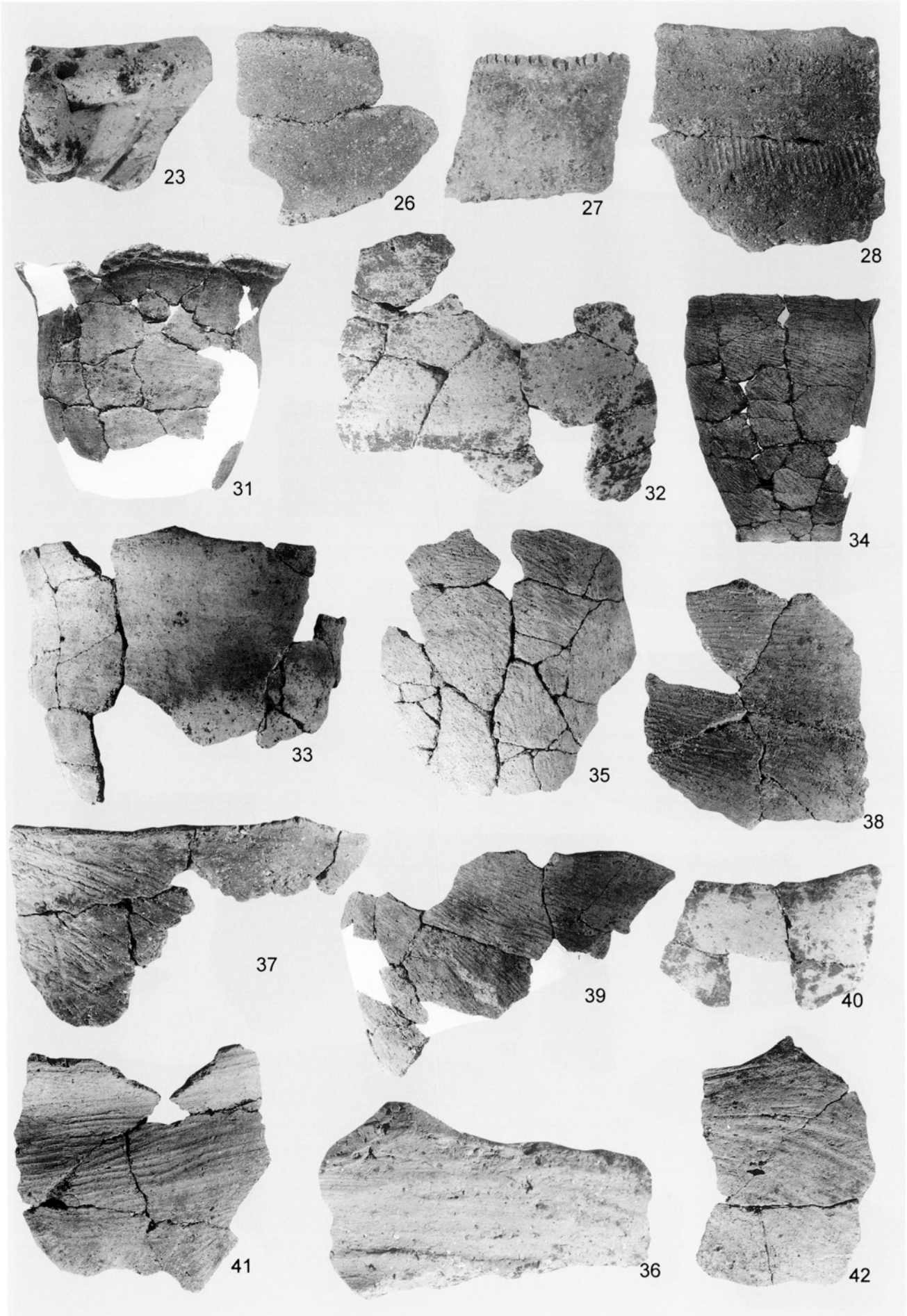
(4) SC250 遺物出土状況 (北から)

(6) E-8-3 出土遺物

第 1 次 調 査

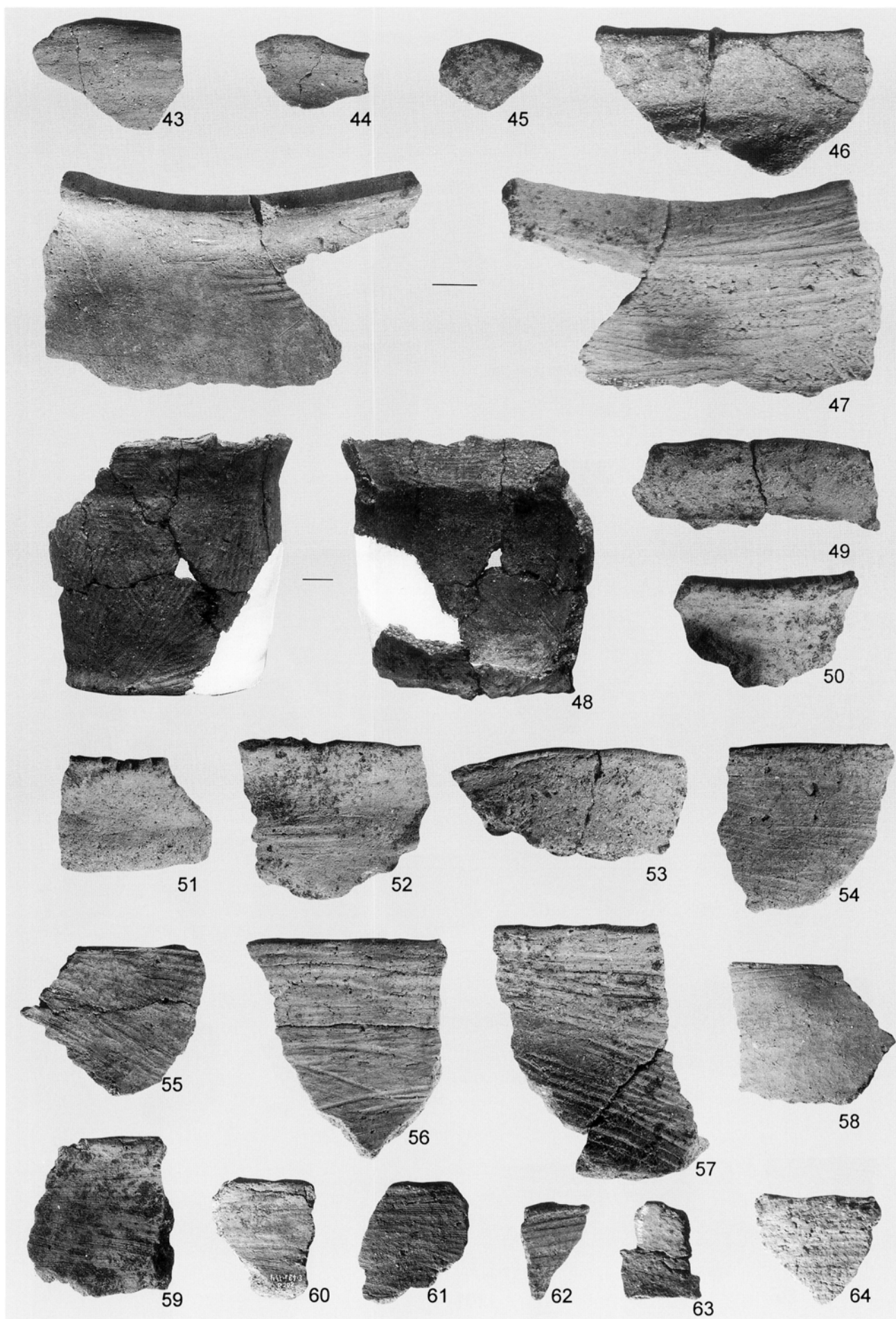


出土遺物 1

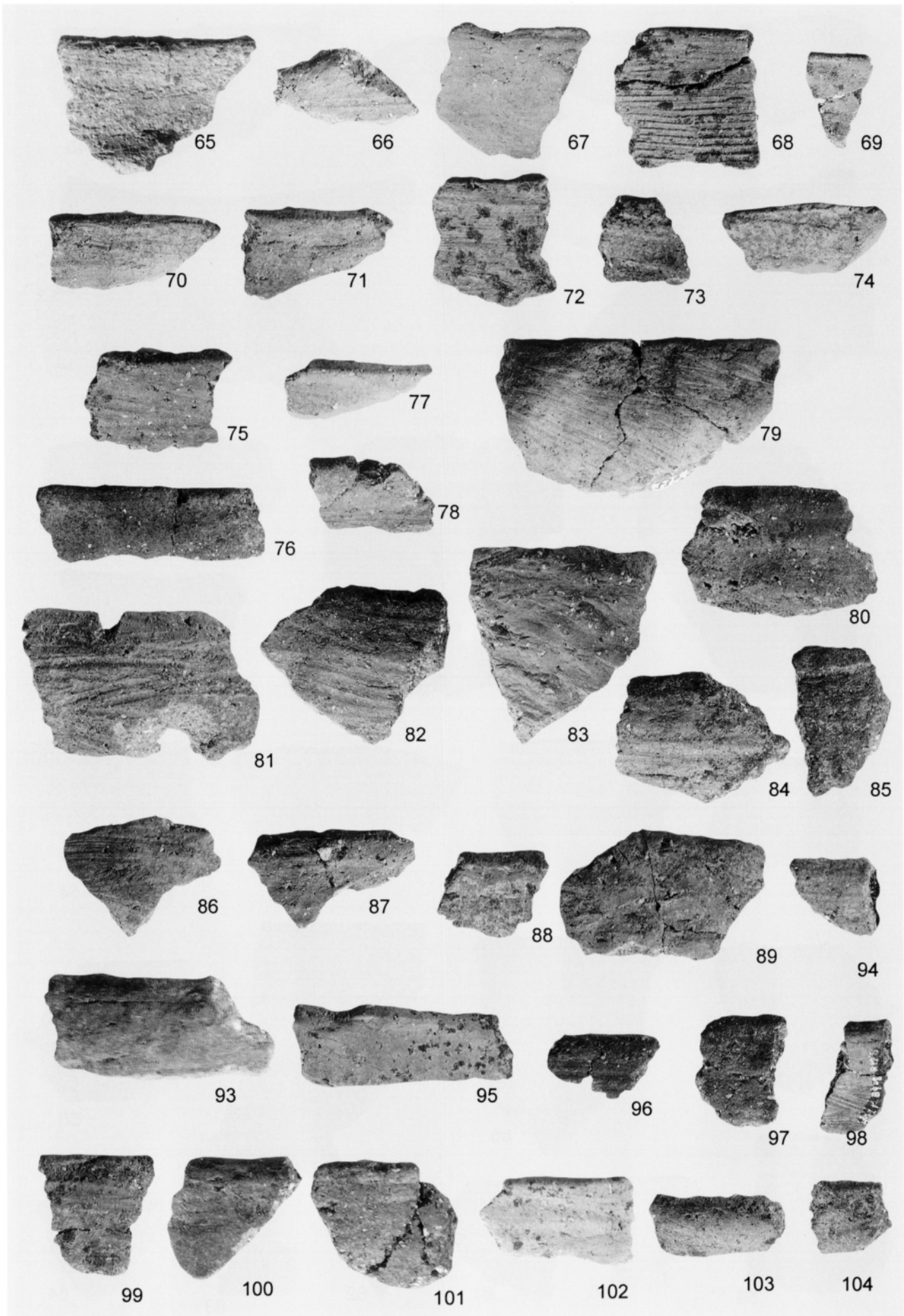




第 1 次 調 査

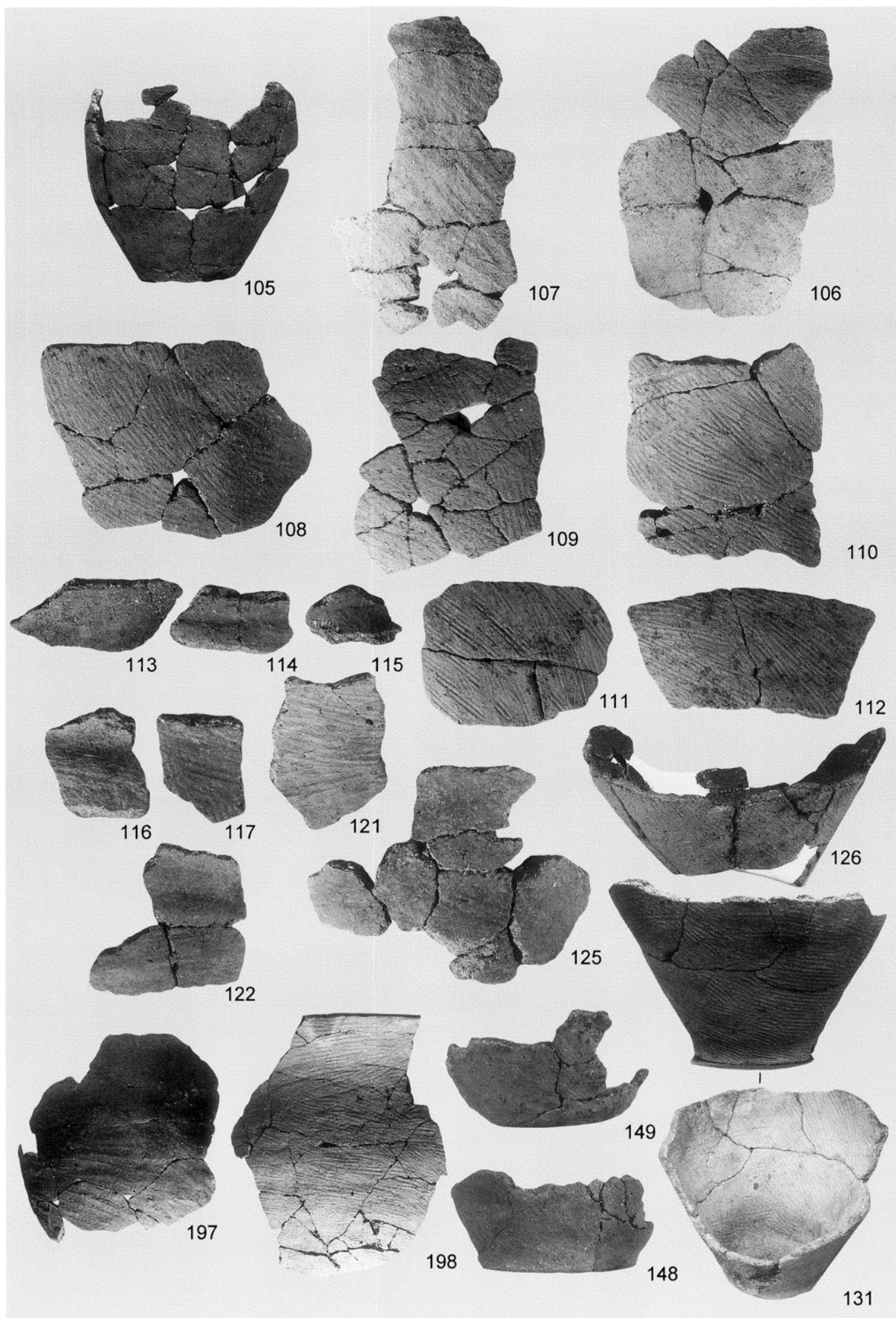


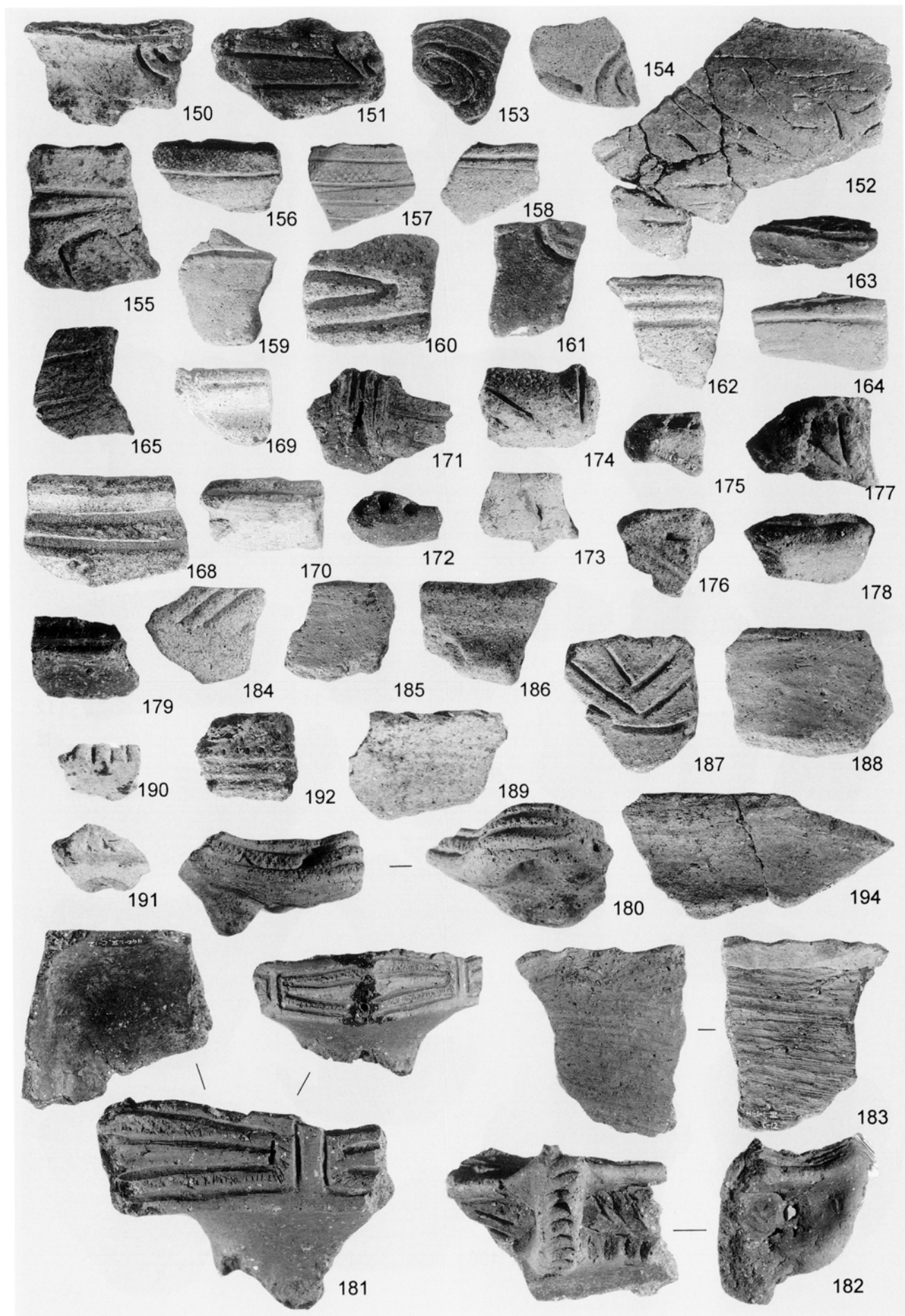
出土遺物 3





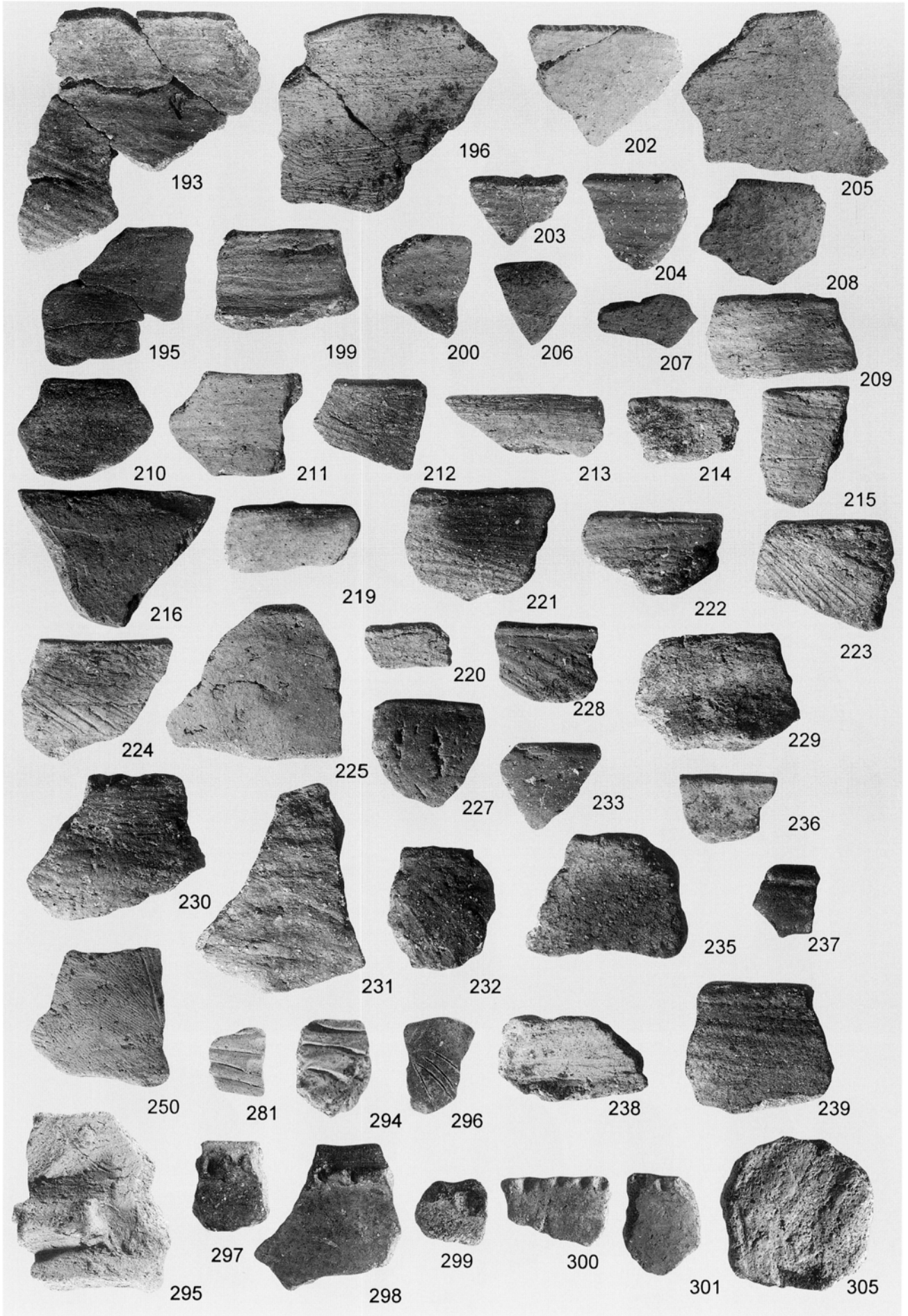
第 1 次 調 査





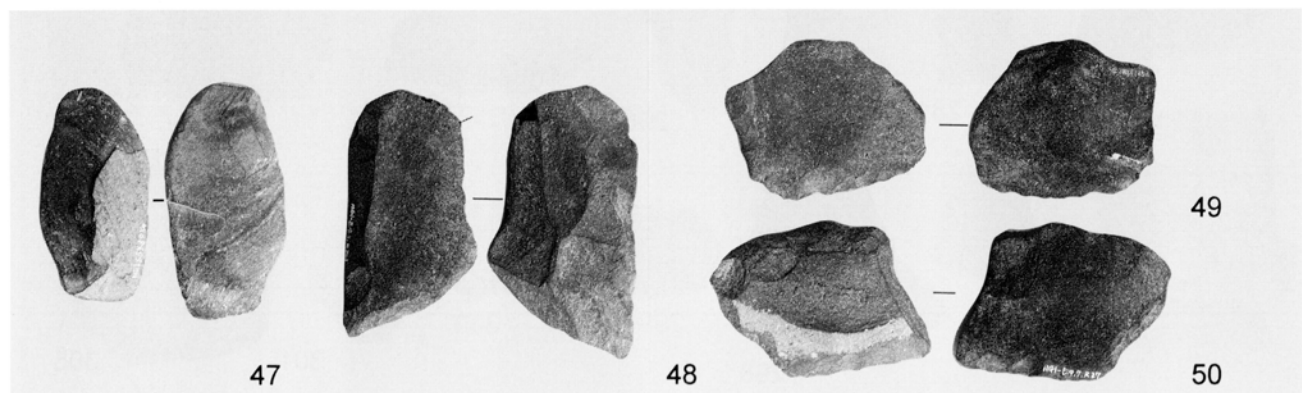
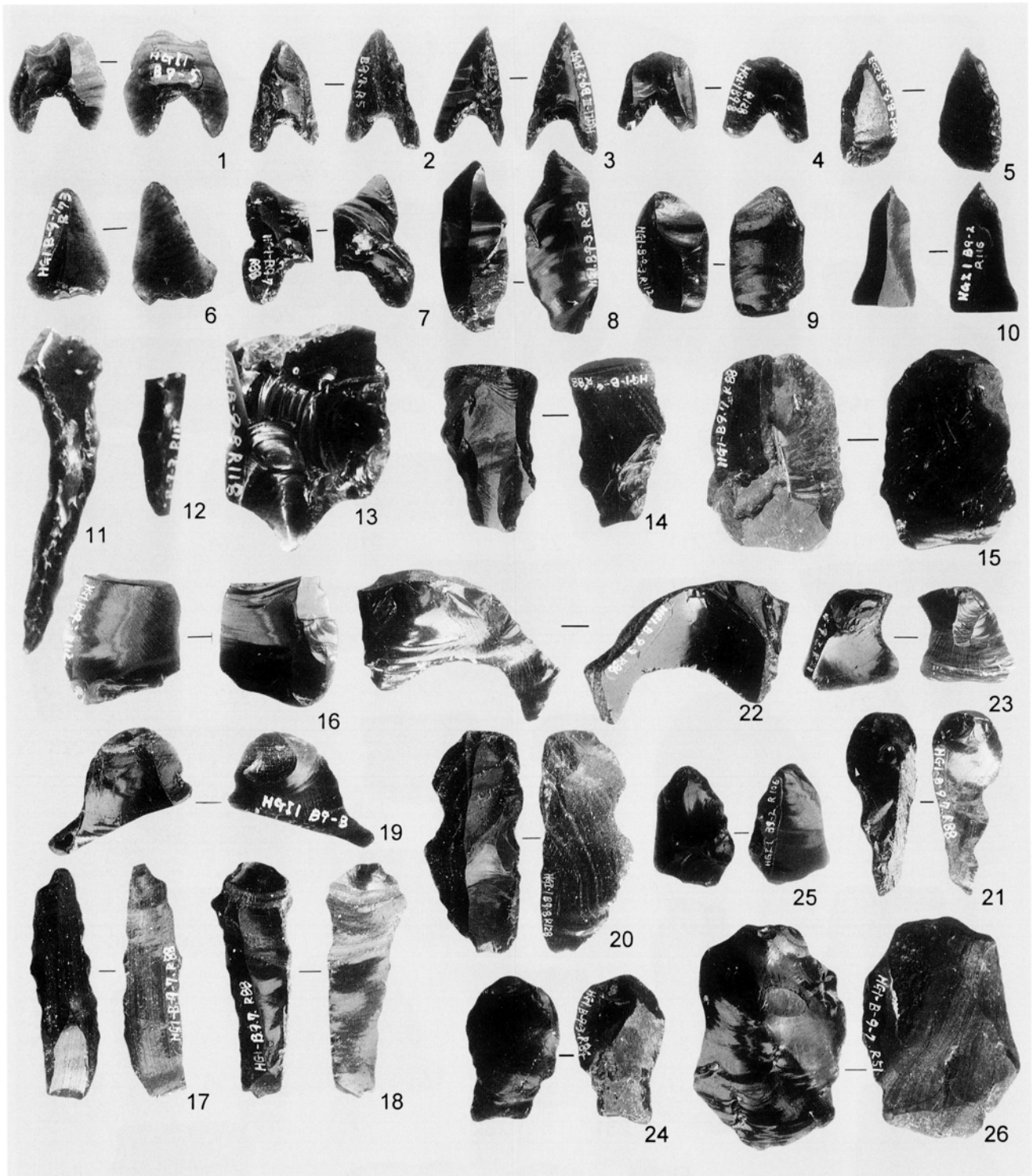


第 1 次 調 査



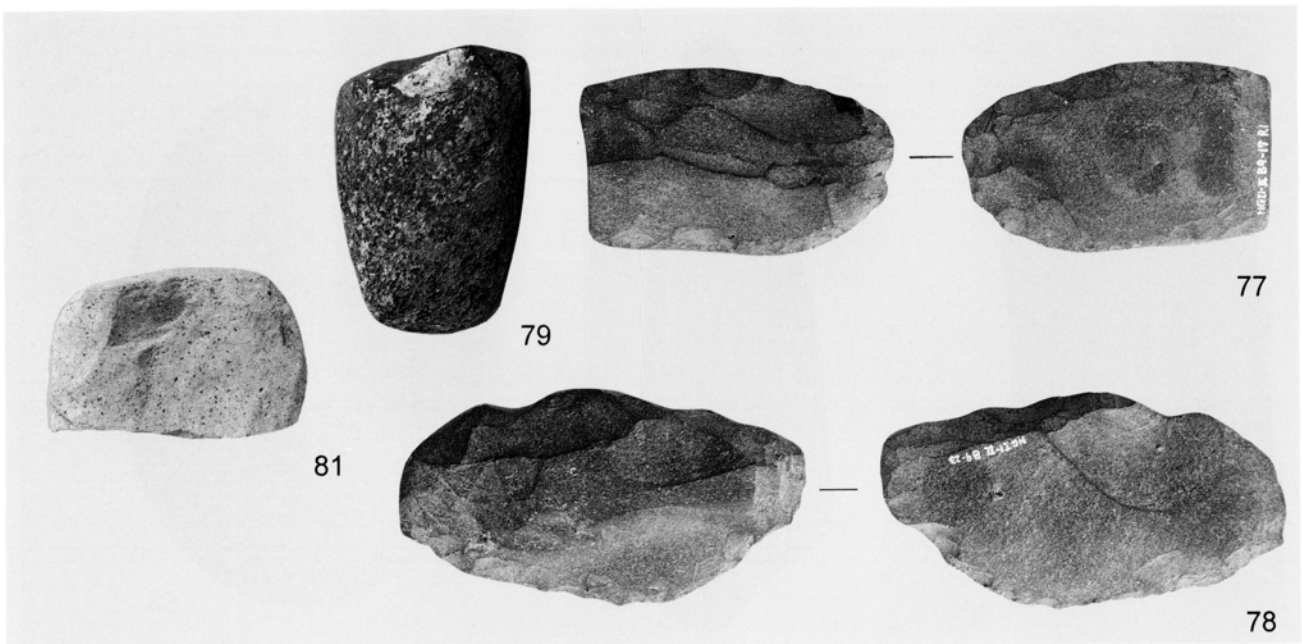
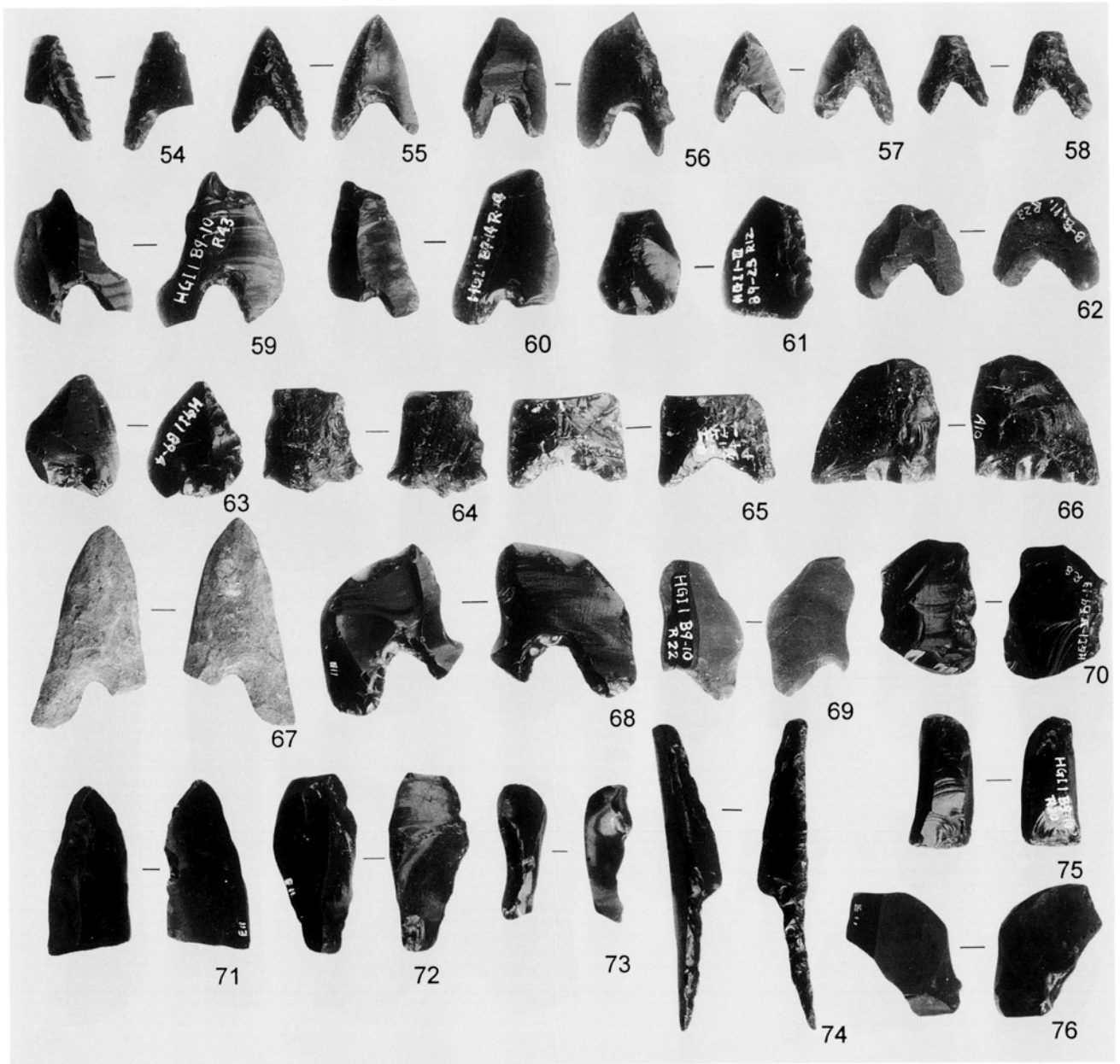


第 1 次 調 査



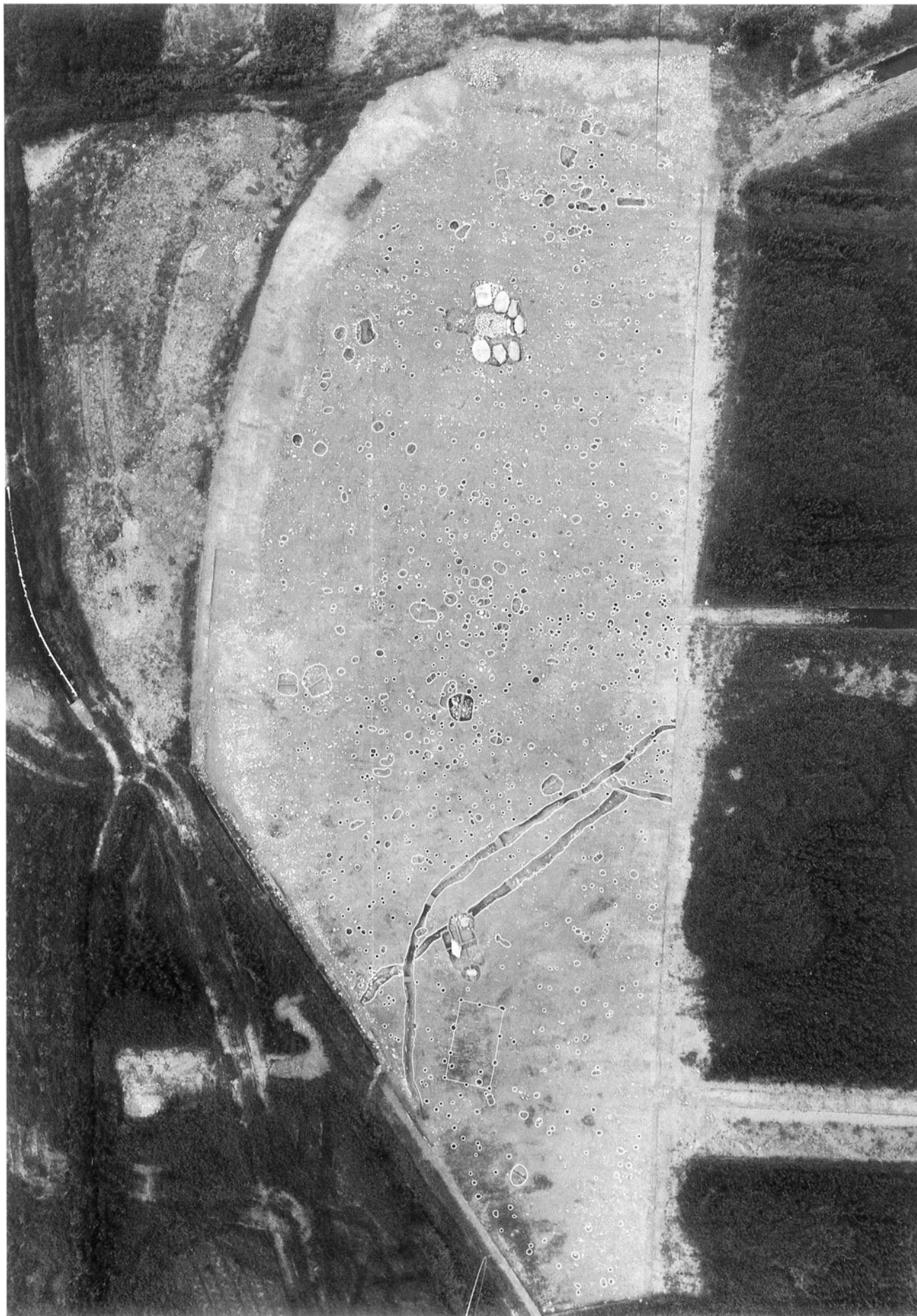


第 1 次 調 査





第 2 次 調 査



6 区全景 (上空から)

第 2 次 調 査

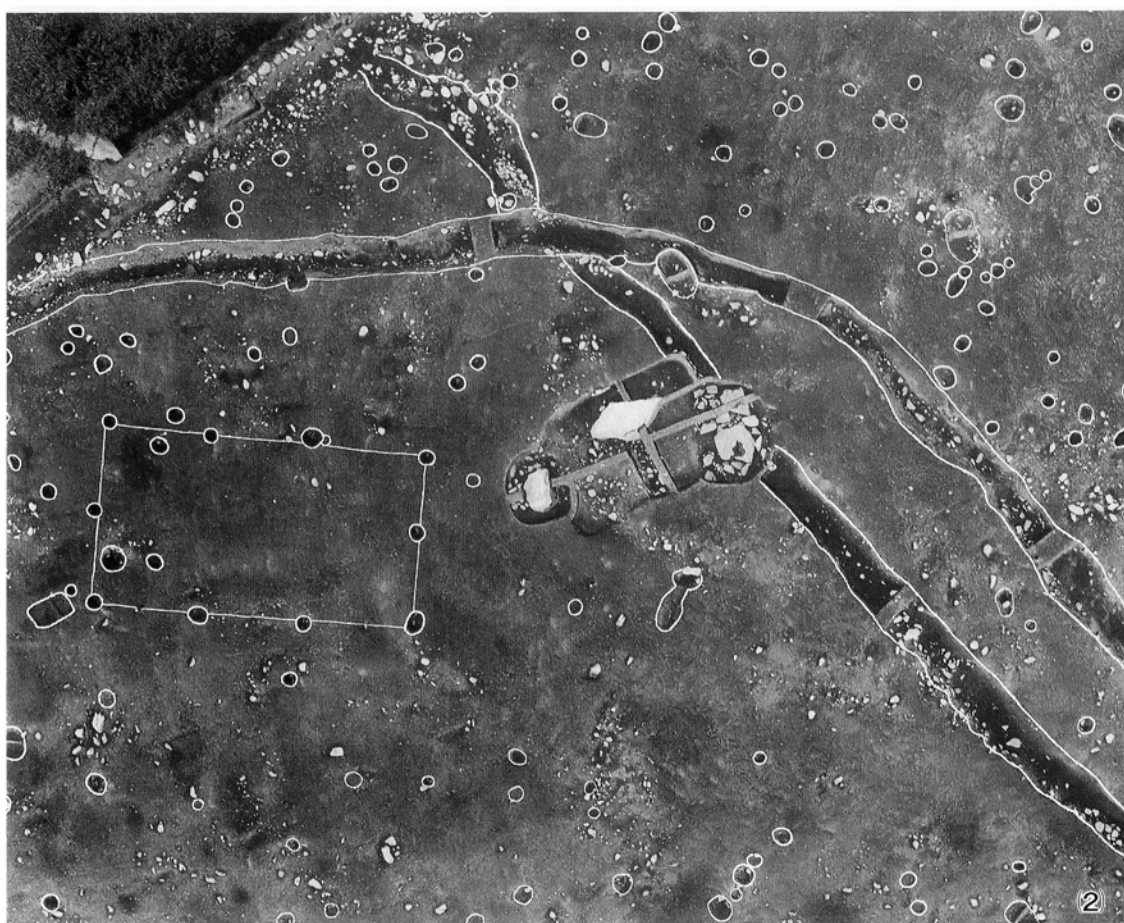


(1) 6・7区全景（北上空から）

(2) 7区全景（南から）

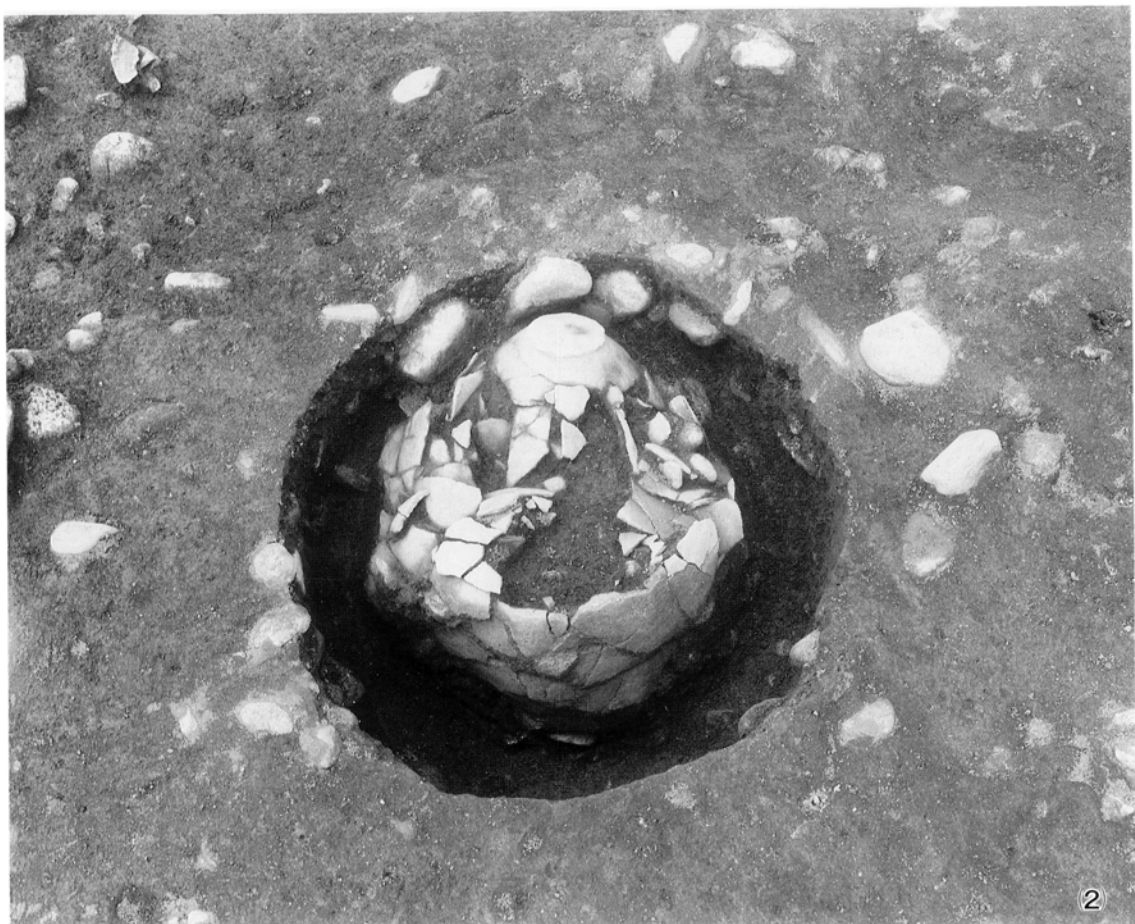
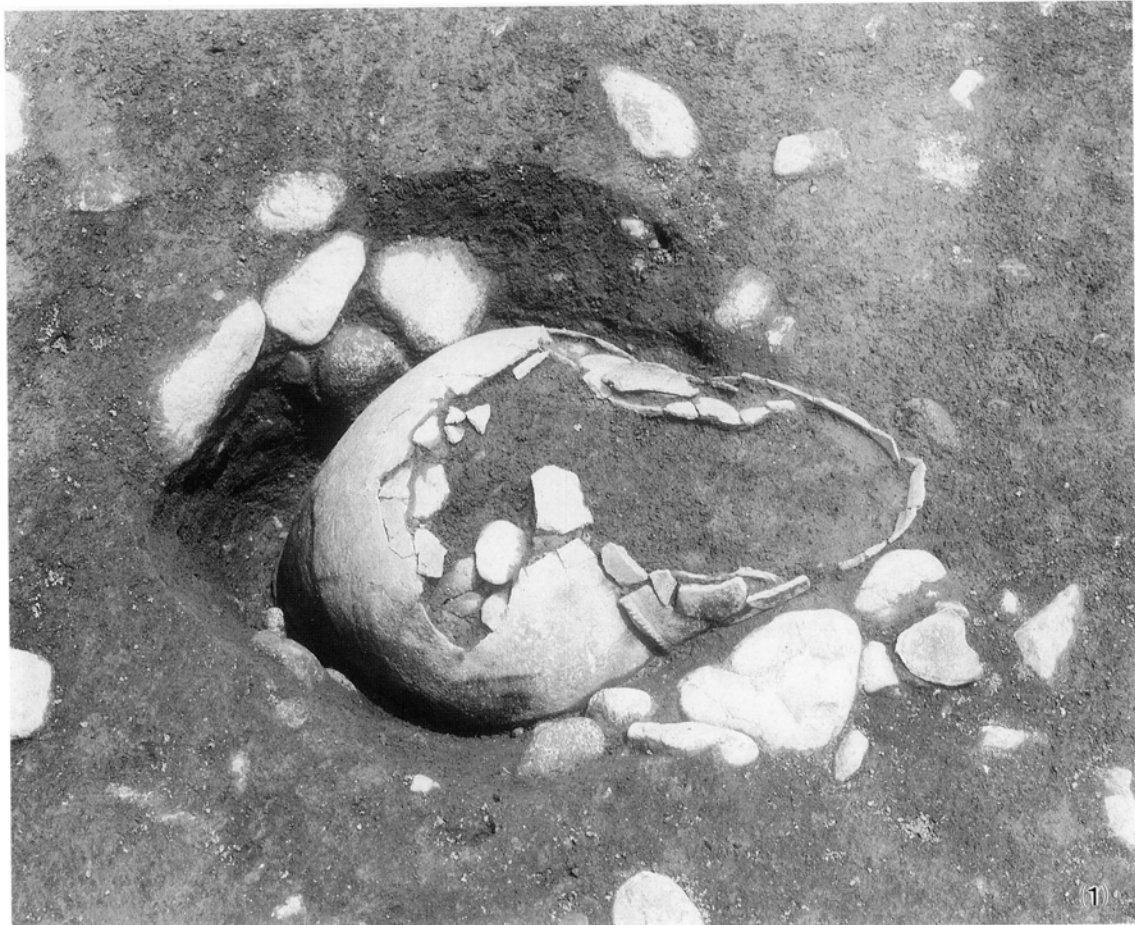


第 2 次 調 査



(1) 6区石塚古墳と甕棺墓

(2) 6区SB0407堀立柱建物とSD0331・0333溝（上空から）



(1) K0001 甕棺墓 (東から)

(2) K0002 甕棺墓 (北から)



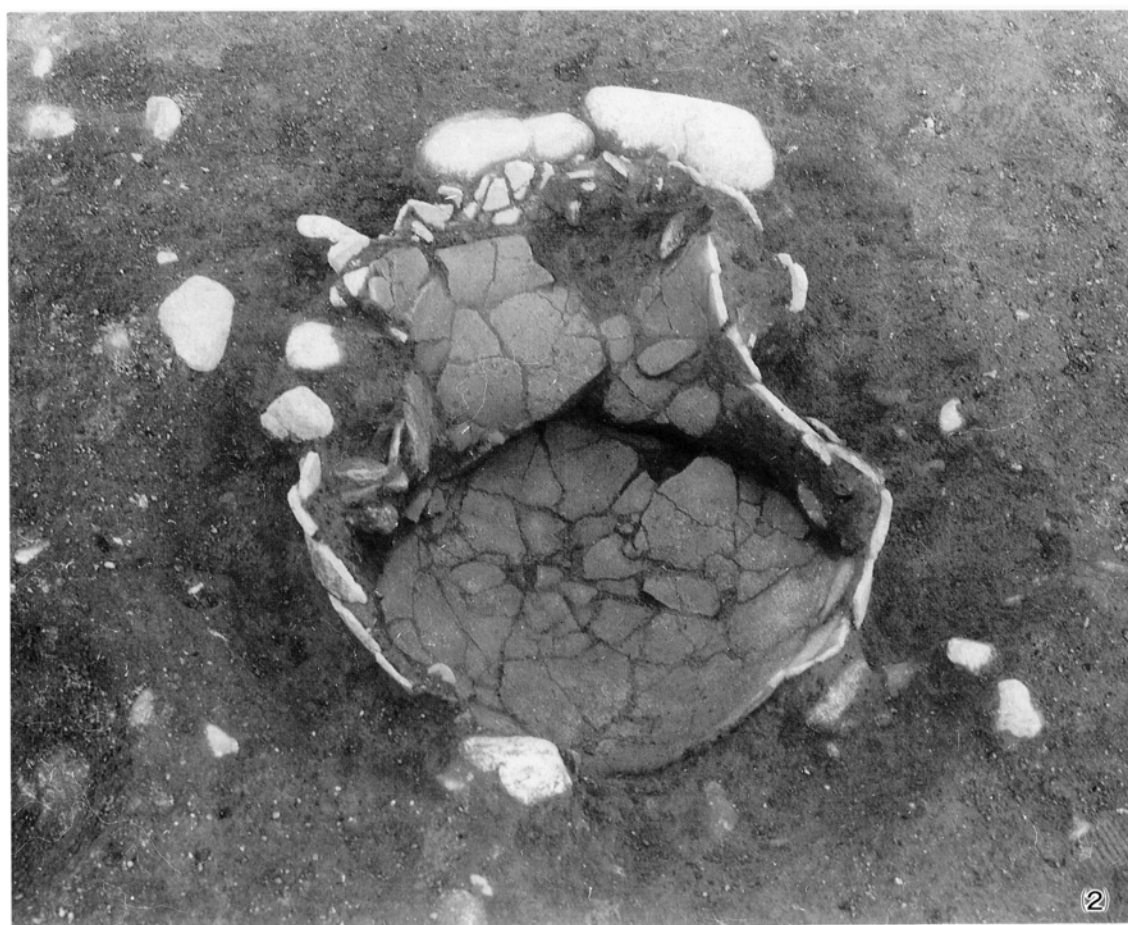
第 2 次 調 査



(1) K0003 甕棺墓 (北から)

(2) K0004 甕棺墓 (西から)





(1) K0005 甕棺墓 (西から)

(2) K0006 甕棺墓 (西から)

第 2 次 調 査



(1) K0007 甕棺墓 (北東から)

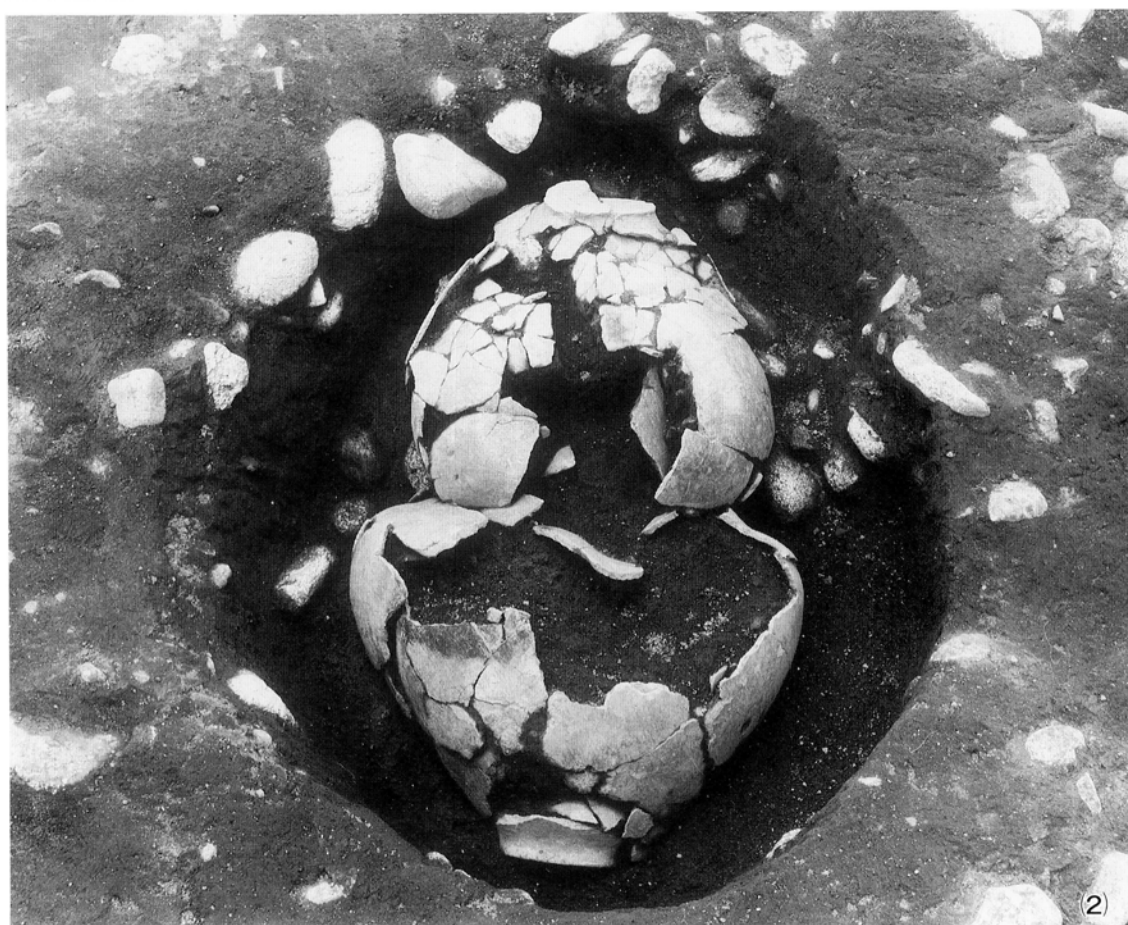
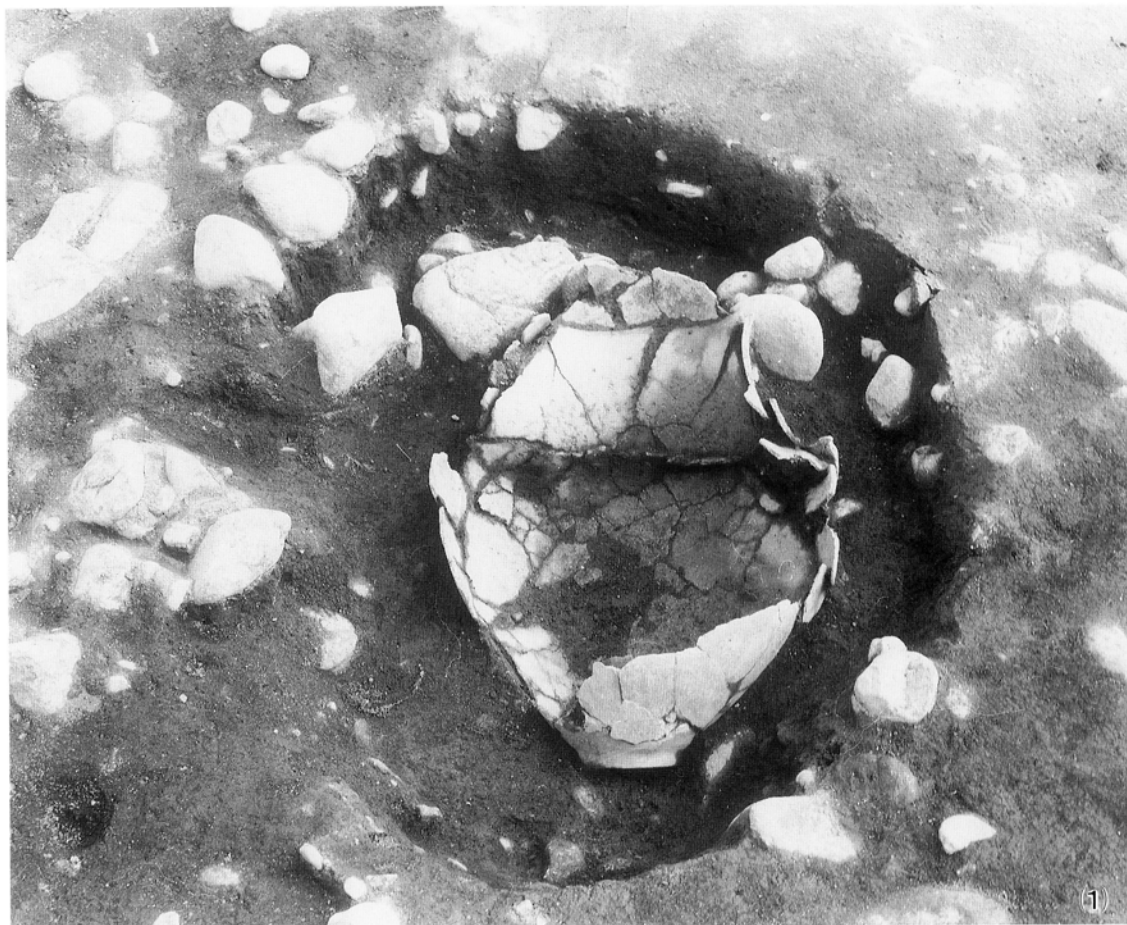
(2) K0008 甕棺墓 (西南から)



(1) K0010 甕棺墓 (西から)  
(2) K0011 甕棺墓 (東南から)



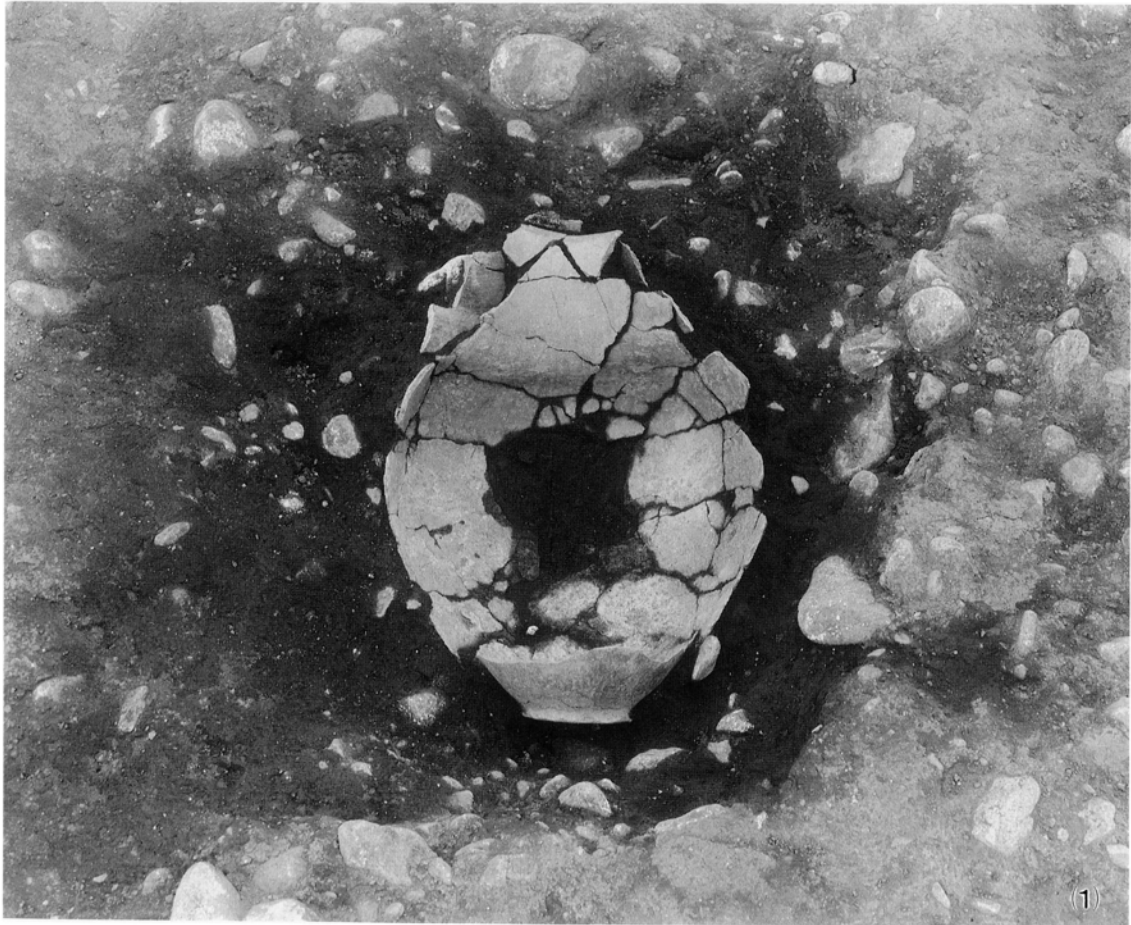
第 2 次 調 査



(1) K0012 甕棺墓 (東から)

(2) K0013 甕棺墓 (北から)

第 2 次 調 査



(1)

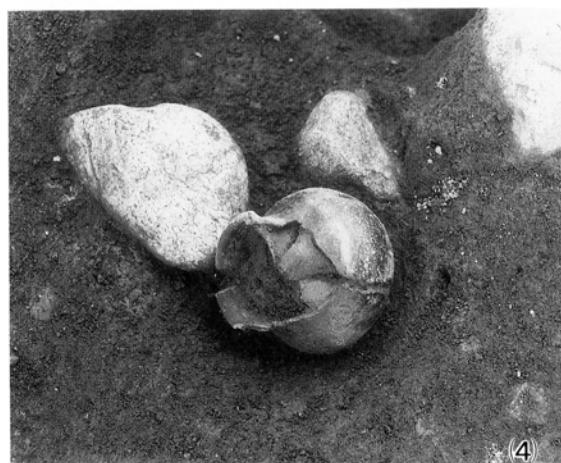
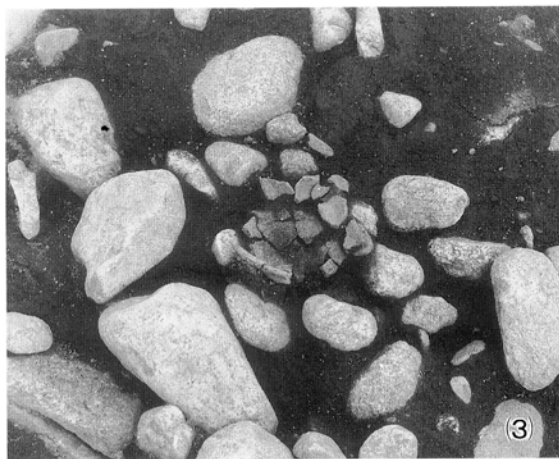


(2)

(1) K0014 甕棺墓 (北から)

(2) K0015 甕棺墓 (北から)

第 2 次 調 査



(1) K0016 甕棺墓 (北から)

(2) SX0301 祭祀土器出土状況 (東から)

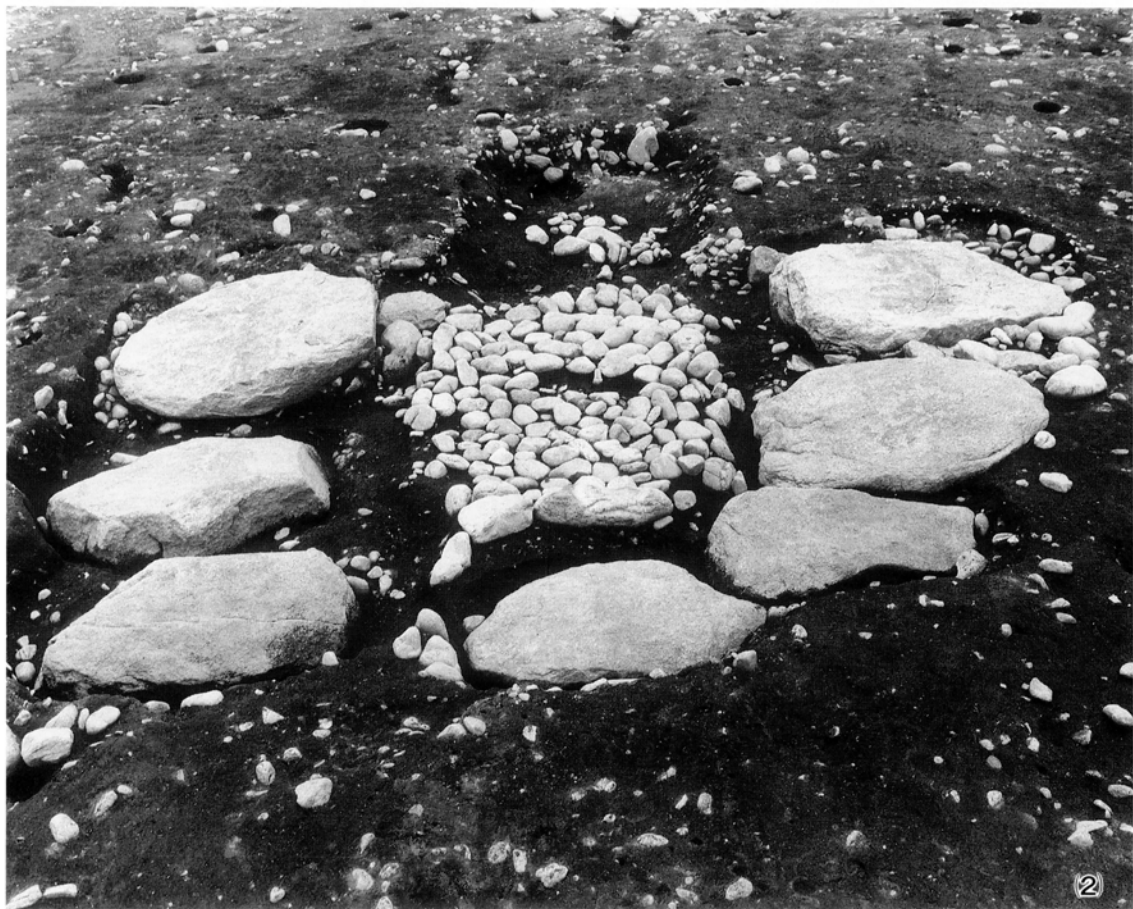
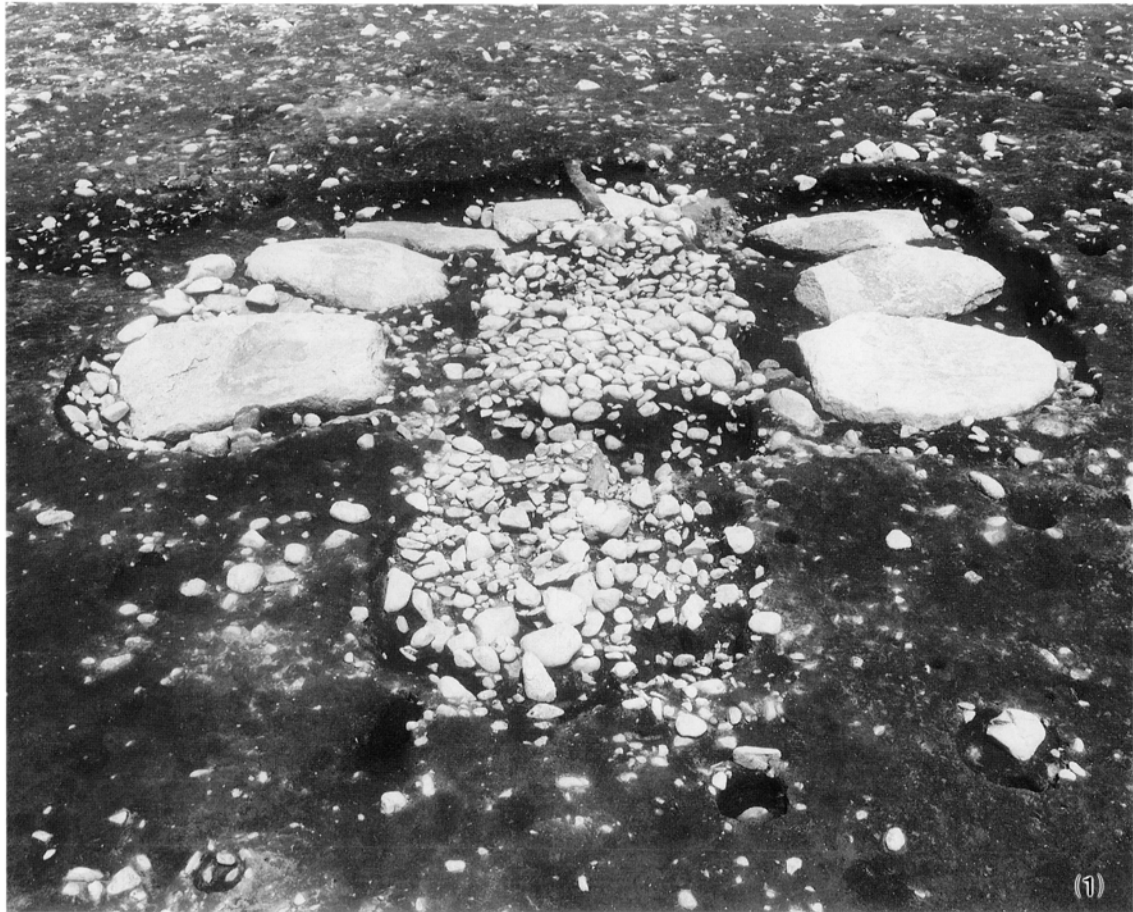
(3) SX0302 祭祀土器出土状況 (東から)

(4) SX0305 祭祀土器出土状況 (西から)

(5) SX0308 祭祀土器出土状況 (西北から)



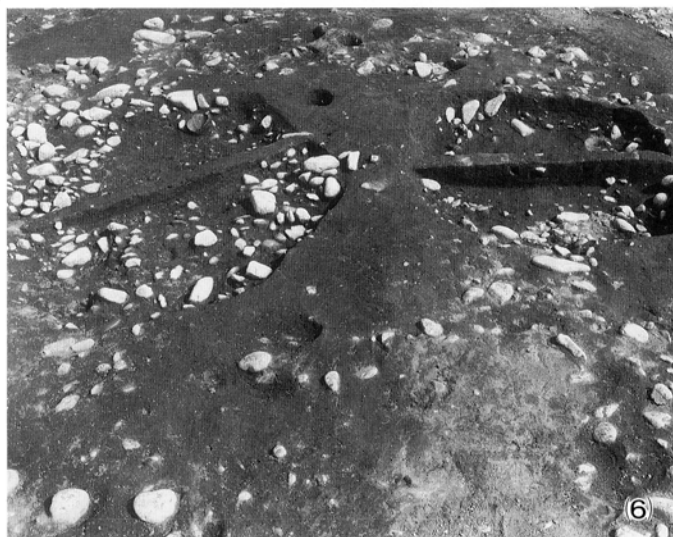
第 2 次 調 査



(1) 石塚古墳検出状況（西から）

(2) 石塚古墳石室・敷石下面（東から）

第 2 次 調 査



(1) 石塚古墳玄室内遺物出土状況 1

(3) SK0307 土坑 (西から)

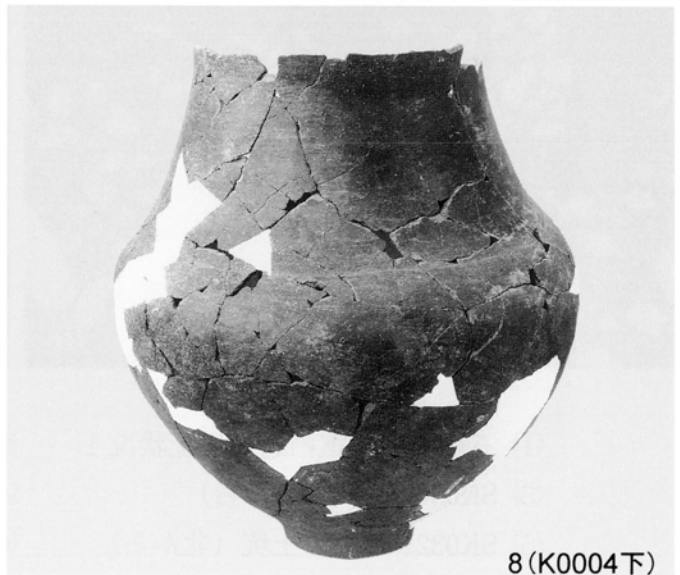
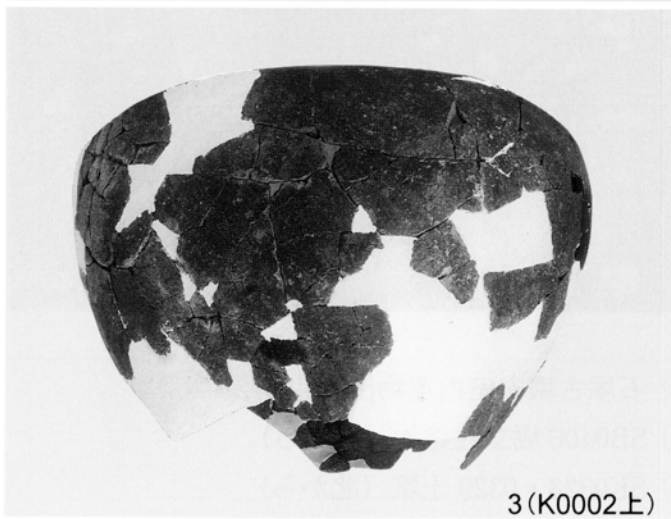
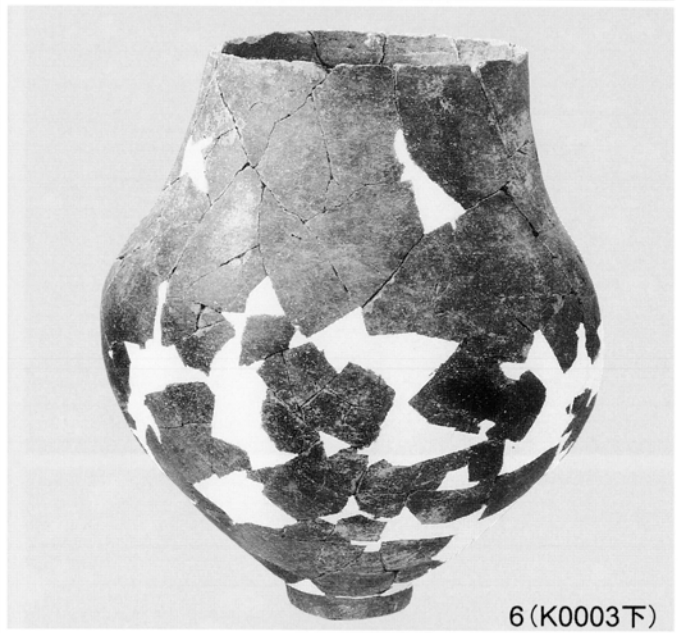
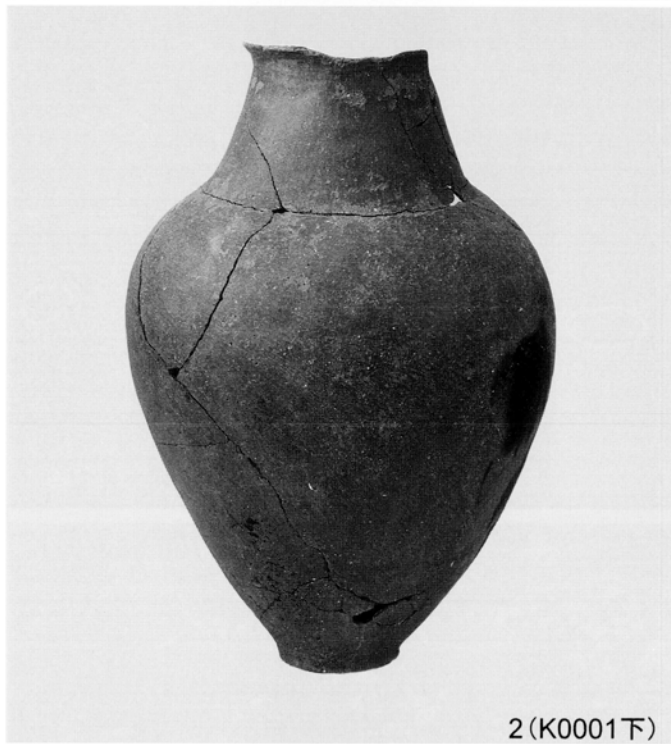
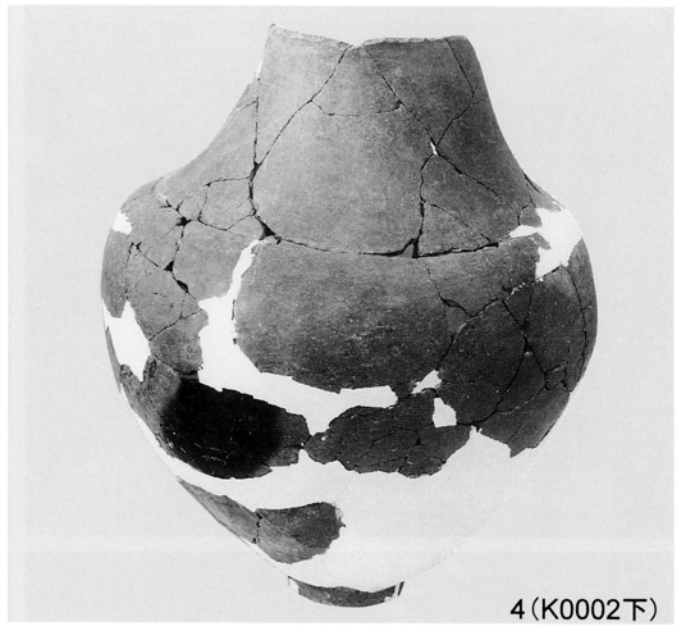
(5) SK0325・0326 土坑 (北から)

(2) 石塚古墳玄室内遺物出土状況 2

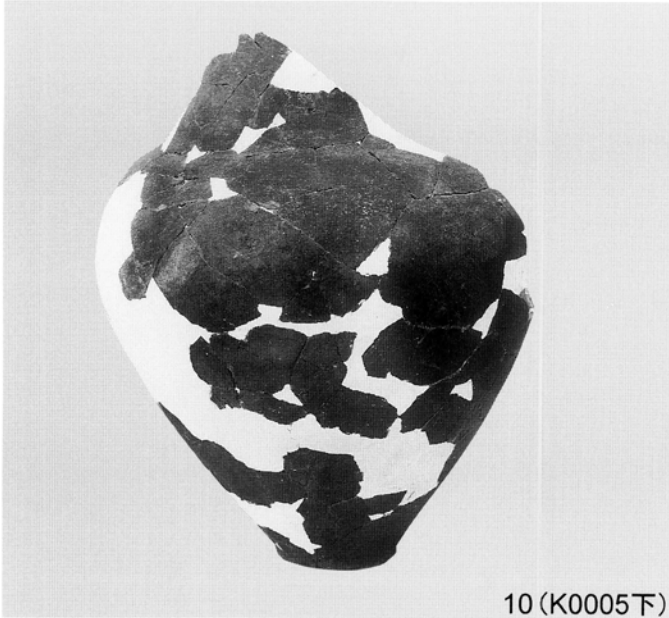
(4) SB0406 堀立柱建物 (北から)

(6) SK0328・0329 土坑 (北から)





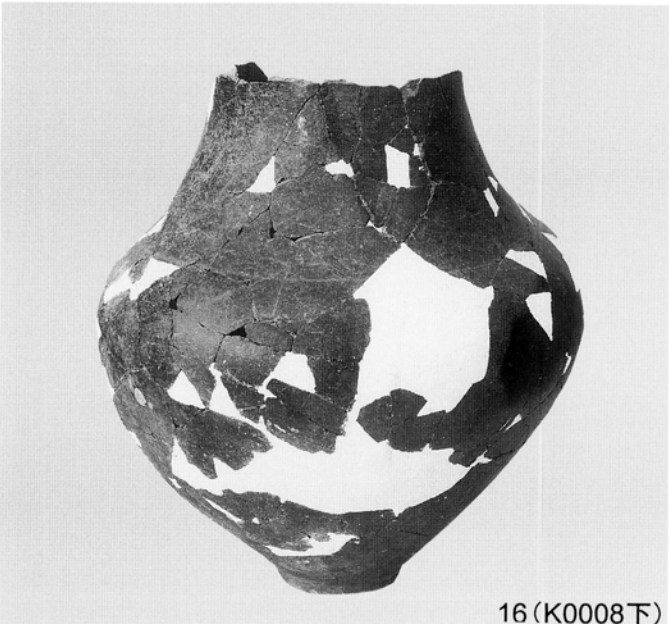
第 2 次 調 査



10 (K0005下)



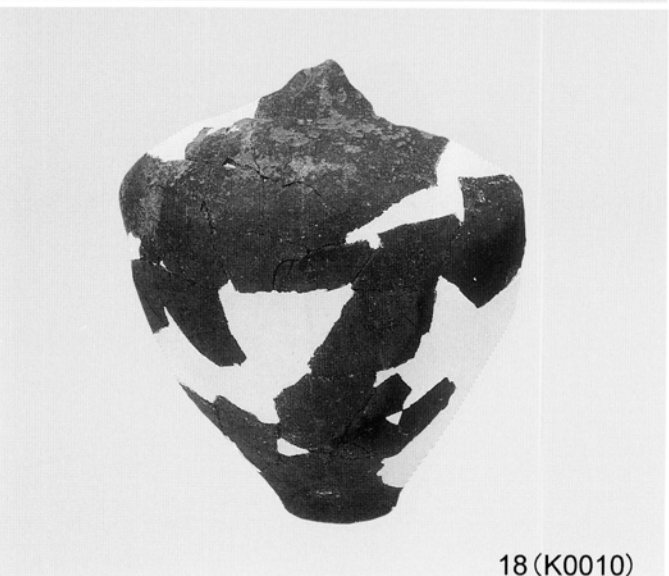
19 (K0011上)



16 (K0008下)



20 (K0011下)



18 (K0010)

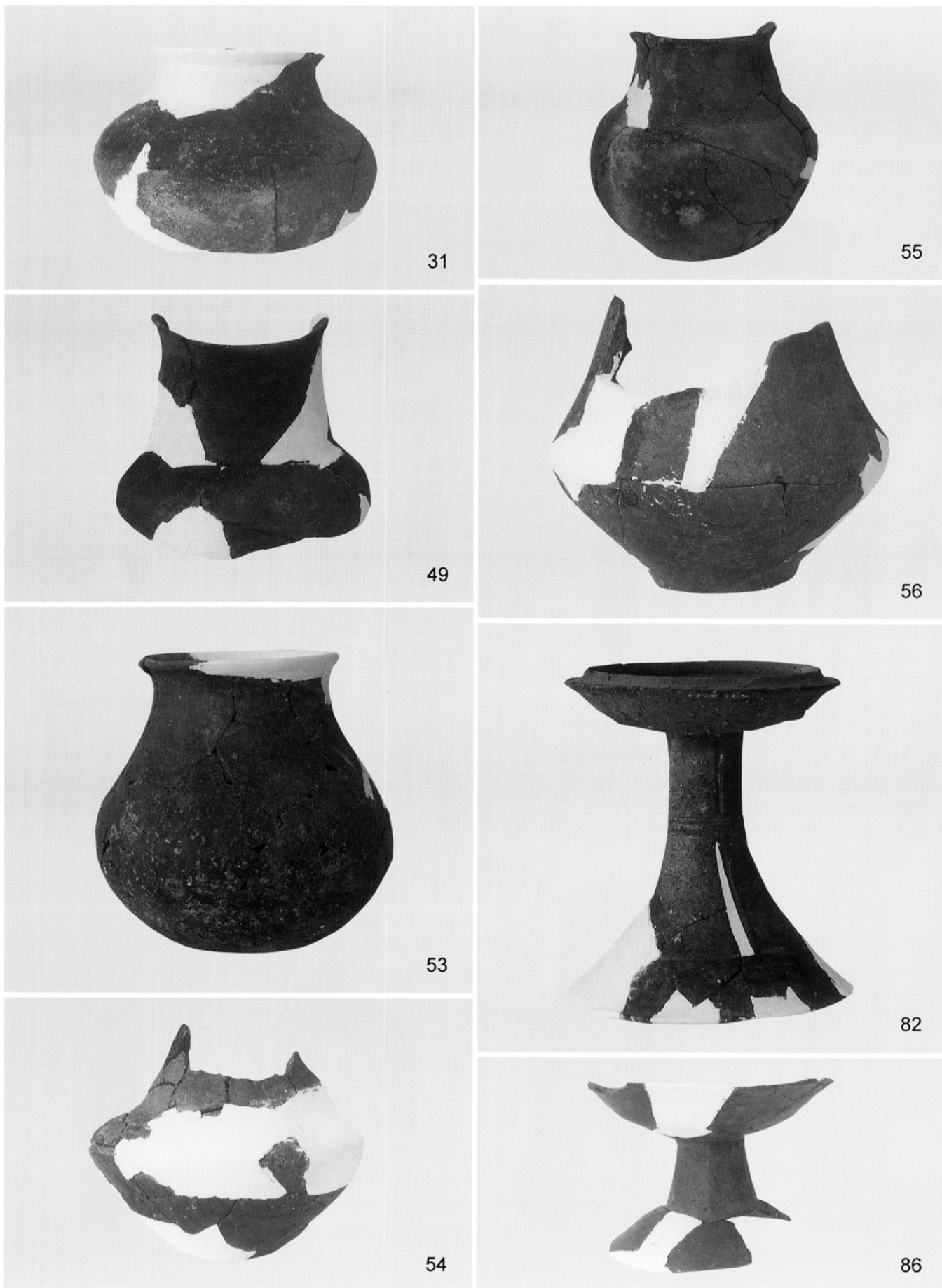


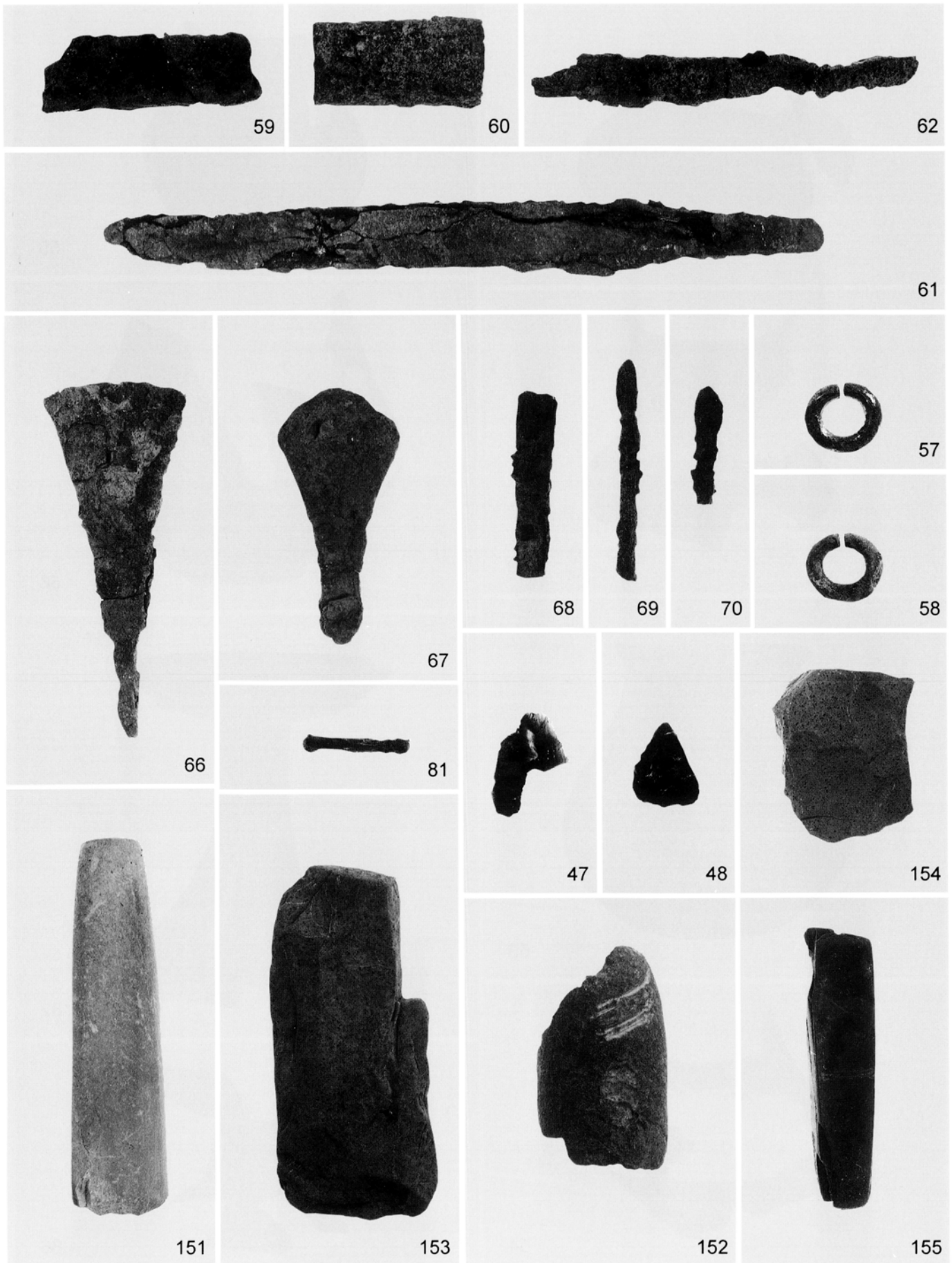
23 (K0012 上)





第 2 次 調 査





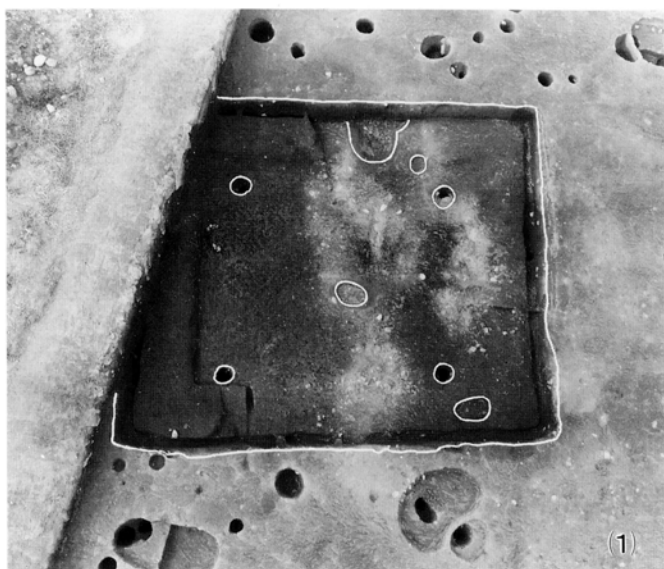
第 2 次 調 査



(1) 9区全景

(2) 10区全景 (東から)





(1) SC0701 (東から)

(3) SC0701 遺物出土状況

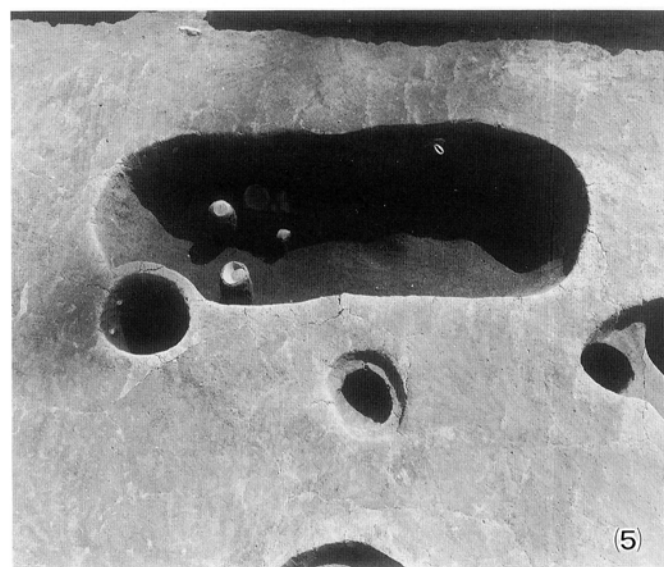
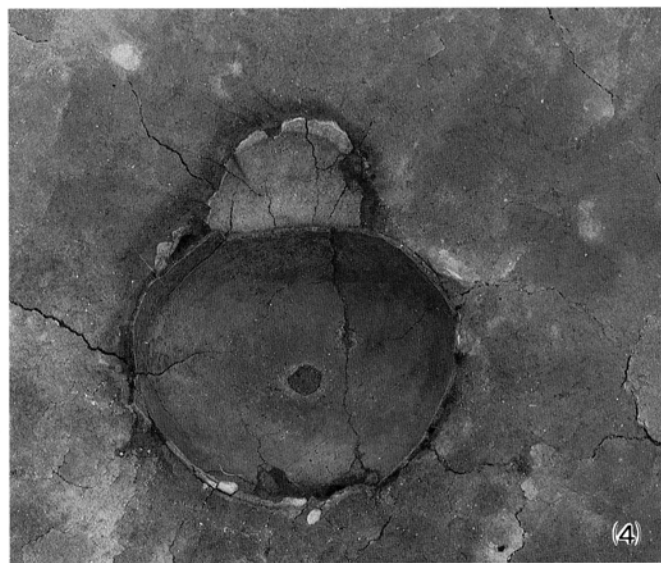
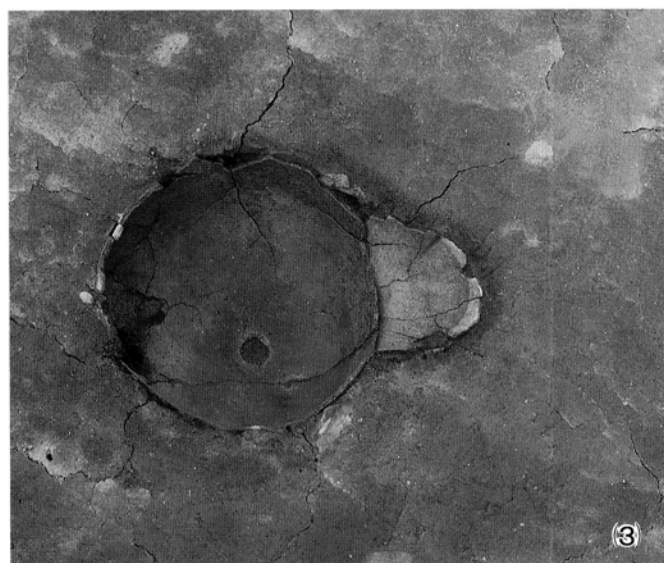
(5) SK0709 (南から)

(2) SC0701 遺物出土状況 (東から)

(4) SC0705 (北から)

(6) SK0710 (南から)

第 2 次 調 査



(1) K0018 (東から)

(3) K0019 (東から)

(5) SX0702 (北から)

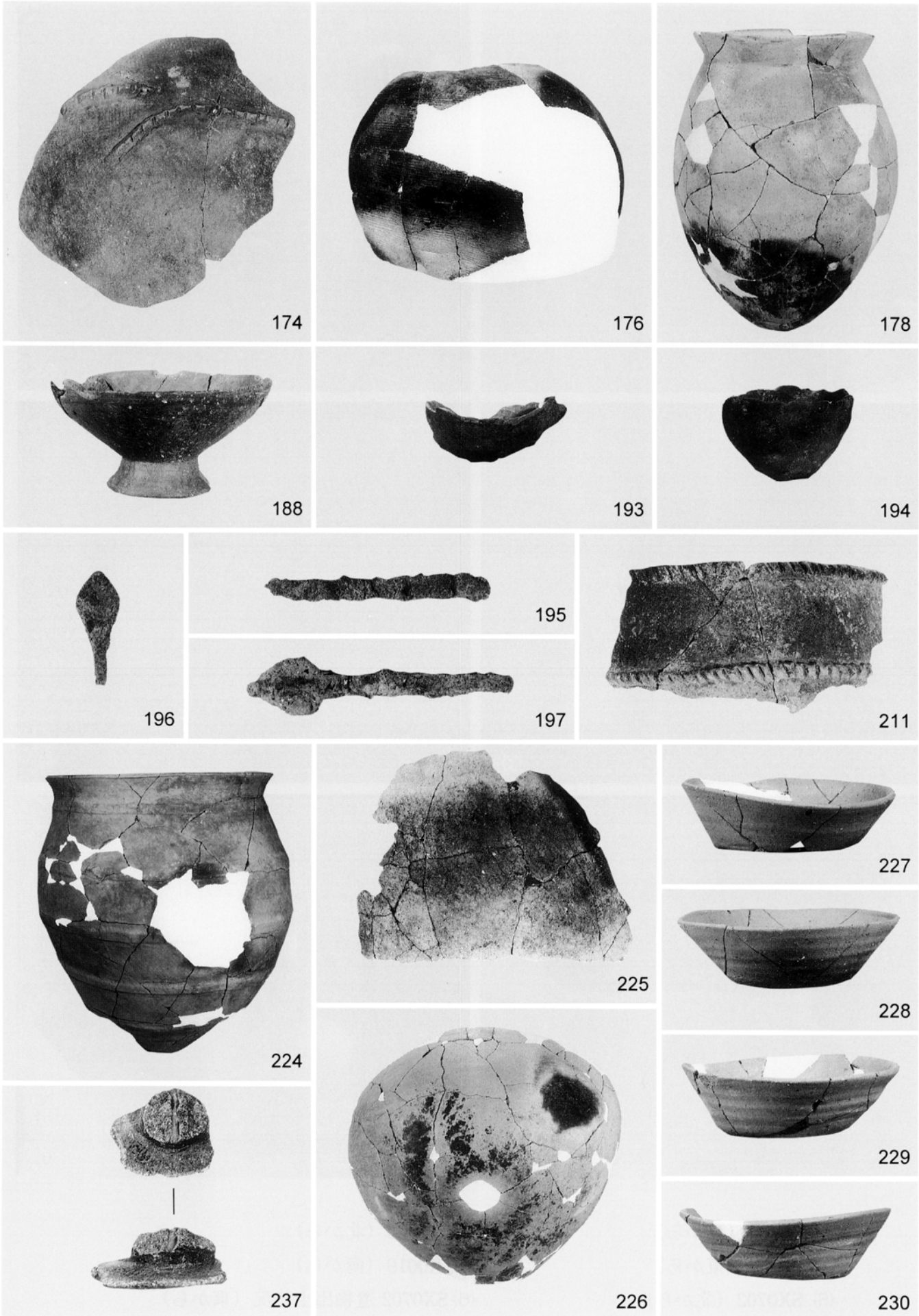
(2) K0018 (北から)

(4) K0019 (南から)

(6) SX0702 遺物出土状況 (東から)



第 2 次 調 査



---

いる べ  
入 部 IX

—東入部遺跡群第1次調査報告(2)・第2次調査報告(1)—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第613集

1999(平成11)年3月31日

発行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 九州印刷株式会社

〒816-0057 福岡市博多区西月隈3-11-27

---

福岡市埋蔵文化財調査報告書第613集

# 『入 部 IX』

付 図

東入部遺跡群第2次調査 6区・7区・10区全体図(1/200)